



巻 頭 言

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 校長 郡司 完

東日本大震災からの教育復興のシンボルとして開校した本校は、今年度で高等学校が8年目、中学校が4年目を迎えました。原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーを育成するため、高校開校時に文部科学省から5年間、スーパー・グローバル・ハイスクール事業の指定を受け、その後、現在のグローバル型の事業に3年間取り組んできました。自治体や大学、NPO法人などを巻き込んだコンソーシアムの構築、地域課題の解決を図る探究活動を核としたカリキュラムの開発、グローバルな視野を育み福島の今を発信する海外研修を柱として、本校の建学の精神である変革者の育成を目指し、特色ある教育活動を展開してまいりました。

事業最終年度となる令和4年度は、新型コロナウイルス感染症の流行が収束には至らないものの感染症対策の強化と緩和により、活動の範囲を大きく拡大することができました。ニュージーランド・ドイツ・アメリカの他、宮城県・広島県・沖縄県など、国内外でのたくさんの研修を実施できたのは、大変意義深いことと思っております。加えて、北は青森、南は九州、さらにはベトナムなど、国内外の方が本校において研修を行い、さらに今年2月3日に開催しました事業報告会では、150名を超える多くの方にご参加いただき、事業成果の発表や参加者との交流などを行い、充実した時間と空間を共有することができました。コロナ禍での事業推進ではありましたが、多くの皆様のご支援とご協力のお陰で、特色ある取組を数多く実施し、無事に事業を締め括ることができました。

本事業において生徒たちは、地元の双葉郡を始め様々な地域に出向いて課題を見出し、解決に向けて300以上のプロジェクトに一人一人が思いを持って取り組みました。チアダンスで子どもと地域を元気にする取組や、プラスチックによる海洋汚染を地域から防ぐ取組など、その内容は様々です。これら生徒たちの主体的な学びは、学校生活にも良い変革をもたらし、今年度、生徒会が中心となって校則の見直しを行ったり、紛争で苦しむウクライナの子どもたちに手紙を届ける企画なども実施しました。震災から13年目に入っても、この地域には福島第一原子力発電所の燃料デブリの取り出しや処理水の海洋放出など、重く大きな課題が残されていますが、避難指示の解除や地元での学校再開、福島国際研究教育機構の開設など、復興の歩みは着実に進んでいます。ふたば未来学園では、それらに真摯に向き合いながら、地域課題に立ち向かう志と困難に負けないレジリエンス、社会をより良く変えていく変革者としての資質・能力の育成に取り組み、引き続き、生徒の学びと地域復興の相乗効果を目指して、これまでの実践を深化させ、新たな取組にも果敢に挑戦してまいります。

結びに、本書には事業の推進に臆することなく挑み続けた本校生徒と教職員の、活動の軌跡と成果や課題を包み隠すことなく掲載しています。事業を進めるに当たりご尽力を賜りました全ての皆様に、この場をお借りしまして心から感謝申し上げますとともに、本書が皆様のこれからの活動に少しでも役立ち、日本の教育の発展に僅かでも寄与できましたら幸いに存じます。

1. 1 研究開発概要（事業構想）

1 教育目標

① 管理機関における教育目標

ふたば未来学園中学校・高等学校は東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故を受け、福島県双葉郡に平成 27 年に高等学校、平成 31 年に中学校が開校した。現在、双葉郡では原発の廃炉、地域コミュニティの再生、風評との闘いなど地域を分断する困難な課題が山積している。世界と協働しながらこれからの復興・地方創生を進めていく人材の育成が、この地域にとって喫緊の課題である。このため、グローバルな課題である原子力災害からの復興をテーマとして設定し、地域との協働による地域の課題解決に向けた探究・実践と海外研修を体系的に位置づけたカリキュラムを開発する。

② 学校の教育目標

本校は震災と原発事故により休校となった 5 校の伝統を引き継ぎ開校した。世界が経験したことのない困難な課題に直面した本地域の課題は、極端な少子高齢化や人口減少が進行する未来の全国の地域や、異なる立場や価値観を排斥する世界の分断と重なり合っている。本校は、こうした地域と世界の課題解決に貢献する人材を育成し、全国の学校や地域の変革を牽引する強い決意のもと、「新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、地域や社会を舞台にして、これまでの価値観、社会のあり方と根本から見直し、自らを変革し、地域を変革し、社会を変革する『変革者』を育成する。」 【補足 1】

【補足 1】学校概要

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故は、福島県、特に双葉郡とその近隣市町村に深刻な影響をもたらした。地域住民の避難が長期化するなか、教育環境の整備と震災を踏まえた諸課題に対応できる人材育成のため、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、本校は平成 27 年 4 月に新設された。

本校は、募集停止となった双葉郡内の 5 つの高等学校の歴史と伝統、教育内容や特色を踏まえた幅広い学びを可能とした総合学科高校として、以下の 3 つの系列の科目群を設けている。

- ◇「アカデミック」系列：大学等上級学校に進学するために必要とされる主要教科を中心とした科目群
- ◇「トップアスリート」系列： トップアスリートや生涯スポーツ社会のリーダーとして活躍することを目指し、バドミントン、サッカー、野球、レスリングで高度な技術・理論を習得することを目的とした科目群
- ◇「スペシャリスト」系列： 農業、工業、商業、福祉の分野において地域を支える職業人として将来活躍するために必要な知識・技能を習得することを目的とした科目群

本校はふたば未来学園中学校も併設している。中学校は 6 年間を通した最先端のカリキュラムの中で、主体的・対話的で深い学び、グローバル教育、シティズンシップ教育の 3 つを中高一貫教育の柱に掲げ平成 31 年 4 月に開校した。

平成 27 年の開校当初、校舎は、広野町の本校舎、猪苗代町の猪苗代校舎（「トップアスリート」系列バドミントン生徒が在籍）、静岡県三島市の三島長陵校舎（JFA（日本サッカー協会）アカデミー福島生徒が在籍）の 3 つに分かれていた。平成 31 年 4 月に中学校が併設されると同時に広野町に新校舎が完成し、猪苗代校舎は閉鎖となった。現在は本校舎と三島長陵校舎の 2 校舎に生徒が在籍している。

在籍生徒数 (令和 5 年 1 月)	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年	中学 合計	高校 1 年	高校 2 年	高校 3 年	高校 合計
本校舎（広野町）	60	60	60	180	133	93	125	351
三島長陵校舎	-	-	-	-	5	23	20	48

2 構想の目的等

① 構想の目的

「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」として、これまで SGH で行ってきた研究成果の分析を生かしつつ発展させ、目的として以下を設定する。【補足2】

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムの開発
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成
- C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及

【補足2】 構想の目的と背景、求める地域人材

本校は平成27年の開校と同時にスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定され、「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」という構想のもと、これまで5年間研究開発を行ってきた。東日本大震災、福島第一原子力発電所事故が起きた地域に立地していることから、原子力災害からの地域復興に関する様々な活動を行ってきた。また通常教科・科目においてはアクティブラーニングの手法を積極的に導入し、グループワークやディスカッションなど生徒の主体的な取組を導入してきた。開校当初から SGH 指定となり、学校文化を作りながら研究開発も同時に進め、これまで以下のような成果が得られた。

- 「総合的な学習の時間」において地域の課題に向き合う活動を行い、課題の発見、課題の解決に向けた取組を学校全体で推進するような学校文化が形成された。
 - 本校の教育活動全体で育成すべき資質能力をまとめたルーブリックを作成し、これに基づいて評価を行うシステムの礎ができた。
 - 海外との連携先として、ドイツ、ニューヨークを選定し、現地の同世代の生徒と交流する場の形成、世界の課題を捉える取組づくりをすることができた。
- 一方で、以下の点が課題として明らかになってきた。
- 「総合的な学習の時間」は2年生から始まり、探究活動という視点からは1年生での取組が手薄となっている。1年生では、関連する教科・科目として「地域創造と人間生活」を履修している。ここでは学習指導要領に基づき職業観の育成や進路選択等を行い、さらに表現力育成のための演劇等を取り入れているものの、探究的な視点が欠けており、課題があった。
 - 探究活動における教員の指導方法について整理されておらず、教員個人の力量に任される部分が多かった。研究開発校として汎用的な指導法の開発を目指してきたところであるが、現在も道半ばである。
 - 海外研修について試行錯誤をしながら実りのある研修先や研修方法について検討してきたが、地域と世界の関係を深く考察するまでには至らなかった。
 - 福島県双葉郡復興ビジョンのもと、地域との緊密な連携を行いながら教育を行ってきたが、これまでには学校の開校が重視され、広域の地域連携については課題があった。

上記のような課題も踏まえ、また地域課題の解決に向けてさらに発展的な取組を加え、今回、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」（グローバル型）に申請することとした。構想の目的として、以降に示す達成目標と紐づけて、以下の3点を設定した。

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発（3年間を通して切れ目なく地域探究活動に取り組むカリキュラム、また地域課題とグローバル課題を効果的に往還するカリキュラムに関する研究開発）
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新た

なコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成（調査研究ではなく、真の意味での課題解決に向けた実践を行うことのできる人材の育成を特に重視。また定量的評価に基づいた目標の設定を実施。）

- C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及（学校と地域の協働による、学びと地域活性化の相乗効果を創出、高校での探究活動を核とした学校文化と新たな地域の創造、探究活動における生徒と教員の関わり方に関する提案などを実施。）

② 求める地域人材像

本校は双葉地区教育長会が中心となってまとめた「福島県双葉郡教育復興ビジョン（25年7月）」が建学の礎となっており、同ビジョンにおいて地域が提起した求める人材像を踏まえつつ、本校開校後にルーブリックで人材像を具体化してきた。今後本ルーブリックを地域とのコンソーシアムにおいて主に下記の視点を重視し改訂していく。【巻末のルーブリック参照】

- 地域や世界の課題と自己の将来の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する市民性
- 立場・価値観の違いによる深刻な分断や対立を止揚する、協働的ネットワーク構築力
- 地域の資源を見出した上で、知識や想像力を発揮し、地域に新たな価値を創造する力

3 達成目標（関連資料：「目標設定シート」）

① 定量的目標 ※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的B、Cに関する達成の判断材料として、以下の定量的な目標を設定する。

- 本校では育成したい具体的な知識・スキル・人間性等をルーブリックにまとめ、10項目0（低）～5（高）のレベルで規定している。目標の最重要項目として「3年生最後のルーブリックレベル平均値で3.5以上」を掲げる。これまでレベル平均値は上がっているが、3.5という値は、挑戦的なレベルである。【巻末のルーブリック参照】
- 地域社会への還流を見据え、地域に貢献していく在り方生き方の目標として「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。
- その他、最終年度で「地域と協働した課題探究プロジェクト50件以上」「協働する地域の方延べ200件以上」「来校する教育関係者等250名以上」を目標とする。【補足3】

② 定性的目標 ※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的Bに関する、生徒に習得させる具体的能力は①定量的目標記載の通り。

目的A、Cに関する達成の判断材料としては、以下の目標を設定する。【補足3】

- 総合学科の入学年次必修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状とSociety5.0時代の変化を踏まえた能力と態度を養い自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。
- 地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。
- 地域復興・創生における高校の役割と、「教育と復興の相乗効果創出」の必要性を踏まえ、双葉郡8町村との広域的・組織的・実働的な協働体制をコンソーシアムで確立し8町村を面的にカバーするとともに、地域協働の場・機会として校舎や探究発表会を活用し、生徒の探究を通じて地域住民主体のウェルビーイング実現を後押しする。

【補足3】 本構想の目的A、B、Cに紐づけて達成目標を以下の通り設定した。目的の内容を踏まえて、目的Aについては定性的目標を、目的Bについては定量的目標を、目標Cについては定量的目標と

定性的目標を設定した。また定量的目標については関連資料：「目標設定シート」に記載した。

目的A「地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発」に対する目標

総合学科の入学年次必履修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状と Society5.0 時代の変化を踏まえた能力と態度を養い、在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。また、2，3年次に履修する「総合的な探究の時間」において地域課題に向けた探究活動を行い、探究活動の効果的な進め方について整理する。探究活動を効果的に進めるための方策、例えば、探究活動ルーブリックの開発、探究段階に応じた教員の関わり方についての整理、探究段階に応じた発表会の設定等についてモデルを構築する。

また、地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。海外研修などを通じて生徒による地域探究活動と世界の課題事例との共通点を探り、本質的な課題解決に向けた取組を行う。また最近特に注目されている SDGs を紐付けたマップやエッセイの蓄積、海外来校者やアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生の視点を生かした新たなアイデア創出等を行う。なお、アジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生について、本校は平成30年度から受入れを行っており、令和4年度は2名の留学生が滞在している（これまで過去5年で6か国7名の実績）。

目的B「原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成」に対する目標

本校では教育活動を通じて育成したい具体的な資質能力をルーブリック（添付資料3）にまとめている。本校のルーブリックは知識、技能、人格、メタ認知といった学力概念のもと10項目あり、定性的に表現しているが、それをレベル0（低い）～5（高い）の数値で規定している。「0」は全く達成できていないレベル、「3」は教員が求める学校で達成してほしいレベル、「5」は「変革者」を達成できることが想定される極めて高いレベルである。ルーブリック評価は入学直後から卒業まで数回実施し、生徒の資質能力の伸長度合いを測定している。今回、定量的目標の最も重要な項目として、「3年生最後のルーブリック10項目（令和4年度より11項目）のレベル平均値で3.5以上」を掲げることとした。これまでの推移では年を経るごとにレベル平均値は上がっている（一期生（平成29年度卒業生）：1.99、二期生：2.63）が、3.5という値は実現できておらず、挑戦的なレベルである。なお、ルーブリック評価は自己評価であるが、客観性を高めるため、生徒同士によるピアレビューや教員との面談を試験的に実施しつつあり、本事業ではこの評価システムを確立する。

また地域社会への貢献についての目標として、「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。本校では、高校卒業後、就職希望が30%程度、進学希望が70%程度である。就職希望の生徒はほとんどが地元就職するのに対し、進学希望の生徒のほとんどは地域外の大学等へ進学する。これはこの地域に高等教育機関がほぼないことが大きく影響している。そこで地域への貢献の指標として将来的な地域貢献への期待度を示すアンケートを取り上げることとした。地域に根差した探究活動を行うことにより地域の魅力を発掘し、将来、この地元に関わりたいと感じる生徒の割合は高くなることを確信している。

目的C「双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及」に対する目標

本校は、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、地域との連携を重視して開校したが、これまでのネットワークを一層拡充し、教育と復興の相乗効果の創出のための地域協働体制を確立する。そのため

にコンソーシアムを組織的かつ実働的なネットワークとして機能させる仕組みを構築する。コンソーシアムでは8町村という広域での連携をカバーし、行政、民間、教育界といった幅広い業種による連携を目指す。本校が行う活動に協力をいただくだけでなく、連携側も本校の校舎を積極的に活用する等、学校を核とした多方向の連携、ネットワークの構築を目指す。

また、モデル校としての高等学校教育改革推進への波及に対する達成目標としては、多面的な定量的目標として、「保護者アンケートによる本事業への70%以上の肯定的評価」、事業への外部からの関心の度合いとして「視察、研修、発表会、聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数 250人以上」等を掲げることとした。さらに地域と連携を測る指標として「地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数 50件以上」、「本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数 200件以上」を掲げることとした。

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を図るものとして、管理機関において設定した成果目標) 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値					単位： なし
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	3.5
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。						
b	(高校卒業後の地元への定着状況を図るものとして、管理機関において設定した成果目標) 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上					単位： %
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もあり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。						
c	(その他本構想における取組の達成目標) 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合					単位： %
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を図るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数					単位： 件
	22	31	40	45	50	50
	目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の1年間を対象とする					
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を図るものとして、管理機関において設定した活動指標) 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数					単位： 人
	調査なし	200(見込み)	200	230	250	250
	目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。					
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 生徒の外部発表、コンテスト応募件数					単位： 件
	調査なし	30(見込み)	35	40	45	45
	目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。					

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間の件数					単位： 件
	133	150 (見込み)	165	180	200	200
目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。						
d	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：
目標設定の考え方：						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全校生徒数（人）		421	440	463	480
本事業対象生徒数			381	403	420
本事業対象外生徒数			59	60	60

4 実施体制

(1) 管理機関及びコンソーシアムの実施体制

① 管理機関における実施体制や事業の管理方法

双葉地区の未来を創造するリーダーの育成を具現化するために、双葉郡8町村、高等教育機関、地域、産業界、NPO等がコンソーシアムを構築し、協働して双葉郡ならではの教育を推進するとともに、子どもたちの実践的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことで、地域ならではの新しい価値を創造できる人材を育成する。また、管理機関独自の予算措置を行うとともに、事業をきめ細かく実施できるように教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問し事業の進捗を確認し、必要に応じ指導助言を行う。

② 運営指導委員会の構成（令和2年度より継続）

氏名	所属・職	備考
飯盛 義徳	慶應義塾大学総合政策学部教授	プラットフォームデザイン、地域イノベーション
田熊 美保	経済開発協力機構(OECD) 教育局教育訓練政策課シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030
田村 学	國學院大學人間開発学部初等教育学科教授	総合的な探究の時間の指導、カリキュラム研究

③ コンソーシアムの体制（令和3年度の体制）

機関名	機関の代表者名
双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（双葉郡浪江町教育長、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会及び双葉地区教育長会 代表）	笠井 淳一
福島大学人間発達文化学類教授	中田 スウラ
公益社団法人福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム） 専務理事	桜町 道雄

公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 教育・人材育成部長	山内 正之
認定 NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ拠点長	横山 和毅
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校長	柳沼 英樹
福島県教育委員会 教育次長	丹野 純一

④ コンソーシアムにおける実施体制や事業の管理方法

本校建学の礎である「福島県双葉郡教育復興ビジョン」推進のための「福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」がこれまで定期的に開催され、管理機関及びふたば未来学園も参画している。同会議における全体ビジョンの検討と、学校における地域協働による個別の探究実践との間をつなぐ実働的な枠組みが求められており、コンソーシアムはこの役割を果たす。コンソーシアムは管理機関が統括し、本事業の方向性や人材育成要件の確認、カリキュラムへの助言、参画各機関の特性を活かした生徒の探究活動の支援を行う。

⑤ カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置や活用に関する計画

カリキュラム開発等専門家：長谷川勇紀氏（NPO 法人カタリバ双葉みらいラボ拠点長） 探究活動のカリキュラム策定や地域探究活動の効果的な進め方について助言をいただく。
 海外交流アドバイザー：島田智里氏（ニューヨーク市役所公園局都市計画&GIS スペシャリスト） 海外との連携について国際協働と地域開発の専門的観点から助言をいただく。
 地域協働学習支援員：平山勉氏（双葉郡未来会議 代表） 双葉郡 8 町村の住民主体の復興活動のハブとしての立場から、地域探究活動における連携先について助言をいただく。

⑥ 管理機関及びコンソーシアムにおける活動計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
管理機関	○活動計画の実施や教育課程特例取得に向けた指導助言	○第1回コンソーシアム協議会の開催（事業の進捗確認） ○第1回運営指導委員会の開催 ○教育課程特例の申請	○学校訪問による指導助言	○第2回コンソーシアム協議会の開催（成果の検証） ○第2回運営指導委員会の開催
コンソーシアム	○事業構想、人材育成要件、役割等の確認、共有 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○生徒探究発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用	○生徒中間発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用 ○1年間の総括

⑦ 事業終了後の取組計画（カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置・活用計画やコンソーシアムのコミュニティスクール化等を含む。）

本事業終了後についても、地域参画でカリキュラムの改善や地域協働の深化を継続するため、コンソーシアムの枠組みを維持することを検討する。また、カリキュラム開発等専門家や地域協働学習支援

員の協力を仰ぎながら、同様の事業を継続するとともに、両者の役割を一部でも教員が担えるよう、本事業実施期間内にノウハウの伝達を行い、地域協働の取組の持続可能性を高める。費用については引き続きの事業継続が可能となるよう管理機関において支援するとともに、地域から持続可能な体制の構築について助言をいただき、各種団体の助成金等を活用し自走できるようにしていく。

⑧ 学校と地域団体・大学等との連携協定の概要

- 双葉地区教育長会（双葉郡8町村）がまとめた「双葉郡教育復興ビジョン（25年）」に教育復興の方向性と本校開校の方向性が示され、現在も同会と継続的に協働している。
- ふたば未来学園と関係機関による協働コンソーシアム連携協定（令和2年度締結予定）

（2）学校の実施体制

① 学校における研究体制、教職員の役割、事業実施への支援体制等

- 本事業の企画運営を専門的に行う校務分掌として「企画研究開発部」を設置し、本校高校教員の1割程度を配置する。同部では、探究カリキュラム全体の企画立案および運営、地域との接続、国内研修、海外研修、外部講師との交渉、教員研修等を所管する。
- 地域との協働による探究活動は「全教員が担当」しつつ「数名のチーム」体制で指導にあたる。学校全体の探究活動の指導力を向上し教員意識を変革していくため、チーム内での週次会や、担当教員同士が課題を共有し解決策を検討する月次会を設定するとともに、全教員参加の研修会「未来研究会」を年間10回程度開催し、組織的な研究開発を進める。

② カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け・役割、活用方法

- 各専門家・支援員を教職員の重要なパートナーとして位置づけ、校内にも専用の机を確保し、いつでも来校して担当教員と密接な連携・議論ができる環境を整える。
- カリキュラム開発専門家は企画研究開発部と週次の会合を行い、学校設定科目「地域創造と人間生活」、「総合的な探究の時間」、各教科における指導法等について検討する。
- 地域協働学習実施支援員は年間フィールドワーク計画や生徒の探究課題の方向性を共有し、地域の団体等との協働計画を協議するとともにコーディネートする。
- 海外交流アドバイザーは海外との連携に関して教員、生徒共に助言を行う。

③ 定期的な確認や成果の検証・評価等を通じた、究開発の進捗管理や改善の仕組み

- 各取組の際には生徒の「振り返り」を設定し、記述内容から成果・効果を検証する。
- 各学年で年2回、資質・能力のレベルを自己評価する「ルーブリック評価」を行い、能力伸長を測る。評価では自己評価の他に、生徒同士のピアレビューや教員とのルーブリック面談を実施する。これにより多面的な評価を実現するとともに、形成的評価として生徒自身が次の目標設定に向かう成長の機会とする。面談は全教員が担当する。
- 卒業時に「将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）」のアンケートを行い、地域社会への還流を見据えたカリキュラムの効果と課題を検証する。R2年度入学生以降は入学時にもアンケートを行い、卒業時との意識変化も測定する。
- 全体の検証、評価は「企画研究開発部」が中心となって進め、全職員への報告・協議の機会を設けるとともに、コンソーシアム、運営指導委員会に報告し助言を頂く。

④ 学校における外部有識者等の支援・活用体制

- 運営指導委員：定期的に本事業に対する意見交換や指導をいただく。委員の専門性を活かして、カリキュラムの方向性、地域との協働における指導方法、有効な評価方法など、多面的な視点からの指導を仰ぐ。特に、世界的な教育の方向性、日本における探究活動やその評価方法等の議論を深める。
- アクセント・次世代教育・産官学民連携機構：人材育成に関する豊富なデータを必要に応じて提供いただきながら、ルーブリックをはじめとする本校の評価について、評価軸の立て方、データの見方考え方、評価のフィードバックと形成的評価への活用の在り方等について支援いただく。
- 発表会審査員：生徒の発表について大学、企業、NPO等の視点から意見をいただく。結果に対する意見やアドバイスだけでなく、その先の活動の進め方についても伴走者的な立場で協力をいただく。

⑤ これまでの教育課程等の研究開発の実績

年度	研究開発実績
平成 27～31 年度	スーパーグローバルハイスクール

5 研究開発計画及び内容

※関連資料：別紙様式3（前掲：ビジュアル資料）

① 研究開発構想名

原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成

② 研究開発の概要

- カリキュラム開発：全体の柱として学校設定科目「地域創造と人間生活」と「未来創造探究（総合的な探究の時間）」で3年間を貫き、地域課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成するとともに地域に貢献する人材としての在り方生き方を涵養するカリキュラムを開発する。
- 地域課題解決に貢献する人材育成：地域・世界が直面する困難な課題を理解し、自らの在り方生き方を考え、また実践を重視した地域課題解決の探究を行い、その解決に貢献できる人材を育成する。
- 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果を創出し、全国へ発信する。【補足5】

③ 研究開発計画に対する仮説の分析及び事業実施より期待される効果

- 3年間を通じた「地域課題解決の探究カリキュラム」を構築することで、資質・能力の育成と、地域に根ざした在り方生き方の涵養をより深化することができる。これを一般化し、全国の高校の探究活動の活性化に繋げることが期待できる。
- 地域の課題と自らの在り方生き方を重ね合わせて思考しつつ、世界の課題に向き合う経験により、地域と世界の課題の共通性を見出し本質的な解決策を見出すことに繋がる。その上で課題解決の実践を行うことで、地域で新たな価値を創造する力が育成される。
- 高校と地域の広域連携モデルによって、生徒の姿が住民にも影響を与え、地域全体の課題意識や行動力が喚起され、創造的な地域を実現することが期待できる。 【補足5】

【補足5】 研究開発の内容、仮説の分析、期待される効果

○カリキュラム開発の内容

地域課題解決の探究活動を本校の教育活動の核とする。そのため教育課程の特例により「産業社会と人間」（1年次2単位）を新たな学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」に代替した上で、「総合的な探究の時間」（2・3年次各3単位）と3年間を貫き、地域課題解決の探究活動を実施する。その際、

探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくようカリキュラムを構造化する。

○カリキュラム開発における仮説の分析、期待される効果

・学校設定教科・科目の設置と教育課程の特例の活用

本校では現在、1年生で「地域創造と人間生活」（学校設定科目）（2単位）、2・3年生で「総合的な探究（学習）の時間」（各学年3単位）を実施している。これまで地域探究活動は主に「総合的な探究（学習）の時間」において実施しており、探究活動も年を経るごとに活発になっている。しかしながら1年次と2・3年次の間の接続に課題があった。具体的には、1年生で履修する「産業社会と人間」においては「高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告（H5）」に示された通り「職業と生活」「我が国の産業と社会の変化」「進路と自己実現」の3項目で構成し、特に「職業と生活」の指導事項として求められる「各種企業等の見学及び職業人等との対話を通して、職業の種類や特徴、職業生活などについて理解するとともに必要とされる能力・態度、望ましい勤労観、職業観を養うための学習」も実施してきた。一方で、2年次からの「総合的な探究の時間」では時代の変化を踏まえ、地域社会の課題解決に取り組む中から自らの在り方生き方を見出していく学習を行っている。H5年の報告ではある面で職業の種類や特徴は所与の固定的なものとして捉えられている一方、地域課題解決の探究においては産業や職業も自らが地域において創造していく対象の一部である。そのため、「産業社会と人間」では職業について学ぶ他に、新たな地域創造の活動を行っている先人に学ぶ単元を別途設定するなど重複も生じている上、実施してきたものが2・3年生の地域探究活動にあまり活かされていないという課題がある。この課題を解決するために時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成して「地域創造と人間生活」に代替することとし、地域での活動をより重視することとした。このようなカリキュラム編成にすることにより、3年間を通して地域課題に切れ目なく取り組むことができ、地域探究活動を現状以上に活性化させることができる（仮説）。さらに探究活動が活性化することにより、生徒の地域や実社会の課題に向かう意欲や行動力が喚起され、地域に根差した在り方生き方が涵養されることが期待できる（期待効果）。

・探究プロセスの確立

一般に探究活動は「調査」「課題発見」「テーマ設定」「課題解決」の各プロセスが挙げられ、これらを、PDCA サイクルを回して進めていくことが言われている。多くの探究プロセスで活用できるものの、実践しようとするとう漠然としているあまり、指導教員は戸惑うことが多かった。また「課題解決」の段階においては単なる調査研究で終わってしまうケースが多く、真に解決に至るケースは少なかった。また探究活動のステージに応じた生徒と教員の関わり方についても、これまでそれほど多くの関心を持たれてこなかった。そこで本事業では下表に示すような本校独自の探究プロセスや指導方法を構築する。

表 本事業で構築していく探究プロセスの概要（◎はその時期における主要な姿勢、関わり）

時期	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	3 年前期	3 年後期
探究段階	系列選択、職業観育成(産業社会と人間の内容)	調査のためのアクション 地域の現状分析		解決のためのアクションと考察 アクションー考察サイクル		まとめ 論文作成
生徒の探究姿勢	守(受容的)	◎守(受容的) 破(生成的)	守(受容的) ◎破(生成的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)
教員の関わり方	インストラクター	インストラクター	インストラクター ◎ファシリテーター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター

具体的には探究の大枠として「調査のためのアクション」と「解決のためのアクション」を明確に分

けるプロセスである。いずれの段階も重要であるが、特に本事業では「解決のためのアクション」を重点化していく。また、これらの段階を明確に生徒に意識させるため、区切りとなる時期に発表会を実施し、対象生徒全員がそのステージをクリアしながら探究活動を進めていくようにする。また、生徒と教員の関わり方について、上記のステージに応じて、インストラクター的、ファシリテーター的、メンターの役割を担うことができるよう、整理をしていく。このような探究プロセスの明確化、特に「解決のためのアクションの重視」により、生徒が地域の課題としっかり向き合い課題解決にむけて着実に取り組むことができるようになる。また教員の関わり方を明確にすることにより教員の指導力向上や生徒の主体的な探究活動の質的な向上につながることを確信している（仮説）。さらにこの取組を一般化することにより、地域探究活動の進め方の先駆的事例として広く活用していただくことができれば、全国の地域探究活動の活性化につながることを期待できる。

○地域課題解決の探究の内容

1年生の学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」では、「産業社会と人間」としての内容を実施しながら地域課題解決の探究の導入を行う。「産業社会と人間」の内容として具体的にフューチャーマッピングによるライフプラン作成、系列選択等を行い、職業観の育成、進路意識の高揚を図る。また地域課題解決の探究活動の導入として双葉郡の現状を知るフィールドワーク、マインドマップ等によるスキル学習、地域調査と演劇、グローバル課題に関するワーク等を実施する。

2、3年生では「総合的な探究（学習）の時間」において地域に関する課題探究活動を行う。地域の特性や特に重視すべき領域に焦点をあて、以下に示す6つのゼミを設置し、生徒の希望により振り分ける。その際、本校の系列（アカデミック系列、トップアスリート系列、スペシャリスト系列）についても考慮する。

原子力防災探究ゼミ	メディア・コミュニケーション探究ゼミ	再生可能エネルギー探究ゼミ
原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究する。廃炉の進め方や汚染水の処理方法等、事故後の様々な処理について地域がどのように関わらなければならないのか、避難や帰還の過程で生じた対立や分断をどのように解決するのか、避難により断絶してしまった地域コミュニティをどう復活させるべきか、といった課題に取り組み、解決に向けて実践する。	地域におけるメディア・コミュニケーションのあり方について探究する。誤解或いは意図的に加速させられている分断・対立を止揚する情報発信やコミュニケーション、災害時のメディアの効果的な活用方法、災害と巨災の教訓の発信と伝承などに向けて、メディアが果たす役割等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	歴史的に全国のエネルギー供給地であり、原発事故以降、特に再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する本地域の特性を活かし、再生可能エネルギーを中心としてエネルギー全般について探究する。科学的なアプローチのみならず社会的なアプローチでも考察し、望ましい人間社会と、地球環境やエネルギーの関係性について探究し、実践を行う。
アグリ・ビジネス探究ゼミ	スポーツと健康探究ゼミ	健康と福祉探究ゼミ
地域の復興を農業、商業の観点から探究する。地域資源を活用した新たな産業の創出、農山漁村の6次産業化など、ビジネスや生業の観点から探究し、実践を行う。特に地域の農水産物や商品について、風評の実態調査、その解決策、地域の食を活用したコミュニティ形成等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	Jレτζが所在しスポーツが身近な環境を活かし、スポーツを通じて地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康増進、子供のスポーツ環境支援、五輪を契機とした復興、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現や、アスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行う。	少子高齢化や人口減少が一段と加速した福島の地域を全国の課題先進地域として捉え、健康長寿の実現の方策を探究する。中核病院・地域医療・介護・福祉が結びついた地域包括ケア、地域の高齢者・大人・子供などの多様な世代の共助による生きがいのある生活の創造等の課題を設定し、解決に向けて探究と実践を行う。

これらのゼミで扱う課題は双葉郡で特に重視すべき課題であるが、同時に世界的にも共通する課題である。地域に焦点をあてる一方で、世界でこれらの課題にどう向き合っているかという視点も加えながら、実践を進める。

ゼミでは生徒の探究ステージに応じて柔軟に指導し、生徒の主体性や行動力を育む。また探究ステージを明示し、調査研究に留まらず、課題解決のための実践を重視した取組を行う。

地域課題解決の探究活動については、本校舎（福島県広野町）の生徒全員を対象とする。本校には系

列が3つあり、多様な生徒がいるが、それぞれの系列の特徴を生かした活動が可能になるように工夫する。系列と関連したゼミを選択する場合、自分の専門分野を地域の課題と関連させ深く学ぶことができる。一方、系列に縛られず自由な発想でゼミを選択した場合においても、系列とゼミテーマを関連させながら、多様な見方考え方を獲得することが期待される。

○地域課題解決の探究における仮説の分析、期待される効果

震災、原発事故に見舞われた福島県双葉郡には復興に向けた意欲の高い方々や団体が多く、探究活動においてもこれらの方々と連携して取り組むことが多かった。また連携先は本校の位置する広野町が中心であった。しかし連携の在り方についてはいくつか課題が残った。具体的には、双葉郡8町村とは「双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」における年複数回の協議の場でビジョンについては共有しているものの、具体的な地域協働については本校に委ねられており、連携の糸口が教員個人の繋がりに依存してきた点、連携が単発で一方向的な依頼になりがちな点、連携先との意思疎通が低い点（学校教育についての理解不足）、地域が近隣町村に偏りがちである点等である。これらを解決するために本事業ではコンソーシアムや地域協働学習実施支援員の活用、連携先の特性に応じた連携の在り方の整理をしていく。コンソーシアムは、連携の在り方についての議論を深めることを主目的とする。またコンソーシアムには双葉郡8町村に関わるメンバーにも加わっていただき、これまで以上に広域での活動を促進する。地域協働学習実施支援員については個々の取組についての適切な連携先についての情報提供をしていただく。これにより学校と連携先の組織的な繋がりが可能となり、また双方向の意思疎通がよりスムーズに運ぶようになり連携事業をより深化させることができる（仮説）。さらに地域連携が進展することにより、本校が目指している地域と学校の一体化が実現できると期待される（期待効果）。また、広域市町村を「地元＝立地」と捉えた高校を核とした地域活性化のモデルは、今後学校統廃合が進む全国の地域にとって、統廃合を契機として地域の活性化に繋げるモデルともなることが期待される。

○海外研修等の内容

原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりを主要テーマとしたドイツ研修、ニューヨーク研修を行う。ドイツ研修では地域住民のまちづくりへの参画やエネルギーに対する考え方、ニューヨーク研修では持続可能な社会づくりと若者の役割について学ぶ。これらのテーマは地域的にも国際的にも共通する課題であり、同年代の生徒と深く議論する機会を設定する。なお、これらの研修は希望者を対象とするが、研修の成果は全生徒に波及するように工夫する。具体的には発表会の開催、SNSを通じた海外高校生との連携企画、地域課題解決の探究活動のテーマによる意見交換の機会の設定などが挙げられる。

また本校で受け入れている「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生やALTも活用し、異なる価値観の人たちと日常的に協働して探究活動を進めていく。

○海外研修等における仮説の分析、期待される効果

本校ではこれまでいくつかの海外研修を実施し、グローバルな視点を持ち行動力の高い生徒の育成に繋げてきた。海外研修にあたり、従来の位置づけ（グローバルな視点の獲得、外国語コミュニケーション力の育成、福島の現状報告）をより具体化、深化させ、以下のように位置付ける。

- ・地域課題と世界的な課題との共通性の発見から本質的な課題解決へ

本校で実施する地域課題解決の探究活動は6つのゼミに分かれて実施する。各テーマは地域に根差したものであるが、本質的には世界でも共通する課題である。例えば原子力防災探究ゼミでは原子力災害からの復興課題を掲げているが、天災人災を問わず、災害に対する適切な対応は、東日本大震災以降、特に注目されているところである。またメディアコミュニケーション探究ゼミで実施する課題には教訓を次世代に活かすことが大きなテーマとなっている。世界を揺るがす多くの事案の後には必ずこの課題

が伴っており、世界から学ぶところも大きい。生徒自身が自身のテーマを持って海外研修を行うことにより、自身のテーマの普遍性を学び、本質的な解決策への足がかりを得ることができる。また、単発の研修に終わらず、海外研修後の継続的な実践や議論に接続することが可能である。

・社会の構造的な課題

双葉郡は震災、原発事故により避難を余儀なくされ、一時は住民が誰もいなくなった地域であり、地域を初めから構築し直す経験をしてきた。この経験から住民のまちづくりへの参画の在り方については特に注目すべき点がある。ここには日本が抱える「少子高齢化」はもちろんのこと、多くの課題が山積している。一方で「一から」地域社会をつくるという観点からは、従来の施策に縛られない創造性豊かな未来を描くことも可能である。このような観点から世界の先進的な地域社会を学ぶことは非常に意味が大きい。海外では、住民と行政が一体でまちづくりを進めている事例が多く、これを学ぶことで自分たちが住む地においても、住民と行政が深く関わりながら課題に向かう取組に発展させることができる。

・異質からの学び

福島県は健康被害、食、観光等において未だに風評被害や差別に苦しんでいる。これらの本質の一つは、異質なものに対する違和感やイメージ先行の見方考え方にある。多民族が共存する海外は異質なものの宝庫であり、偏見・差別等の共通の課題をどう乗り越えていくのか多くを学ぶことができる。

・主体性の育成

これまでの海外研修経験者の様子から、研修実施後には主体性が大きく育まれていることが伺えた。この能力をさらに育成するために海外研修の在り方を再検討する。これまで教員側が様々な指示を与えながら実施してきたが、教員が担ってきた役割を極力生徒側に委譲し、生徒中心の研修運営を促進する。具体的には研修先の選定、事前研修、事後研修といった計画策定等が挙げられる。教員はファシリテーターとして生徒の運営をサポートする。また海外研修アドバイザーに生徒と積極的に関わっていただく。

④ 研究開発のスケジュール

ア 3か年の計画

年度	1年目	2年目	3年目
内容	【本事業の整備、運用】 ○コンソーシアムの立上と運営 ○カリキュラム整備 ○人材育成ルブリック改定 ○探究ルブリックの新たな策定と運用	【本事業の本格運用】 ○カリキュラムの確立 ○探究活動の定常化 ○ルブリックを活用した評価方法の確立 ○本事業の普及拡大	【本事業の総括と継承】 ○本事業の課題の抽出と対策の検討 ○継続的、発展的な活動に向けての環境整備 ○本事業の普及拡大

イ 令和4年度の計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
内容	1年：進路、職業選択、人間関係形成に関する活動 2年：地域探究の導入、ゼミ、テーマ探索 3年：地域探究（解決アクション）《全学年ルブリック評価》	1年：地域を知るためのフィールドワーク、演劇による地域の表現 2年：地域探究（ゼミ配属、テーマ探索） 3年：地域探究（まとめ、発表）、ルブリック評価	1年：国際理解活動、地域探究の導入、テーマ探索 2年：地域探究（テーマ決定、調査アクション）、ルブリック評価 3年：論文執筆《全学年学校評価》	1年：地域探究（ゼミ配属、テーマ探索）、ドイツ研修（希望者）、ルブリック評価 2年：地域探究（解決アクション）、ニューヨーク研修（希望者） 3年：論文完成

⑤ 地域との協働により実施する学習内容と教科・科目における位置付け、相互の関係

学校設定科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究の時間」で地域との協働による探究活動を行う際、探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくことを目指し、教科の視点から知識を学ぶ単元も設ける。一方、各教科においても下記のように探究と接続した内容を取り扱い、教科を学ぶ意欲を喚起し発展的な知識の学習に繋げていく。【補足7】

例) 理科、数学：一次エネルギーのとらえ方、放射線とその減衰、地球温暖化、廃炉技術
 地歴公民：エネルギー供給地としての地域の歴史と背景、原子力災害と地域の未来

【補足7】地域との協働により実施する学習は主に学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」の探究活動で実施する。その際、学校全体の意識を統一するルーブリックの設定を始点としたカリキュラムマネジメントを重視していく。

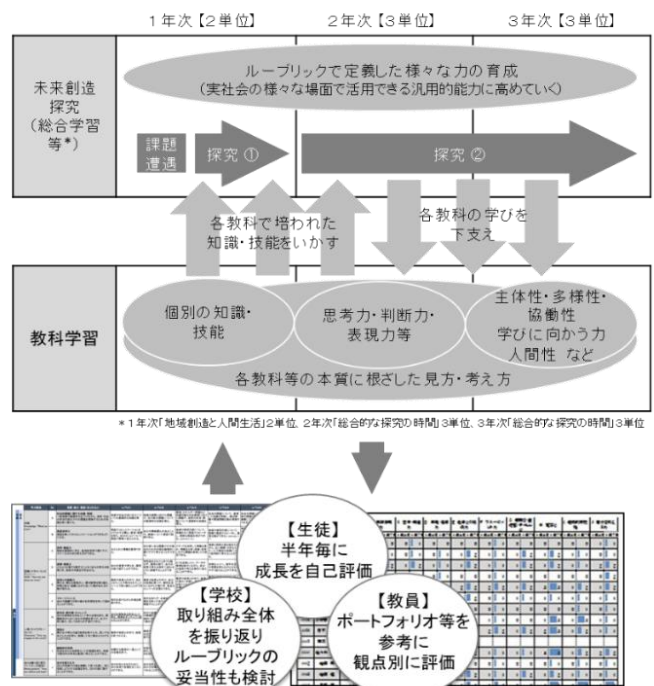
いずれの探究においても、各教科で身に付いた、ものの見方・考え方、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性、学びに向かう力や人間性などが発揮され、本校がルーブリックで定義した汎用的な能力に高まっていくことを目指す。逆に、カリキュラム全体の軸となる探究があるからこそ、実社会での探究を通じて知識の必要性を痛感する体験等から各教科の学習の意欲が喚起され、各教科の学習活動が確かに下支えされていく。また、内容面に関する知識も、各教科において発展的に学習し、深められていく。

同時に、下記のように本校の全教科においても、地域と関連したテーマを扱っていく。

「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」における探究と各教科のつながりを意図的に生み出し、通常各教科・科目を探究活動と組み合わせることにより、各教科の学習も表面的な知識や技能の習得にとどまらない、より深い学習となる相互作用が期待できる。

また通常教科・科目において地域のテーマを扱う場合、複数の教科が連携して行う教科連携がより効果的である。教科連携を本校の教員研修「未来研究会」の重点的な取組の一つとして位置づけ、また強化期間を設定することにより、その推進を図る。

ふたば未来学園におけるカリキュラム・マネジメント



⑥ 他校や他地域への事業成果の普及方策

- 管理機関主催で全県立学校の教員が本校で研修を行い、各校への取組の普及を図る。
- 学校公開日を毎月設定し、本校への視察を積極的に受け入れ発信する。
- 学校ホームページに事業に関する報告や成果を掲載する。
- 生徒の地域課題解決の探究発表会を公開し、成果を発信する。
- 最終年度には教員による成果報告会を実施し、成果を総括し、その普及を図る。

6 学校設定教科・科目、教育課程の特例を活用した取組

① 学校設定教科・科目を設定	○
② 教育課程の特例を活用	○

学校設定教科・科目の設定に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	地域創造と人間生活
単位数	2単位
対象学科・学年	1年次
必修修・選択の別	必修修
設定する教科・科目の内容	<p>1 目標</p> <p>地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を次の通り育成することを目指す。</p> <p>ア 社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う。</p> <p>イ 地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p> <p>2 内容</p> <p>(1) 地域社会の創造へ参画していく自覚と態度の涵養</p> <p>地域を知る学習（双葉郡フィールドワーク）、地域人材インタビュー、国際理解講座等を通して、地域や世界で困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れる。</p> <p>(2) 地域社会を創造する力</p> <p>コミュニケーションワークショップ、スキル学習、地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、複雑な地域課題を多面的に理解し、新たな地域を創造していく協働力や想像力等の基本的な技能や態度を養う。</p> <p>(3) 生き方と進路</p> <p>自己理解から職業人インタビューを通して、自己・地域・世界の未来を重ね合わせたライフプランを作成し、次年度の系列選択に繋げる。</p>
その他特記事項	教育課程の特例を活用して本科目を設定し、総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を代替する。

教育課程の特例に関する説明資料

教育課程の特例を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
教育課程の特例を活用する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

教育課程の特例を活用して設定する科目の内容

科目名	地域創造と人間生活
単位数	2
対象学科・学年	総合学科・1年次
必履修・選択の別	必履修
特例を活用して設定する科目の内容	<p>(1) 目標 地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を育成することを目指す。</p> <p>(2) 内容</p> <p>ア 地域でのフィールドワークやインタビュー等を通して、困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れ、社会の変化の中で主体的に新たな地域社会の創造に参画する自覚と態度を養う。</p> <p>イ 各種スキル学習や地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と、地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、自己の将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p>
代替措置	総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を本科目に代替する。
特例が必要な理由	<p>○「産業社会と人間」は総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされ、高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告（H5）において具体的指導内容が提言され、各校にはこの内容に十分配慮した指導が求められているが、職業の種類や特徴、職業生活の理解等において、固定的な産業や職業が想定されている。</p> <p>○一方本校では Society5.0 の社会像と求められる人材像を踏まえ、地域社会において新たな価値を創造する人材の育成を構想しており、産業や職業は創造の対象の一部である。時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成することで、狙いを損なうことなく人材の育成がより確かになるため、代替が適当であると判断する。</p>
特例の適用範囲	令和3年度入学生から適用する。

研究
開発
構想名

原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造する グローバル・リーダーの育成

目的

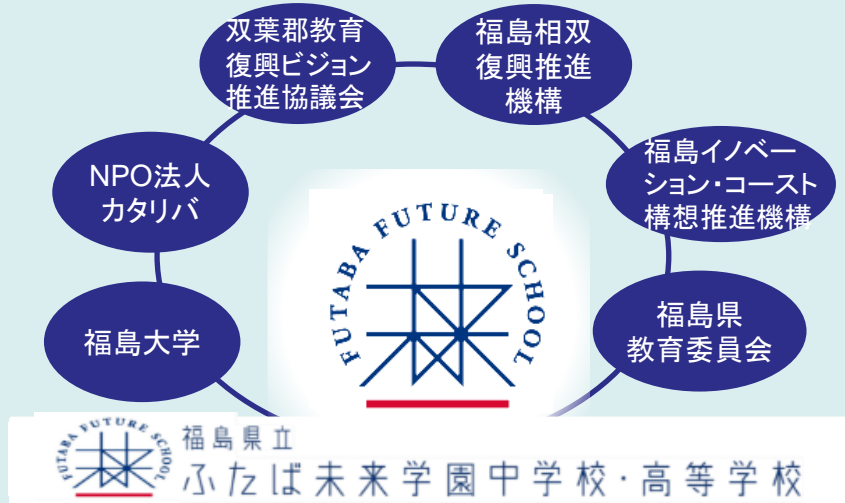
- 地域探究と海外研修を体系的に位置づけたカリキュラム開発
- 地域や世界の課題解決に挑戦する人材の育成
- 教育と復興の相乗効果の創出、全国の高校への波及

育成
人材像

- 地域や世界の課題と自己の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する市民性
- 立場・価値観の違いによる分断や対立を止揚する協働的ネットワーク構築力
- 地域の資源を見出し、地域に新たな価値を創造する力

ふたば未来学園と双葉郡による広域協働コンソーシアム

- ◆ 県、ふたば未来学園中学校・高等学校と双葉郡8町村を中心とする広域コンソーシアムを構築。
- ◆ 生徒の実践的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を創出。



- ✓ 将来の地域ビジョン、ふたば未来学園で育成していく人材像の共有
- ✓ 上記に基づきふたば未来学園で展開する教育活動の企画・立案 等

3年間を通じた「地域課題解決の探究カリキュラム」の構築

- ✓ 学校設定科目「地域創造と人間生活」の設置。
- ✓ 課題解決のためのアクションを重視。
- ✓ 教員の関わりを含めた、汎用性のある探究活動指導方法の確立。
- ✓ 地域の特性を考慮した6つの探究ゼミでの実践。

原子力防災探究ゼミ

原子力発電所事故後の地域社会のあり方、廃炉と住民の関わり、地域コミュニティの復活について探究する。

メディア・コミュニケーション探究ゼミ

地域におけるメディア・コミュニケーションの効果的な活用方法、教訓を継承していくための方策について探究する。

再生可能エネルギー探究ゼミ

エネルギー供給地としての福島県の特性を踏まえ、エネルギーについて科学的、社会的なアプローチで探究する。

アグリ・ビジネス探究ゼミ

地域の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究する。

スポーツと健康探究ゼミ

Jヴィレッジの近隣という立地を活かし、スポーツを通じた地域活性化策や地域の健康増進策等について探究する。

福祉と健康探究ゼミ

少子高齢化の先進地域となっている双葉郡の地域性を活かし、地域の方が生きがいのある人生を送る方策について探究する。

海外研修等による地域と世界の課題解決

- ✓ 自身が取り組む地域課題解決の探究内容について、海外の同世代と議論。
- ✓ 地域課題とグローバル課題の往還による本質的な課題解決策の模索。
- ✓ 事前、事後研修も含めて、生徒が主体となった海外研修構築プロセスの確立。

1年次：ドイツ研修

フライブルク・ミュンヘン

住民の積極的な参画・関与によるまちづくりや再生可能エネルギーの活用について学び、今後の地域の在り方について考察する。
演劇やプレゼンによる福島の実況報告を行い、地域の理解を促進する。

2年次：米国研修

ニューヨーク、国連本部

「持続可能な社会づくり」をテーマに地球規模での課題について国際機関や世界の同世代と意見交換、議論を行う。
差別や対立・分断について米国の現状を学び乗り越える方策を探る。

2. 1. 1 課題を知る学習

本校の地域創造と人間生活は、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①については自分史やマインドマップを用いた自己理解を通して、将来を見据えてありたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③ではイラクでエイドワーカーとして活躍する高遠菜穂子氏などの協力で、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、2年次後半からの未来創造探究に繋げてきた。今年度は中高一貫生と高入生が合わさる初めての学年ということで、学びのバージョンアップを目指し、これまで高校2年次から実施していた探究を1年次の11月から実施し、演劇と探究の接続を丁寧に行った。

(1) 実施内容

① 地域創造と人間生活 オリエンテーション

入学者への課題として「自分史」を実施し、これから地域やそこで生きる人々と出会う前に自分のこれまでの人生を振り返った。覚えていないことについては家族に聞きながら記入することでせることで、家族との対話の時間を持つことができたという感想があった。オリエンテーションでは改めてこの学校が設立された経緯や、これから地域と出会う前のイントロダクションとして、双葉郡の紹介を丁寧に行った。

身に付けて欲しい力

目標

地域や社会の変化を見通しながら、**自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造**するための資質・能力を育成する。

社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う

地域社会の変化を多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく

自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、主体的に学び続ける能力と態度を養う

② 双葉郡8町村バスツアー

日 時：6月14日（火）

講 師：

1号車	広野町	磯辺吉彦（広野わいわいプロジェクト）
		青木裕介（広野ぷらっとあっと）
		新妻良市（新妻有機農園）
		正木里奈（ワークショップ講師）
2号車	檜葉町	中井俊郎（JAEA） 青木隆宏（一般社団法人ならはみらい）
3号車	富岡町	青木淑子（富岡町3.11を語る会）
		平山 勉（ふたばいんふお）
4号車	川内村	三瓶義浩（一般社団法人かわうちラボ）
		井出寿一（一般社団法人かわうちラボ）
5号車	双葉町	小泉良空 （一般社団法人ふたばプロジェクト）
		佐藤真喜子（一般社団法人まちづくりおおくま）
	大熊町	武内一司（喫茶レインボー）
		松永秀篤（熊川稚児鹿舞保存会）
6号車	浪江町	佐藤秀三
7号車	葛尾村	下枝浩徳（一般社団法人葛力創造舎）

行 程：

1号車 広野町

学校 ～ ぷらっとあっと ～ 新妻有機農園～ 箒平地区にて移住者との対話 ～ ひろの未来館（海洋ゴミでアクセサリをつくるWS） ～ 学校

2号車 檜葉町

学校 ～ 檜葉遠隔技術開発センター ～ レストラン岬 ～ みるーる天神 ～ 木戸川漁協 ～ J ヴィレッジ ～ 道の駅ならは ～ みんなの交流館ならは CANvas ～ 学校

3号車 富岡町

学校 ～ ふたばいんふお ～ 富岡高校 ～ 富岡沿岸部ツアー ～ さくらモール ～ とみおかアーカイブミュージアム ～ 学校

4号車 川内村

学校 ～ 川内村役場 ～ いわなの郷 ～ 草野心平記念館（天山文庫） ～ 幻魚亭 ～ 上川内諏訪神社・長福寺 ～ 完全密封型野菜向上 KiMiDoRi ～ いちご工場 ～ 複合施設「ゆふね」 ～ 学校

5号車 双葉町・大熊町

学校 ～ 双葉高校 ～ 双葉郡内ツアー ～ 双葉町産業交流センター ～ 大熊町内ツアー ～ おおくまーと・喫茶レインボー ～ Linkの大熊～ 学校

6号車 浪江町

学校 ～ 福島ロボットテストフィールド ～ 道の駅なみえ ～ なりわい館工房（大堀相馬焼絵付け体験） ～ 浪江町周辺 ～ 学校

7号車 葛尾村

学校 ～ ZICCA ～ かつらおやぎ広場がらがらどん ～ 葛尾大尽屋敷跡公園 ～ 葛尾村郷土文化保存伝習館～ 学校



概要：

双葉郡の現状と課題を実際に自分の目で見て、この地で学ぶ意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的として、双葉郡8町村バスツアーを

毎年実施している。今回、8町村それぞれのバスツアー（大熊・双葉のみ1つにまとめて計7コース）を企画し、1日かけて双葉郡を歩いた。浪江高校、双葉高校、富岡高校を訪問した生徒達の中には、大震災から10年以上経つ現在でも、時がとまったままの校舎を見て言葉を失っている生徒もいた。

また、地域で生きる方々や、地域を盛り上げるために活動している方々とも直接交流ができたことで、今後の演劇創作や未来創造探究につながる学びとなった。本校には、福島県外出身者も多数在学している。事前に調べ学習を行い、実際に自分の足でその地を訪れた際に得る学びが深化したと考えられる。また、双葉郡出身者で、震災後避難して以来初めて故郷を訪れる生徒も一定数おり、バスの中から自分の家のあたりを必死で探す様子もみられた。震災以前とは様子の変わった町に驚く生徒もいたが、11年振りに故郷を見て様々なことを感じたようだ。バスツアー振り返りでは、こちらが想像したよりも生徒は多くの学びを得ていたようだ。

③夏休みプチ探究

夏休みの宿題として、プチ探究を実施した。右上の3つのコースから自分に合ったものを選んでもらった。成果物として、アクション結果をGoogle Formに入力することと、短い動画にまとめて提出してもらった。提出先は、生徒達でも携帯電話から簡単にアップできるよう、Flipgridを使用した。バスツアーを経て、双葉郡の気になる所について調べる者もいれば、純粋な自分の興味関心についてひたすら深掘りする者もいた。生徒達の得意とする動画を使った表現にしたことで、楽しみながら取り組むことができたようである。提出された動画はどれもクオリティが高く、生徒同士の知的好奇心をくすぐるものばかりとなった。夏休み明けには表彰式を実施し、ベストアクション賞、ベストクリエイター賞、ベストリサーチ賞、ファーストペンギン賞として14名の生徒を表彰し、景品として知育菓子を贈呈した。

3つから1つ選んでアクションプランを作ろう	
[A]	自分や誰かの困りごとを解決！ 「未来創造探究」先取りコース
[B]	興味あることをひたすら深掘り！ 「フカボリ探究」コース
[C]	とにかく助け！ 「ひたすらアクション」コース

◆ベストアクション賞

- 「県内・寿都高校生との交流を通して」
- 「宮城研修で震災遺構を訪れて」
- 「医療の仕事1日体験デー2022に参加して」
- 「福島の放射能問題や課題に対する取り組みについて」

◆ベストクリエイター賞

- 「ひとりバンド」

◆ベストリサーチ賞

- 「同調圧力について」
- 「テクノポップの歴史と音楽ジャンルの傾向の変化」
- 「夢日記からわかるわたしの真理」
- 「地域医療について」
- 「ドイツから学ぶ日本が多様性を受け入れる社会づくり

を行うにあたって」

「海外と日本の色彩感覚の差」

「人体への影響から考える1000万ボルトの本当の威力」

◆ファーストペンギン賞

「児童クラブボランティアに参加して」

「宮城県の震災遺構」



「医療の仕事1日体験」



↓「ドイツから学ぶ多様性を受け入れる社会づくり」



「福島の放射能問題や課題に対する取り組みについて」↑

生徒感想より

「プチ探究をやってみて調べてくる時に出てくる数々の記事が印象的でした。僕はプチ探究をやることは新しいことを知ることに加えて自分で何かをすることやどンドン気になることを調べたくなることだと気づきました。沢山のことを知ることによって自ら行動する気力を起こす事ができました。何かを調べることはとてもワクワクするので、他にも何か調べてみようかなあという気持ちになりました。」

「自分の好きなことや気になったことについて細かく調べてアクションを起こしたり、まとめられる時間を学校の課題として設けてもらえるのが嬉しく、楽しかったです。」

(2) 成果

昨年度と比較すれば、今年度はコロナ前のような活動ができた。同時にコロナ禍に普及したICTを活用して学びの共有を有効に行うこともできた。また、今年度はすでに探究で取り組みたい分野がハッキリしている生徒が多く、プチ探究で生徒たちの興味・関心を知ることができたことで、後半の未来創造探究のスタートアップでの面談等に大いに役立った。

(3) 課題と展望

1日かけてバスツアーを実施するようになり、1つの町村をじっくり体験することができるようになった。コースの打ち合わせなどの事前準備が大変ではあるが、その分生徒たちの学びは大きいので、引き続きそれぞれの地域をより深く学ぶ機会としていきたい。

2. 2. 1 探究オリエンテーション

2～3年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出する。本校で「未来創造探究」と呼ぶその授業において、生徒は自らの興味関心に従い、「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」の6つからひとつのゼミに所属して探究活動を行う。オリエンテーションでは自分の興味・関心（Will）や地域の課題（Need）について考えたうえで、ゼミ選択を行った。

（1）はじめに

本年度は「未来創造探究」の授業とは何か、目的は何かを入念に確認するところから始めた。そのうえで、探究テーマを決めるためのステップとして、「マインドマップ」「マンダラート」「50の問いづくり」のワークを実施した。テーマの決定とゼミ選択をスムーズに行うために、ゼミ担当者が作成した「ゼミマップ」を公開し、ゼミ決定前に探究担当者と生徒で面談を実施した。

（2）実施内容

「未来創造探究」の授業に入るにあたり、まずは高校1年次1年間の「地域創造と人間生活」の取り組みを振り返り、自分の考えを整理するところから始めた。探究活動はどのように進めていくのか、考えるべき地域社会とはどの範囲を指すのかを説明し、地域社会の課題探究とはすなわちそこにいる人間の課題探究であること、課題を解決することよりも課題を発見することが重要であることを確認した。これは探究テーマを支える「問いづくり」が今後のゼミ選択・探究活動に大きく関わってくるからである。

自分の興味・関心（Will）や地域の課題（Need）をうまく掛け合わせたマイキーワードを絞るために、まずは「マインドマップ」の手法を取った。そこから気になるいくつかのキーワードを選び「マンダラート」を用いてキーワードの解像度を上げていく。最後に問いを深められそうなキーワードから「50の問いづくり」を実施し、探究テーマにふさわしい課題設定を試みた。問いづくりはWhat（何を）やHow（どうやって）という疑問詞の視点だけでなく、定義説明（〇〇はどういう意味？）や事例（〇〇とは例えば？）という問いの視点、あるいはキーワード×学問分野など広い視点から問いを作るよう促した。

生徒の適切なゼミ選択のために、探究担当教員による「ゼミマップ」の作成を試みた。生徒が実施するマインドマップの活動への理解を深めつつ、担当教員各個人の個性を踏まえてゼミ内で展開できる活動のテーマやその

幅をキーワードで端的に示すことができた。生徒は自分のマイキーワードや問い、探究テーマと各ゼミマップの共通点を探しながらゼミ選択について考えることができた。そののち、自分の興味関心にに基づき、6ゼミ（「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」）の担当者と面談し、所属ゼミを決定していくという流れになる。

（3）成果

オリエンテーションとして未来創造探究の授業の意義、課題発見・問いづくりの重要性を確認したことで、問いづくりワークショップ、そしてゼミ選択へと円滑に進めることができた。また、担当者月次会での「ゼミマップ」作成は、生徒のゼミ選択に大きく貢献しただけでなく、生徒の探究活動に「教員も参加していく」という意識づけに大きな効果を発揮したと言える。

（4）課題と展望

ゴールデンウィーク期間中に「50の問いづくり」を完成させることを宿題とした結果、生徒によって出来具合がバラバラになってしまったが、ゼミ選択までのスケジュール上全体で十分なフォローができなかったこと、また、一度ワークシートに記入した50の問いを記録のために再度Googleフォームに入力させたことが、一部の生徒にとって問いづくりをより煩雑な作業と感じさせてしまい、重要性を伝えるためのオリエンテーションと逆効果になってしまった点があげられる。実際、ゼミ選択後も自分が決めたテーマに自信や展望が持てず面談を繰り返した生徒や、ゼミ移動を希望する生徒が出た。

加えて、今後は探究活動が行き詰まった時やテーマ設定に悩んだ時に振り替えることができる蓄積という側面でも、自分が過去に作成した「マインドマップ」や「問いづくり」ワークシートを有効活用できるような方法を確立できると良いのではないだろうか。

2. 2. 2 進路探究 キャリア学習

本校の「未来創造探究」は、火曜日の6・7校時と金曜日の3校時に設定されている。本年度の金曜日の授業は、進路に関する学習を中心に行われた。外部講師による入試・進路選択についての講話、志望理由書に関する講演会と作成、奨学金制度とは何か、といった講演、さらに次年度に行う予定のセルフエッセイ作成を通じ、自分の進路について深く考える時間とした。

(1) はじめに

今年度は火曜探究2時間と金曜探究1時間の連携・往還を深め、探究と進路ひいては教科学習の意欲が高まるよう、関係部署による連携を綿密に行った。

(2) 実施内容

前期（4月～9月）の前半は、まだゼミの所属や探究内容も明確ではないため、自らの興味関心と、それが地域・社会にどうかかわっていけるかという視点を中心に、テーマ設定・問い設定の助けとなるよう、授業内容を設定した。

例えば、社会科学的な視点からは、処理水の問題、メディア報道のあり方、過疎化・高齢化問題、自然科学的な視点からは主に放射線について理解を深め、それについて簡単な議論も行った。

また、前期の後半においては、探究に行き詰まる生徒も散見されたタイミングを見計らい、SDGsという観点で、全世界的な課題を復習しつつ、日本の課題の特徴を捉え、また、課題は独立して存在するのではなく、様々な問題と関連を持ちながら存在することに目を向けることで、視野を広く持たせ、より自分の興味関心のある課題について理解を深めるきっかけを作った。

後期（10月～）になると、生徒の探究テーマ・問いもある程度決まり始め、解決のためのアクションも少しずつ実践されるようになり、各生徒が自分なりの目標・方針を定めて進み始めた。そこで進路探究では、生徒の進路意識の向上を目指し、まずは志望理由書作成の講座受講、模試受験およびリライトによる文書作成を行った。四年制大学・専門学校進学希望者、就職希望者の全員がまず講演会を受講し、志望理由書がなぜ必要なのか、どのような書き方をすればよいか、と言った入門期の指導をした頂いた。その後、志望理由書の作成に入るが志望校を作成までに絞り、パンフレットなどの資料を取り寄せる等の事前準備を生徒に行わせ、進路意識を自らに引き寄せられるようにした。また業者が提供する自己診断適性検査の結果も参考にし、自分の適性（コンピテンシ

一）・長所等を客観的に見つめることで、深い自己理解に努めさせた。

同時期に「奨学金制度」に関する講演会も開催し、奨学金制度についての理解を深めさせるのと同時に、自らの進路が決定しなければ奨学金も志望理由書も動き出せない、ということを生徒に周知した。

今後、前年度は後期の後半（1・2月）に取り組んでいたセルフ・エッセイを3年次の前期に取り組む予定である。これまでの進路についての知識をベースとしつつ、より明確にしていくことを目的としている。セルフエッセイとは主に探究活動を通じた自分なりの生き方・在り方について、「書き手自身の個人的な知識や体験を基にし、読み手を説得するような、自分なりの意見を所定の書式に従って書くもの」である。進路意識の向上と、3年次4月の中間発表会を終え進路も含めた探究活動への本格的始動に位置付け、この時期の実施とした。

(3) 成果

火曜日6・7校時との連動を毎回意識したカリキュラム・マネジメントができた。また、進路探究の一つ一つの行事（講演等）を集中的に行ったため、各分野の講演が生徒の中で結びつき、継続的に進路について考える機会となった。

(4) 課題と展望

探究活動と進路活動の連携は、これまで通りの課題と言える。探究の内容と進路が必ずしも合致するとは言えないため、それぞれの担当者が情報を共有し、金曜日3校時と火曜日6・7校時の取り組みが、より進路に向けて効果的になされることが望ましいだろう。進路希望を把握している担任と、専門的な観点から探究内容を把握しているゼミ担当者とは、縦と横で紡ぐ網の目のように生徒理解に努めていくことは、大きな化学変化をもたらす可能性に満ちているため、このつながりを多く作ることができるような戦略を様々な場面で考えていくことが重要であろう。

2. 4. 3 原子力防災ゼミ

原子力防災探究ゼミ（以下原防ゼミ）は原子力発電所事故によって毀損された地域コミュニティの再生や、3.11の経験の伝承を考察することを目的としている。しかし近年は生徒の直接的な震災の記憶が薄くなっているためか、ゼミを選択してきた生徒の興味・関心、課題の捉え方は必ずしもゼミ本来の目的とは合致せず、直接的に原発事故をテーマとする者は少なくなってきた。

(1) はじめに

七期生は2011年3月の段階で彼らは幼稚園の年中に在籍していた世代である。本ゼミには11名（女子5名、男子6名）が参加し、7プロジェクトが進行している。

(2) 実施内容

生徒個々の興味関心に基づいてテーマを設定したため教員側からの一斉講義形式でのインプットはあまり行わず、基本的に生徒の活動に対する教員のフォローは個別に行っている。生徒ごとの担当教員も設定していない。毎回授業のはじめに全体で各プロジェクトの進捗とその時間の活動を確認する時間をとっている。

(3) 生徒のプロジェクトと活動内容

「なぜ海洋放出に反対運動が起こるのか？」

アカデミック理系女子の単独プロジェクトである。昨年度、放射線ワークショップを受けて、廃炉と海洋放出の問題について関心を持った。広島研修（詳細は本誌2.4.3を参考）にも参加し、事前研修の1F地域塾で廃炉の諸問題と未来の展望について考察した。



福島大学前川直哉先生の「東日本大震災の心理的影響」について講義受講、松谷彰夫『裁かれなかった原発神話』読了をへて、処理水放出に住民が納得していないという問題に関心を持ち、海洋放出反対運動と過去の原発建設反対運動の比較を試みた。数字の面と気持ちの面との乖離が見られるトランス・サイエンスの問題を考察するべく、いわき市久之浜で漁師をされている新妻竹彦さんにインタビューを行った。



インタビューの内容は右のQRコード先書き起こしをしている。今後の予定として茨城県の漁師さんへのインタビューを考えている。



「フードロスをなくすためには？」

トップアスリートの男子3名、商業系列の男子1名による共同プロジェクトである。当初はテレビ番組の企画を参考に「捨てられる野菜を集めて0円食堂」をテーマに掲げていたが、より深化させてフードロスをテーマに掲げた。町内の「お食事処ふたば」を訪問し、フードロスを押さえるための工夫を聞くとともに食事動画を撮影、担当教員の手つてにより福島放送「シェア」のコーナーで自分たちの活動を放送してもらった。動画は番組のYouTubeチャンネルにアップロードされている。リンクは右のQRコードより。



「古着を利用してなにができるか？」

ファストファッションはなぜ安いのか？ という関心から古着のアップサイクルについて考えるともに2022年8月27日の朝日新聞記事「古着の山 先進国がおしつけ」を読んでリサイクルの偽善性という視点にも気づけた。身近な古着である「クラスTシャツ」に着目し、過去のクラスTシャツがどうなっているか、今後のクラスTシャツをどうするか高2・3にアンケートをおこなった。現在は海洋後についても関心を広げている。

「多頭飼育崩壊について」

女子による単独プロジェクトである。自身もネコを飼っており、広野町にノラネコが多いことから関心を持った。2022年9月11日朝日新聞で広野と富岡のノラネコの記事をもとに広野町社会福祉協議会の根本さんに取材をおこなった。これにより広野町のノラネコ問題の背景にも震災の影響があることを知った(詳細はQRコードのリンクへ)。その後多頭飼いに至った広野町のHさん(昭和16年生まれ、81才)に話を聞いた。



「3.11は僕らにどんな問いを投げかけたのか？」

社会科教師を目指す男子の単独プロジェクトである。震災の記憶がない中学生に震災のことを伝える授業をしたいと考え、母校である小名浜二中の教員とのやり取りで授業をさせてもらえるよう交渉した。立命館大学産業社会学部現代社会学科の丹波史紀先生のミニ講義「原子力災害は地域に何をもちたか」を視聴して授業案を練っている。

中学生の政治的関心を高めたいとも考えており、10月18日に県の選挙管理委員の依頼を受け町内のイオンに赴き、お客さんに投票呼びかけグッズを配布した。

現在は授業案をつくり、ゼミ仲間へまず授業を試みることを目指す。

「富岡に写真を通じて何が出来るか？」

女子二人によるプロジェクト。3.11前後の写真を集めて比較し、問題点を読みとっていくプロジェクトである。とみおかアーカイブミュージアムを訪れ過去の写真を入手しようとしたが挫折。テーマを子どもの貧困に方針転換し、広野町のこども家庭課の職員に話を聞いた。



「神社ではどのような交流が行われ、生活にどのように影響を与えているか？」

女子による単独プロジェクト。双葉町の交流人口を増やすために、地域の中心にあった初發神社を核とした交流を起案した。宮司さんや町議員の山根さんに取材をし、町のイベントに参加した。



2022年に町に人が住めるようになり、駅西住宅が建設された。入居者の半数は以前住んでなかった人なので、情報を発信する必要を感じ、双葉町を紹介するホームページも作成した(右QRコード)。



2. 2. 3 メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は、双葉郡を中心とした地域が抱える課題を踏まえ、海外を含めた特定の地域社会に属する人々への情報の発信や、コミュニケーションの有効な方策について探究し、その解決に寄与することを目的としている。

メディアゼミを構成するメンバーは2022年2月現在22名（女子11名、男子11名）となっている。一人で活動に取り組む15のプロジェクトと、テーマの近いもの同士でグループを形成して活動に取り組む3つのプロジェクトが、各々のペースで探究活動に励んでいる。

(1) はじめに

7期生は震災当時4～5歳の未就学児であり、震災に関する記憶も定かでなく、被害状況や震災に関わる諸問題については本校入学後に初めて知ったという生徒も少なくない。生徒のテーマ設定は震災に関する直接的な課題にとどまらず、世界的な課題（海洋ゴミやフードロス）や、身の回りの課題（学校生活、自己表現）への関心も高く、これまで以上に多岐に渡っていると言える。

メディアゼミに所属する生徒の探究テーマも、震災・原発事故からの復興や風評被害の払拭といったテーマを始め、福島の魅力の開発・発信や、他地域も抱える課題に対し双葉郡を活用して解決に取り組むなど、多様なテーマが設定されている。



今年度も新型コロナウイルスによる活動の制限が懸念されたが、例年と比較すると感染状況は落ち着きを見せており、実際に現場に足を運び、様々な人間と関わりあう機会にも恵まれた。地域社会と関わる貴重な体験を通して、探究テーマについて深く考察・分析し、活動の質を高めしていくことが目下の目標となっている。

(2) 実施内容

担当者間で作成したゼミマップを提示することで、生徒のマイキーワード・問いを関連付けやすくした。



調査のアクションについては、夏季休暇明けまでに必ず一度以上一次情報を集めることを目標に指導を行った。一部の生徒は全校生あるいは同学年の生徒を対象としたGoogle Formによるアンケートの手法を取ったが、オンラインイベントへの参加や現地での取材を試みる生徒も見られた。2名の生徒が海外への短期留学の機会があり、探究に関連する質問を現地で調査した。夏季休業明けのゼミ内報告会では4人程度の小グループを編成し、調査のアクションの取り組みや結果について共有し合った。



調査のアクションの段階で生徒ごとの探究活動の進捗の差が顕著に出始めたことで、担当教員による毎週の定例ミーティングでの情報共有・進捗確認を通して、生徒を複数のグループに分割して指導する方針をとった。「アクションの進捗」と「一人で活動を進めるスキルがどの程度あるか（活動が一人で進めやすい段階であるか）」の2つの軸で生徒を分け、1グループに一人教員を配置して指導にあたった。この手法は改良を加えながら現在も継続して採用している。

10月25日のプレ発表会に向けて、生徒の探究テーマと調査内容から「地域社会のあるべき姿」を想定し解決すべき課題を見出すワークを通して、「課題解決のためのアクション」に取り掛かる生徒が少しずつ出始めた。具体的なアクションとしては、校内で小規模のイベントやワークショップを開催する、自分で作品を制作する、実験を繰り返す、実際に他者とコミュニケーションを取る、双葉郡の施設と協働しイベントの手伝いをしようとする、などが見られた。プレ発表会での発表とアドバイスを通して、多くの生徒が課題解決のためのアクションを進めている。

(3) 成果

【A：社会的課題に関する知識・理解】

調査のアクションとして施設を訪れたり、アンケートを取ったりする活動を通して、多くの生徒が社会的課題に関する知識がまだまだ足りていない、想像と実際が異なるということ学ぶことができたようだ。

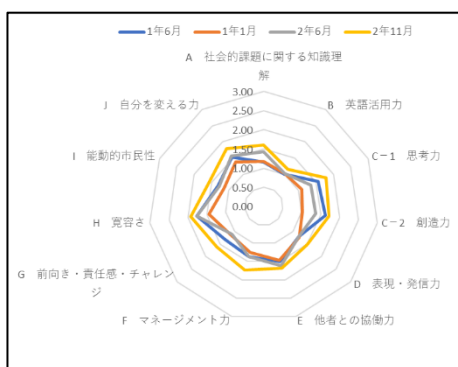
【D：表現・発信力】

特筆すべき成果の一つとして、メディアゼミからは4人の生徒がマイプロジェクトアワード福島県 Summit (オンライン) へ出場した。自らの探究の内容を他校の生徒やアドバイザーに向けて発表し、対話を通して考察を深めた。このような外部での発表の機会は、発表の仕方やスライドの見せ方を工夫する契機となるだけでなく、普段はなかなか話せない相手とコミュニケーションを取ることにつながるため、今後も機会を逃さず挑戦し続けてほしい。

【F：マネージメント力】

普通の教科の授業等ではなかなか発揮状況を確認したり評価したりする機会が少ないのが、マネージメント力(自己管理能力)である。1人で進めているプロジェクトと複数人で進めているプロジェクトでは、マネージメント力として求められる要素に多少の違いはあるが、教員やカタリバスタッフの助けがないとなかなか活動を進められない者もいれば、一度やり方を覚えてしまえばどんどん活動を進められる者もいる。本ゼミ担当者間ではこのマネージメント力をひとつの軸として生徒の伴走方法を考えていたこともあり、生徒が今指示を必要としているのか、何をすべきかを一緒に考えたり意見を聞き出したりする必要があるか、という点には特に注意を払って指導を行ってきた。実際、7期生の2年次11月時点のルーブリック自己評価では、6月時と比べてC-1思考力、Fマネージメント力、G前向き・責任感・チャレンジが大きく伸びていることがわかる。

	2年6月	2年11月
A	1.43	1.60
B	1.02	1.15
C-1	1.35	1.79
C-2	1.38	1.72
D	1.22	1.51
E	1.61	1.68
F	1.37	1.74
G	1.11	1.62
H	1.77	1.92
I	1.28	1.55
J	1.56	1.79
平均	1.37	1.64



【G：前向き・責任感・チャレンジ】

探究活動を進める中で、前述のルーブリックの結果の通り、生徒の前向きな態度やチャレンジ精神にも大きな成長が見られたと言える。数々の発表や対話の機会を通して、自分の考えを他者に伝えることへの抵抗感が薄れ、地域の方々と積極的に関わろうとする態度が育まれた。



(4) 課題と展望

【C-1：思考力】

ルーブリック評価では高い数値の伸びを見せているのがこの思考力であるが、ゼミ活動を通してみると、アクションの結果に対する考察や分析がまだ十分でないと思われる。一度出た結果や自分にとって都合の良いデータを疑ってみる批判的思考力に欠ける部分が見られ、今後の指導が肝要である。

【J：自分を変える力】

活動に全力で取り組んだり、あきらめずに遂行する前向きさは認められるが、自分の将来の目標や進路に関連付けて活動を進め、目標と現実の差を見つめたり、自省するということにかけてはまだ成長の余地があるように感じる。来年度は高校3年次になり、探究活動もいよいよ後半に差し掛かってくるからこそ、現状維持ではなく、自分に足りない部分に真摯に向き合って振り返り、自分を変えていく力が養われていくよう、生徒に寄り添って探究活動を進めていきたい。



2. 2. 3 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たな再生可能エネルギー推進ビジョンとして震災以降の社会情勢も反映させた「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

本校の再生可能エネルギー探究ゼミでは、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」をもとに福島県や双葉郡の現状を把握し、課題を見いだすことで解決の糸口を探究することが一般的な進め方であるが、私達は探究の動機付けとして学校周辺の産業や自然環境に着目し、フィールドワークや基礎実験などの演習を全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。

(1)はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒10名が協力しながら探究活動を進めてきた。全体の活動としては、広野海岸の清掃活動、浅見川の清掃活動・水質調査、請戸漁協訪問など、様々な取り組みを行ってきた。また、グループごとに7つの探究テーマを設定し、探究活動を進めてきた。

(2)実施内容

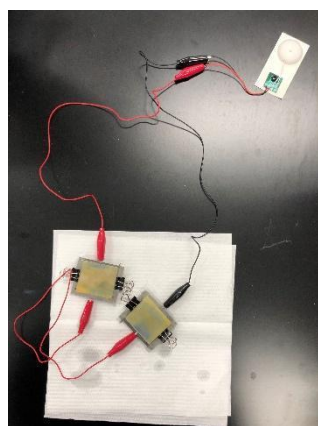
①テーマ：色素電池

地元である川内村の自然を壊さずに発電できる方法はないかという考えからこの探究活動を始めた。

「色素増感太陽電池」という発電方法を使って実験をしている。電気の循環発電の可能性があること、デザインによってはインテリアとして活用できる可能性があることに着目している。

本格的な実験の準備として、2つの活動を行った。1つ目は、専用キットを用いた色素実験である。実際に電気が流れているか確認するためにオルゴールを使用し、小音ではあったが音を確認することができた。2つ目は、川内村へのフィールドワークである。色素を抽出するためにどのような野菜等を用いるとよいかをインタビューしたり、実際に野菜等をいただけないか交渉したりした。

今後は、野菜等から色素を抽出し、実験を本格的に進めていく。



②テーマ：川内村の魅力を発信！

幼い頃から川内村の自然に囲まれて生活してきた。村の自然に親しみを持ち、どのようにして守られているのかを調べ、その魅力を広めたいと考えている。また、川内村で感じることでできる人と人の繋がりや温かさをもっと広めていきたい、とも考えている。「川内村の自然に触れて楽しむエコツーリズムを通して村の人と出会い交流し、そこから村は活性化するのか？」という仮説を立てて活動している。

具体的には、自然環境保全について調べたり、川内村出身の天山文庫管理人をしている志賀風夏さんに話を伺いに行ったりした。また、ツアーで実際に訪れたい場所の下見をし、川内村で活動される方の話を伺ったり、実際にツアーをする上での注意点を確認したりすることができた。

今後は、川内村の地図におすすめスポットなどを書き込む活動を計画している。そのために、村でお店を営んでいる方に話を伺い、おすすめスポットを調査する予定である。

③テーマ：人と海の関わり

津波が社会や自然に与える影響について調べていくなかで、海洋教育・防災教育という言葉を知った。もともと海に興味を持っていたこともあり、今はそれらについて調べている。

現在まで行った活動は4つ。1つ目は、施設見学である。請戸小学校、コミュタン福島、伝承館等を訪れ、震災や放射線に関する基礎的な知識を身につけた。2つ目は、寮の指導員の方へのインタビューである。寮における災害時マニュアルを見せていただき、避難経路のパターンや過去の災害時の対応について詳しくお聞きした。3つ目は、アクアマリンふくしまの岩田雅光さんへのインタビューである。海に恐怖心を持っている人の特徴についてお話を伺った。最後に、日本科学未来館のサイエンスコミュニケーターである中野夏海さんへのインタビューである。日本科学未来館での取り組みや海洋教育について教えていただいた。

今後は「子どもへの海洋教育」を主軸にイベント

等の実施を検討している。また、いわき市で海洋教育に力を入れている方にもインタビューの依頼を予定している。

④テーマ：福島の魚

釣り好きな仲間が集まったので、テーマを「福島の魚」とし、処理水問題と関連して探究している。漁業の状況が急激に悪化した。2018年に漁業が再開されたものの、ネット上では「危険」「命が危ない」「食べる気がしない」など、否定的な意見も少なからず見受けられる。こうした状況を払拭するため福島の魚の知名度と安全性を発信したい。

その第一歩として、福島の魚を皮膚感覚でとらえるために、富岡漁港と請戸漁港を訪問した。幸運にも富岡漁港では釣り船でヒラメ釣りをするという貴重な体験をした。結果は衝撃的なものであった。なぜこんなにも巨大なヒラメが入り食い状態で釣れるのか。海底は震災後どのような状態になっているのだろうか。船長さんのインタビューからたくさんのヒントを頂いた。さらに偶然乗船していたアクアマリンの職員の方より科学的な視点からの海洋汚染の現状と未来についてのお話を聞き、自分ごととして「福島の魚」を考えるきっかけとなった。請戸漁港では魚市場の見学と漁協の職員の方とのディスカッションを通して「福島の魚」の話はもちろん、ウニの磯焼けや海洋ゴミ、未利用魚問題、そして処理水問題など様々なテーマを深く掘り下げることができた。これらの学びをさらに発展させて次のアクションへと向かうことが私たちの使命である。



⑤テーマ：「海藻を呼び戻すために」

2009年に国連環境計画（UNEP）が出した、ここ十数年の比較的新しい概念「ブルーカーボン」を知っているだろうか。地球温暖化の原因といわれる温室効果ガス、その中でも最も存在量の多い二酸化炭素を陸地にある植物が光合成によって減らしてくれている「グリーンカーボン」ということは広く知られているが、それに対し海が減らしてくれるというのが「ブルーカーボン」で、海草藻場、海藻藻場、干潟、湿地、マングローブ林などのことである。これらは世界中の海の面積のたった0.2%しかないが、海全体で吸収する二酸化炭素の50%を占めている。ウニで磯焼け（ウニが異常繁殖し海藻を食べつくした状態）して藻場がなくなってしまうと、ブルーカ

ーボンによる二酸化炭素の吸収もなくなってしまうので、地球環境に深刻な影響をもたらす。では、解決策としてウニを捕獲して食べればよいと考えるだろうが、実は内臓がスカスカの瀕死状態のものばかりで食用にもならない。

私たちは、「ブルーカーボン」の再生を目指すという高い目標を掲げ、ウニの生態を調べ始めたが、長期的な観察が必要になるのでぜひこの研究を引き継いでほしい。

⑥テーマ：スポ GOMI

体を動かしながら街をきれいにすることをテーマに活動している。その中で制限時間内にごみを拾い、その重さや種類でポイントを競う「スポ GOMI」というスポーツに出会った。自分もスポ GOMI を企画・運営することを目的として活動した。

大会を開催するためのルールと必要な道具の確認、会場の選定を行った。広野町内のゴミが落ちている状況を調査したが、ゴミが落ちているような所はなく、打ち上げられたゴミがある広野海岸に設定した。プレ大会としてゼミのメンバー10名で実施した結果、大量のゴミを回収することができ、課題も明確になった。スポ GOMI を行っている NPO 法人に連絡を取り、運営するためのポイントを再確認することができた。今後は、もう少し規模を大きくしたスポ GOMI を開催したいと考えている。



⑦テーマ：葛尾村に人を呼ぶために

過疎化と高齢化の進んだ葛尾村に対して、多くの人に村の存在を知ってもらい魅力を発信したいと考えている。そのための活動として、ゼミ生を対象に葛尾村キャンプを実施した。参加者からは葛尾村の魅力に触れることができたとの感想をもらっていた。今後は、バイクのツーリングツアー実施のため、インタビューや動画撮影を予定している。

(3)課題と展望

今後もお互いが協力して、各グループの探究活動を進めていきたい。また、「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を実現できるように継続的に努力していきたい。

2. 2. 3 アグリビジネス探究ゼミ

「地域の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究する。」を目標に活動している。

(1) はじめに

メンバーは6名で、スペシャリスト系列農業が5名（男子1名、女子4名）で、残り1名（女子）は、スペシャリスト系列商業の生徒で構成されている。テーマについては、個人または、グループで自由に設定させた。

(2) 実施内容

テーマ及びキーワードは、次の通り。

テーマ	キーワード	編成
檜葉の特産品をつくる	檜葉町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、さつまいも、ゆず	個人
オリーブを使って町おこし	六次化産品 オリーブ	個人
大熊町を応援しよう ～いちごやキウイを使ったスイーツ開発～	大熊町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、いちご、キウイ	個人
小麦アレルギーの人でも食べることができるお菓子作り ～米粉を使った食べ物～	小麦アレルギー、六次化産品、風評払拭、米	個人
美容を活かして食品廃棄物を減らそう ～おからの有効利用～	美容、六次化産品 おから	グループ

(2) 成果

① 檜葉の特産品をつくる

檜葉町の特産品である「さつまいも」を使用して商品開発を行った。株式会社マルト商事と連携し「さつまいもパン」を商品化し、市内のマルトで販売を行った。

今後は、檜葉町特産の「ゆず」を使用したお菓子の商品開発の予定である。



② オリーブを使って町おこし

広野中学校の御協力で、広野中学校グラウンドで栽培しているオリーブを収穫し、「オリーブを使ったラスク」を製造した。出来上がったラスクを広野中学校教頭やいわきオリーブプロジェクト代表松崎康弘氏に試食をしていただきアドバイスを受けた。今後、商品化に向けて継続研究中である。



③ 大熊町を応援しよう

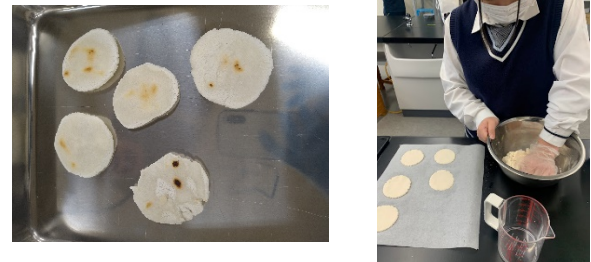
ネクサスファームおおくま徳田辰吾氏の御協力で、大熊町産のいちごをいただき、フルーツドライに加工して「いちごマドレーヌ」を製造した。「いちごマドレーヌ」は、大熊町で開催された「標葉祭」で販売し、アンケートを実施した。

また、HAMADORI 13の佐藤亜紀氏の御協力で、大熊町産のキウイをいただき、フルーツドライに加工した。今後、キウイを使用したマドレーヌを製造する予定である。



④ 小麦アレルギーの人でも食べることができるお菓子作り

フロンティア広野芳賀吉幸氏の御協力で、広野町産の米をいただき、煎餅を試作した。今後、商品化に向けて継続研究中である。



⑤ 美容を活かして食品廃棄物を減らそう

「おから」が美容に良いことを調べ、「おから」を使用したスイーツづくりを行った。今後試作を継続し、いわき内の豆腐店の店主にアドバイスをうけ、商品化を目指す。



(4) 課題と展望

自分で商品を企画し試作を行っているが、どうしてもレシピの完成度および製造技術が不十分で思うように進んでいないのが現状である。しかし、自分自身、失敗を繰り返して学んでいく姿勢が探究活動であると考えている。

少しずつではあるが、見た目や味について改善されてきており、確実に商品化に前進している。

これまでの活動を通して、自ら地域の方々とコミュニケーションを取り、原料を入手し、イベントに参加するなど、多くの経験を通して深い学びができたと考えている。

2. 2. 3. スポーツと健康探究ゼミ

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から12年を迎えようとしている。この12年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開、浪江町や富岡町、大熊町の居住制限区域の減少など、復興が進み、明るい話題が増えてきた。

一方で、震災や原発問題の余波もいまだに残り、不自由な環境で生活を送っている人々がまだたくさんいる。また、新地高校と相馬東高校が合併し、相馬総合高校になるなど、人口の減少には歯止めがかからない。さらに、未だ新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、震災からの復興を目指すスピード感に影響を与えた。

これらの地域課題に対して、スポーツを通して何ができるのか、について昨年までのスポーツと健康ゼミではアクションを行ってきた。しかし、ここ数年新型コロナウイルス感染症の影響で多くの人と触れ合ったり、一緒に活動するなどのアクションができず、思い描いていた探究活動ができていなかった。また、自分の得意とするスポーツを地域課題の解決のアクションとどのようにつなげていくかを考えていくと、活動の幅が狭くなり、充実した探究活動がやりくいことも課題となった。そのため、今年度から地域課題とスポーツを結びつけることの他に、自分自身の競技力向上にも目を向けた探究活動も可能ということとした。

(1) はじめに

スポーツを通して持続可能で豊かな地域の実現を探る他、競技力向上、障害の予防などトップアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行い、グローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

① 自分と向き合うためのアクション

自分は何に興味があるのか、「マイキーワード」を探るため、マンダラート、問いづくり、担当教員との座談会などを通して、自分の興味に合ったゼミを決める活動を行った。その中で、同じテーマに興味を持つ者同士でグループになったりしながら、自分の探究活動のテーマを決定していった。

② 調査、アクション

テーマ決定後も担当教員と対話を繰り返し、「このテーマのゴールは何か」「そのための仮説は何か」「どのようなアクションが必要か」など、探究の内容を深めていった。対話を繰り返す中で、テーマやグループが変わった生徒もいたが、それを否定せず、生徒の自主性を尊重して活動を進めた。

その後もアクションが思うように進まない生徒に対してはこちらから寄り添い、できる限り生徒主体になるような支援を心掛けてきた。

腰のケガを減らそう



腰痛に悩むバドミントン選手が多いことから、腰痛を減らすにはどのようなトレーニングやストレッチを行ったらよいのかについて、アンケートやインタビューを行った。

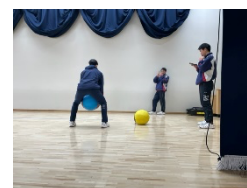
This is football

広野町にサッカーを広めるための活動を様々な方向から考えた。まずは男子サッカー部の活動や本校のサッカー場についてより多くの町民に知ってもらうためのアクションを立案した。



パフォーマンス向上とケガ防止のためのトレーニング

野球選手の投げる、打つ、などのパフォーマンス向上及びケガ防止のためのトレーニングについて、様々な文献や動画を元に検証を深めた。

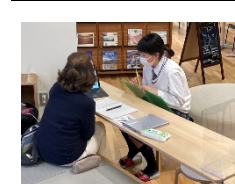


SKAメソッド

ロングキックの飛距離を伸ばすためには、どのような要素が必要なのかを探り、どんなサッカー選手でもロングキックの飛距離が伸びるためのメソッドの開発を目指して活動した。



メンタルの状況はスポーツにどう影響する？



自分の体験から、メンタルの状況がトレーニングやゲームにどのような影響を及ぼすのかについて探求を深めた。アプリを使用して自分の精神状況をグラフ化したり、専門家から話を聞いたりしたことをまとめた。

サッカー選手の補食づくり

サッカー選手に必要な栄養素が含まれた補食はどのようなものがふさわしいか、というテーマについて研究した。ゲームやトレーニング前に、何を、どれくらいとるとパフォーマンスを落とさずにプレーできるかなど、様々な文献を元に検証した。



日本選手と海外選手のバドミントンへの取り組みの違い

海外のバドミントン選手がなぜ強いのか、について興味を持ち、日本選手が海外選手に勝利するためには何を向上するべきか、日本選手と海外選手のバドミントンへの取り組みで何が違うか、インタビューやアンケートを通して検証した。



女性アスリートの貧血と月経について

自分のように、貧血に悩むアスリートを少しでも減らしたいと思い、女性アスリートの貧血と月経の諸問題について解決のためのアクションを立案した。

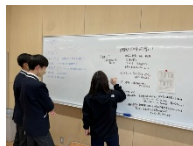


障がい者と交流する場所を作る

障がい者と触れ合う場所が少ないことに注目し、スポーツを通して誰もが楽しく触れ合える場を作ることを目指した。アンケートを元に調査を進め、まずはプレイベントを実施し、その後さらに大きなイベントの計画を実施するための計画を立案した。

高校生アスリートが求める食事は

寮生活を送る中で、普段食べている寮食がアスリートにとって望ましい味付けや栄養素が含まれているのか疑問を持ち、寮生にアンケートを実施したり、栄養士や医師にインタビューをしたりして、望ましい食事の実現を目指して活動した。



スポーツブランドを通して地域を盛り上げる

双葉郡の魅力をスポーツを通して広めたい、と考え、本校を会場にしたイベントの立案をした。いわき市にあるアウトドアブランドと連携し、実際に会社へ行き、様々な製品に触れる中で、このブランドの良さを広めること、スポーツの楽しさを味わうことを中心としたイベントの実現を目指して活動した。



アスリートの障害の再発予防プロジェクト

アスリートに多い靭帯損傷を防ぐためのトレーニング立案を進めていく中で、靭帯損傷だけではなく、アスリートのためのケガをしない、又は再発しないためのトレーニングや運動の研究を進めた。



野球の楽しさを広めたい



野球の歴史を調べ、なぜ野球が日本で受け入れられたのか、また、野球選手のパフォーマンス向上のためにはどのようなトレーニングが必要か、などについてそれぞれで調査した。探究を進める中で、「野球を多くの人に楽しんでほしい」という思いが強まり、協力して活動を進めることになり、小学生に野球に親しんでもらうための活動を考え、実践した。

アスリートに必要な栄養素が含まれた手軽に作れる副菜作り

アスリートがトレーニング後の疲れた状態でも、手軽な調理で簡単に必要な栄養を補給できる副菜について研究を進めた。



できるだけ調理器具を使わず、短時間でできる料理を様々な文献や動画を参考に調べ、実際に簡単に調理できるかを検証した。

(3) 成果

本ゼミに所属する生徒は、トップアスリート系列として日頃からスポーツに真摯に取り組んでいる。そのため、地域課題と自分の専門種目を結びつけるより、競技力向上や障害予防、スポーツを広める、などの方がより自分事として捉えられるため、昨年度よりも自分で考えて行動する生徒が増えてきた。また、外部のどのような人材と連携して探究を進めればよいか、今までの自分のスポーツ活動の中で知り合った人が身近にいる場合もあり、より調査が進めやすくなった。アンケートの対象も自分が所属する部員や寮生など、立案してすぐに実施できるような環境であったため、一人ひとりが自分の役割に責任を持って取り組む姿勢も感じられた。その結果、本ゼミからマイプロに応募し、受賞した生徒もいた。また、地域課題とスポーツを結びつけたグループに関しても、身近に地域型スポーツクラブがあったり、Jヴィレッジでたくさんのスポーツイベントを手掛けてきた方から助言をいただいたりすることができ、アクションが起こしやすい環境にあることも意欲的な活動につながった。

(4) 課題と展望

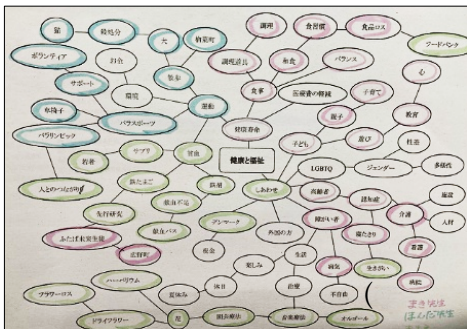
一方で、「競技力向上」「ケガの予防」「アスリートの食事」など、すでに多くの専門家が検証し、実証しているテーマでもあるので、自分たちのアクションをどのように仮説を立て、実証していくか、で悩み、なかなか進展しない生徒やグループもあった。科学的なデータを取るためにはより専門的な知識と施設が必要になり、探究活動で実践するには限界がある。教員もそれぞれの探究活動のゴールから逆算して考えるように何度も対話を繰り返し、アドバイスをしてきた。本当にこのテーマで探究活動を進めてよいのか、活動を進めていく中でゴールからずれて不安になり、何から手を付けてよいか悩んでいるグループも多かった。また、トップアスリート系列の生徒は、長期休業中の練習日程や試合などの関係で、思うようにアクションに取り組めないことも多い。さらにグループ活動になると、グループ内で積極的に活動する生徒と、それに依存してしまう生徒もいる。「まずはアクションに取り組んでみよう。」と生徒に寄り添いながら生徒の活動を見守ってきたが、アクションを実施しなければゴールには近づかない。以前よりもトップアスリート系列が取り組みやすい状況にはなったが、より担当教員で連携して進捗状況を確認し、見守り、声掛けのバランスを考えながら支援していきたい。この活動が、競技力向上に役立つことのほか、アスリートのセカンドキャリアにも役立つものであることは間違いない。その意味でもトップアスリートの探究活動の在り方を今後も試行錯誤していく。

2. 2. 3 健康と福祉探究ゼミ

健康と福祉ゼミは、「健康」や「福祉」に興味のある生徒や高校卒業後の進路に福祉系を考えている生徒が選択している。自ら興味関心のある事柄と「健康」や「福祉」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。今年度本ゼミに所属しているのは、アカデミック系列7名、スペシャリスト系列5名（福祉1名、農業4名）、トップアスリート2名（野球1名、レスリング1名）の計14名で、系列を超えグループで探究を行っているチームもあり、全部で9プロジェクトが進行している。

(1) はじめに

探究テーマやゼミの選択がしやすいよう、「健康と福祉」に関するワードをマインドマップにて紹介した。(図1) 探究テーマは生徒それぞれの興味関心に基づいたテーマであるため、教員側からの一斉講義形式の授業はほとんど行わず、毎回各自で計画を立てさせ、活動後に評価反省をさせるようにしている。(図2) 基本的に生徒からの相談や活動に関するフォローは生徒個別に行っている。生徒ごとの担当教員も設定していない。



(図1)

7期生 健康と福祉ゼミ 総合探究 10月25日(火) 全体プレ発表までの計画表		年 級	番号	氏名
授業日	長期的な計画 (一を調べ、二をやる、三を繰り返す、四を捨てる、 パワーポイント作る、などなど)			評価
10月4日				A: 評価し発表し、計画も決まることができたこと()
10月11日				A: 評価し発表し、計画も決まることができたこと()
10月18日	発表創造探究2年次プレ発表会準備(発表の練習)			A: 評価し発表し、計画も決まることができたこと()
10月25日	未来創造探究2年次プレ発表会			A: 評価し発表し、計画も決まることができたこと()
【プレ発表会に向けてのチェックポイント】 研究ノートより				
1. 勉強が宿える評価をおこなっているか <input type="checkbox"/>				
2. 量分が取り込みたい評価設定が決まっているか <input type="checkbox"/>				
3. 評価採点に向けた調査や実践の成果があるか <input type="checkbox"/>				
4. 新たな見えてきた課題の機会があるか <input type="checkbox"/>				
5. 発表の仕方(パワーポイントが使いやすいか、発表の準備はどうか) <input type="checkbox"/>				
6. 自己満足になっていないか <input type="checkbox"/>				

(図2)

(2) 実施内容



(写真1)

今年度は、4、5月にテーマ設定をした後、6～8月は調査のためのアクションを実施する。(写真1) 夏季休業明け8月末の授業にてゼミ内発表を行う。(写真2) 「テーマ」と「テーマ設定の理由」、「4月から行った調査のためのアクション」をそれぞれパワーポイントにて発表した。9月からは調査のためのアクションと並行して解決のためのアクションをそれぞれ行い、10月25日にプレ発表を行う。(写真3)



(写真2)



(写真3)



(写真4)

(3) 生徒のプロジェクトと活動内容

「LGBTQ を身近に感じよう」

演劇部で LGBTQ の要素が入った内容を演じたことで興味を持ち探究を始めた。いわき市役所職員猪狩僚さんの紹介で「さんかく交流会」のメンバーと交流し地域の「LGBTQ」の状況について知った。今後は LGBTQ を認知してもらうためにパンフレットを作成する予定。



「パラスポーツの認知度を上げるためには」

パラスポーツに興味があったことと、オリンピックで認知度が上がったパラスポーツではあるが高校生の認知度はあるのか等の疑問から探究が始まった。福島パラ陸上競技会事務局齋藤さんのご協力のもと実際に田村市陸上競技場に行き、パラスポーツで使用する車椅子体験をしたり、本校にてポッチャ体験を行ったりした。今後は「高校生のパラスポーツに対する認知度調査」を通してパラスポーツの認知度を上げるアクションを考える予定。

「HSP を知ろう」

自分自身が HSP であり、この症状の生きづらさを知ってもらいたいということから探究が始まった。自分と同じ悩みを持つ人のために HSP 診断表を Google フォームで作成し、高校生の認知度を上げようとしている。今後は SNS のコミュニティを作り話し合い予定。

「私たちにできること～子供のために～」

子供好きな女子生徒2名が、コロナ禍で好きなことができず子供の自律神経が乱れていることに着目し、認定こども園「ひろのパーク」にて保護者へ大規模なアンケートを実施。食事の好き嫌い困っている保護者が多く、これが自律神経に関係あるのではないかと子供の好き嫌いが減る食事メニューを試作する。ピーマンのレシピを考案中。

「よりよいメンタルヘルスを」

職場や学校など環境が原因で心の病を発症する現代に着目し、心の病にならない優しい社会にするに

はどうしたら良いか、という疑問から始まった。学校カウンセラーや養護教諭へのインタビュー、ストレスチェックシートの作成、アンケートを実施し、それらの分析を通して現代のストレスについて考える。今後はメンタルヘルスについて座談会を行う予定。

「運動が苦手な子供はどうすれば動くことを好んでくれるのか」

自分自身が子供の頃運動が嫌いであったため子供が運動を好み自分から運動を始めるにはどうしたらよいか？という問いから探究を始めた。自身の通っていた保育園への聞き込みや富岡わんぱくパークを見学した。

「双葉郡と愛」

将来ブライダルプランナーを志望している生徒と「愛」について考えてみたいという生徒が集まり3人に行っている探究である。高校生や教員に「愛に関するアンケート」を実施し実態を調査する。ララチャンスいわき、ベルヴィ郡山館にてインタビューを実施し、今後は葛尾村の祝言式を運営する予定。

「嫌われがちな食材はどうやったら食べてもらえるのか」

福島県の肥満率がワースト上位であることを知り、偏った食生活を少しでも直し健康になってもらいたいということで探究が始まった。水口栄養教諭にインタビューし栄養について学び、子供が苦手とする野菜を使ったレシピを考案する。

「この世はカラフルだ！」

言語や年齢関係なく性的マイノリティについて多くの人に伝えるために私ができることは？という探究目標でスタートする。本校生に対して LGBTQ に関する大規模なアンケートを実施し、さんかく交流会や磐梯山観光職の金光弦太さんとの対話を通して、言語や年齢関係なく性的マイノリティを理解してもらえる方法を探す。今後も性的マイノリティの方や支援団体の方々との対話を大切にしながら絵本を製作していく予定である。



2. 2. 4 探究活動整理のための発表会

10月25日に2年次の探究のプレ発表会を行った。目的は以下の4つである。①これまでの活動を通しての学びや今後の課題を振り返り、発表という形で表現することにより、他の班の探究班の生徒たちと共有し、探究活動の意識の高揚を図る、②探究テーマ(問い)を明らかにした先にある、自らが考える「地域・社会のあるべき姿」と課題解決に向けて実践したアクションや、構想中のアイデアを報告する、③地域の方から意見やアドバイスを受けることにより、今後の実践を具体的に落とし込む機会や個別に地域の方から協力を得る足がかりとすること。④まとめに入っている3年次生や教員からの意見やアドバイスを受けることにより探究ゼミの縦のつながりを強くする機会とする。地域のアドバイザーとしては、以下の方々にお越しいただいた。

氏名	所属	地域	関連領域
岩田 雅光	アクアマリンふくしま	いわき	再エネ
山根 辰洋	一般社団法人双葉郡地域観光研究協会	双葉町	メディア、原子力
猪狩 琉依	富岡わんぱくパーク	富岡町	スポーツ、福祉
平山 勉	双葉郡未来会議 代表	富岡町	メディア
日比 賢二 新國 宏樹	廃炉資料館	富岡町	原子力
佐藤 亜紀	HAMADOORI 13 事務局	大熊	アグリ
猪狩 僚	いわき市役所、Igoku 編集長	いわき	メディア、福祉
秋元 菜々美	一般社団法人双葉郡地域観光研究協会	富岡町	メディア、福祉

(1) 発表準備

発表時間とアドバイザーからのコメント、対話に多く時間を割けるように、Zoom 接続による全体での開会をやめ、各会場ごとに最初から最後まで進行する形で計画を立てた。3年次生徒は最終発表を終え、論文作成に取り掛かる段階だったため、希望を取ったうえで自由参加とした。

発表の項目として以下の7つの点を示した。

- ①探究テーマ、そこに至った経緯
- ②どんなアクションをしてきたか
(調査のためのアクション、課題解決のためのアクション)
- ③自分が考える「地域・社会のあるべき姿」
- ④アクションする前後でわかったこと、気づいたこと、学んだこと、新たな仮説
- ⑤自分の考え方や姿勢にどのような変化があったか
- ⑥今後の「課題解決のためのアクション」の内容、計画
- ⑦現在の悩み、壁、相談したいこと

(2) 実施内容

発表件数は原子力防災ゼミ7件、メディアコミュニケーションゼミ18件、再生可能エネルギーゼミ7件、アグリビジネスゼミ5件、スポーツと健康ゼミ15件、健康と福祉ゼミ11件。合計63件となった。

発表者をプロジェクト内容に基づきゼミを横断して11会場(A~Kグループ、1グループにつき5~6プロジェクト)に分け、発表を行った。1プロジェクトの発表につき10分(6グループ会場:発表5分、ディスカッション5分)、または12分の時間を取った(5グループ会場:発表5分、ディスカッション7分)。



(発表の様子)

(3) 成果

発表会が探究のマイルストーンとなり、生徒の刺激となったとともに、アドバイスによって探究のブラッシュアップがされた。アドバイザーの提案で、発表者全員を後日引率して外部接続をさせる機会を設定する会場もあった。また早稲田大学の山田研究員にもアドバイザーとして入っていただき、資料提供・外部接続の機会をいただけた。

2. 2. 5 コラボ・スクール 双葉みらいラボ

コラボ・スクール双葉みらいラボは、生徒たちが放課後に集うコミュニティスペースである。学校と地域の「潮目」の場所として大学生や社会人、地域の大人たちとのナナメの関係に溢れた生徒にとっての学びの場となっている。そこは生徒たちの安心・安全な「居場所」であり、様々なことを挑戦できる「ステージ」でもある。

2019年の新校舎移転と共にプレハブ校舎から学校内へ移って4年目を迎え、様々な法人・個人のご寄付に支えられながら、認定NPO法人カタリバのスタッフが常駐、運営。学校と協働しながら地域協働スペース、協働学習ルームを使用し、平日の放課後から20時まで運営が行われている。

(1) はじめに

コラボ・スクール双葉みらいラボは、校内の地域協働スペース内に設置。生徒が自学自習に取り組む協働学習ルーム、生徒が交流の場や居場所として用いる地域協働スペースがある。

また施設内には「カフェふう」が併設されており、地域交流の起点として、卒業生や地域の大人など年間延べ500名以上が来館し、多様な人材が生徒に関わる場所となっている。

(2) 取り組み内容

○居場所支援

カタリバのスタッフがユースワーカーとして常駐することで、コミュニケーションを通して意欲喚起の土台となる「安心安全なセーフプレイス」をつかっており、生徒の日常や進路に至るまで、思春期世代特有の複雑な悩みを相談できる場となっている。

また、探究学習におけるアクションの個別相談、定期考査前の福島大学と連携した大学生ボランティアによる学習支援なども行っており、生徒の主体的な学びをサポートする場としても機能している。



～双葉みらいラボでの居場所支援・学習支援の様子～

○地域との連携・協働

新型コロナウイルス感染症による活動の制限も緩和されつつある中で、生徒主体で地域の方と打ち合わせやイベントをともに実施する姿が再び多く見られるようになった。そのような機会によって生徒と地域の方が出会い、活動の場が地域へと広がっていく事例も多く見られた。また、「生涯学習施設」としての観点から、今年度は地域向けに映画上映会や、芸術・建築・科学・まちづくりなどの様々な分野で活躍されているゲストを招いた対談イベントなど、これまで学校や生徒とはつながりがなかった方も参加できるコンテンツを多く実施した。中高生だけでなく大人も探究し学び、そしてつながる場としての役割を強化することで、結果的に生徒にとっての「学びの土壌」を耕すこととなると確信している。また、このような機会に来館された地域の方

が、学校の探究発表会の審査員等の教育課程内の活動に参画してくださるなどの事例も生まれている。



～地域協働スペースを通じた地域の方々との交流の様子～

○未来創造探究のサポート

全学年で取り組まれる「未来創造探究」のサポートを行っており、カタリバのスタッフが「未来創造探究」の授業にアドバイザーとして教員とともにゼミ運営を行っている。具体的には、地域の大人や外部の機会へのコーディネート、生徒同士の議論のファシリテート等を通して、生徒の多様な学びを作るサポートを行っている。

また、生徒が活動に対するフィードバックを受けられる場として、「社会貢献活動コンテスト」「ベネッセSTEAMフェスタ」「全国高校生マイプロジェクトアワード」などの外部機会に生徒を送り出す支援もしている。

加えて、今年度は県内外から総合的な探究の時間のカリキュラム作りに取り組む高校の教員研修の受け入れも行った。今年度はトライアルながら4度実施し、5校16名の教員・役場職員・コーディネーターが参加し、本校の取り組みを現場で視察した後、次年度の探究カリキュラム作りをワークショップ等も交えながら行った。

(3) 今後の展望

双葉みらいラボには、今年度約7,800名の生徒が来館している。今後は、今年度に引き続き、地域の方や多様な分野で活躍される方が学校に来るきっかけを作り、生徒と大人、大人同士の出会いの機会を創出していく。またその中で生まれる生徒の学び、地域の変化について、定量的なモニタリング等も行うことを通して、「学校」という施設やその教育活動における存在意義を深めていきたい。

2. 3. 1 未来創造探究の概要

総合的な学習の時間の中で、3単位を未来創造探究として実施した。そのうち1時間は主として自らを見つめ、進路実現のための時間として、残りの2時間を探究活動として実施した。2年次に引き続き、3年次においても6つの探究ゼミに分かれ、グループや個人でテーマを設定し、実践を行った。昨年までと比較して、最終発表会後の論文作成に力を入れ、論文作成を通じて自分の探究の理解を深めることを重視した。

(1) 3年次の探究活動概要

4月26日 中間発表

5月～9月 各班、グループに分かれて探究

活動

9月24日 未来創造探究生徒研究発表会

10月～1月 論文作成

(2) 実施内容

① 中間発表

3年次の探究の進捗状況を確認することも踏まえ、まず4月に中間発表会を行った。今年度は発表というよりはむしろ、聴衆と議論をしながら、今後の探究のヒントを得ることを重視した。また、新2年次を招き、2年次がこれから取り組む未来創造探究のイメージがつきやすくなったともに、新たに赴任して探究担当となった教員にとっても、概要を伝えられるようになった。

② 探究活動

6つのゼミに分かれて探究活動を行った。各ゼミの構成は以下のとおりである。

探究ゼミ	プロジェクト数	担当教員人数
原子力防災	18	4
メディア・コミュニケーション	18	4
再生可能エネルギー	5	3
アグリ・ビジネス	4	3
スポーツと健康	17	4
健康と福祉	8	2

③ 未来創造探究発表会

「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。各分野の第一線で活躍されている方（専門知を持つ方）、地域の課題に取り組んでいる方（地域知を持つ方）を審査員兼コメンテーターとして呼びし、各賞を設定した。

今年度は高校70PJ、中学15PJとプロジェクト数が増加した。昨年度の反省もあり、発表会は「8分程度の発表時間」「高校はコンテスト部門と審査部門に分ける」等の改善を行った。特に、コンテスト部門と審査部門に分けたのは、賞のための発表会ではなく、あくまで探究を深めるための発表会という位置づけにし、審査委員も教員も余裕をもって内容を吟味するのが狙いだ。また、生徒にとっても自主性を高めるきっかけとした。

全体会においては審査員の松岡俊二先生と田村学先生から講評を頂き、コロナ渦での探究活動に

一定の評価を頂きつつも、問いの更新、考察、文献調査等において更に探究を深めていく手法について課題をご指摘頂いた。

④ 論文作成

発表会終了後は、探究内容を深めるため論文の形でまとめていった。今年度は論文指導を強化し、全体での論文作成ガイダンス、ゼミ担当者月次会（数回）、中間締切のリマインド（数回）、論文作成進捗確認シートの作成等、生徒が論文作成をするに当たってのゼミ担当者の指導方法に関する情報共有を強化した。

構成は目次・要旨（アブストラクト）・内容（動機・目的・仮説・検証方法・解決アクション・結果）・考察・探究で得た成長・謝辞・参考資料、とし、特に考察および参考資料の提示を促し、先行研究に基づいた自分なりの分析をすることで、探究の深化を狙った。分量は6,000字～10,000字とし、一定量を書きつつも、冗長にならないよう、各項目についてコンパクトにまとめさせた。12月中旬を一次締め切り、ゼミ担当者のフィードバックを経て1月下旬を最終締め切りと定めた。

(3) 評価と課題

感染症の影響による大きな制約の中でも、多くの生徒が地域や実社会の課題を「他人事」ではなく「我がこと」として捉え、主体的に取り組んでいた。実践に踏み出し、地域で新たな価値を創造した事例や、探究を通じて自身の生き方を見出し、進路へと向かう姿勢は高く評価できる。

一方で、課題設定、調査やデータ、考察の言及が少なく、「活動報告」と見受けられる探究が依然と多い。「やってみた」だけでは探究とはならない。自身の実践を、書籍や教科から得た知識と結び付け、抽象化して全国・世界の課題とも重ね合わせて考察を行い、地域や社会を揺り動かす新たな知の創出や、未来に向けた提言へと至るような活動を今後は期待したい。

2. 2. 2 原子力防災探究ゼミ

23名の生徒が原子力防災探究ゼミとして活動を行なった。2年次に設定したテーマについて、今年度は更なる調査や課題解決に向けた実践を重ねた。設定時には、地域コミュニティの再生を中心に、原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究するというゼミ全体テーマと合致しないテーマが一定数あったが、それらについても、活動する中で地域住民・団体との協働などが多く見られ、結果的に地域社会のあり方を考える機会が得られた。

(1) はじめに

昨年度の原子力防災探究ゼミ発足時、生徒個々の興味・関心を出発点としたテーマ設定を重視した。それぞれの生徒が、自らの興味・関心が地域の抱える課題の解決にどのように生かせるのかという視点でテーマ設定を行なった。その結果として、例年以上にテーマは細かく分かれ、全て個人または2名によるプロジェクトとなっている。

(2) 実施内容

基本的には2年次の段階で設定したテーマで引き続き探究活動を進めた。テーマについて軌道修正する者や再検討する者もいたが、それらの生徒についても2年次でテーマを設定する際に行った自身の興味・関心の検討や、そこまでに行ってきた前テーマでの活動が生かされる形でテーマの再設定が行われた。ある程度探究活動が進んだ状態で迎えた今年度は、各プロジェクト（個人・チーム）の進捗状況に応じて、教員が個別にフォローする体制がとられた。年度の前半は、積極的に外へ出て調査や実践を重ねる姿が見られた。そうしたアクションについては、ほとんどの生徒が夏休み明け頃までに一区切りをつけ、その後は多角的に考察したり、表現したりする段階に入った。9月の未来創造探究発表会、そして論文執筆を通し、2年にわたる探究活動をまとめた。

(3) 成果

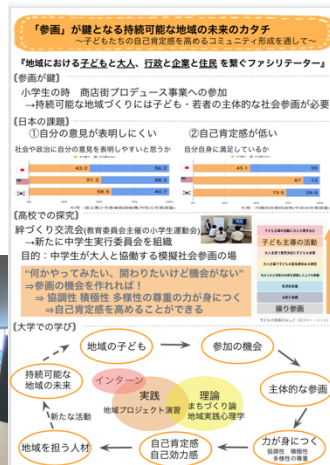
3年次になると、各プロジェクトともこれまで以上に考えながら行動する姿が見られた。2年次から積極的に地域へと活動の場を広げていった生徒たちであり、その積極性こそ彼らの強みであるが、一方で、十分な検討や準備が不足していた面もあった。それが3年次では経験の積み重ねや反省から、調査や実践の前後でしっかりと思考する姿勢が伴ってきた。また、仮説通りに活動が進まなかったときでも諦めずに新たな方策を検討するしなやかさ（レジリエンス）が備わってきた。試行錯誤こそ探究の醍醐味であると考えられるが、生徒らは活動を通してそれを堪能したと思う。

【主なテーマ・プロジェクト】

①子どもの社会参画の場を創出することをテーマと

したプロジェクトは、双葉郡8町村小学生交流イベントの開催を中心に探究活動を展開した。この交流イベントはこれまで郡内小学校教員を中心に企画・運営がなされてきた。本プロジェクトでは、教員らで構成する実行委員会に対し、中学生を企画・運営側に加えるよう提案し、中学生実行委員会を組織することに成功した。中学生らは、小学生時代に交流会へ参加しており、その経験を生かし今回は企画側として参画することとなった。これは、中学生が企画実行による達成感を味わうことと、社会に参画することへのハードルが下がることを期待して行われた。新型コロナウイルス感染症の拡大により、交流イベントは実施直前で中止となってしまったが、新たな体制を次年度以降へ引き継ぐことができた。本プロジェクトに取り組んだ生徒は、学校内外の様々な場面で一貫して子どもの参画を重視した活動を行い、生徒会活動においても生徒主導の校則改正に大きく貢献した。

②アレルギーに対応したスイーツを地元企業



と共同開発したプロジェクトの出発点は、原発事故以降苦境に立たされた地元の農産品販売に貢献したいという思いだった。南相馬市出身の生徒2名が、地元産品を使った商品開発を目指し、調査や試作に取り組んだ。災害用非常食に、地元産品を取り入れることはできないかと考え、非常食に関するアンケート調査を実施したところ、調査結果からは、被災者自身がなかなか選ぶことができない非常食にアレルギーへの配慮を求める意見が一定数あることが分かった。そこで、アレルギーに対応した非常食、なかでも非常時に精神的な安らぎを与えられるものとして甘味（スイーツ）の開発に取り組んだ。非

常食という性質上、長期保存が基本とされるため、こういった食材が、またどのように加工するのが適して



いるのかというところで、

大きな壁にぶつかることとなった。活動が停滞気味になったところで、地元スーパーに相談する機会を得られた。非常食の開発は難しいものの、アレルギーに対応したスイーツを共同で開発するというのであれば、スーパーとしても協力できるという申し出をいただいたことで、テーマの修正を図った。その後、スーパーの担当者に加え、地元洋菓子店の協力を得て、数回にわたる検討会と試作会を繰り返し、完成したスイーツを一週間にわたってスーパーの店頭で販売した。最終的に、いわき市や双葉郡の地元産品を使用すること、アレルギーに対応した商品を一般のお客様に提供することまで実現できたのは、活動の途中においてぶつかった課題にしなやかに対応できるチームワークがあったからと評価できる。

③将来医師を志す生徒が、医師不足という問題を抱えた地域医療の現状を、AED（自動体外式除細動器）の普及によって改善していくというプロジェクトにとりくんだ。前半は、医師との対話等を繰り返し、日本の医療、地方の医療が抱える課題について、考えを深める機会を得た。一方で、地方の抱える医師不足といった問題が、福島県で顕著になっている問題ではあるものの、全国のどの地方でも見られる構造的な問題でもあり、その解決のためには国や地方公共団体、そして医学部をはじめとする医療従事者を養成する大学等が中心となって取り組まなければ、解決の難しい大きなテーマであることを再確認させられた。そこで、現在の一住民の立場から、少しでも地域医療に貢献できないかと考えた際に、AEDの可能性を探っていくこととなった。日本は、人口あたりのAED設置率こそ世界トップクラスであるものの、実際にAEDが使用されているのは必要な事態の5%に過ぎないとされている。そこでAEDの意義、設置箇所、使用方法について、多くの人に広めていく活動に取り組んだ。校内に設置されているAEDについても、アンケートの結果、設置箇所を正確に把握している者は少なく、

いざという時に使用できる状況でなかったため、校内各所に最寄りのAED設置箇所とそこまでの経路を矢印で示す表示を掲示した。これにより、教員・生徒だけでなく、校舎を利用する全ての人にとってAEDの場所が明らかになった。また、防災避難訓練の機会を利用して全校生徒に対しAED活用の意義を説いたり、AED製造企業や救急救命士を目指す本校OBの大学生らと協働してAED講習会を催したりするなど、校内において積極的な啓発活動を展開した。一方、校外においても、各種発表会で本テーマでの活動を紹介することでAEDの啓発活動に努めるとともに、見てくださった方々からは多様な視点でのフィードバックをいただき、それをまた活動へと反映させていった。本探究は、自身の将来の夢につながるテーマであり、本人にとっては高校卒業後も継続していく探究となっている。探究が自分自身の夢や目標を深く考える機会になったり、一生かけてやり続けたいと思えるテーマに出会える機会になったりする、好事例であったと言える。



(4) 課題と展望

生徒の興味・関心を出発点としてテーマを設定しているため多様なテーマ設定となったが、これまで一定数あった廃炉や事故後の処理についてのテーマが生徒らの関心と結びつかない現状は、事故からの時間の経過が一因としてあるだろう。一方で、こういったテーマであれ、この地域においてこの地域に暮らす人々と協働したり、この地域の他の課題について考えを深めたりすることは、どこかで震災や原発事故との関わりを持っている。震災や原発事故が出発点でなくても、そこと繋がった時にどう考えを深めていくことができるのかが、今後のゼミ運営の課題かと考える。

今年度は、順調に活動が進まなかったときの生徒の頑張り（踏ん張り）が目立った。簡単に解決しない課題だからこそテーマとしたわけではあるが、昨年度までは一度行き詰まると活動がそのまま停滞し続けることが多く見られた。今年度は、実践の形を変えて再度挑戦したり、テーマの修正を図ったりと、試行錯誤しながらも前へ進もうとする姿勢を見せ、その点は大きな成長であった。

2. 3. 2 メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は、双葉郡を中心とした地域が抱える課題に対し、情報の発信や過去の記録（アーカイブ）といった手法を通して、その解決に向けた活動を行っている。メディア・コミュニケーションという枠を超えたテーマを設定し探究活動に取り組む生徒も多く、25名（男子5名、女子20名）が在籍している。

(1) はじめに

震災について「ほとんど覚えていない」と本ゼミ生の大半が語る。これは、震災当時彼らが未就学児であったことに起因する。これまでの探求では、自身の経験した「ストーリー」に基づいたテーマ設定が主であったが、これまで家庭や学校で得た学び・双葉郡の地域課題について考察した高校1年次での活動などによる、客観的知識に基づいたテーマ設定が顕著となる。伴って、彼らに寄り添う我々アドバイザーの関わり方も、柔軟な変容が求められる。

前述のことに由来して、震災・原発事故からの復興や風評被害の払拭といったテーマが減少し、双葉郡の魅力の開発・発信や、他地域も抱える課題に対し双葉郡を活用して解決に取り組むなど、多様なテーマが設定されている。

(2) 実施内容

①話せばわかる、話せば変わる～いわきを越えた学びを通して～

震災と原発事故で様変わりした双葉郡を知るために、様々な活動に参加した。特に大学のシンポジウムに参加して、交流する中で、固定観念に捕らわれず、世代を超えた交流をすることができた。そして新たな目標・課題が見つかった。

②ふるさとを大切に

ふるさとを大切にしたいという思いから、多くの人がふるさとに誇りを持ち、貢献したいと思えるような活動を行った。出身中学校の生徒を対象にアンケートやワークショップを行い、ふるさとについて考えるきっかけ作りをすることができた。



③絵本を作って、東日本大震災を伝承する

オリジナル絵本を作り、たくさんの人に東日本大震災の知識や記憶などを伝承したいと考えた。完成した絵本を本校図書館、相馬市立図書館、南相馬市立図書館の3カ所に展示し、読んでい



ただいた方にアンケート調査を行った。

④生理によりそう探究

生理の貧困をテーマとし、問題を解決するため、アンケートを行い、関係する教員と協議しながら、本校のトイレに生理用品を設置するアクションを行った。活動の中で、トイレに生理用品を置く活動を持続させるためには、企業と連携するという方法もあるという新たな視点に気づくことができた。



⑤発達障害と療養

発達障害のことを調べてみると、その解説の多くが難解でわかりにくい。そこで、どのようにすれば、多くの人に発達障害のことが理解されるか、また療育施設について理解が進むのかを探求した。

⑥浜通り×聖地巡礼

浜通りの観光客増加のために、アニメ等コンテンツの聖地巡礼を取り入れることで、観光客が増え、双葉郡の魅力を伝えられるのではないかと考えた。双葉郡をイメージしたオリジナルキャラクターを作成し、文化祭で展示した。



⑦男性保育士に対しての差別や偏見を減らす

保育の魅力を発信している横浜バーンの方々や男性の保育教育実習生、出身幼稚園の教諭らと交流し男性保育士の置かれている状況について調査した。性別による差別や偏見について、現場の状況を知るとともに、その払しょくのための解決方法について考えを深めることができた。

⑧救いたい小さな命

最近のペットブームから殺処分をキーワードにして、飼い主のあり方、自治体や民間団体の取り組みなどを電話などから調査し、子供たちにもこの問題について考えてもらえるよう絵本を作り、啓発活動を行おうとした。

⑨孤食 ～今の子供たち～

一家団らんの食事が大切だと考えているので、1人で食事をとる子供が増えている事は大きな問題で

あると考えた。アンケートをとると、家族の生活が忙しくばらばらな状況と、子供が一家団らんを避ける傾向の2つが見えてきた。どうすれば一家団らの時間を持てるか考察した。

⑩ひろばーを広めよう ～キャップアートで印象付ける～

アートと環境問題に興味があったことから回収したペットボトルのキャップを使ってアート作品を作ることを考えた。広野町の象徴のひろばーをアート作品にすれば多くの人の目に留まりペットボトルのキャップの回収が進むと考えた。



⑪古着の活用

古着のリサイクル事業に関心を持っていた。そこで自ら古着の仕分けに参加し、どのような古着がどのような年齢層にどのような目的で採用されているかを調査した。古着再利用の可能性を探求した。

⑫不自由なく過ごすには？

すべての人が不自由なく過ごせる社会を目指したいと考え、身近なところで生活に不自由な物や場所がないかを調査した。物が充実していれば人の心も満たされると考えていたが、物よりも人の心が大切だということに気づいた。

⑬民話を通して地域を知る

非常食の必要性を認識することと災害に備える意識を高めることを目的として、非常食を作ってみたり、公的に保管されている備蓄品について調べたりした。高齢者や子供を抱える世帯、外国人などに対しては配慮が必要なのことがわかった。

⑭福島と世界

震災で差別を経験し、福島県が風評被害に遭っていることに対して、福島についての印象を、SNSなどを利用し、いろいろな意見をもとに、どのようにしたら福島の印象が良くなり、各種産業が普段通り行えるようになるのかを考察した。

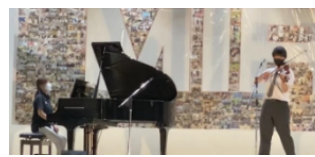
⑮繋がる世界と福島

中学校まで中国に住んでいた経験を活かし多くの国際交流活動に参加した。福島県が風評被害を受けており、自分のルーツを活かし貢献できることを模索した。将来は現地での交流ができる、異文化交流の場を設けたい。

⑯音楽で町を元気に！

広野町を由来とする童謡「とんぼのめがね」のよ

うに、町民が親しみやすい音楽を広める活動を行った。文化祭で自身の広野町の新たなテーマソングになるような童謡作曲し披露した。音楽の可能性について深めることができた。



⑰風評被害と心理

風評被害を減らすため、風評被害と情報の関係性について調べた。誤った情報の発信が風評被害の原因であると考え、どのようにすれば正確な情報を発信できるかの調査をポスター掲示やアンケートで行った。活動の中で、情報を正確に伝えることの難しさに気づいた。

⑱小説で福島に人を

小説を書いてみたいと言う気持ちと、地域振興の役に立ちたいと言う2つの気持ちを掛け合わせてみた。携帯で読める小説をネットで発信。その際に広野町の特産物や名所を小説に散りばめれば、広野町の交流人口が増えるきっかけになるのではないかと考えた。

⑲交流を通して双葉郡の魅力を伝える

双葉郡の魅力を、交流を通して広めたいと考え活動した。本校生徒へのアンケートや広野町、楡葉町の町民へのインタビューから広野町の魅力をマップにまとめた。活動の中で、人と人との繋がりの大切さを実感し、目的の達成には地域との協同が必要であると考えた。

(3) 成果

行動制限があった昨年度と比べ、今年度はアクションを行う機会が徐々に増え、地域人材とのつながりを大切にしながら探究を進めることができた。活動の中で、自分が社会を変えることができる力を持っていることに気づき、「変革者」として果たすべき役割について考えることができた。

(4) 課題と展望

コロナ禍の中、徐々にアクションの機会は増えたが、それでも十分なアクションができたとは言えない状況であり、やむを得ずオンライン上で交流することが多くなってしまった。文化祭において発表や展示をするアクションを行った生徒や、ある程度まで探究が進んでしまった生徒などは、煮え切らずに探究を終える生徒もいた。教員によるアクションの提案を積極的に行うことが重要であると考えた。

2. 3. 2 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たな再生可能エネルギー推進ビジョンとして震災以降の社会情勢も反映させた「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

本校の再生可能エネルギー探究ゼミでは、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン 2021」をもとに福島県や双葉郡の現状を把握し、課題を見だし、解決の糸口を探究することが一般的な進め方ではある。フィールドワークや基礎実験などの演習を全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。それと同時に、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒12名が、お互いが協力しながら、探究活動を進めてきた。全体の活動としては、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン 2021」を参考にFH2Rの見学、ソーラーカー大会参加、CQEVミニカートレース参加(筑波)等、様々な取り組みを行ってきた。また、各グループの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。除去土壌の再利用班、CO₂削減班、マイクロプラスチックについて班、小水力発電班等野心的な探究テーマを設定し、探究活動を進めてきた。

「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン 2021」の概念図



(2) 実施内容

①CO₂削減班

CO₂削減の為に個人でできることは何があるのか、地球環境の現状を知り、一人ひとりが、「節電」、「省エネ」に日常的に「能動的」に取り組む社会を目指すというものです。その実現の為に考えた検証は、植物や木を増やせばCO₂の吸収を促進できる、電気自動車の導入、微生物発電、節水、節電、プラスチック削減、都市ガスを電気で代用などです。実践した結果は、植林は長期的にみれば、効果はあるがコストと土地、時間がかかる。電気自動車の推奨は自分たちでやるには難しい。微生物発電は毎秒2[μW]でほぼ効果ありませんでした。最終的に節電、省エネが一番身近で取り組みやすく、また各家庭の生活費も削減できるので、取り組みやすい結果になりました。具体的には無駄な電気をこまめに消す、寝るときやエアコン使用の節約です。班員の各家庭試みたが、夏や冬の気温で我慢しなくてはならなく

なり、不自由な暮らしになるので続かない。節電は自分たちが意識することで実現できたが、毎日継続して実施することが難しいという結果になりました。改善点は、大規模な電力需要家(学校や大企業)で節電を積極的に取り組む。

未来創造探求を通して自己の考え方、姿勢の変化、成長は、この探求をする前は、引っ込み思案で自分がやっても無駄だよなーと自分から積極的に取り組むことが少なかったが、探求を通して自分が行動することに意味があることを知り、まずは自分から始めようという考え方になりました。また姿勢の変化として、目標を達成するためではなく、日ごろから無駄を省いて生活の一部として心がけることが大事だと思いました。

出典「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン 2021」〇〇〇〇

②水素班～「水素を知る・伝えること」～

水素エネルギーをわかりやすく広めるためにはどうすればいいのか?それには水素社会・水素エネルギーをすべて理解するのではなく、基礎的なことやある程度までのことを理解している状態を目指しています。

水素はこれからの脱炭素の大切な役割になると思い、浪江町の福島水素エネルギー研究フィールドFH2Rを見学した。職員の方に施設について話を聞き、再生可能エネルギーを利用したグリーン水素の製造する実証運用施設。太陽光発電から得られる電力によって水の電気分解をおこない水素を取り出している。水素製造装置は10MWと世界最大級で1時間あたり1,200Nm³の水素を製造することができる。この量を1日稼働すれば約150世帯の1か月分の消費電力量、もしくは燃料電池車両約560台分の燃料に相当するエネルギーをつくりだすことができるのでした。製造された水素は、燃料電池や水素ステーション、産業用として使用され、東京2020オリンピック・パラリンピックの聖火台や一部の聖火リレーの燃料としても使われ福島県ではサッカーナショナルトレーニングセンターのJヴィレッジや浪江町の道の駅なみえ、福島市のあずま総合運動公園などにも提供されている。



福島水素エネルギー研究フィールド/FH2R（出典：NEDO）

石炭や石油などの化石燃料を燃やして水素を製造する方法を「グレー水素」、化石燃料を使って水素を製造するが、排出したCO₂を回収や貯留することでCO₂の排出を低減「ブルー水素」、最後に太陽光発電など再生可能エネルギーから水素を製造する方法を「グリーン水素」の3種類に分類されることを知った。

また、2022年11月19日と20日にJヴィレッジで親子向けのカーボンニュートラル啓発イベントに参加する機会がありそこで今まで学んできた水素エネルギーについて丁寧にわかりやすく説明することができたと思う。

探求で得た成長は、水素エネルギーや再生可能エネルギーの現状やメリット、デメリットがわかり、テレビや新聞で再生可能エネルギーについてのニュースはある程度理解でき、そのことについて周りの人や親に説明できることだと思う。



③ 小水力発電の作成、実験班

広野町は豊富な水資源があり、小水力発電を活用し町の歩道を、イルミネーションで照らそうと考えました。

地域の現状は、人口が減少し、活気が少ないと感じました。街灯の数が少なく、歩道が暗く危ないこと、加えて、地域自体もどこか活気のないように思いました。

再生可能エネルギーを使って、イルミネーションを点灯することで町の歩道や人の心も明るくなることです。

そのためのアクションは、太陽光発電を使用した、イルミネーションを設置、点灯をすることです。また、小水力発電の作成、実験です。

結果は、町民の方に町が安全になった、明るくな

ったと感じてもらえた。町の街灯も増え、LED化で夜も明るい歩道が増えました。もう一つの課題は、小水力発電でしたが、生活に使用するには様々な困難があることがわかりました。

未来創造探究を通して地域の方々から頂いた様々な知恵を元に、お世話になったこの地域のために、私たちができることをこれからも探し続けていきたいと思います。

④ 除去土壌の再生利用とその可能性班

除染作業によって発生した大量の汚染土壌が中間貯蔵施設に蓄積されていく問題があります。

飯館村長泥地区で環境省が進めている再生利用実証事業の最新状況について学習をしました。そこでは、除去土壌の放射能の安全を確認した上で、造成可能な農用地等の利用促進を図ることとされています。風評被害もあり、安全性を示そうと考えたとき、除去土壌を利用して場所を取らないようにするには、農作物の育成に活用することと仮説を立てました。それを踏まえて、実証実験からはどのような安全性を示す数値が出たかなどを詳しく調べてきました。しかし、除去土壌を減らすことについて直接的に解決することはできませんでした。探究に取り組む背景となったきっかけ・起点として、東日本大震災を経験して多くの災害による被害を目の当たりにしたことが最も大きな出来事になったと感じます。

探究発表で除去土壌の再生利用や、福島県外の人々が、福島県産の作物に対してどのような意見を持っているか、またその対策案などを友達や先生方との意見交換をすることができました。そして、地域・社会が抱えている課題について考え、福島県外の人々から県内産物への良いイメージを作り出すために地域の理想の未来を構想したりすることができました。

基本的な学習の一環として、再生可能エネルギーのあり方について、より具体的に話し合うことなどを行ってきました。

(3) 成果

再生可能エネルギーの探究を通じて、身近にあるエネルギーを様々な方法を用いて取り出し電気エネルギーに変えて使えるようにすることが、アイデア次第で簡単にできると理解できた。

(4) 課題と展望

各種エネルギーを電力に変換する方法や、電力を冷房、暖房、モーター等様々な用途を考えるベストミックスを個人レベルや職場単位、地域単位で進めることで、そのモデルを発展させ全国に広めることができる可能性を感じた。

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/fukushima-saiene/#houkousei>

2. 3. 2 アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミは、双葉郡の農業生産の現状を鑑み、今後の農業とビジネスを探究するゼミである。令和4年度はアカデミック系列、スペシャリスト系列農業、商業の生徒から成り、計8名（女子8名）で実施している。自らの関心のある事柄と「農業」や「商業」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。

(1) はじめに

アグリビジネスゼミに所属する生徒は、商品開発に関心を持つ者が多い。所属生8名のうち7名がスペシャリスト系列の農業または商業選択者であり、教科の授業をとおして地域資源を活用した商品開発に取り組んでいる。それゆえ、教科と連携させながら、双葉郡の資源を使った商品開発を目指す活動を進めてきた。

全体の活動としては、2022年7月21日に、福島大学 農学群職農学類 則藤孝志先生による「フードシステム」についての講話を聴いた。『農業と食品産業は、原子力災害からの復興を目指す「車の両輪」である』という研究上の理念から始まり、農と食による地域の盛り上げ活動の考え方や実践例について学んだ。講話の後半では、本ゼミ生に向けて「(探究のテーマについて)なぜそれをするの?」という問いかけがあり、探究のきっかけや思いを語り合う場面もあった。

(2) 実施内容

テーマおよびキーワードは、次のとおりである。

テーマ	キーワード	編成
エディブルフラワーの栽培とゼリー作り	農業、食用花、無農薬栽培、地域活性化	グループ
美容で双葉郡の魅力を伝えたい!	美容、商品開発、双葉郡の果物、地域活性化	グループ
双葉郡のフルーツで町を元気にしよう! 廃棄品を使用した新商品の開発について	商品開発、双葉郡の果物、果糖、ジャム	グループ
双葉郡の新土産「コーヒーかす」の石鹼～コーヒーかすの再利用可能性について～	再利用、商品開発、コーヒーかす、石鹼	個人

(3) 成果

①エディブルフラワーの栽培とゼリー作り

地域の花を使ったスイーツを作り、双葉郡の景色を多くの人に知ってもらうことを目的とした探究活動である。スペシャリスト系列農業選択者3名から成る班で活動し、花の無農薬栽培と、花を使ったスイーツ作りを行った。

県内でエディブルフラワーの栽培を行っている「にこにこバラ園」を訪問し、エディブルフラワーに適した花の品種の選び方や、無農薬での栽培方法について学んだ。8月より本校施設内でマリーゴールドの無農薬栽培を実践し、エディブルフラワーの自家栽培に成功した。温室内での栽培管理が継続できなかったことが原因で

アブラムシがついたが、希釈した食酢水溶液を噴霧することで対処する工夫がみられた。



自家栽培のマリーゴールドを使ったスイーツ作りでは、花の見た目や香りをそのまま残すことが可能な濡奈加工法として、ゼリーを選択した。ゼリーは二段仕立てとし、下層には

ヨーグルト風味の白いゼリー、上段にはエディブルフラワーが入った透明なゼリーを重ね、味も見た目も高評なスイーツが完成した。



探究で得られた学び・力は、「コミュニケーション能力」と、地域のために自ら動く「行動力」である。同班の活動成果は、2023年1月開催の「県総合学科高校生徒研究発表会」にてポスター発表を行った。

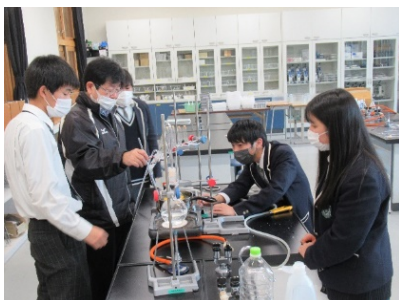
②美容で双葉郡の魅力を伝えたい!

若い世代の話題となりやすい美容に着目し、双葉郡産の果物を活用した化粧品作りと、それによる若者の呼び寄せを目的とした探究活動である。

広野町で化粧品を製造している「(株) レイス」を訪問し、直接肌に触れる商品は、アレルギー検査の実施や安全性を示すための申請が必要であることを学んだ。

肌につけない美容製品として、香りでリラックス効果や美容効果が得られるアロマに着目した。水蒸気蒸留法の装置を自作し、みかん皮やバナナ皮、ドクダミなどから香りを抽出した。結果は、採れた香り分量は微量であり、アロマ効果を期待できる香りではなかった。抽出法や抽出資材の改善をすることで、日本人好みのフレッシュで清潔感のあるフルーティーな香りが得られ、双葉郡の果物から話題性のあるアロマができると期待できる。

探究で得られた学びは、他者との関わりをとおして「ものごとの捉え方が広がった」ことだ。見学先の工場での相談や、カタリバスタッフからのアドバイスから多くの気づきを得られた。探究活動をきっかけに、他者の考えを受入れようとする姿勢が強まったという成長が見られた。



③双葉郡のフルーツで町を元気にしよう！廃棄品を使用した新商品の開発について

双葉郡産の果物を活用した新商品開発を目的とした、砂糖不使用のジャム製造についての探究である。

果物に含まれる果糖に着目し、果糖を抽出・粉末化することで、砂糖の代替品としてジャム作りに活用しようと考えた。バナナ、キウイ、オレンジなどの果物をペースト状にし、濾過して得られた濾液を70℃で1～2週間乾燥させて、粉末化を目指した。結果は、得られた乾燥物にはべたつきがあり、粉末化はできなかった。べたつきの正体は、乾燥不十分によるもの、または濃縮された果糖のいずれかであると考察している。

探究で得られた学びは、「物事は思い通りに進まない」ということと、その解決のためには「視野を広げること」が必要だということである。果物から砂糖が取れると勘違いしたまま実験を行って



いたため失敗続きと感じていたが、実はこれらの実験ではドライフルーツが完成していたことなどに、発表会をとおして気づきを得ていた。

④双葉郡の新土産「コーヒーかす」の石鹸～コーヒーかすの再利用可能性について～

本校カフェで廃棄されているコーヒーかすに着目し、コーヒーかすを活用した石けん作りを目的とした探究である。

石鹸の自作を目指し、食用オイルと苛性ソーダ水を混合する製造法と、グリセリンソープを融解する製造法の2つを実践したが、結果は難しかった。

いわき市で石けん製造を行っている「GSauto JAPAN・ANDANTE」を訪問し、コーヒーかすを使った石鹸の商品化についての会談を複数回行った。コーヒーかすをリサイクルことの意義や、石鹸におけるコーヒーかすの消臭効果などを協議し、商品化に向けて具体的な企画立てをした。年度内の実現には至らなかったが、継続する価値のある探究である。



探究で得られた学びは、「情報に直接触れる」ことの大切さである。本探究では、情報の収集や発信において SNS は極力使用せず、実際に見たものや触れたものを信用して活動を進めてきた。直接触れることで気づきを得られたり、信頼関係を構築できたりした。

(4) 課題と展望

地域資源を活用した商品開発を自分で企画し、必要な技術を自ら外に学びに行ったが、多くの大人との関りから地域課題について再確認し、実践を通して何を学ぶのかを整理していくことが必要である。

2. 3. 1. スポーツと健康探究ゼミ

概要

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から12年が過ぎた。この12年の中には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。震災や原発問題で受けた子どもたちも、運動能力低下問題も、様々なプログラムが考えられるようになり、少しずつ回復傾向に向かっている。しかし、震災や原発問題の余波もまだ残り、福島県民の生活に不安を残している。不自然な環境で生活を送っている人もおられる。時間が経過したことで忘れられ、今年度は新型コロナウイルス感染症が世界で拡大。私たちの生活する日本、福島県にも大きな影響をもたらした。震災からの復興を目指すスピード感にも鈍りを与えた。これは12年目に私たちが身をもって感じたことである。そして「当たり前」は「当たり前」ではない。「緊急事態宣言」「ソーシャルディスタンス」など、私たちが「まて」を感じた「新しい生活様式」。「緊急事態宣言」は「スポーツ」というものが、ただの「改め」ではなく、多くの人にと元気が与え、様々な課題を解決できる可能性がある。秘めたるものが、かたがた改め、感じるこころとつながった。「知る」「支える」「知る」。このような状況にあるのかを、世界や社会、地域、さらには自らの課題に目を向けて、どのような課題が蓄積されているのかを知り、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指す。

(2) はじめに
スポーツを通して地域を豊かにする方策を、健康増進の総合型地域クラブの活用、ポータルサイトの構築による持続可能な地域の実現や、科学的見地からの探究と実践を行う。バーリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容
① 興味あるテーマに対する文献調査
高校1年次に決めた、各生徒のテーマに沿って、インターネットや図書館を使用した文献調査を行った。生徒が抱える小さな疑問や、人、施設、団体、専門家を切り口として、既に行われている取り組みや、分かっていることの情報収集した。その際、インターネットや図書館を使った調べる方法や気を付けたことに対して、実践的に学習する機会を設けた。

2 地域のスポーツ振興を担う施設、団体の訪問
文献調査の後、地域のスポーツ振興を担う施設、団体を代表して、広野みかんクラブ、Jヴィレッジ、ヨナルトレーニングセンター、Jヴィレッジを訪問取材を行った。文献調査で分かったことと、実際に活動している方から得た情報と、同じ部分を通して、生徒が持つテーマをより多様な視点で向き合う時間を設けた。

3 グループ学習(調査・アクション)
文献調査や地域の調査を通して得た情報を、自身でより深く調査する内容を検討し、実施する内容による活動する生徒が主体性を、グループ学習を行った。

生に運動する機会を届けた。



“外遊び減少解決”

東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故で、屋外での遊びが減少し、子どもたちの外遊びの機会が減少している。この問題を解決するために、子どもたちの外遊びの機会を増やすことを目指している。

“肥満児を減らそう”

広野町において、肥満児の割合が多いため、肥満児を減らすことを目指している。このために、子どもたちの運動を促進し、健康的な生活を送ってもらうことを目指している。

“Easy Sports で not 苦手”

「運動が苦手な人を減らすにはどうしたらいいか」という疑問をきっかけに、子どもたちが楽しめるスポーツを開発した。



広野 Revolution”

「自分たちの得意なスポーツを使って貢献できる」と、広野町の探求活動が、広野小学校で始まった。



“コロナ禍でもスポーツ観客数を増やそう”

新型コロナウイルスの流行により、スポーツ観戦ができなくなった経験に基づき、「コロナ禍でもスポーツ観戦が楽しめるようにしたい」という思いから、FCの試合をVRで観戦する体験型イベントを開催し、観戦の楽しさを伝えることで、観客数の増加を目指す活動を行っている。



“高齢者に健康的な食事を”

高齢者の食生活の改善を促すことで、健康寿命を延ばすことを目指している。高齢者の食生活の改善には、適切な栄養と運動のバランスが重要である。また、高齢者の食生活の改善には、適切な栄養と運動のバランスが重要である。また、高齢者の食生活の改善には、適切な栄養と運動のバランスが重要である。

“筋トレをして運動不足を解消しよう”

運動不足を解消するために、筋トレを行うことを推奨している。筋トレは、筋力向上と代謝促進に効果的である。また、筋トレは、筋力向上と代謝促進に効果的である。また、筋トレは、筋力向上と代謝促進に効果的である。

“ケガゼロプロジェクト”

ケガを減らすための取り組みを行っている。ケガの予防には、適切な運動と十分な休息が重要である。また、ケガの予防には、適切な運動と十分な休息が重要である。また、ケガの予防には、適切な運動と十分な休息が重要である。



“怪我をなくして笑顔広がる世界を創る”

怪我を減らすことで、笑顔を広げたいという思いから、ケガの予防活動を行っている。ケガの予防には、適切な運動と十分な休息が重要である。また、ケガの予防には、適切な運動と十分な休息が重要である。また、ケガの予防には、適切な運動と十分な休息が重要である。

“野球に興味をもってもらい野球人口を増やそう”

野球に興味をもってもらい、野球人口を増やそうという目的で、小学生向けの野球体験イベントを開催している。野球に興味をもってもらい、野球人口を増やそうという目的で、小学生向けの野球体験イベントを開催している。

“パークゴルフで肥満率低下と地域活性化”

パークゴルフを通じて、肥満率の低下と地域活性化を目指す活動を行っている。パークゴルフは、運動不足の解消と地域活性化に効果的である。また、パークゴルフは、運動不足の解消と地域活性化に効果的である。

“バドミントンで地域活性化”

バドミントンをきっかけに、地域活性化を目指す活動を行っている。バドミントンは、運動不足の解消と地域活性化に効果的である。また、バドミントンは、運動不足の解消と地域活性化に効果的である。



“サイクリング”

サイクリングを通じて、地域活性化を目指す活動を行っている。サイクリングは、運動不足の解消と地域活性化に効果的である。また、サイクリングは、運動不足の解消と地域活性化に効果的である。



“スポーツを通して町をきれいにしよう”

スポーツを通して、町をきれいにしようという活動を行っている。スポーツ活動を通じて、町をきれいにしようという活動を行っている。また、スポーツ活動を通じて、町をきれいにしようという活動を行っている。



“遊んで知って広げよう”

世代間関係なく、高齢者や子どもも交流がもった。世代間交流の場、要するに、交流の場をいかに活用するか、という点に、子どもたちも積極的に参加している。また、高齢者や子どもも交流の場をいかに活用するか、という点に、子どもたちも積極的に参加している。



“サッカー好きを増やそう！！！！”

環境が活動の場を提供している。また、地域にサッカーチームを通して、地域を活性化させることに取り組んでいる。

“アスリートに必要な栄養を少量で効率的に摂る方法とは”

栄養素を効率的に摂る方法について、生徒たちは興味を示している。また、栄養素を効率的に摂る方法について、生徒たちは興味を示している。



“サッカー一部を通して地域活性化”

「サッカー部の活動を通して、広野町に元気をお届けすることができないか」と考え、活動を始めた。町民の意見を聞くために、アンケートを作成した。その中で、地域住民がふたば未来学園を遠い存在としてとらえていることを知った。サッカー部をはじめとするふたば未来学園が町民との距離を縮めるにはどのようなことができるか、検討している。

(3) 成果
スポーツと健康探究ゼミに所属する生徒は、

男の子も女の子も、部活動やサークル活動を通じて、地域を活性化させることに貢献している。また、部活動やサークル活動を通じて、地域を活性化させることに貢献している。

(4) 課題と展望
健康とスポーツの両立を実現するためには、生徒たちの健康意識を高める必要がある。また、健康とスポーツの両立を実現するためには、生徒たちの健康意識を高める必要がある。

2. 2. 3 健康と福祉探究ゼミ

本ゼミは、少子高齢化や人口減少が加速する地域において住民が安心して暮らすことができる町づくりを目標として活動している。アカデミック系列生徒4名、スペシャリスト系列生徒7名（農業1名、福祉6名）の計11名が所属し、地域の課題解決に向けて、昨年度から個人あるいはグループで探究活動を行ってきた。

自分が興味関心を持っている事柄と「健康」「福祉」の分野を関連させ、世代間交流の活発化や防災意識の向上、食習慣の見直し等、よりよい生活の創造を目指し探究と実践を行っている。

(1) はじめに

昨年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、時間をかけて準備してきたイベントが直前で中止となる等、対面での探究活動が思うように進められないことが多く、落胆する生徒の姿も見られた。今年度は、オンラインを活用したり、規模を縮小したりする等、当初の予定にこだわりすぎずに課題解決のためのアクションを行っていくように、生徒たちへの声かけとアドバイスを行ってきた。

(2) 実施内容

① 2年次の活動

5月から7月にかけて福祉科教員、大学教授、栄養教諭による講義や演習を受け、「福祉」「健康」「栄養」分野についての知識を得ることで、探究活動を進めるヒントをつかむことができた。夏季休業中に各自のテーマについて調査を行い、8月にはその内容をゼミ内発表会で発表し、同じゼミの生徒や教員からアドバイスももらった。9月以降は、課題解決のための活動を個人、またはグループで進めてきた。

② 今年度の流れ

- ・中間発表（4月26日）

2年次で行った探究活動の内容と、今後の活動予定について、PowerPointを用いて発表を行った。見学者からのコメントと発表の振り返りが、その後の活動を進めるうえでのヒントとなった。

- ・課題解決のためのアクション（4月～12月）

新型コロナの状況を踏まえて活動の見直しと実践を繰り返した。

- ・未来創造探究 生徒研究発表会（9月24日）

これまでの探究活動についてPowerPointを用いて発表を行い、審査員と見学者からコメントを頂いた。

- ・論文作成（10月～1月）

2年間の探究活動を論文にまとめた。

③ 探究活動内容

- ・地域リング

南相馬市出身の2名が、地域における子ども、高齢者、障がい者の交流を増やすことを目標に活動を行ってきた。今年度は交流イベントを準備していたが、新型コロナの感染拡大により直前で中止を余儀なくされた。しかし、準備の過程で、地元で市民の交流イベントを行っているNPO法人と出会い、ボランティアとしてそのイベントの運営に携わった。



南相馬市での交流イベント

- ・介護を知って興味を持ってみよう

高齢化が進行しているにも関わらず介護従事者が減っていることを問題視し、多くの人に介護に興味を持ってもらうことを目標に探究活動を行ってきた。今年度は、文化祭で本校生と来場者を対象としたボッチャ体験イベントを実施した。



文化祭でのボッチャ体験イベント

- ・LGBTを知ろう

LGBTへの理解を広めることを目標に、LGBTへの認知度や理解度に関するアンケートを実施した。ハワイに短期留学をした際には、現地でLGBTに対する意識調査を行った。

・交流で地元の魅力を発信

他ゼミの生徒と協力して、本校が位置する広野町の魅力を住民の方々、広野小学校の児童、中学校の生徒、本校生から聞き取り、その魅力を地元イベントで発信するという活動を行った。



広野小学校の児童たちへ放送で協力を呼びかける様子



校内で広野町の地図を掲示



広野町の魅力を書き込んでもらったマップ

・ひとりひとりが取り組む防災

防災意識を高めることを目標に、校内外で様々な活動を行った。校内においては、他ゼミの生徒と協力して、避難訓練の改善と防災意識を高めるためのワークショップを提案し実行した。校外の施設においては、防災に関する展示と、広野町環境防災課から頂いた非常食の配付を行った。



防災ワークショップの様子



防災に関する展示

・中高生「食育」プロジェクト

若い世代に正しい食習慣を身に付けてもらうことを目標に活動を行ってきた。本校生に実施したアンケート調査の結果、味が濃いものを好む傾向が見られたことから、少ない塩分でも満足できる調理法を教える調理実習を実施する予定であったが、新型コロナの感

染拡大により直前で中止となった。

・DANCEでたくさんのSMILEを

コロナ禍で増加したストレスをダンスによって軽減させることを目標に、本ゼミの生徒2名で協力して活動してきた。校内でのダンスイベントを企画していたが、新型コロナの感染状況の悪化により中止した。感染者数が落ち着いてきた頃に、小学生を対象としたイベントを実施した。



ダンスイベント

・運動と音楽で子どもたちに笑顔を！

音楽と運動を通して子どもたちの笑顔を増やすことを目標に、本ゼミの生徒2名で協力して活動してきた。当初、広野町のこども園で音楽と運動を組み合わせたイベントを行う予定で準備を進めていたが、新型コロナの感染拡大のため中止となった。対象を小学生に広げて、イントロクイズや、ダンス、リレー等の活動を行った。



小学生にイベントについて説明する様子

(3) 成果

今年度も、新型コロナが探求活動に与えた影響は大きく、対面でのイベント開催中止が相次いだ。しかし、多くの生徒たちが、イベントの対象者を変える等、あきらめず柔軟に対応し、実行に移した。実践を複数回行う生徒もいたが、行ったことに満足せず、振り返りを行い、次の活動を改善するという姿が見られた。

また、生徒の論文からは「自分が持っていた思い込みや偏見に気付いた」「自分で問題点を探し、解決法を考えられるようになった」「あきらめずに挑戦することの大切さを知った」「自分も地域の一員だという意識が強まった」等の記述があり、生徒自身が自らの成長を実感していることが伺われる。

(4) 課題と展望

現在生徒たちは、課題解決のためのアクションを行う際に、イベントの企画や告知、参加者集め等を一から自分たちで行っている。しかし、既に地元で活動している団体と連携・協力することも手段の一つとして有効なのではないかと考える。

2. 3. 3 探究活動発展のための発表会（未来創造探究 生徒研究発表会）

高校2年次から2年間取り組んできた「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。本校における課題解決型学習の成果を披露する機会として、調査アクションのみならず、課題を解決するアクション、生徒自身の総括、社会への提言等を発表した。様々な分野の第一線で活躍されている方（専門知審査員）や地域の課題に取り組んでいる方（地域知審査員）に審査をお願いした。今年度は高校が70、中学が15とのプロジェクト数が増えた一方で、昨年度の反省から1発表あたりの時間を長くしたため、分科会でコンテスト部門と交流部門に分け、コンテスト部門での上位発表のみを全体会に進出する形式を取った。また、中学校が開学して4年目であり、3年生が未来創造学の成果を発表する2年目となった。

(1) 概要

- ① 目標
- 1) 地域課題解決のための探究と実践に取り組む学習「未来創造探究」の成果をまとめて発表することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（D：表現・発信力、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 2) 発表を聴講することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（A：社会的課題に関する知識・理解、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 3) 保護者、地域の方々、県内外の教育関係者に本校の探究活動の内容を発信し、ステークホルダーとの協働関係をより強固なものにする。
- ② 日時 令和4年9月24日（土）9：00～16：50
- ③ 内容
- 9：00～11：05 分科会（12教室で7発表）※10分休憩あり
 - 11：10～11：25 休憩
 - 11：25～12：00 審査員によるミニ講義
 - 12：00～12：50 昼食・休憩
 - 12：50～13：00 ★開会行事
 - 13：00～14：00 ★全体会Ⅰ（高校生代表発表）
 - 14：00～14：10 休憩
 - 14：10～15：10 ★全体会Ⅱ（中学生代表発表）
 - 15：10～15：35 ★閉会行事（結果発表、表彰、総評）
 - 16：15～16：50 教員と審査員の探究交流会

④ 審査員 専門知・地域地を持つ審査員17名

	氏名	所属	専門/地域		氏名	分野 or 地域	専門/地域
1	田村 学 様	國學院大學人間開発学部 教授	探究	10	菅波 香織 様	未来会議 議長/弁護士	地域全般
2	松岡 俊二 様	早稲田大学大学院 アジ ア太平洋研究科 教授	地域全般	11	牧内 昇平 様	ライター・物書きユニット ウネリウネラ	メディア
3	平山 勉 様	双葉郡未来会議 代表	富岡	12	下枝 浩徳 様	葛力創造舎 代表理事	葛尾
4	青木 淑子 様	富岡町3.11を語る会、元 富岡高校校長	富岡	13	小山 良太 様	福島大学 食農学類 教 授	アグリ
5	永井 祐二 様	早稲田大学 環境総合研 究センター 研究院教授	再エネ	14	江川 賢一 様	東京家政大学人間栄養学 部人間栄養学科 教授	スポーツ

6	中田 スウラ 様	福島大学 人間発達文化 学類 特任教授	地域全般	15	明石 重周 様	Jヴィレッジ 職員	スポーツ
7	半谷 栄寿 様	一般社団法人 あすびと 福島代表理事	再エネ	16	猪狩 僚 様	いわき市役所/IGOKU編 集長	福祉
8	丹波 史紀 様	立命館大学産業社会学部 現代社会学科	原子力防災	17	佐藤 亜紀 様	HAMADORI13 事務局	福祉
9	高原 耕平 様	人と防災未来センター 研 究部 主任研究員	原子力防災				

(2) 詳細

① 事前準備

今年度の発表会は県内に「まん延防止措置」がとられている状況下での実施となった。昨年度同様に、コロナ感染症の防止対策を徹底して行うことに留意して実施することとなった。対策としては、全体会における三密回避を徹底するためにアリーナには高校2・3年次と中学校3年生だけとした（中学校1・2年生と高校1年次は別教室でZoom映像を参観する）。また分科会会場の人数についても多くなりすぎないように、8会場で分科会を行った。外部からの来場者は審査員のみとし、それ以外の参加者についてはZoomによるライブ配信を行った。

実践内容を様々な観点から探り、参加者全体で学びを深めるために、分科会会場ごとに専門知を有する審査員1名、および地域知を有する審査員1名に参加していただき、校内審査員（教員）1名を加えて3名で審査をすることとした。地域知を有する審査員は本校の開校の経緯や生徒の探究活動が面的に広がってきたことをふまえ、昨年度は双葉郡の全八町村からお呼びするようにした。今年度はさらにいわき市からも審査員をお呼びした。審査員の方々はこれまで本校の探究活動に参画して下さった方が多く、依頼した審査員の方には快諾をいただいた。

今年度は個人探究に組んでいる生徒が増加し、更に中学校3年生の発表も加わったため、総数の増加が昨年度以上に増加した（今年度74PJ【高校48PJ、中学校16PJ】、昨年度は48PJ）。そのため、今年度は動画による事前審査を行い、高校の発表プロジェクトを58PJから32PJまで絞ることとなった。また、昨年まで発表時間10分であったのを5分に短縮し、内容をより精選して発表するように指導をした。

・動画による審査（FlipGridを使用）

発表を5分にまとめ、動画をFlipGrid上にアップさせ

た。この動画は事前審査のために審査員とも共有をした。



② 分科会

- ・昨年同様に、分科会ではゼミの枠を外し、複数のゼミの生徒が参加するようにした。とは言え、分野については共通して括れるように配慮した。
- ・発表数と時間を勘案し、会場数は8会場、各会場で6発表（高校4発表、中学校2発表）を割り当てた。
- ・各分科会に外部審査員2名、内部審査員（本校教員）、司会（本校教員）を設定した。生徒は発表に集中できるように、係の設定は極力少なくなるようにした。



- ・発表するだけでなく、専門知を有する審査員によるミニ講義の時間を設定した。
- ・審査のための審査基準を作成し、その基準に基づいて各分科会会場で審査を行った（未来創造探究賞）。また生徒投票による審査も同時に行った（共感賞）。
- ・分科会の結果、以下のグループが全体会出場となった。（全発表内容については巻末資料を参照）。

	氏名	ミニ講義 タイトル
I	田村 学 様	これからの社会に求められる資質・能力と探究
II	松岡 俊二 様	本当に大事なことと向き合うことは容易ではない：11年半を経た福島の原子力災害
A	丹波 史紀 様	原子力災害は何を地域にもたらしたか
B	高原 耕平 様	〈防災〉を哲学してみる
C	菅波 香織 様	対話が未来を作る～9年間の未来会議を通じて感じる無力感と希望～
D	牧内 昇平 様	メディアの原発問題報道
E	下枝 浩徳 様	祭復活からの葛尾村地域づくりについて～大丈夫、俺たちに未来はある～
F	小山 良太 様	震災11年以降の福島県農業と新しい産地・ブランド形成の可能性
G	江川 賢一 様	これからのスポーツ健康科学
H	明石 重周 様	地域スポーツ振興におけるJヴィレッジの役割について
I	猪狩 僚 様	福祉・行政・コミュニティと課題へのアプローチについて
J	佐藤 亜紀 様	地域コミュニティと向き合う

○環境事業でシビックプライドを作ろう

○Enjoy with the elderly

○もったいないバナナ

○大熊×いちご×私

○Future Quest

○子どもロコモ改善プロジェクト

○鉄たまごという地域の可能性

○わかものがたり



③ ミニ講義（専門知審査員による）

・本年度も昨年度同様に専門知審査員によるミニ講義をお願いした。特にこれから探究を進めていく低学年の生徒にとっては、専門家のお話を聞ける貴重な時間となった。昨年度は講義20分の内容であったが、今年度は講義の時間を30分とし、内容を充実させた。なお、ミニ講義のタイトルは以下のとおりである。

④ 全体会

・全体会では先述の高校生代表4プロジェクトと中学生代表3プロジェクト、中学校バドミントン部の特別発表の全8プロジェクトが発表した。表彰は以下の通りとなった。

「未来創造探究 最優秀発表賞」

・Let's cheer up ふたば!!

「未来創造探究 優秀発表賞」

・話せばわかる、話せば変わる～いわきを越えた学びを通して～

・子どもと若者の社会参画～未来のカタチ～

・海洋ゴミのことを次世代へ伝えたい

「未来創造探究 発表賞」

・誰一人取り残さない防災

・サステナブルな医療を！ by AED

・絵本を作って東日本大震災を伝承する

「共感賞」Let's cheer up ふたば!!

中学校「未来創造学 優秀発表賞」

・常磐線盛り上げ隊

・はるの花「桜」

・蛍復活



⑤ 総評（専門知審査員：佐藤理夫、菅波香織）

1) 佐藤理夫先生から

・探究活動ができる恵まれた環境を振り返って欲しい。他校にはない充実した設備、熱心に探究に向き合っている先生、なにより地域の方々の協力があることを再確認して欲しい。

・中学生の皆さんの発表のレベルが高い。これをさらに高校で伸ばして欲しい。高校生も中学生の目標にな

るように頑張ってください。

- ・テクニカルな話になりますが、5分間のプレゼンはきつかったと思う。人に伝えたいものをもっともっと厳選して欲しい。グループでの発表は考察がちょっと甘いかなと思うところもあった。
- ・探究と学習が乖離していませんか？理系は特に高校までの理科的知識を踏まえてください。また、理系に限らずデータ解析などを活用してください。「やりたいことをやってみた」となってしまうPJも見受けられました。学んだものをいかし、どう進めれるか…特に大学進学を考えている方は意識してください。
- ・これは「探究」ではなく「地域貢献体験記」ではないかと思われるものがありました。それはそれで大切なことですが、成長するためには「高校生がやった」というレッテルがついて満足してしまっってはいけない。20~30才にやった場合でも、そのプロジェクトが地域に活かされているか、考えたい。「高校生がやることだからまあいいか」となってしまうと甘くなる。探究はあくまで探究…。探究という言葉を再考してほしい。体験記録だけにとどまらない論文を期待しています。

2) 菅波香織さんから

- ・地域の課題と自分の関心を合わせて、自分事としてとらえているのが分かりました。みなさんのネットを使った情報活用も上手でした。
- ・現状の把握として、アンケートなどをやっていたと思いますが、発表で見えてこなかった。データがもう少しあればよかった。また、印象で語られる発表も多い。「ヒントを貰えました」「印象が変わりました」というコメントには何を得たのか、どんな風に変ったのか、具体的に欲しい。
- ・みなさんが探究を主体的に取り組んでいるのが伝わりました。2つ目とも関係しますが、みなさんの探究の対象となる地域の子供、高齢者も主体を持つ存在です。コロナで難しかったと思いますが、お一人お一人の心情や意思や尊重すべきことも考えつつ、皆さんのやりたいことを掛け合わせて共創していければ素敵だと思いました。
- ・私的にドキッとしたり、違和感を覚えたワードがありました。皆さんもそれを友人らと言葉にして、対話をして下さい。もやもやを一人の中で消してしまうのは勿体ないです。今日の探究のあとも、対話で未来を作ることを考えていただければと思います。



⑥ 教員と審査員の探究交流会

昨年初めて教員と審査員の探究講習会を実施して、外部審査員と担当教員との懇談会を、発表会終了後に設定した。生徒の発表を踏まえて、日頃の指導方法や連携の在り方等について忌憚のない意見をいただくことができた。今年度は「中学3年間の探究を高校でさらにどのように伸ばしていくか？」という問いを設定し、KPT (Keep, Problem, Try) 法を用いてグループディスカッションを行った。



【Keep (そのまま続けたいこと)】

- ・発表の丁寧な言語化
- ・専門知と出会える場を作る
- ・率直な個人の興味を反映した探究 (中学生)
- ・とがった才能をどんどん伸ばす

【Problem (問題点)】

- ・審査基準が文系の方が点数に反映されやすい (理系のプロジェクトを評価しにくい)
- ・理系をフォローできるゼミ編成
- ・高入生と一貫生のゼミの接続
- ・テーマと自分自身のつながりをもっと言葉にした方がよい
- ・課題からスタートにしないこと
- ・仮説と検証を行って、課題が変わってもいいはずなのに変わらない (「課題」という言葉を使わない方がいいのではないか)
- ・発表時間5分は短い

【Try (来年やってみたい)】

- ・最終発表会で地域の人とであるのではなく、常にオー

プンな関係を作る

・学年を超えた交流・コラボ

⑦ 結果および今後の展望

・今年度もコロナ感染症対策のため、予定していた活動ができなくなるケースがあった。昨年と異なっている点は、Zoomなどの新たなオンラインのツールを手に入れた点である。このツールを積極的に利用し、他県の高校生とオンライン交流会を行った探究やマイクラフトを利用した探究、分科会発表の様子をライブ配信で行う探究など新機軸を導入した探究なども見られた。

・この発表会は1期生から始めて今回が5回目であるが、会を重ねるごとに発表件数が増え、調査だけでなく課題解決のための実践を進める生徒の割合が増えており、質、量ともに高まっている傾向が見られる。一方で、現実的に地域の外に出て課題解決のアクションの総量は絶対的に少ない。また、海外研修がここ2年国内の代替研修に切り替わり一定の成果は出ているが、海外研修を通じて得られる世界の課題と地域の課題を繋げて考える視点が今回の探究で見られなかったことは次年度の課題ともいえる。

・外部参観者向けにZoomによる配信を行ったが、取組そのものに対しては好意的な意見が多かった。また遠方からの参加者も多く遠隔配信のメリットを活かすことができた。一方、映像や音声の質等、配信の技術的な点は課題が多かった。次年度以降は直接来場いただくようになることを願うばかりであるが、今回培った配信ノウハウは今後も生かしたい。

・3年生はこの後、論文作成や探究活動を仕上げる期間に入るが、それらの質を高めるための機会として、全体として今回の発表会は有効に機能したと思われる。また外部の方に本校の活動の様子を理解していただく場としても効果が大きかったと思われる。次年度以降も、定着した取組として実施していく。

2. 4 海外研修・国内研修

2. 4. 1 ドイツ研修

本校では、開校年度からドイツを訪れている。東日本大震災によって、地域課題の先進地ともいえる状況に陥った福島県・双葉郡が、どのような街づくりを行っていくべきかについて考え、帰国後の学びにつなげてきた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、2019年度のチーム(5期生)を最後に渡航見送りとしてきたが、今年度3年ぶりに現地渡航することができた。

1. 研修の概要

(1) 研修の目標・趣旨

本校における高校一年次ドイツ研修では、地方創生イノベーションスクールの一環として、Think Green をテーマとし、2030年に問題となる地域の課題と共通する世界的な課題についてアクションを提言するため、平成28年度にミュンヘンのErnst Mach Gymnasium校と交流を行った。それ以来、同校とはオンラインも含めた交流を毎年継続している。本校では未来創造探究として、原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりについて、それらを福島のための課題ではなく、全世界が共有すべき「持続可能な社会づくり」として探究している。ドイツの環境都市フライブルクを訪問することにより、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩としたい。

(2) 派遣期間 令和5年1月5日(木)から

1月14日(土) 8泊10日

(3) 訪問先 ドイツ フライブルク・ミュンヘン

(4) 参加メンバーと役職

役職	番号氏名
リーダー	1514 谷 聖彩
副リーダー	1503 猪狩 佑紀
副リーダー	1522 林 佳瑞
書記	1317 佐々木 大斗
書記	1327 山形 遥
スケジュール管理	1326 八木 香練
スケジュール管理	1504 伊藤 珠弓
アポイントメント	1508 木村 彩乃

引率団：

齋藤 夏菜子(英語科・企画研究開発部副主任)

塩田 陸(英語科・高校1学年担任・企画研究開発部)

(5) 研修内容

①フライブルク市訪問

ドイツにおける環境や再生可能エネルギー政策の利点や問題点を探り、日本の今後のエネルギーのあり方を考察する。

②ERNST MACH GYMNASIUM 校の生徒との交流

ホームステイをしながら現地の高校生と持続可能な社会を支えるためのエネルギー政策について学び、未来の社会を作る人材としてお互いに研鑽



する。また、現地の高校生との交流活動において、福島の現状を伝えることを通して、福島の安全・再生の歩みを正しく理解してもらう。

(6) 本プロジェクトにおけるふたば未来学園ルーブリック達成目標

B 英語活用力・E 他者との協働・F マネジメント力・I 能動的市民性の長期的支援での上昇。

(帰国直後のUカルチャーショックや、メタ認知が進むことによる一時的な下降。ドイツ研修と探究活動の接続を実感した後、緩やかに上昇することを想定。)

2. プロジェクト開始当初の課題感

(1) 研修時間の確保

今年度の新カリキュラムから、アカデミック系列が毎日7時間の時間割となった。他の系列は従



来通りのカリキュラムであるため、集合研修の時間の捻出をすることや、学校内外の授業外の活動との折り合いをつけることはこれまで以上に困難を極めることになる。また、引率教員が2名体制となり、校内の他の業務により毎回の事前研修に参加できないことが多くなることが想定された。

(2) 探究活動との接続

今年度のカリキュラムより、地域創造と人間生

活を前期週 2 時間+夏季休業登校日で 2 単位履修し、後期に総合的な探究の時間を週 2 時間で 1 単位履修することとなった。実質半年程度の探究活動の前倒しにより、本研修は「生徒の中に探究的な学びに向かうレディネスを醸成する良質なインプットと交流のための海外研修」から、従来の本校 NY 研修が担ってきた、「探究活動の学びの深化と発信・議論の成果の還元」を部分的に担うことになった。事前・事後研修の中で、探究活動との自然な接続が望まれる。

(3) 諸活動との概念的接続

授業時数増による放課後活動の時間的制約により、校外で多様な活動や事前・事後研修での生徒の学びが単発的になることが予想された。諸活動や教科での学びどうしをつなげ、学びの連鎖をファシリテートしていく必要があった。

(4) 参加生徒の系列を超えた学び

上記に加え、参加研修生の系列がアカデミック系列かつ一貫生のチームとなったことにより、参加研修生の議論から多面的・多角的な考察の欠陥に気づかせる場面が必要となった。

3. 研修実施体制

本研修の事前研修は全員での集合研修を原則とした。渡航生どうしで都合を調整し合い、リーダーを中心に常に最大数が参加できる研修を心掛けた。実際に集合する場合は、対面で最大限の効果が発揮される哲学対話などの方法を使って議論をした。事務的な連絡やデータの作成は参加メンバー合意の上で分担をし、オンラインで効率よく済ませるようになった。

(1) 哲学対話

渡航生徒は併設中学からの一貫生であり、中学校時代に行った哲学対話の文化が根付いている。哲学対話とは対話の参加者が輪になって問いを出し合い、一緒に考えを深めていくという対話のあり方である。渡航メンバーは、事前研修の中でこの対話を自然と行うことができていた。

ドイツ研修のメンバー初顔合わせでは、探究活動同様にそれぞれ自分なりの「問い」を考えて研修に臨んでほしいということを伝えている。ドイツ人作家のエーリッヒ・ケストナーの『動物会議』を読み、その内容をもとに 2 度の哲学対話を行った。1 度目は本校にて、10 月 14 日（金）に実施し、神戸 和佳子氏が来校し、対話に参加した。2 度目は 10 月 28 日（金）東京立川の複合文化施設 Play! 内の「どうぶつかいぎ展」で、高橋 源一郎氏・神戸 和佳子氏と哲学対話を行った。

(2) 教科教員による特別授業

12 月 26 日には、地歴科の教員によるドイツの歴史と文化の特別授業を行なった。これは、参加生徒が読んだ書籍などを元にチーム内で問いを吟味

し、担当者とのアポイントも含めて実現したものである。

(3) Canva と Zoom の活用

英語科の担当者が事前に教育者用のアカウントをとって授業で活用していたが、本研修の参加生徒も Canva に招待した。EMG のホームステイの受け入れ家庭の学生に向けて、自己紹介のビジュアル資料を作成して交換した。互いの情報を見ながら、Zoom を通じてオンラインで事前交流を行い、実際のホームステイに備えた。これは、コロナ禍で渡航を断念しながらも、オンラインホームステイなどを通して交流を繋いできてくれた上級生のおかげだと言える。（海外研修で訪問した学校では、あらゆるアプリケーションを用いたリモート授業のノウハウが授業に生かされており、生徒が便利な技術を駆使してやりとりをしていた。Google のアプリセットも含め、事前研修で精通していたと感じることが多くあった。）



(4) 英会話・ドイツ語会話(校外人材)

①過年度 AFS 留学生との会話

本校では、過去 5 年間、AFS アジアプロジェクトを通じて、アジアの若者たちを受け入れ、学校生活を送るプログラムを実施してきた。本校での生活を送った後は、海外の大学に進学する学生が多く、1 期生として本校で約半年交流したマレーシアの学生がドイツに留学している。ドイツでの生活のコツなどについて Zoom でインタビューを行なった。

②旧職員によるドイツ語会話

本校には、過年度、ドイツ語に詳しい教員が在籍していた。冬季休業期間を使って、ドイツの生活に最低限必要な会話表現のインプットを行った。

③ALT による英語会話

本校の ALT による英会話教室も行った。自分たちで入国審査の場面などを想定し、ALT によるスキット練習などを行った。

(5) 文化交流

EMG との打ち合わせの中で、茶道や日本料理をふるまう計画を立てた。そこで、生徒たちは国語科の教員に依頼をし、お茶のたて方を学んだ。また、他国の若い生徒も飲みやすい飲み方についても考えてもらい、ALT にふるまった。

(6) Facebook

海外研修や探究活動に関する親和性の高い Facebook を活用した。用途の例として、研修日程の共有、研修内容や写真・動画の共有、Facebook messenger が挙げられる。生徒チームが自走していく上では使い勝手が良く、教員の目が届くところで校内外の関係者との情報共有がしやすい。



4. 研修の成果

(1) 対話文化の根付き

中学段階で哲学対話を行ってきた参加生たちは、研修開始当初から、議論の際に自然と円を作って対話を行ってきた。参加生徒選抜の前からドイツに関する文献を読み、目的を持って研修に応募してきた生徒もいるが、チームでの議論や、さらなる文献購読により、より真理に迫る対話を実践することができた。現地渡航がかない、なぜそのような対話が必要であるのかについてさらに肌で感じて帰国した。

帰国後は、地域に、哲学すること・対話することをもたらす探究的な問いを立てた生徒が多かった。

(2) Open-minded な姿勢と能動的市民性・アクションの創発

帰国後、目の前にある物事が自らの探究活動や進路活動につながるか否かがわからなくても、積極的に学校内外に活動の範囲を広げ、挑戦をする姿勢が見られた。例えば、他地域のツアーに参加申し込みをする生徒や、地域住民に直面・オンラインで積極的にインタビューを行う生徒が出始めた。特に象徴的であったのは、本研修参加者の中から生徒会活動の中で提案をし、中高全生徒を巻き込んだウクライナ支援のための講演会とメッセージの作成を実現できたことである。このことは、

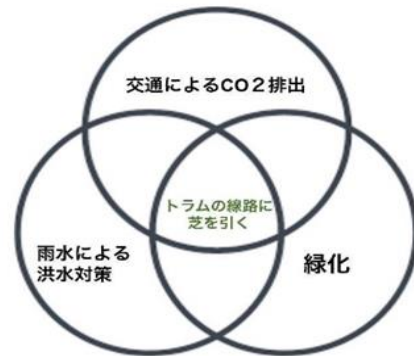
テレビでも報道され、後日、本校運営指導委員で OECD 教育スキル局シニア政策アナリストの田熊 美保氏からも称賛の声をいただいている。

例えば、他地域のツアーに参加申し込みをする生徒や、地域住民に直面・オンラインで積極的にインタビューを行う生徒が出始めた。特に象徴的であったのは、本研修参加者の中から生徒会活動の中で提案をし、中高全生徒を巻き込んだウクライナ支援のための講演会とメッセージの作成を実現できたことである。このことは、テレビでも報道され、後日、本校運営指導委員で OECD 教育スキル局シニア政策アナリストの田熊 美保氏からも称賛の声をいただいている。



(3) 複眼的思考の定着と発散収束の螺旋的思考

生徒は帰国後に事後研修として、レポート作成を行った。報告会などの発表は日程を調整中ではあるが、作成の進んだレポートの内容からは、一つの問題につき、単一目線からの解決方法ではなく、問題をあらゆる学問分野から学際的に策を考えることができるようになってきている。複数の問題を一度に解決するモデルを作り、双葉郡から実践を始めていこうと考える生徒も出始めている。(下図)



(4) ルーブリックの生徒記述より

今後 B 英語活用力・E 他者との協働・F マネジメント力・I 能動的市民性の上昇は十分に見込まれるが、生徒ルーブリック記述とでは、以下のようなものがあつた。(原文ママ)

B 英語活用力

・ドイツの子や先生とは、移動時間やステイ中に原稿が無い会話も出来たが本当の英語圏だとそうはいかないと思っている部分がある。

・ドイツ研修でドイツの高校生と交流をする時に、福島のことや私たちの学校のことなどについて準備した英語で発表し、その後簡単な質疑応答をしたり感想を話して貰ったりした。お茶会の時やホームステイの時にも相手に気になることを質問したり、逆に質問に答えることが出来た。

E 他者との協働

・ドイツ研修メンバーのチームワークは良いものだった。一言で「良かった」とまとめてしまうのは恐れ多いが。もちろん弱音を吐く時もあったし情報伝達が噛み合わない時もあったけど最後見えた景色はチームワークあってこそかなと。

・私は部活動に所属しておらず、放課後の時間は空いているため、プレゼン作成を自分のペースで進めることができた。だが部活動に所属しているメンバーは放課後自分で使うことのできる時間が限られているため、作成を計画的に行うことが難しい仲間もいた。昼休みや部活動のない放課後の時間を利用し役割を分担してパワポ、原稿の作成を進めてきた。またホームステイ期間はホストファミリーの家事の手伝いを行った。各家庭にそれぞれの生活スタイルがあるがそれを海外で経験したことにより異文化交流を通して他者理解にもつながることができたと思う。

F マネジメント力

・ドイツ研メンバー全体でなら適切な役割分担なども出来ていたが、個人としては計画立てるのもマルチタスクも苦手なのでまだ5段階評価の2。

・指示をもらわないで行動するのはまだこわいと思う。

・レベル4に上がるためには「作業を適切に役割分担する」能力を身に着けるべきだと感じている。今回の研修では一人一人のスケジュールがある中で事前研修等を組み立てていたためどうしても偏りが出てしまった。

I 能動的市民性

・ドイツ研修の目的に他者還元があり、私も大切にしている。変革者の一歩として報告会で学校の人たちに良い影響を与えたい。

・研修参加前までは社会問題を他人事として捉えていたわけではないが、自分自身にできることを考えたりその問題に対して自分の考えを持ったりすることは、なんとなくでしかできなかった。

「動物会議」の哲学対話を通して、日常にある問題を深めて考えることを始めとし、現地へ行き様々な問題に触れていく中で、日本に置き換えて考えてみた。ドイツの学際的な考え方を浸透させるべきだと思い今の探究内容に至っている。ドイツの課題解決をする際の根本的な考え方を学べたことは、自分の価値観を見直すきっかけとなった

とともに、社会問題や身近なことに当てはめて考えてみると視野を広めることができると思った。学際的な考え方をを行うことは「社会の主体としての意識を持ち、社会がより良くなるための考えを持つことができる」に繋がると感じた。



2. 4. 2 ニューヨーク研修

本校が SGH 指定校であった期間から続く本事業は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止や代替を余儀なくされていた。SGH 指定最終年度となった 2019 年度(本校 4 期生)およびグローバル型初年度の 2020 年度(本校 5 期生)、そして昨年度(本校 6 期生)も渡航を断念してきた。このような状況のため 3 年に渡って国内での代替研修を実施してきていたが、今年度(本校 7 期生)は 3 期生以来 4 年ぶりにニューヨーク現地への渡航が可能になった。

(1) チームビルディング

本研修は、教員主体の語学研修や、探究活動の広報活動とは異なる。地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。

本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたという意志を持った 8 名の生徒たちが選抜される。(これまでは最大 12 名の生徒を選抜していたが、今年度は渡航に関わる旅費が例年と比較しても非常に高くなっており、人数減に至った。) 原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきかから生徒たちは議論を重ねる。研修前後には積極的に地域と学校に学びの成果を還元する。

参加者 8 名を選抜する際には、以上の観点を踏まえた内容および自分の探究と地域・世界とのつながりについての志望理由書を重要視し選抜した。

これまでと大きく異なる点として、3 年間渡航を断念してきた生徒たちの思いを受け継ぎ、強い使命感を持って研修に臨む必要があるということ全員を確認した。

(2) 事前研修①(伝承館研修、語り部交流会)

期日：令和 4 年 12 月 21 日(水)

令和 5 年 1 月 23 日(月)

令和 4 年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の一環として、NY 研修参加生徒 7 名で東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れ、当時の被害状況への理解を深め、福島の実況の課題について把握した。

上記イベントに参加できなかった生徒 1 名について、後日伝承館で行われた令和 4 年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部交流会」にオンライン参加し、プレゼンテーションを用いて自身の被災体験と現在の学校生活について発表を実施するとともに、県内高校生の被災体験や取り組みについての発表を聞いた。

これらの事前研修は後述する事前研修②(会津大学留学生との交流)に向けた準備と NY 現地で発表するプレゼンテーション作成において効果的であった。

(3) 事前研修②(会津大学留学生との交流)

期日：令和 5 年 2 月 20 日(月)

会津大学主催のプログラム「2022 年度東日本大震災・原子力災害伝承館と福島ロボットテストフィールド等視察」へ参加した。同プログラムでは上記 2 つの施設に加えて請戸小学校を訪れ、福島が抱えてきた課題と復興への取り組みを客観的にとらえ、今後革新的な未来のために何ができるかを実感することを目的としている。

会津大学からは 13 名の留学生を含む 21 名が参加し、本校 NY 研修生徒 8 名、留学生 2 名と合わせて計 31 名がグループに分かれて研修を行った。

英語を用いたコミュニケーションのみならず、外国人から見た福島の影響や、専門分野を学ぶ大学生ならではの思考から未来の可能性について共に探る良い機会となった。



(4) 事前研修③(その他)

期日を問わず、以下の内容を事前研修として実施した。

- ・英語コミュニケーションのトレーニング
- ・課題図書『This Very Tree』(Sean Rubin 著)
- ・課題図書『災害ユートピア』(Rebecca Solnit 著)
- ・課題図書 教育関連書籍を各自 1 冊選択
- ・社会科教員による 9.11、アメリカ史講義
- ・映画『1/10 Fukushima をきいてみる 2022』鑑賞会&交流会参加
- ・小玉直也氏(NPO 法人アースウォーカーズ)との懇談
- ・NHK Special 混迷の世紀 第 9 回「ドキュメント国連安保理〜密着・もうひとつの「戦場」〜」視聴と哲学対話
- ・UNIS-UN 2023 Conference Debate 練習

上記に加えて、NY 現地でのプレゼンテーションに向けたスピーチ作成、スライド作成、プレゼンテーション練習、UNIS-UN Cultural Showcase で披露するダンスの練習等を実施した。

(5) ニューヨーク現地での研修

期日：令和5年3月10日（金）～18日（土）

活動内容：

① 国際機関関係者との意見交換

国連日本政府代表部による「国連とSDGs」に関する講義を聞き、福島の人たちが持続可能な世界の実現に向けて何をすべきなのかを考える。また、各国の国連関係者に福島復興に向けた自身の実践について発表を行い、持続可能な世界の実現について意見交換を行う。

② UNIS-UNでの各国同世代との交流

国連職員の子弟等が通学するUNIS（国連国際学校）が主催し、各国の高校生が参加する生徒国際会議UNIS-UN（会場：国連総会会議場）に参加し、各国の同世代とグローバルな課題について議論を行い、交流する。（2023テーマ：Turning the Page: A New Chapter in Education）

③ 現地NPOと連携した同世代生徒意見交換

現地のNPOと連携し、NYの多様性を包含するコミュニティ形成について学ぶとともに、市内在住の同世代に福島復興に向けた自身の実践について発表し、グローバルな課題について意見交換を行い、交流する。

④ 現地行政職員との意見交換

NY市の職員に向けた自身の実践について発表し、福島と世界の課題解決について意見交換を行う。

⑤ シティズンシップに関するフィールドワーク

The Apollo Theater や Schomburg Center for Research in Black Culture で、NYにおける黒人文化の歴史と、その記憶の伝承等について学ぶ。また、9.11 Memorial Museum の視察と意見交換を行う。

⑥ 生徒たちの計画による自由研修

多様性と能動的市民性が息づくニューヨークの文化を体感する。また、異国の地で行き先や移動手段も自分たち自身で計画し行動する経験を積む。

プレゼンテーション発表内容：

『Paying it forward
from Fukushima』



2011年3月の東日本大震災・原子力災害発生時の自分たちの体験とふたば未来学園入学後に学んだことを踏まえて、次世代への「恩送り」として地域社会あるいは世界に向けて活動していることを紹介し、福島の現状の課題を解決に導くための対話の場（Open Dialogue）の必要性を訴える内容である。 ※Canva でスライド作成

3月10日（金）

3/10（金）10:05 発の飛行機に乗り、12時間かけてニューヨークへ向かい、午前9:00にニューヨークに到着。生徒の中には海外渡航経験がある者とそうでない者がいたが、ニューヨークは全員初めて訪れた。

初日は、NY市役所の Chisato Shimada 氏、同僚の Christopher Haight 氏、Naiyiri Booker 氏をホテルの一室に招き、用意したプレゼンテーションを見ていただき、対話の時間を設けた。

Christopher 氏と Naiyiri 氏はNY市役所公園局の水に関わる（川、池、海、湿地等）研究者の方々である。プレゼンテーション内で言及した福島の原発処理水の問題を中心に、生徒の探究活動のヒントになるようなアドバイスを多数いただいた。



午前0:00（日本時間3/11（土）14:00）、ふたば未来学園では震災追悼式が執り行われており、生徒たちはzoomをつないで式へ参加し、黙祷を捧げた。

3月11日（土）

2日目は黒人文化の原風景が残るハーレムでの研修である。国連ユース代表でNPOを運営されている Jadayah 氏と合流し、まずは The Apollo Theater を見学した。Mr. Apollo こと Billy Mitchell 氏が見学ガイドを務め、The Apollo Theater の歴史や自身の生い立ち、The Apollo Theater という施設は何なのか、ハーレムはどういう街なのかについてお話をいただいた。

The Apollo Theater のステージは Stevie Wonder や Michael Jackson (The Jackson 5) など名立たるパフォーマーたちがパフォーマンスをしてきた長い歴史がある。Mr. Apollo によって一部の見学参加者がステージに立ってパフォーマンスをすることを求められたため、後日参加予定の UNIS-UN の Cultural Showcase のために練習してきたダンスを生徒全員で披露するという貴重な体験をすることができた。



その後はモスクの外観を一目見てから、African Market の散策を実施。セネガル出身の方が開いた店内に案内していただき、Africa in Harlem という取り組み・考え方や、黒人やアフリカに住む人々に対する偏見についての話を聞く機会に恵まれた。

午後は黒人文化の歴史のアーカイブが残る Schomburg Center の見学と、ハーレムの学生たちとの交流を実施した。アイスブレイクのゲームで親睦を深め、生徒が準備したプレゼンテーションを発表した。ハーレムの学生たちは最初は福島のことをほとんど知らなかったが、発表を通して、福島が直面している風評被害や処理水の問題と、黒人差別の歴史やミシガン州フリントの水汚染公害問題を重ねて、共感しながら真剣に聞いてくれた。発表後にも多数のコメントをいただいた。

ホテルに戻ってひと段落した後、プレゼン発表と The Apollo Theater でのパフォーマンスを動画で見て振り返りを実施した。

3月12日(日)

3日目は初めて自分たちで地下鉄を使って移動することとなったが、逆方向の列車に乗ってしまった。全員で協力しながら丁寧に確認すること、誰かに任せっきりにしないこと、分からなかったらとにかく誰かに聞くことの大切さを学んだ。

到着後、9.11 家族会の Meriam 氏と1日目もお世話になった Chisato Shimada 氏の案内で World Trade Center 周辺の散策を行った。Meriam 氏は写真を見せて当時を振り返りながら、9.11 の出来事について丁寧に説明して下さった。

9.11 の事故から蘇った World Trade Center 一帯とニューヨークシティ全体の復興のシンボル“Survivor Tree”のもとを訪れることができた。この木については事前研修で絵本“*This Very Tree*”を全員が読んでおり、実物を目の当たりにして感動の声が漏れた。また、Saint Nicholas Greek Orthodox Church & National Shrine を訪れ、礼拝堂のモザイク画を鑑賞したり、追悼のロウソクをお供えしたりした。



9/11 Memorial Museum の視察では、事前研修で複数回訪れた東日本大震災・原子力災害伝承館と同じ役割を有する施設の見学を通し、歴史を後世へ伝え残すこと、それを学ぶことの大切さを改めて感じる事ができた。

いったん解散し、3 班に分かれて自主研修を行った。各班がそれぞれ自分たちで行先を決め、時間通りに目的地へたどり着けるように行動した。ニューヨークの観光名所を訪れたり、現地の人々とコミュニケーションを取ったりする体験を通して、海外での生活を肌で感じる事ができた。

集合後は、本校の NY 研修で縁のあるロバート柳澤氏のご自宅を訪問した。Meriam 氏を始めとする 9.11 家族会の方々にも集まっていたいただき、生徒によるプレゼンを実施した。家族会の方々には真摯に生徒のプレゼンを聞き、多数の質問とコメントをして下さった。用意していただいたご馳走をいただく中で、日本に留学予定の学生とコミュニケーションを取ろうとする生徒の姿も見られた。

ホテルに戻って反省会を行った。生徒たちは「対話の大切さ」をプレゼン発表しているが、これまでの3日間で経験した言いたいことがあっても英語で答えられないもどかしさや、周りの様子を窺って自分から一步を踏み出せなかったこと、聞かれていることが分からなくなってしまったこと等を振り返り、自分たちがこの研修を通してどう変わりたいか、明日からの取り組み方や姿勢について考え直した。振り返ると、この日の反省会が後の研修内容に大きく良い影響を与えたと思われる。

3月13日(月)

4日目、昨晚の反省を踏まえて朝早くに集まり、学んだ内容の共有と、本日から始まる UNIS プログラムの内容の予習をした。

午前中は国際連合日本政府代表部を訪問し、志野光子大使、大嶋勝公使のお二方にご挨拶をさせていただいた。生徒は事前研修として視聴した NHK スペシャル 混迷の世紀 第9回 「ドキュメント国連安保理～密着・もうひとつの“戦場”～」の感想と、それを踏まえた対話の内容、自分たちの考えと NY Project の取り組みについて報告した。志野大使と大嶋公使からは激励の言葉をいただき、その後生徒の探究活動に関する質問を基に対話を行った。

続いて児玉啓佑参事官にご挨拶し、国連やSDGs、児玉参事官自身の取り組み等についてのブリーフィングに参加した。プレゼンテーション披露では「想像以上に素晴らしいものでした」と感想をいただき、プレゼンをより良くするためのアドバイスや処理水問題への言及、また生徒からの質問に対して、探究活動への助言やチームプロジェクトにおいて大切にすべきことなどを教えていただいた。

午後はUNIS (United Nations International School) のプログラムに参加した。Cultural Showcase には各国の高校生が参加し、自国の文化を紹介するパフォーマンスを披露した。本校生徒も事前に申し込みをしており、何度も練習したダンスで会場を盛り上げることができた。生徒は国籍が異なる相手とでも感動を共有できる楽しさや達成感を感じたようだ。



その後は生徒の希望に応じて2つの Workshop へ参加し、周りの外国人生徒とコミュニケーションを取ったり、協働して作品を作り上げたりした。一回目の Workshop で上手くいかなかったことを踏まえて、二回目では勇気を出してアクションを起こすことができたという生徒の話も聞かれ、大きく成長を感じる一日となった。

3月14日 (火)

5日目は国連国際学校 UNIS (United Nations International School) が主催する生徒国際会議 UNIS-UN へ参加した。世界中の学生が国連本部の General Assembly Hall (総会議場) に集い、講話を聞いたり Debate をしたりするプログラムである。本校はGERMANYとGHANAの席に割り当てられた。

【Day1 Keynote Speaker (講演者) と概要】

- Mr. Christopher de Bono, Deputy Director responsible for Communications, UNICEF 気候変動によって教育の機会を奪われる子どもたち
- Sheikh Manssour bin Mussallam, Secretary-General, Organization of Educational 教育で何を学ぶべきか
- Dr. Lauren Rumble, Associate Director Gender Equality for UNICEF 教育のジェンダー平等、女性の教育機会均等について

生徒は英語で長い講話や議論を聞き取ることに苦労していたが、分からない単語をリストアップしたり、スマートフォンの音声入力機能を駆使して文字起こししたりしながら、必死に食らいつく姿が見られた。

Day1 の Debate Motion は "Incorporating AI into education will have positive or negative effects" であった。事前に選ばれた学生が議論するのを聞き、最終的に投票を行う。事前研修でALTの協力の下、立場を決めて理由や根拠を考えてきたこともあり、いくつかの例や単語について聞き取って自分なりに考えることができたようだ。Day1 プログラム終了後は国連本部ツアーに参加し、安保理の会場等、国連本部の内部を見ることができた。



ホテルに戻り、明日の Day2 にどう臨むかを全員で考えた。学んだ内容を記録していくことよりも、リアルタイムで言われていることを理解・共有してみんなで考えていくということを目指し、誰が何を担当するか、どのような配置で着席するかを決め、よく耳にした表現や単語の意味を確認した。

3月15日 (水)

14日に引き続き、UNIS-UN Day2 へ参加した。

【Day2 Keynote Speaker (講演者) と概要】

- Dr. Roser Salavert, Co-Founder and Director of the NYS/NYC Professional Development 「他人の靴を履く」思いやりのある教育システム
 - Soraya Fouladi, Founder and CEO of Jara e-ラーニングの普及、The Jara Unit の紹介
- ※上記に加え、Student Moderated Panel Discussion

反省を生かして席の配置を変え、各自が必死に自分の役割を果たそうとしている姿が見られた。同じテーブルに座った羽黒高校の生徒と先生も巻き込んで、考えを深めるために一緒に対話をした。これまでの準備や事前研修で学んだ単語・表現、毎晩反省を重ねて新たに増えた語彙のおかげで、生徒からも「今こういう話してたよね」など話の内容を確認しようとする声が聞こえてきた。

Day2のDebate Motionは“Education should be private rather than public.”であった。結果的に指名されることはなかったが、本校ならではの視点から様々な要素について考え、質問を準備して挙手することができた。3期生ぶりのUNIS-UNの現地参加はハードルの高いものだったが、生徒は色々な新しい経験をしたり、教育の世界的な問題について自分事として考えたりする機会を得ることができた。

夜は2日目に一度訪れた The Apollo Theater で Amateur Night というライブイベントを鑑賞した。子供から大人まで幅広い年代の挑戦者が性別・人種も関係なく自らの才能を発揮するためにステージに立ち、歓声やブーイングを浴びるという、アメリカ・ニューヨークの大衆文化を肌で感じる良い経験となった。



ホテルに戻った後は、プレゼンテーションの最終発表に向けて、児玉参事官のアドバイスを参考にプレゼン発表の原稿とスライドを調整した。生徒は眠気に抗いながら声を掛け合い、助け合いながら最終調整に取り組んだ。

3月16日(木)

最終日となる7日目は、国連本部 Civil Society Unit のHawa氏や、UN Youth Representativesの皆様に、福島島の課題と世界の課題を重ね合わせつつ、持続可能で平和な世界の実現に向けた提言を盛り込んだプレゼンテーションを行った。発表を終えてスタンディングオベーションをいただき、生徒からは泣きそうになったという感想を聞くことができた。

国連関係者の方々は、プレゼンを通してふたば未来生の取り組みや福島・日本の現状をよく理解できたと仰っていた。また、発表内容について、対話・交流の場を開くことの大切さ、そしてそこから生まれてくる新たな分断に立ち向かうための助言をくださった。生徒たちのこれからの取り組みに期待し励ましてくれる声かけの数々に、生徒たちは安堵しながらも身の引き締まるような思いだったと思われる。



現地での研修プログラムを一通り終えて、生徒からは「色々な経験と失敗ができて良かった」「周りのメンバーを尊敬できた」「人生が変わった」という感想が聞かれた。帰国後は、学んだことを報告・共有・実践していく使命を果たすことになる。ひとまず4年ぶりのニューヨーク現地での研修は成功に終わったと言えるだろう。



※3月17日(金)、3月18日(土)は移動日

(6) 成果と課題

チームビルディング

メンバー選抜において、自分の探究と地域・世界とのつながりについて志望理由書に書く必要があったことで、全員が探究活動の内容を深く振り返ることにつながり、それぞれの取り組みを深化させようという意識づけをすることができた。また、顔合わせの際に、3年間渡航を断念してきた生徒たちの思いを受け継ぎ、強い使命感を持って研修に臨む必要があるという話をしたことで、メンバーに責任感が生まれた。ドイツ研修に参加した者とそうでない者、海外渡航や国際交流経験の豊富な者とそうでない者等、多様なメンバーを選出したことで生徒間での学び合いが活発に生まれた。結果的に8人という少人数編成になったことでチームの結束力が高まりやすく、仕事をスムーズに分担することができた。しかし、学校や地域への学びの還元、学び合いの効果の最大化を考えると人数を確保することも考慮すべきである。

事前研修

事前研修は現地での活動を有意義なものにするべく、大きく分けて、①プレゼンテーション作成のために福島・世界のことを知る、②ディベート等を含めた英語によるコミュニケーション・思考の強化という2つの軸で行われた。講義やフィールドワーク、多くの対話の機会

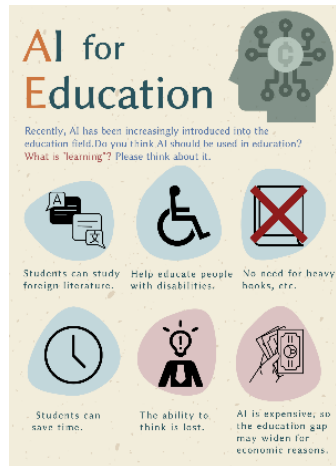
を通して、グローバルな視野を持つこと、世界の諸問題についての基本的な知識を身に着け、関心を持てるようになるという目的は達成することができた。

また、各自の英語トレーニング以外は基本的にチームで協働して取り組むことで、チームプロジェクトの進め方を学び、実践するという経験が得られた。これまでの研修等では実現できなかったレベルでの「チームでの協働」ができたということは生徒全員の総意のようである。チーム間での連絡共有に Facebook グループを使用したこと、プレゼン等の作成に Google Document や Canva を使用したことで、アーカイブとしての機能を有しつつ同時作業で効率的にプロジェクトを進めることができたこと、関係教員からのフィードバックが容易であったことも1つの大きな成果である。

また、事前研修の内容に加えて、UNIS-UN 2023 のトピックであった教育の問題に関連するポスターを作成する課題・授業を行ったことは、研修に参加していない生徒も巻き込んで思考を深めながら、研修生徒の学びを他生徒へ還元する役割も果たしていたと言える。

課題として、旅行費用や日程の調整に時間がかかったことが大きく影響しているが、準備時間に余裕がなく、書籍を読み込んで内容を深掘りすることまではできなかった。また、英語力改善のためのトレーニングは自主性に任せる形になり、十分に実施できなかった点にも課題が残る。

生徒が作成したポスター



ニューヨーク現地での研修

全体を通して、英語でのコミュニケーション（特にリスニング）で困難を感じる機会は多く、生徒は英語学習に対する強い動機付けを得ることとなった。また、普段の授業においても、ただ原稿を読むようなものではなく、ディベート等で必要とされる即興性と論理的思考力に英語活用力を組み合わせさせたトレーニング等、より実践的な英語力を醸成する内容を考案していく必要性が感じられた。一方で、教科書で学ぶ基本的な英文こそがコミュニケーションの核となるということも併せて意識づけできると良いと感じた。しかし、生徒が研修の中で積極的に相手に話しかけたり言葉を発しようとしたりする姿が見られるようになったことは大きな成果である。

研修終了後に取得したルーブリックの自己評価からは、生徒が NY 研修を通して自身を大きく成長させることができたと感じていることがよく分かる。下記の資料は NY 研修に参加した 8 名の生徒のみを対象とした、1 年次以降から取得しているルーブリックの自己評価の平均の推移である。NY 研修後の振り返りでは、すべての項目が大きく数値を伸ばしており、生徒自身も最も伸びたと感じる能力として特に B(+1.25)、E(+1.25)、G(+1.50)、J(+1.13)を挙げている。研修を通して得られたモチベーションを高く維持して、今後の事後研修や学校・地域への学びの還元をしていきたい。

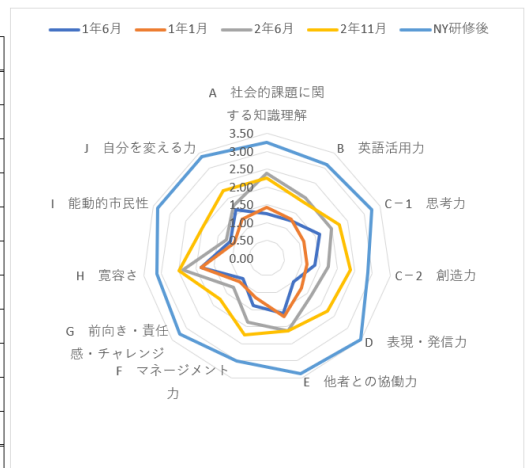
【生徒のルーブリック反省・感想】（一部抜粋）

- ・「研修の中でメンバーの良いところをたくさん見つけられたし協力できた。」
- ・「最初は何を言っているのかわからなくて会話も避けていたけど、後半になるにつれて聞き取れるようになっていった。」
- ・「プレゼン中、聴衆が良い反応をしてくれた事がとても嬉しかったため、これは自分もできるようにしたいと思い、メンバーと一緒に挑戦していた。」
- ・「ニューヨークの人にとっては相手の時間を無駄にしないことが礼儀（日本人の謙虚な性格は時間が無駄になる）と学び、テキパキと接するようになった。」
- ・「自分がやっている探究が、世界で起きている問題と共通点があることに改めて気づかされ、本当に全部他人事じゃないんだと思った。」
- ・（後輩へ）「心から頑張ってたよ良かったと思う。迷ってる人は絶対挑戦してほしい。」

【資料】ルーブリックの平均値の推移

7期生 ルーブリック評価の推移（2021年6月～2022年11月、NY研修）

	1年6月	1年1月	2年6月	2年11月	NY研修後	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.25	1.43	2.38	2.25	3.25	
B 英語活用力	1.25	1.29	2.00	1.88	3.13	
C-1 思考力	1.63	1.14	2.00	2.25	3.25	
C-2 創造力	1.38	1.14	1.75	2.38	2.88	
D 表現・発信力	1.00	1.29	1.63	2.25	3.50	
E 他者との協働力	1.63	1.71	2.13	2.13	3.38	
F マネジメント力	1.38	1.14	1.88	2.25	3.00	
G 前向き・責任感・チャレンジ	0.88	1.00	1.25	1.75	3.25	
H 寛容さ	1.88	1.86	2.38	2.50	3.13	
I 能動的市民性	1.13	1.00	1.25	2.00	3.38	
J 自分を変える力	1.63	1.29	1.75	2.25	3.38	
平均	1.36	1.30	1.85	2.17	3.23	



※本校ルーブリックについての詳細は「4 実施の効果とその評価」参照。

2. 4. 3 広島研修

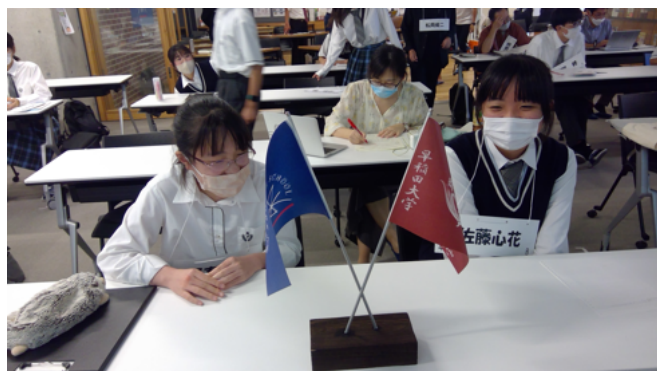
福島の復興を目指し学ぶ私たちは、原爆被爆から復興し、核無き世界を目指して世界に発信をし続け、歴史的使命を果たしてきた広島の在り方から、多くのことを学ばなくてはならない。未来創造探究をより深化させ、未来を切り開く一歩とすることを旨とし、広島県立広島国泰寺高等学校と連携して下記の通り広島研修を実施した。

(1) 日程・参加生徒

10月28日から30日の二泊三日で行った。例年は二年次10数人を対象とした研修であるが、本年度は一・二年次25名が参加する大規模なものとなった。内訳は一年次20名・二年次5名、男女比は男子4名・女子21名であった。

(2) 事前学習

事前学習として本校と協定を結んだ早稲田大学との協働で開催した1F地域塾に生徒は参加した。1Fとはイチエフと読み、福島第一原子力発電所の通称である。戦災からの復興を果たした広島に学びに行く前に、福島県・浜通りが抱える原発事故および廃炉事業が抱える問題と未来について考察することを目的とし、第0期全4回に参加した。



地域塾は本校を会場とし、地域の方や大学生、専門家や事業者（東京電力）が参加した。全体会で基調講話を聴いたのちグループに分かれて意見を出し合い、最後に分科会で出された意見を共有する流れになっており、9月17日の第三回1F地域塾では、実際に第一原子力発電所の見学も行った。

(3) 実施内容（10月28～30日）

初日は広島の国泰寺高校へ赴き2年生と授業に混ぜてもらい新エネルギーについてディスカッションを行った。その後ホテルに荷物を置いたのち平和記念資料館へ。たっぷり2時間弱見て回ることができた。

二日目の午前中は国泰寺高校有志とディスカッションをした。全体テーマを「ヒロシマとフクシマの高校生でいること～復興・継承・未来について～」とし、広島

生徒に「福島のイメージ、小中のころの平和教育、ヒロシマの高校生だと意識する体験」本校生から「広島イメージ、平和資料館の感想」を出し合い、フリーディスカッションでは「そもそも何のために後世に伝えていくのだろうか?」「最後の話者」がいなくなる広島の伝承」「自分たちの世代がフクシマを伝える「最後の話者」であること」について話した。



「広島で福島で生まれたからってそういうのを期待されるのも重い」という意見や「伝承する意味ってあるの」という意見も出た。教員からは「人間の愚かさを舐めないほうがいい（だから伝えていかなければ）」とコメントがあった。

13時から梶本淑子さんによる被爆体験講話。メッセージ性の強い重みのあるお話で、終了後も生徒からは質問が挙がった。次いでボランティアガイドのさんに平和祈念公園と市内南東の陸軍被服支廠跡のガイドを受けた。午前中に「別に伝承しなくとも」と出たところで、被爆者の方から「伝えていくべき!」と訴えられ、最後の被服支廠では「残したものをどう活用するか」を考える展開になった。三日目は宮島を見学し帰路についた。

生徒からは次のような感想が出された。

「大人になるにつれ、話せる自由が制限されるような気がする。子どもは、立場がないから語れるものがあり、それが強みかもしれない。何でも質問できる今のうちに知識をつけたい」「原爆ドームは核廃絶を願う世界的テーマの象徴。1Fの遺構化は何のためだろう」「ふたば未来には原発事故を語ることに對しての押しつけはないけど、期待はされていると思う」「浜通り＝原発というレッテルはやめて欲しいし、浜通りの人だけで原発を考えるのもおかしいと思う。福島、日本全体で考えていかないと」「忘れるということは過去の人に対する冒瀆だと思う」「私たちは梶本さんのお話を聞くのが最後かもしれない。語ろうとする気持ちが宝物なんだよ、と最後に言われた。語ることで相手に伝えられるし、もしかしたら同時に自分も救われていくのかなって思った。」

2. 5. 1 発表・交流

ここでは外部団体が主催する発表会への参加や他校との交流についてまとめる。

2. 5. 1 ふくしま学 (楽) 会

ふくしま学 (楽) 会は早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターが主催する学会である。世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島復興について考える場として毎回多くの方が参加している。今年度も7月31日に第10回が富岡町で、1月29日に第11回が大熊町で開かれた。

(1) 第10回 ふくしま学 (楽) 会

第1部【1F 廃炉の先を考える】で3年次の渡邊光季が「話せばわかる、話せば変わる：いわきを越えた学びを通して」をテーマに報告をした (写真)。



第2部【福島浜通り地域社会の将来像を考える】では3年次の三村咲綾が「ひとりひとりが取り組む防災」をテーマに報告を行った (写真)。



発表資料は以下のサイトに掲載してある。



また、第4部【総括セッション】では本校副校長の南郷市兵と渡邊光季がパネリストとして参加した。

(2) 第11回 ふくしま学 (楽) 会

2年次の佐藤志保が「なぜ処理水の海洋放出に反対運動が起きるのか 創造的未來を考える」をテーマに発表した (写真)。



高校1年生の時のワークショップを通じて、それまでは「何となく危険」と感じていた処理水を、「安全なこと」と思い始めた。しかしその後、処理水放出を巡って、ネット上で賛成派と反対派が論争を繰り返していると知った。賛成派は、国や東電が伝える科学的な安全や海洋放出することのメリットといった「正しい知識」に基づき、「反対派は『正しい知識』を持っていない人」と単純化して攻撃しているという。

このことを通じて「自分の中にも、これに近い思考回路があったかも」と思うようになり、対立の要因は、反対する人たちを理解しようという気持ちが足りないからではないか、と思い調査を始めた。

風評被害への懸念。国策として原発政策を推し進めた東電や国への不信感。原発事故以来続く先が見えない暮らしの不安感、反対の理由は人によって様々なことに気づき、「なぜ反対しているのかに目を向けて真摯に対応しなければ、本当の心配や不安を解消することができない」と考えるようになった。

発表の最後に、聴衆にこう呼びかけた。「問題が起きてから他人を責め、自分は関係ないという態度をとってほしくない。私たちにはいま、考えるチャンスがある」と。

2. 5. 2 ふるさと創造学サミット

(1) 「ふるさと創造学サミット」について

双葉郡8町村内の各学校で行われている「ふるさと創造学」の取り組みを共有し、子どもたちの学びの場となるのが「ふるさと創造学サミット」である。今年度は、富岡町文化交流センター・学びの森に一部の児童生徒が集まり、その他の児童生徒は各校からオンラインで参加する、現地・オンライン併用での開催となった。また、今回で第9回目を迎えたが、初めての双葉郡内での開催となった。

(2) 実施内容

本校からは、高校3年生が「ひとりひとりが取り組む防災」というプロジェクトを行っている高校3年生の生徒が代表として発表を行った。防災×歴史をテーマに、震災の教訓は歴史的にきちんと残されており、それをどのように活かしていくのが重要であると発表した。

また、防災と要配慮の避難の観点から、これまで学校で行われた避難訓練をアップデートしていく必要について説明し、校内の避難訓練を学校の先生と話し合いながら作り変え、避難訓練の後に校内でワークショップを行った。高校生の力が地域の防災力を向上させる必要性があると発表した。



(3) 成果と課題

本サミットは双葉郡内の小中学生と高校生とが交流できる貴重な場である。特に今年度は震災後初の双葉郡での開催という意義は大きい。双葉郡で学ぶ児童生徒達が、お互いにどのようなことに取り組んでいるのかを共有できるきっかけとなった。

その一方で、貴重な交流の場を活かしきれていないという声も挙がった。学びの成果を発表したり意見を交換したりするだけでなく、学校を超えて、町村を超えての協働が今以上に促進されれば、より有意義なサミットになることが予想される。

2. 5. 3 福島県高校生社会貢献活動コンテスト

本コンテストは、地域の課題解決に向けた創造的復興教育を目的として、福島県教育委員会の主催で震災以降毎年行われている。各学校が探究活動を推進する一つのインセンティブとしての位置づけもあり、最優秀賞を受賞すると県知事への訪問という機会も与えられる。本校では令和元年度から本コンテストの積極的な活用を呼びかけており、今年度も以下の4件を応募した。

このうち、書類選考に応募した2件が最終選考に選ばれた。最終選考会は9月10日(日)、自治会館(福島市)でオンライン開催された。県内の12件のプレゼンテーション、質疑応答が行われた。

審査の結果、以下のような結果となった。

<最優秀賞> 1プロジェクト

- ・ふたば未来学園高校 みらい防災
プロジェクト名:「ひとりひとりが取り組む防災」
- ・ふたば未来学園高校
社会起業部カフェチーム
プロジェクト名:「可能性はここから始まる!! Café ふうよ変革者たれ」

<入選(社会貢献賞)> 2プロジェクト

- ・ふたば未来学園高校 ニューヨークチーム
プロジェクト名:「浜通りツアー」
活動名:原子力防災探究ゼミ 個人
プロジェクト名:話せばわかる、話せば変わる
〜いわきを超えた学びを通じて



令和元年度より本コンテストに参加し、過去4回中3回目の最優秀賞を獲得できた。このコンテスト以外にも様々なコンテストがあるため、今後は年間計画を見ながら、長期的な視点で低学年からのコンテスト出場を進めていく必要がある。また、各学校の発表内容が充実しており、福島県でも探究文化が定着してきたように感じる。

2. 5. 4 マイプロジェクトアワード校内選考会

「全国高校生マイプロジェクトアワード」は、高校生の探究活動、マイプロジェクトなどを発表する日本最大級の学びの場である（認定NPO 法人カタリバ主催）。本校では、応募するプロジェクトの質を高め、あわせてプロジェクトからの学びをより深める機会を設定するため、福島県 Summit の校内予選という位置づけで校内選考会を実施した。

校内選考会には高校1年生～3年生まで14件の応募があった。1年生から4件の応募があり、早期に探究に取り組む自発的に探究活動を行う生徒も見られた。

審査はマイプロジェクトアワードの審査基準に則り、アクションしていることを前提に、オーナーシップ、コクリエーション、ラーニングの観点で行った。参加した生徒全員に、自身の活動の質をより高めるために、審査を行った先生からコメントを後日配布した。

○マイプロジェクトアワード福島県 Summit

校内選考会概要

実施日：令和4年11月21・22・24日(月・火・木)

内容：発表、質疑応答、審査

審査員：本校教員5名、カタリバ1名

校内代表を選考する審査会では、「生徒たちのプロジェクトをどう評価するのか」「良いプロジェクトとはどのようなものか」など様々な議論になった。今年度から、初めて未来創造探究やマイプロに関わる先生もいる中で、このような議論ができたことは、審査員にとっても探究やマイプロジェクトの意義を考え直すきっかけになったのではないだろうか。

最終的に14件全てのプロジェクトが、福島県 Summit に出場する校内代表に決定した。

選考会を通じて生徒のプロジェクトを評価することは、単に代表者を選ぶだけでなく、本人達の活動をさらに進化させるためにも重要であったと考える。参加した生徒からは、「緊張したけどアドバイスをもらうことができてよかった」、「答えられない質問があったから悔しい。もっと頑張りたい」など、前向きな声が聞かれた。

発表後の質疑応答で、審査員から問いかけをもらう中で、自身にない様々な視点に気づくことができたようだ。

2. 5. 5 マイプロジェクトアワード福島県 Summit

マイプロジェクトアワード福島県 Summit は全国 Summit に向けた福島県予選として、今年度で3回目の開催となる「学びの場」である。本校からは校内選考会によって選出された13件が参加し、3年生のプロジェクトである「誰ひとり取り残さない減災・防災」が福島県代表として全国 Summit に出場する運びとなった。

実施日：令和5年1月22日(日) 終日

実施形態：オンライン

発表数：32件

本校からの発表テーマ

- 誰ひとり取り残さない減災・防災(3年)
- 福島と世界の架け橋プロジェクト(2年)
- 私たちと少年法(2年)
- 葛尾村に人を呼ぶために(2年)
～葛尾村の自然とツーリングを活用して～
- 川内村の魅力を発信!(2年)
- 表現するファッションとは(2年)
- スポーツブランドをもとに地域を盛り上げる(2年)
- Come to Futaba(2年)
- メンタルの状況はスポーツにどう影響する?(2年)
- Caféふう売上あげあげプロジェクト(2年)
- My Dream KIRAKILIVE(1年)
- 震災教育を教育で終わらせないために(1年)
- 神社を盛り上げて地域のつながりを作りたい(1年)



本年度の福島県 Summit は「学びの場」として実施された。生徒達は分科会に分かれ、自分のプロジェクトの発表を行った。分科会では、福島県ゆかりの専門家・実践者の方々や他校の生徒から質問や感想をもらい、自身の活動の内容について対話を行った。発表終了後の振り返りでは、自身の学びや気づき言葉にするとともに、今後の活動をについて考えた。普段は関わりのない大人や他校の生徒との交流を通して、自分の活動の意義に気づき、さらなるモチベーションにも繋がったようだ。

2.6.1 社会起業部の活動

社会起業部は、普段から地域を「知る・伝える・盛り上げる」活動をしており、福島を訪れる高校生との交流や、自分たちも地域や原発事故を考えるためにフィールドワークを行った。またパンフレットやポケットティッシュなどを製作し、交流先への配布を予定した。製作費、およびフィールドワークの費用は福島県の「チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業」の対象である。

(1) 社会起業部×早稲田大学 (4月13日)

社会起業部の新入生歓迎イベントの一環で早稲田大学の学生さんと「オンライン進路座談会」を行いました。

(2) 広野町の限界集落・箒平を訪問 (6月20日)



(3) 灘高校など関西の高校生と交流 (7月28日)



(4) 横浜緑が丘高校さん双葉町をアテンド (8月1日)



(5) 宮城研修 (8月3~4日)

福島県についての説明や食材を寄付することを目的に宮城研修へ。気仙沼東日本大震災遺構・伝承館では社会起業部のように語り部活動をされている気仙沼向洋高校の方と交流しました。南三陸町と石巻でのフィールドワークで津波被害について学ぶとともに、それをどう伝承していくかも考えさせられました。最後に石巻市で子ども食堂を行っているオアシス教会さんを訪問し、福島県産の食材を寄付しました。



(6) 沖縄基地問題学習ワークショップ (8月19日)

年末の沖縄研修の事前学習として明治大学、慶応義塾大学、中央大学の学生さんらとともにワークショップを行いました。

(7) 滋賀県河瀬高校さんと交流 (8月23日)



(8) 「戸村さんに聞くカムのこと」 (10月3日)

大熊町出身で本校のカフェに勤務する戸村さんに、大熊町にあったカムラ洋菓子店についてお話しいただき

した。

(9) 木村さんと沖縄事前研修 (10月19日)

津波で命を落とした家族の遺骨捜索を続ける傍ら、語り部として活動している大熊の木村紀夫さんをお招きして、沖縄研修の事前学習を行いました。みなで沖縄で遺骨収集されている具志堅隆松さんの『ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ。』を読みました。



(11) 福島放送「シェア！」に動画提供 (6月・10月)



(12) 中央大附属高校さんと交流 (10月27日)

中央大附属高校の川北慧先生は福島と沖縄の類似点を踏まえ、生徒に対して福島研修・沖縄研修を行っている。昨年に引き続き福島研修では本校生徒と交流の機会を作ってくれた。本校での沖縄研修に当たり中央大附属高校さんの沖縄研修に一部相乗りさせていただけることになっている。

(13) 岐阜県の中京高校さんと交流 (12月21日)



(14) 沖縄研修 (12月22~24日)

福島原発立地の構造が沖縄の米軍基地の構造と似ていることに気づき、沖縄県宜野湾市辺野古で基地問題について学習するとともに、福島県の現状を伝えていく2泊3日の沖縄研修を企画した。



事前研修を経て(講義動画を左下リンク先に掲載する)、初日はホテルにて福島県のリンゴを配布しアピールを行った。



二日目は辺野古に移動し、(12)で述べたように中央大附属高校さんと合流、川北先生のもとフィールドワークをおこなうとともに基地移転容認派と反対派の住民のお話をうかがった。



生徒は「原発と基地の構造が似てる。国防のために沖縄が基地を引き受けている」「沖縄・福島・水俣と、住民を分断するような点がある」という感想を持った。三日目はひめゆり平和記念資料館などを訪問した。辺野古フィールドワークの詳細については右QRコード先にある社会起業部 Facebook に記載している。



2. 6. 2 社会起業部カフェチーム

(1) はじめに

「地域を知る・伝える・盛り上げる」ことを目的として、社会起業部カフェチームとして高校の部活動でカフェを運営している。ケーキや焼き菓子の製造、イベントの企画・開催など、生徒主体で活動している。

(2) 実施内容

昨年度までは新型コロナウイルスの影響によりカフェの営業が制限されることが多かったが、今年度に入ってからは徐々に規制が緩和の方向に進むことを期待し、「ご来店いただいたお客様一人一人に楽しんでいただく空間を提供する」をテーマに季節ごとに限定メニューを提供すること、地域のイベントに率先して足を運ぶことを中心として活動した。

(3) 成果

①第7回全国高校生SBP交流フェア チャレンジワード予選 7/30 (土)

3年の和賀菜々香、佐川生華の2名がオンラインにて本校caféふうの取り組みについて発表を行った。A・B・Cの3つのグループごとに予選が行われ、本校はAグループにて予選に挑んだ。オンラインであっても普段のカフェの様子を見ていただきたいと予選当日はカフェチームの1・2年生の協力によりカフェを開店・営業し、営業中のカフェの様子を交えながら発表を行った。

予選ののち、各グループ上位2校が8月に三重県伊勢市にて行われる決勝に進むことができるが、本校は「輝」の受賞とともに決勝進出校に選出され、全国各地において多方面で活躍する方々の前で本校の取り組みについて発表する機会を得ることができた。

第7回全国高校生 SBP 交流フェア チャレンジワード本選(予選)-グループ A 2022.7.30(土)

- 1: 熊本県立天草総合高等学校 天草総合高校 SBP
- 2: 岐阜県立加茂高等学校 森林科学校
- 3: 三重県立明野高等学校 ぶかりプロジェクト
- 4: 三重県立伊勢高等学校南校南校校舎・学生会舎 南伊勢高校 SBP
- 5: 法政大学中学校・高等学校 社会科学部地域調査班・地域創造コース
- 6: ふたば未来学園中学校・高等学校 社会起業部 カフェチーム
- 7: 佐賀県立伊万里東葉高等学校 フードプロジェクト
- 8: 三重県立紀南高等学校 きにゃんプロジェクト
- 9: 三重県立高等学校 ダンス部 SERIOUS FLAVOR



②第7回全国高校生SBP交流フェア チャレンジワード決勝 8/20 (土)

コロナ禍で活動が制限される中で自分たちに何ができるか、コロナ禍だからこそやれること・やるべきことを問い続け、『可能性はここから始まる～caféふうよ変革者たれ～』のテーマを掲げ、三重県伊勢市で開かれた決勝に参加した。決勝ではA・B・Cの3つのグループから勝ち上がった計6校による発表を行なわれた。

本校カフェチームは、入学から今までの活動期間中にコロナ禍での飲食店経営の厳しさや交流を深めることの難しさに直面した経験から、『カフェで待っているだけでは何も変わらない』とカフェを飛び出し自分たちから地域に出向いていくことで新たな交流を生み出そうと試みたことを中心に発表した。今年度のカフェチームは、交流するための活動だけでなく、カフェの経営視点やお客様に喜んでいただく経営・営業とは、といった様々な視点から「Four Seasons Menu」をテーマに取り上げ、季節限定メ

ニューを提供している。今年度最初の限定メニューとして夏限定のメニューを考案・提供した結果、売り上げや集客、お客様の反応にどのような影響があったかを分析・発表した。

輝・NARUMI賞(特別賞) 受

③第7回全国高校生SBP交流フェア 8/20(土)
上記②チャレンジワードの後、三重県伊勢市の皇學館大学にて行われているSBP交流フェアに参加した。普段は双葉郡を中心として活動しているため、全国各地から来場された方々と交流できる貴重な機会となり、改めて自分たちが行っている活動を見つめ直す良い機会となった。また、参加・来店していただいた高校生から、形は違えども同じ高校生が社会貢献・地域貢献や経営、地域活性化など私たちが目指す活動に取り組んでいる内容について、お互いに直接意見を交換でき、新たな発見につながる機会となった。

第7回全国高校生SBP交流フェア

2022.8.20(土)



④ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト 9/10(土)

本校カフェの取り組みについて、「社会貢献」の視点から発表を行った。双葉郡8町村にスポットをあて、1か月1町村をテーマに地域を知り、自分たちも伝統や文化を学ぶことでカフェの活動にそれらを取り入れ地域に伝えていく活動を紹介した。社会起業部カフェチームは日頃から「変化 交流 居場所が生まれるカフェ」をコンセプトとして活動している。そのため、カフェを「交流が生まれる場所」と定義しており、カフェの活動を通して年齢や性別、地域を問わず様々な方との交流の場となるよう活動している。今回はその一助となるよう、地域の伝統や文化について実際に体験し、出来上がったもののカフェに置いて紹介することでカフェに足を運んで下さった方に地域の伝統文化に触れていただく・知っていただく活動を発表した。「双葉町のふたばダルマ」を製作し、カフェに紹介POPと共に店頭置く、「檜葉町の藍染め」を体験し、作ったスカーフをお客様の目につくようにカフェ営業時に身に着けるなど自分たちならではのやり方で地域の情報を発信し、双葉郡を知っていただく活動に繋がった。他にも双葉郡8町村についてより知っていただくために、カフェ内の壁を使い、中学・高校の美術部と連携し双葉郡8町村をテーマとして壁画も作成し、故郷への想いを感じていただいた。

優秀賞(2位相当)・社会貢献賞
受賞

④ふたばワールド in 双葉(双葉町) 9/23(金)

震災後、双葉地方の交流の場として年1回開催されていたふたばワールドは、新型コロナウイルスの影響で開催が見送られていたが、今年は3年ぶりに双葉町にて開催された。

現カフェチームとしては郊外での初の出店であり、普段カフェにいらっしゃる方々とは違った交流を持つ良い機会であった。当日は、飲み物だけでなくスペシャリスト系列農業が作った広野町産のバナナ「綺麗」を使った「学園マドレーヌ」も販売し、本校のスペシャリスト系列農業の活動とcaféふうの活動の両方を多くの方に知っていただくことができた。また、ふたばワールドを取材にいらっしゃっていた地元テレビ局の方にcaféふうを取り上げていただき、会場に足を運べなかつた方にもメディアを通して活動を伝えることができた。



⑤ならSUNフェス（楡葉町）11/12（土）

楡葉町にて開催されたならSUNフェスに出店した。このような機会を活用し、自分たちから率先して地域の方と交流する機会をもっと持つべきではと考え、自分たちから双葉郡の方々に会いに行こうとイベントに積極的に足を運んだ。



イベントではふたば未来学園にカフェがあることを知らなかつた方もいらっしゃったため、改めて「caféふう」の存在を多くの方に知っていただく機会にもなった。本イベントでは現カフェチームになってから初めて屋外での「ふうブレンドコーヒー」の提供を行った。お客様においしいと言っただけのコーヒーを提供したいと普段から懸命にドリップの練習をしていた部員にとってはより多くのお客様と関わることができ、良い経験を積むことができた。

⑥広野町暮市（広野町）12/24（土）

広野町駅前商店街の活性化とにぎわいづくりのために開かれる「広野町暮市 2022」に出店させていただきました。

当日は強風が吹く中での出店となり、いつものようにスムーズにコーヒーを提供するのが難しい環境であったが、コーヒーを楽しむにしてくださいお客様のためにと丁寧にドリップし、寒い中でのほっと温まる一杯を提供した。当日は隣接するテントにてスペシャリスト系列農業の栽培担当生徒が自ら大切に育てた鉢植えを販売した。農業・カフェのそれぞれが広野町に元気を届けたいという想いを持って参加していたため、新型コロナウイルスの影響で3年ぶりの開催となった広野町暮市に高校生だからこそ届けられる元気と活気をもらすことができた。



(4) 課題

今年度は、ご来店いただいたお客様一人一人に楽しんでいただく空間を提供することを念頭に運営した。新型コロナウイルス感染症に関する規制が徐々に緩和されるに伴い、店頭での活動の幅が広がっていくことを感じつつも、学校外の方々との交流の持ち方や情報の発信の仕方について、更なる改善の必要性を感じる。学校外の方が学校の中にある「caféふう」に気軽に来店できる雰囲気や環境づくり、SNSによるタイムリーな情報発信など今年度見つけた課題を次年度は生徒主導により解決したい。

併せて今後は生徒主催のイベントを率先して企画し、校内に外部の方を呼び込むことで交流の場としてのカフェの機能を十分に果たせるようにしていきたい。また、他校との交流を持ち意見交換や共同商品開発などを企画し、生徒の中の可能性を広げていくことも課題として挙げられる。

2. 1. 2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「地域創造と人間生活」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒全員が 20 班に分かれて演劇を創作し、演じた。

生徒達は課題を知る学習における双葉郡 8 町村バスツアーを通して、震災前と後の双葉郡の変容について話を聞き、地域の復興に向き合う。また、演劇の題材となる地域の課題を発見するために、事前に調べ学習をした後、地域の公共機関や商店、企業などを訪問し、フィールドワーク (FW)を行う。生徒たちは復興に携わる地域住民の内面に焦点を当ててインタビューを行い、学んだ内容を演劇創作につなげていく。演劇創作の中では、地域の方を取材し、聞いた話を持ち帰り、議論しながら双葉郡の復興のための核心的な課題を見つけ出す。それぞれが置かれる立場の違いから生じる葛藤や対立など、複雑に絡み合う事象から、解決の難しい課題があることを認識する。生徒は発見した課題や学びを、その後展開される未来創造探究 (探究活動) を通じて探究することになる。今年度はリッチピクチャーを使って自分達の演劇作品を構造化し、探究への問いづくりへ繋げた。

(1) 目的

- ① 学校の所在する広野町の特色や課題の理解を深めるために、自分たちが設定した具体的な課題に基づき、地域住民や企業、公的機関、施設等への取材 (FW)を実践し、地域についての正しい知識を身につける。
- ② 対話劇を創作することで、地域の様々な立場の方々の視点で物事多面的に見つめ、そこで出てきた課題と向き合い、2 年次以降の未来創造探究での活動に繋げる。
- ③ 自分達の学習の成果について、特に伝えたい内容や相手を踏まえた有効な方法を確立し、校内外での発表を通して正しく伝える。

(2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	5 月 24 日 (火)	5・6	演劇オリエンテーション①	○
2	5 月 31 日 (火)	5・6	演劇オリエンテーション②・取材先を決める	○
3	6 月 13 日 (月)	終日	双葉郡バスツアー (終日)	
4	6 月 14 日 (火)	5・6	バスツアー振り返り/取材先調べ	
5	6 月 21 日 (火)	5・6	演劇創作のための取材	
6	7 月 5 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ①	○
7	7 月 12 日 (火)	5・6	演劇創作のためのフィールドワーク	
8	7 月 19 日 (火)	終日	演劇創作 WS ②	○
9	7 月 20 日 (水)	終日	演劇創作 WS ③・中間発表会	○
10	9 月 13 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ④ブラッシュアップ	○
11	10 月 4 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ⑤ブラッシュアップ	○
12	10 月 25 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ⑥ 演劇リハーサル	○
13	10 月 26 日 (水)	終日	演劇成果発表会	○
14	10 月 27 日 (木)	5・6	演劇振り返り&分析・リッチピクチャー作成	

(3) 講師

平田オリザ (青年団主宰 劇作家・演出家)
 わたなべなおこ (劇団あなざーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)
 森内美由紀 (青年団・俳優、NPO 法人 PAVLIC)
 宮崎 悠理 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、河野 悟 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
 石本 径代 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、有吉 宣人 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
 金 恵玲 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、植浦菜保子 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
 北村 耕治 (俳優、劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC)

(4) 対象生徒

1 学年生徒名 1 6 班編成

(5) 授業内容 (抜粋)

1 演劇オリエンテーション

今年度は、中高一貫の一期生（一貫生）と、高校から本校に入学する生徒（高入生）が初めて一緒になる年であった。カリキュラム上の関係で、彼らが系列を越えて授業で交わる機会がないため、演劇班編成にあたり、意図的にクラス・部活動・一貫生/高入生などバラバラなメンバーが混在するように工夫した。オリエンテーション前半はチームビルディングのためのコミュニケーションWSを丁寧に行い、後半は演劇を通して地域課題を知ることの意義について体験を通して学んだ。身体を使ったゲームや、台本を使った短い演劇体験を通して、イメージを共有することの難しさや、人それぞれに価値観が違うことを楽しみながら学び、そこから福島の問題にも結びつけて考えた。

授業の最後には、生徒たちをシアターに集め、プロの俳優である講師の方々と、担任教員による演劇発表があった。昨年度の生徒達の作品をブラッシュアップして上演し、担任が生徒役で舞台に立つというサプライズを行った。何も知らされていなかった生徒たちは教員の登場に大いに湧き、最後まで集中して観劇を楽しんだ。演劇が学校全体の文化として浸透した成果と言える。生徒の感想には「楽しかった。演劇は恥ずかしいと思っていたけど、自分達の発表が楽しみになった。」「伝えたいことが観客に正確に伝わるように、私も恥ずかしがらずに堂々と演じた。」といった感想が多く、これから成果発表会に向けて大きな後押しとなった。



2 取材先を決める

演劇の班ごとに希望を取り、地域で様々な分野で復興に携わる方々の中から生徒達自身が取材希望先を選んだ。これまでお世話になった方々に加え、毎年地域との新たな繋がりも増えている。また、年々生徒たちの興味関心も深く、今年度はより明確に「この人にこのことについて聞きたい」という目的を持って取材先を選ぶ班が多い印象を受けた。取材先は右のとおり。

3・6 演劇創作のための取材・FW

演劇の題材を探す（地域の課題を発見する）ために、2回インタビューを行った。1回目は学校に本校校いただき、2回目は生徒達が現地に出かけた。お話を伺うだけでなく、実際にその場所を見ることができ、より強くイメージを共有することができた。

この授業は今年度で8回目となるが、地域の方々の協力なしには成立せず、今回も様々な資料等を用意してくださり、FWの際には生徒達により伝わるようにツアーを組んでくださるなど、伝え方を工夫してくださいました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。生徒たちは事前に調べ学習の中で考えた質問内容を演劇コミュニケーションWSにて更に掘り下げたのちにインタビューを行った。ただ用意した質問をするだけでなく、相手が答えた内容からさらにストーリーを引き出すことができました。さらに、2回目に実際に現地を訪れ、語られた言葉とその場所を重ねて震災当時に思いを馳せることができたことは、その後の演劇創作に真摯に打ち込む生徒達の姿勢に繋がったと感じる。



	FW先
1班	木村紀夫さん（大熊町）
2班	田中秀昭さん （東京土木支店 東電福島遮水壁工事事務所所長）
3班	花井真理奈さん（双葉町・東京電力福島復興本社）
4班	中島仁子さん（双葉町・東京電力福島復興本社）
5班	小泉良空さん （大熊町・一般社団法人ふたばプロジェクト）
6班	遠藤マユリさん （富岡町・タイ料理屋「サラータイ」店主）
7班	平山 勉さん（富岡町・ふたばいんぷお）
8班	武内一司さん（大熊町・喫茶レインボウ）
9班	明石重周さん（楢葉町・株式会社 J-Village）
10班	長田真優さん・長田澁央さん（楢葉町）
11班	磯辺吉彦さん、青木裕介さん （広野町、ぷらっとあっと）
12班	新妻良平さん（広野町・新妻有機農園）
13班	宇名根良平さん （双葉町・一般社団法人ふたばプロジェクト）
14班	田中秀昭さん （東京土木支店 東電福島遮水壁工事事務所所長）
15班	鎌田毅さん（葛尾村・かつらおファーム）
16班	鈴木謙太郎さん（楢葉町・木戸川漁協）
17班	青木淑子さん（富岡町・3.11を語る会）
18班	松本佳充さん（浪江町・双葉高校元教員）
19班	秋元菜々美さん（富岡町）
20班	神崎克訓さん、杉山佳樹さん （大熊町・鹿島建設株式会社・除染解体作業）

6～12 演劇創作WS

講師陣と共に、生徒の状況を見ながら授業を組み立てた。取材内容を基に少しずつイメージを形にしていく工程を丁寧に行った。演劇創作においては、脚本を書かずグループで話し合いながらその場でシーンを創りあげた。書かれた言葉に頼らず、その場で生まれる表現を大切に、全員で合意形成を図り

ながら創作をすることで他者と協働する力を伸ばすことをねらいとした。

中間発表会では教員が審査員として入り、地域課題がより多角的・多面的に見えてくるよう、作品の中で足りないところをアドバイスした。視点は以下の3つである。

- 1 取材対象の心理描写だけでなく、地域課題がきちんと描かれているか。
- 2 取材対象に寄り添いすぎて、物事を一方向から見ているか。きちんと相手の背景も描けているか。
- 3 取材相手が何者で、どのような仕事をしているのか、劇を見て分かるようになっていないか。

中間発表会でのアドバイスを受けて、多くの班が作品をガラッと変えた。その軽やかさもまた、演劇を中学3年間実施してきた生徒たちがいる学年ならではの变化だと思われる。

1.3 成果発表会

本校みらいシアターにて、成果発表会を行った。20班20作品を4グループに分け、グループごとに生徒達による投票を行った。評価の観点には以下のとおりである。

- ①テーマ（広く見てもらいたいと思う内容だった）
- ②発想力（オリジナリティがあり、ユニークだった）
- ③セリフ（心に響く、印象に残る台詞があった）
- ④構成（話の流れ、組み立て方が良かった）
- ⑤演技（迫真の演技、役になりきっていて引き込まれた）

また、FW先をはじめ今年度お世話になった方々にも案内を出し、発表をご覧いただき、フィードバックをいただいた。最優秀賞、平田オリザ賞、校長賞、副校長賞の他に、生徒投票による賞も選出し、表彰を行った。

	班	タイトル	FW先
A	1	2人のこれまでと私たちのこれから	広野町
	1	今	大熊町
	8	震災ととある漁業の話	檜葉町
	1	カワイソウジャ、ナイ	富岡町
	6	大切なもの	大熊町
	9	私とヤギができること	葛尾村
B	1	この先のJヴィレッジは	檜葉町
	5	震災と差別	富岡町
	9	どうかかえてください。	双葉町
	6	新妻さんの軌跡	広野町
	1	大熊はずっとある！	大熊町
	8	罪悪感から使命感へ	双葉町
C	2	東電と私	東京電力
	3	「伝えた」のか「伝わった」のか	東京電力
	1	避難後の住民	富岡町
	7	平山さんと震災	富岡町
	0	困難をのりこえて ～ふるさとノカタチ～	檜葉町

2	数十年後の、未来へ向けて	大熊町
2	大熊と未来の人々の為に	大熊町
0		
1	田中秀昭さんの苦難	大熊町
4		

特に衣装や舞台セットなどはなく、全員がジャージや制服姿で演じたが、それでも情景が伝わったのは、演劇が様々なものを受け手が補完して鑑賞する表現であるからだ。生徒たちは、椅子や机などの少ない小道具を上手に使って防波堤や瓦礫、家、会社などを表現していた。

今年度も、取材にご協力いただいた多くの方が本番を観に来てくださり、丁寧なフィードバックをいただいた。さらに客席では震災直後ではあり得なかった、立場を超えた対話も見られた。極端に言えば加害者と被害者のような関係性だった人々の間に、生徒たちの演劇を通してお互いの当時の想いを知り、お互いの境界を超えて新たな対話が生まれる場面もあった。

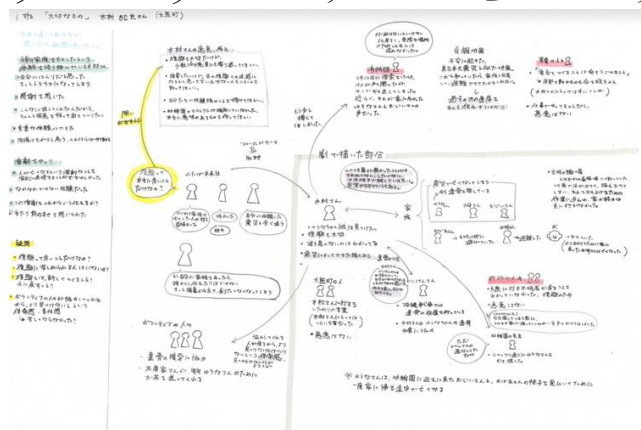
「境界を越える」とは、自らが引いた境界が揺らぐことである。演劇を見ることで他者の記憶を追体験し、自分が自分でありながら他者に「なる」ことで足場を揺るがされるとき、境界が揺らぎ、自分の見方で他者を判断する眼差しは相対化され、その先に対話が生まれるのを感じた。このプログラムが、生徒達だけでなく地域の方々にとっても有意義な時間となっているようである。



1.4 演劇振り返り、リッチピクチャー作成

成果発表会を終えて、これまでのプロジェクト全体を振り返り、個人として・チームとして自分達がどのように成長したのかを言語化し、お互いの成長を讃え合った。その後、今年度初の試みとして、「リッチピクチャー」の手法を用いて自分たちが作った演劇を構造的に分析するWSを行なった。

リッチピクチャー



リッチピクチャーとは、ある人とそれを取り巻く様々な人・モノ・コトと関係性を表現した図のことである。書き方はおおむね次の通りである。

- ①中心となる人を書く
- ②その人に関係する人・モノ・コトを手当たり次第書く

③場合によってはそれらを並べ直し、グループ化する

④線をつなぎ、それを矢印にする

⑤線や矢印に吹き出し等で、その矢印に関わる感情などを書いていく

更に、より内容を整理するために、演劇では描ききれなかった部分の情報を補足させた。生徒たちはイラストを描きながらより相手に伝わるように構造化することができた。最終的にはポスターサイズに印刷し、アリーナにてリッチピクチャーの共有会を行った。自分以外の班のリッチピクチャーを見ることで、20通りの地域課題に触れることができ、その後の探究接続のためのインプットとして大変有意義な時間となった。

(6) 振り返りと評価

今年度、明らかにこれまでとの違いを感じたのは創作までのスピードである。話し合いがスムーズに進んだのは、一貫生が演劇と哲学対話を中学3年間通して経験してきたことが大きい。自分と違う他者の意見を否定せず、共に対話を楽しみながら腑に落ちるまで考え続けることがきる生徒がそれぞれの班に存在していたことで、あらゆる作業がスムーズに進んだ。そういった前向きな姿勢の生徒が大多数を占めていたことで、高入生も自然とその流れに身を任せて創作に集中することができたと言える。実際に、どの班も必要最低限の衝突はあったが、どの班もそれらを乗り越え、誰一人取り残さない姿勢が見られた。何より生徒達が協働作業を楽しんでいた。

また、「地域課題を演劇にする」という一見固くありがちなテーマにも、演劇の良さである「フィクション」を軽やかに取り入れることでどうすればより観客に伝わるかを工夫した。例えば、除染解体作業の現場にいるはずのない女子高生を登場させ、「ねえ、あれ解体じゃない？やばいよね？」といった何気ない会話を挟み、「でも、この人たちどんな気持ちなんだろうね」と、目の前で起きていることを客観的な立場で語るという演劇的にも高度な技術を用いていた。また、解体作業に使われる機械を人間で表現し、瓦礫を撤去する無機質な機械にも感情があるかのような演出をした。

演劇は、舞台上立つ演者同士のコミュニケーションだけでなく、舞台と観客の間のコミュニケーションも成立しないと上手くいかない。4月からの演劇WSを通して、生徒たちの中に、受け手を想像し伝え方を工夫するという能力が積み上がっていると感じた。この力は今後の未来創造探究でも活かされるだろう。

演劇創作は探究に必要な論理的思考と批判的思考のトレーニングの場である。論理的思考は、演劇を作ることで自分が論理的に情報を出していないと相手に伝わらない。批判的思考は、時にはフィクションの力を使って地域が抱える課題を掘り下げることだ。審査員の平田オリザ氏の言葉を借りれば、「探究」とは課題を探究するのではなく、「人間」と人間が作っている「社会」について探究するものだ。人間の複雑さを深掘りすることが重要である。取材をすると、どうしても取材対象に共感してしまい、そのままに伝えたい！という気持ちが起こるが、そこで踏ん張って、その周りを取り巻く複雑な構造を深掘りしてもらいたい。

福島で学び、原発事故、復興、トリチウム海洋放出問題、様々なものをこれから背負わざるを得ない彼らが、この不条理と闘うためには、大人の言うことを全て真に受けるのではなく、批判的思考を持ってほしい。それが演劇をつくる意味である。この経験を活かして2・3年次の探究活動に生かしてほしい。

い。

(7) 次年度実施への課題

振り返りでも述べたように、意見の違いを越えて協働し合える集団づくりは成功したと言える。地域で働く様々な方々の気持ちに寄り添うことができたことは大きな一歩ではあるが、やはり共感だけでは地域の課題解決には至らない。

ブレイディみかこ著「他者の靴を履く」では、これからの世の中エンパシーの力が重要だとある。エンパシーとは「他者の感情や経験などを理解する能力」のことであり、それを「他者の靴を履くことができる能力」として表現している。これに対してシンパシーは「誰かをかわいそうだと思う感情や友情」である。シンパシーとエンパシーの差を示す例がサッチャー元英首相だという。優しく思いやりがあった一方で、衰退した地方の製造業者に厳しく自助を求める経済政策を進め、それに付いて来られない人のケアに心を砕くことはなかったという。「シンパシーはあったが、エンパシーはなかった」と当時の秘書は証言している。人間は顔が見える人（知っている人）の靴は履けても、顔が見えない人たちの靴はあまり履こうとしないものだ。

このことを考えた時に、生徒たちがこの授業を通してなるべく多くの地域の方々と出会い、顔が見える人たちを増やしていくことが、彼らのエンパシーを育てる唯一の方法であると改めて考えた。また、地域の大人たちが考えていることを想像・理解することや、他者の感情を自分も感じるといったエンパシーで完結せず、それが何らかのアクション（未来創造探究）を引き起こすにはどうすればよいかについても考えたい。

演劇を通して他者の人生に触れるだけでなく、その先へ行くにはどうすれば良いのか。震災時の年齢が低年齢化している中、生徒達自身が地域の課題の本質に気付き、時間を掛けてそれらを深掘りする中で基本的な知識をインプットしていく仕掛けや、今年度のリッチピクチャーのように、演劇と探究をシームレスにつなげられるような仕掛けを、次年度に向けてさらに考えて更新していきたい。



2. 1. 3 国際理解教育

本年の「地域創造と人間生活」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、スタディサプリの活用を通して、働くことの意義を考え、自己理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について知る・学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる (Global Citizenship Education)。

(1) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会～概要～
イラクで約18年、エイドワーカーとして取り組んでいる高遠菜穂子氏に講話いただいた。高遠氏の体験談を通して、地域が抱える課題を世界の課題と繋げて考え、世界平和や国際理解の意義を考えることを目的としている。

- 1 日時 令和4年12月1日(木) 5, 6校時
- 2 講師 イラク支援ボランティア
エイドワーカー (フリーランス)
高遠菜穂子 (たかとおなほこ) 氏
- 3 対象 本校1年次生徒、教職員

(2) 実施内容

演題『戦争の与える影響』 内容を一部抜粋する。

【世界と日本の難民問題】

難民 UNHCR グローバル・トレンドズ 2021 によると、紛争、迫害、暴力により家を追われた人が過去最多の8930万人(10年連続増加)であり、2011年の2倍に増えている。国境を越えたら難民(現在2710万人)、越えないのが国内避難民(現在5320万人)。第三者は簡単に「なぜ逃げないのか」と言うが、様々なところに関門所があり銃を突きつけられ、殆どの場合は賄賂が必要である。お金がないと逃げられず、逃げるのにも命懸けである。難民最多受け入れ国がトルコ(360万人)であるのに対し、日本の難民認定は毎年50人以下に止まっている。非常に悲しいことに日本の入国管理局による外国人に対する人権侵害は深刻である。死者も出ている。スリランカ人のウィシュマさんの事件は記憶に新しいはずだ。このような人権侵害が日本という平和な国で起きていることを皆さんにはもっと知ってほしい。



【市民のトラウマのほかに、兵士のトラウマも深刻】

戦争によって市民が受けるトラウマ(身体的外傷、心的外傷 PTSD)について、目を背けたくないような写真や映像と共に説明を受けた。その際に印象に残った話が、兵士のトラウマについての話である。

「戦争はおぞましく、信じられないほど残酷だが、最初からモンスターはいない。残酷な米兵も家に帰れば一人の息子であり、優しい父親なのだ。想像してほしい。あなたが軍隊という装置の中で、反射的に攻撃できるよう訓練され、軍の規律に従うよう教育され、戦地の究極の緊張状態の中で「敵を殲滅せよ」という命令を受けたら、攻撃され、仲間の兵士が殺されたら、残酷行為をしてしまうかもしれない。でも、ある瞬間に自分が犯した「罪」を意識し、も

う人を殺したくないと思っても、アメリカの軍法では、それは反逆罪になる。兵士のトラウマは、軍の名誉とされる行為が良心と折り合いがつかないことで生じてくるのだ。」

【PEACE CELL PROJECT について】

高遠さんが現在取り組んでいるプロジェクトについても話を聞くことができた。テーマは「絵本と演劇で紛争を止める」である。このプロジェクトを思い付いたきっかけがまさに本校で演劇の授業と出会ったことだと高遠さんは話している。

絵本の読み聞かせによる情操教育と、演劇を通して彼らの想像力を刺激して、紛争解決できる人を増やしていくのが目的。現在もイラクでは分断が根強く残っている。クルド人とアラブ人、シーア派とスンニ派、イスラム教徒とキリスト教徒 etc...。同じ地域に暮らしながら目も合わせない人たちもいる。現在はコミュニケーション WS が中心だが、最終的には本校と同じように、参加者が自分とは少し背景が重なり合わないような場所に取材に行き、聞いてきたことを演劇にする取り組みにチャレンジしたいそうだ。演劇を通して彼らのエンパシーを高めたいと高遠さんは話していた。(エンパシー: 他者の感情や経験などを理解する能力のこと) ※講演会終了後は、本校の演劇作品をいくつか鑑賞し、生徒たちに熱心に質問をしていた。



(3) 生徒の感想

「人間の中には良心と残酷性の2つがあると知った。残酷性のトリガー(引き金)を引かないようにするために想像し続けたい。」

「一国平和主義ではなく、世界の平和を希求するには、軍事行動への参加ではなく、人道支援立国を目指すべきだと学んだ。」

「戦争をしない環境を世界に増やしていきたい」
「自国の安全のために若者たちを戦地に活かせる政治ではなく、紛争を予防する外交・政治を本気でしてくれる政治家を選ばなければならないと思った」

(4) まとめと今後の展望

生徒達は、高遠さんから語られるイラクの現状とその熱量に圧倒されながらも自分達の知識を広げようと真剣にその思いを受け止めた。講演会後も多くが残り、19時近くまで質問が止まなかった。イラク復興と双葉郡の復興を重ねた生徒も多く、探究のテーマに直接繋がった生徒もいたようである。まずは身近な社会から変えていけるよう、引き続き生徒の能動的市民性を育てていきたい。

2. 1. 4 1年次未来創造探究

今年度より、1年次から未来創造探究が始まった。1年次前期火曜の6・7校時と夏季休業期間中の授業を「地域創造と人間生活」(以下地創)とし、後期の火曜の6・7校時を総合的な探究の時間とした。

1. 概要

前期を中心に行った地創の中では、系列・高入/一貫の区別なくグループを作り、地域の課題を見つめて演劇を製作した。総合的な探究の時間では、「リッチピクチャー」を用い、地創の演劇製作を振り返って地域課題の構造を可視化するところからスタートした。

その後、生徒の中学時代の取り組みや活動の中で立てた問い等をもとに、学年を5チームに分け、チームごとに指導者と対話を重ねながら、課題設定と調査のアクションに取り組んだ。なお、5チームの内訳は、調査グループ1つと課題発見4グループ、うち前者はある程度の課題設定が済んでおり、早期から調査アクションに取り組む生徒集団、後者を課題の発見にいていねいに取り組む集団とした。

2. 調査グループ

問いつくり→課題設定→調査アクション→個人面談→プレ発表

調査グループの中には、ふたば未来学園中学からの一貫生が多く含まれている。併設中学在学時の探究活動では、主に福島県双葉郡が持つ観光資源や地域住民の活動に着目し、魅力を知って発信することをゴールに設定していた。そのため、中学時にある程度の発信をし、そこを一区切りにした生徒の中では、高校での活動継続につなげられない場面が散見された。ふたば未来学園高等学校では、課題発見→調査→解決アクションの螺旋構造で探究活動に臨むことになるため、「中学で考えた手段を使っていかに社会を創造するか」という問いに昇華させるよう伴走する必要がある。

地創の授業からつなぐ課題設定の際には、併設中学校時代の探究活動からはいったん離れ、演劇の振り返りや、自分が高校進学後に学んだことや高入生との一貫生の交流の中で見えてきたことを中心に、自らの進路とのかかわりを見出しながら課題設定を行わせるようにした。結果、中学時代に取り組んできたことを調査・解決のアクションに位置づけて探究活動を始めた生徒や、新たな課題の解決に取り組む生徒が混在するチームとなった。

3. 発見グループ

調査グループより長めの問いつくり・課題設定→個人面談をしながら調査アクション→プレ発表

高校から入学してきた生徒が多めに含まれるチームであるため、探究活動の導入期は、アインドマップ等を通じたアイデア出しと、それをもとに行う問いつ

りに多めに時間を割いた。また、比較的

早く問い作りが進んだ生徒は調査チームに移動させるなどして、人数は多いながらも、個別最適化を図った。

マインドマップや生徒が立てた問いをもとに、発見チームは4チームに分けて活動を進めた。このチーム分けは、後述の2年次ゼミの再編成計画をもとに、おおまかな学問分野や活動のジャンルによって編成されたものである。ただし、活動中は他のチーム伴走教員からのアドバイスを受けることも奨励し、多面的・多角的な課題設定につながるよう配慮した。

4. 今年度の調査実績

(1) 新書マップ(<https://shinshomap.info/>)

良質なインプットは書籍から得ることが基本となるが、どのように検索をかければよいのかわからない生徒に向けて、下図のようなサイトを紹介した。



検索ワードを入れて表示されたポイントをクリックすると、参照候補となる新書が本棚に入って表示される。

(2) 書籍

調査チームでは特に、授業中の対話の中でおススメの書籍を提示することを多く行った。生徒からは、「いったん書籍を読み始めると、必要箇所がどこかわからないから、結局読まずに済ませてしまうことが多い」「読み終わってから探したものと違うことに気づいて、時間がないうち中読んできたのがっかりする」などの声もあった。そのような経緯で探究の教室や1-4教室に数冊本を準備して紹介することにしたが、「同じ著者の別の本などに挑戦した」など、うれしい報告も聞こえてきた。

(3) 新聞データベース

以下のデータベースのアカウントを取得し、調査に活用した。

朝日けんさくくん

1985年以降の朝日新聞や、系列雑誌の記事などを読むことが出来る。

ヨミダス for スクール

1986年以降の読売新聞の全国版・地域版の記事を読むことが出来る。

(4) 大学院生インタビュー

本校卒業生で、福島大学大学院生の遠藤健次さんをお呼びし、理系の探究活動に助言をいただいた。バイオマス科学会年間奨励賞、日本炭化学会技術部門賞を受賞している卒業生の活躍は生徒に響いた。

(5) 生徒の活動内容

調査グループ生徒(I.K)

日本地理学会主催 2023 年春季学術大会
高校生ポスターセッション出場

[要旨] 福島県双葉郡広野町には、晩秋から春先にかけて阿武隈高地からの強風が吹く。地元民が「五社山おろし」と呼ぶこの風は、その実態についてはほとんど研究が行われていない。そこで、本研究では、アメダスのデータや地形の検証を通して、「五社山おろし」の局地風としての特殊性を検証し、その実態を定義付けすることを目的としている。令和3年より続けている本研究では、地元住民へ「『五社山おろし』の具体的な特徴」についてのアンケートを取った。また、1976年から2022年までの広野と他の浜通りの3地点の冬季の気象データを基に、当期間の日最大風速7m/s以上の日数とその風の16風向の割合を調査した。これらの検証結果から、冬型の気圧配置時に西北西から吹く強風が「五社山おろし」とであると考察した。今後は、QGIS等を用いた地形の調査データを集積し、地形の変化で当該強風の特殊性が現れるのかなどの考察を行っていきたい。

<https://www.ajg.or.jp/20230306/16303/>

発見グループ生徒(A, M, Rの3名)

サステイナブルアートに興味を持った3名が集まり調査を行った。調査や担当教員への相談を進める中で、本校7期生までの探究活動でお世話になった方で、NPO法人ザ・ピープルの吉田恵美子様が取り組む、古着のリサイクル活動に興味を持った。吉田様にインタビューを行い、助言をいただいた。実際に作業場を訪れ、ボランティア活動にも参加させていただき、古着を用いたサステイナブルファッションを行おうと考えた。

次に、双葉郡に目を向けてみると、富岡町にオープンしたYONOMORI DENIM (ヨノモリデニム) とのつながりに気づいた。実際に担当教員とお店を訪れ、インタビューをし、お話をお聞きすることができた。

5. 課題

昨年度まで、本校高校1学年には総合的な学習(探究)の授業が設定されておらず、「産業社会と人間」や「地域創造と人間生活」のみを履修していた。今年度のカリキュラムから、1学年でも総合的な探究の時間を1単位履修することとなり、観点別評価の導入の時期も重なった。今年度は、担当者間で協力して評価を行ったが、圧倒的に知見の蓄積が足りないという問題がある。

プレ発表実施後に、各会場のアドバイザーの助言をもとにループリック評価を行う十分な時間を確保したい。ループリック面談をしながら、形成的評価・総括的評価について、ゆとりをもつて行う時間を残しておく必要がある。

本校のループリックが Google Forms になった結果、生徒は前回何を書いていたのかがわからず、手元に文章が残らない状態になっていた。例えば、ドイツ研修の参加生徒に参加後のループリック調査・インタビューを行ったが、数日たっただけでも自分が何を記入したのか忘れてしまっているため、Spreadsheet から記述データを印刷し、本人と眺めながら面談をすることになった。

また、自身の成長を実感した場面について、生徒が文章で記入しても、入力した Form が手元に残らない設定であったため、後日発表原稿を作るような場面でも Spreadsheet 上に展開されたデータを個々にデータで返却する手間になった。

各学年では、年度末のLHRの授業内で1年間の学習の振り返り(≒指導要録作成に活かす情報のとりまとめ)を行っている。担任ではない探究活動の担当者にも引き続き協力をいただき、学校全体で形成的評価に生かしたい。

3. 3 外部連携

本事業を行うにあたり、令和2年度からコンソーシアムを構成し、双葉郡教育復興ビジョン協議会や福島大学などと連携し、地域から海外まで、様々なグループとの連携を意識的に推進してきた。過去2年間はコロナ禍により現地に赴くことができなかつたり、直接会って話ができなかつたりする等、活動に大きな支障が生じた。一方ではオンラインの活用によって移動の制約がなくなり、時間さえ合えば校内で様々な方と容易に話し合うことができるようになった。オンラインツールは慣れてしまえば大変便利であり、これを活かして逆境をチャンスに変えることにより新たな連の形が進み、生徒の様々な取組が面的、質的、量的に大きく展開してきた。ここでは外部連携の経緯や状況等について、「地域知」と「専門知」に分けてまとめた。

3. 3. 1 コンソーシアム

(1) はじめに

令和2年度に結成したコンソーシアム協議会によって、これまで以上に外部連携を強化することとした。また、外部連携が教員個人の繋がりを活用しているケースが多く、長期的に連携を進めるには組織同士で連携する必要性はあるという課題は引き続き解消しなければならない。

(2) コンソーシアム

今年度のメンバーは以下のとおりである。

双葉郡教育復興ビジョン推進協議会	笠井 淳一
福島大学 人間発達文化学類	中田スウラ
福島相双復興推進機構	桜町 道雄
福島イノベーション・コースト構想推進機構	山内 正之
NPO 法人カタリバ	横山 和毅
福島県教育庁	丹野 純一
本校校長	郡司 完

今年度は令和4年7月と令和5年2月に協議会を実施した（コンソーシアムの記録については巻末に記載）。

第1回コンソーシアム協議会では、昨年度の取り組みの確認と今年度の研究開発実施計画について説明した。

「グローバル型」最終年度となり、研究成果報告発表会にむけての確認や、令和5年度より開所される福島国際研究教育機構（F-REI）や福島イノベーションコースト構想を実質化していくために、構想と本校をシームレスにつなぐ人材育成の在り方について議論した。

1月の第2回協議会では、2月3日の研究成果発表会を終えて、「グローバル型」3年間の総括とともに今後の展望について総括した。この3年間の中で、8町村すべての自治体と探究を通じての連携をすることができたほか、早稲田大学との連携やNPO法人カタリバとの連携を進めることができた。

(3) 今後の展望

今年度は探究カリキュラムの前倒しが行われ、1年前期の地域創造と人間生活における演劇プログラムと1年

後期の連携が一層強化された。地域の分断や対立の構造を人間関係だけではなく社会構造として分析をするための「リッチピクチャー」を作ることで、よりシームレスに探究に接続できた。次年度以降は探究をより高度化させるため、大学等の機関との連携を一層進める方向である。

3. 3. 2 地域知連携

(1) はじめに

本校では開校当初から地域の課題探究活動を学校の教育活動の中心に据えてきた。本校が所在する福島県浜通りは震災原発事故が起きた地域であることから、社会課題が顕在化しており、その課題の解決のために頑張る大人が他地域に比べると多い。このような方々を本校では「地域知を持つ方」あるいは単に「地域知」と呼んでおり、開校から8年目となる現在、「地域知」は増えてきており、昨年度から今年度も双葉郡8町村全域での活動を行うことができた。以下に今年度の事例を提示する。

(2) 地域知連携

「外部連携を個人的つながりから組織としての網切りにする」ことを目標に、コンソーシアムを軸とした連携を模索した。また、1年次前半に行う双葉郡8町村バスツアーで行った場所・出会った人の影響で1年次後半の探究学習を始まる生徒が増え、生徒が教員を介さずに地域の方々と直接つながる事例が生まれてきた。

・葛尾村との連携：葛尾村で活動している下枝浩徳氏（葛力創造舎）との協力から、演劇部を中心に「宝宝宝」の演劇上演や、葛尾村で伝統的に行われていた「祝言式」に携わる中で「愛とは何か」というテーマでの探究活動が始まった。

・富岡町との連携：リメイクデニムの専門店「YONO MORI DENIM（ヨノモリデニム）」と協働し、資源をアップサイクルする探究や「海」をファッションで表現する探究などが生まれている。

(3) 今後の展望

双葉郡8町村への活動展開をほぼ達成することができ、多くの「地域知」と繋がることのできた。教育と地域復興の相乗効果を目指し、この方向性を引き続き継続するとともに、より多くの協働体制をとっていきたい。また、双葉郡には企業が多くないため、復興を目指す企業との協働した商品開発をすすめたい。

3. 3. 3 専門知連携

(1) はじめに

前述した「地域知」に対して、生徒の考えた探究テーマに関連した学術的な見識を持った方を「専門知を持つ方」あるいは単に「専門知」と呼んでいる。本校がある地域には大学や研究機関はほとんどなく、結果的に専門知を持つ方との接点は限定的であった。

(2) 専門知連携

コンソーシアムとの中で「グローバル型」指定3ヶ年で一番連携が強化されたのが早稲田大学である。早稲田大学との連携協定を結んだほか、早稲田大学とふたば未来学園高校との共催である「ふくしま学(楽)会」を年2回開催することができた。また、今年度は大学関係者、専門家、東電職員、地域の方々、大学生、本校高校生(広島研修を希望するもの)が集まり、1F=福島第一原子力発電所の廃炉廃炉の先を考え、語りあい、学びあう場として「1F地域塾」を開催した。



(3) 今後の展望

専門知との連携により、新たな見方、考え方が加わり、探究活動そのものの進展、深化がみられた。今後も引き続きこの環境を活用していきたい。また、次年度以降は探究の更なる高度化を進めるため、東北大学との連携を進める予定である。進路でも、大学の先生による模擬授業を2回実施することができたが、次年度は模擬授業を超えて、単位の先取り履修を視野に入れた連携協定を考えたい。

3. 3. 4 国際連携

(1) はじめに

開校以来、本校は海外国際機関の関係者や、海外の学校との交流を継続してきた。海外研修のみならず、海外から日本への修学旅行や視察・研修の受け入れ実績も

多く、都度、授業内での受け入れ・交流や参加者を募ったプロジェクト型の交流を行ってきた。

(2) 実施内容

① NZ先遣

本校中学校の一般選抜生は、中学校3年生の修学旅行でニュージーランドを訪れることとなる。しかし、現高校1年次生はコロナのため修学旅行に行くことはできなかった。そのため、今回渡航した生徒9名は、修学旅行の「先遣隊」として連携校との関係構築や訪問先検討等のミッションを果たすために、3年越しの訪問となった。



②ニュージーランドのアワタブ高校との交流会

5月12日(木)の3年生英語コミュニケーションの授業で交流会を行った。参加してくれたアワタブ高校の生徒たちは日本語を勉強している高校3年生。5つのグループに分かれて交流会を行いました。あるグループはマオリの言葉を習っていました。あるグループはお互いに好きなK-Popのアイドルグループの話に熱中。最後には一緒に踊り出すなど、英語が使えたと人の輪が広がることを実感したひと時でした。



(3) 成果と課題

オンライン交流によって、つながりを持ち続けることは容易になった。しかしながら、本来直接交流することによって習得されていたであろう身体知は、オンラインによる完全な置き換えがきかないものである。今年度海外研修が実現できるようになり、対面での学びがいかに重要であるかを実感した。しかし、オンラインで置き換えが十分可能なプログラムもあり、それぞれのプログラムが有機的に組み合わせたり、生徒の学びに効果的につながる事が重要である。

3.4 外部連携実績

1年「地域創造と人間生活」お世話になった方々

活動名	日付	氏名	所属、役職	活動名	日付	氏名	所属、役職
コミュニケーションWS	2022/4/12	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC	各取材先への バスツアー	2022/7/12	磯辺吉彦	ぶらっとあっと
		河野悟	NPO法人PAVLIC			明石重周	檜葉町Jビレッジ
		有吉宣人	NPO法人PAVLIC			鈴木謙太郎	木戸川漁業協同組合
		森内美由紀	NPO法人PAVLIC			遠藤マユリ	サラータイ
		山本雅幸	NPO法人PAVLIC			平山勉	ふたばいんふお
		北村耕治	NPO法人PAVLIC			秋元菜々美	ふたばいんふお
		宮崎悠里	NPO法人PAVLIC			青木知里	廃炉資料館(富岡)
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC			花井真里奈	廃炉資料館(富岡)
		金恵玲	NPO法人PAVLIC			青木淑子	NPO法人3・11を語る会
石本	NPO法人PAVLIC	武内一司	喫茶レインボー				
演劇WS	2022/5/24	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC	演劇WS	2022/7/19 .20	木村紀夫	大熊町
		河野悟	NPO法人PAVLIC			神崎克訓	鹿島建設
		有吉宣人	NPO法人PAVLIC			杉山佳樹	鹿島建設
		森内美由紀	NPO法人PAVLIC			松本佳充	双葉高校元教員
		山本雅幸	NPO法人PAVLIC			宇名根良平	ふたばプロジェクト
		北村耕治	NPO法人PAVLIC			小泉良空	ふたばプロジェクト
		宮崎悠里	NPO法人PAVLIC			鎌田毅	葛尾村
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC			新妻良平	新妻有機農園
		金恵玲	NPO法人PAVLIC			わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
演劇WS	2022/5/31	河野悟	NPO法人PAVLIC	演劇WS	2022/9/13	河野悟	NPO法人PAVLIC
		有吉宣人	NPO法人PAVLIC			森内美由紀	NPO法人PAVLIC
		森内美由紀	NPO法人PAVLIC			有吉宣人	NPO法人PAVLIC
		山本雅幸	NPO法人PAVLIC			北村耕治	NPO法人PAVLIC
		北村耕治	NPO法人PAVLIC			植浦菜保子	NPO法人PAVLIC
		宮崎悠里	NPO法人PAVLIC			宮崎悠里	NPO法人PAVLIC
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC			金恵玲	NPO法人PAVLIC
		金恵玲	NPO法人PAVLIC			村田牧子	NPO法人PAVLIC
		石本	NPO法人PAVLIC			わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
双葉郡バスツアー	2022/6/14	磯辺吉彦	ぶらっとあっと	演劇WS	2022/10/18	河野悟	NPO法人PAVLIC
		中井俊郎	JAEA			森内美由紀	NPO法人PAVLIC
		森雄一朗	ならはみらい			有吉宣人	NPO法人PAVLIC
		平山勉	ふたばいんふお			北村耕治	NPO法人PAVLIC
		青木淑子	NPO法人3・11を語る会			植浦菜保子	NPO法人PAVLIC
		井出寿一	かわうちラボ			宮崎悠里	NPO法人PAVLIC
		宇名根良平	プロジェクトふたば			金恵玲	NPO法人PAVLIC
		小泉良空	プロジェクトふたば			わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		正木哲也	おおくままちづくり公社			河野悟	NPO法人PAVLIC
山崎大輔	おおくままちづくり公社	有吉宣人	NPO法人PAVLIC				
佐藤真喜子	おおくままちづくり公社	森内美由紀	NPO法人PAVLIC				
下枝浩徳	葛力創造舎	金恵玲	NPO法人PAVLIC				
演劇創作の 為の インタビュー	2022/6/21	木村紀夫	大熊町	演劇WS (成果発表会)	2022/10/25 .26	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		田中秀昭	東電福島遮水壁工事事務所			河野悟	NPO法人PAVLIC
		花井真里奈	東京電力復興本社			森内美由紀	NPO法人PAVLIC
		中島仁子	東京電力復興本社			有吉宣人	NPO法人PAVLIC
		小泉良空	プロジェクトふたば			北村耕治	NPO法人PAVLIC
		平山勉	ふたばいんふお			植浦菜保子	NPO法人PAVLIC
		明石重周	檜葉町Jビレッジ			宮崎悠里	NPO法人PAVLIC
		長田滉央	檜葉町			金恵玲	NPO法人PAVLIC
		長田真優	檜葉町			平田オリザ	
		磯辺吉彦	ぶらっとあっと	大倉英揮			
		新妻良平	新妻有機農園	青木裕介	ぶらっとあっと		
		宇名根良平	プロジェクトふたば	鈴木謙太郎	木戸川漁業協同組合		
		田中秀昭	東電福島遮水壁工事事務所	秋元菜々美	ふたばいんふお		
		鎌田毅	葛尾村	木村紀夫	大熊町		
		鈴木謙太郎	木戸川漁業協同組合	鎌田毅	葛尾村		
		青木淑子	NPO法人3・11を語る会	明石重周	檜葉Jビレッジ		
		松本佳充	双葉高校元教員	松本佳充	双葉高校元教員		
		秋元菜々美	富岡町	小泉良空	双葉プロジェクト		
神崎克訓	鹿島建設	中島仁子	東京電力復興本社				
杉山佳樹	鹿島建設	花井真里奈	東京電力復興本社				
演劇WS	2022/7/5	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC	成果発表会 (みらい シアター)	2022/10/26	青木淑子	NPO法人3・11を語る会
		河野悟	NPO法人PAVLIC			平山勉	ふたばいんふお
		北村耕治	NPO法人PAVLIC			長田滉央	檜葉町
		植浦菜保子	NPO法人PAVLIC			長田真優	檜葉町
		宮崎悠里	NPO法人PAVLIC			田中秀昭	福島土木総合事務所
		有吉宣人	NPO法人PAVLIC			神崎克訓	鹿島建設
		金恵玲	NPO法人PAVLIC			杉山佳樹	鹿島建設
		村田牧子	NPO法人PAVLIC				
		石本	NPO法人PAVLIC				

2年「未来創造探究」お世話になった方々

探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職	探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職
原子力防災ゼミ	2022.7.12	阿部 知示	お食事処ふたば	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.6.11	鈴木正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 (川)
原子力防災ゼミ	2022.7.25	高倉宮司	初發神社 宮司	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.6.11	賀澤正	NPO法人浅見川ゆめ会議 (川)
原子力防災ゼミ	2022.7.26	山根 辰洋	一般社団法人双葉郡観光研究協会	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.6.17	鈴木正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 (ホテル)
原子力防災ゼミ	2022.9.23	山根 辰洋	一般社団法人双葉郡観光研究協会	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.7.2	鈴木正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 (川)
原子力防災ゼミ	2022.9.23	川上 友聖	一般社団法人双葉郡観光研究協会	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.8.6	鈴木正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 (川)
原子力防災ゼミ	2022.9.21	根本 さと子	広野町社会福祉協議会	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.10.1	鈴木正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 (川)
原子力防災ゼミ	2022.10.11	根本 さと子	広野町社会福祉協議会	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.11.12	鈴木正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 (ヤマメ)
原子力防災ゼミ	2022.10.11	芳賀 一江	広野町民	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.7.	遠藤裕和	葛尾村役場 復興推進室 産業創出係
原子力防災ゼミ	2022.12.13	新妻 竹彦	久之浜港漁師	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.7	八嶋哲也	葛尾村役場 復興推進室 復興推進係
原子力防災ゼミ	2022.12.19	阿部 加奈子	広野町役場	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.8.8	遠藤裕和	葛尾村役場 復興推進室 産業創出係
原子力防災ゼミ	2023.1.7	山根 辰洋	一般社団法人双葉郡観光研究協会	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.8.8	八嶋哲也	葛尾村役場 復興推進室 復興推進係
原子力防災ゼミ	2023.1.22	根本 幸一	北茨城平潟港漁師	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.8.9	遠藤裕和	葛尾村役場 復興推進室 産業創出係
原子力防災ゼミ	2023.1.24	渡邊 美夏	かれーやYUU	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.8.9	八嶋哲也	葛尾村役場 復興推進室 復興推進係
原子力防災ゼミ	2023.1.24	根本 正俊	かれーやYUU	再生可能エネルギー-探究ゼミ	複数回	志賀風夏	天山文庫管理人
原子力防災ゼミ	2023.1.29	松岡 俊二	早稲田大学	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2022.10.15	石井宏和	釣り船 長栄丸 船長
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2022.7.25	今井夕華	多摩美術大学テキスタイルデザイン専攻卒業生	再生可能エネルギー-探究ゼミ	複数回	岩田雅光	公益財団法人ふくしま海洋科学館
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2022.8.17	深澤諒	結のはじまり	再生可能エネルギー-探究ゼミ	2023.1.31	遠藤健次	福島大学大学院
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2022.9.27	東京電力廃炉資料館	東京電力廃炉資料館	スポーツと健康探究ゼミ	複数回	久保 翔太	本校トレーナー
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2022.10.18	佐藤悠希	Linderwood University (本校卒業生)	スポーツと健康探究ゼミ	2022.1	明石 重周	Jヴィレッジ
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2022.10.8	岡森綾子	すえつぎcafe	スポーツと健康探究ゼミ	2022.12		キャニオンワークス
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2022.11.15	猪狩 僚	いわき市市役所職員	スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野元気教室
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2022.11.15		いつだれkitchen	スポーツと健康探究ゼミ	複数回	四家先生 ※確認中	接骨院 ※正式名確認中
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.1.24	東あすか	一般社団法人まちづくりなみえ	スポーツと健康探究ゼミ	複数回	榎本 佳治	バドミントン部チームドクター
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.1.2	森雄一朗	一般社団法人ならはみらい(ならはCANvas)	健康と福祉探究ゼミ	2022.8.14	齋藤 俊蔵	福島パラ陸上競技会 事務局
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.1.2	日野涼音	一般社団法人ならはみらい(ならはCANvas)	健康と福祉探究ゼミ	2022.11.15	猪狩 僚	いわき市市役所職員
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.2.2	小島和美	caféふう	健康と福祉探究ゼミ	2022.8.6	三戸 花菜子	さんかく交流会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.2.2.7	齋藤裕喜	YONOMORI DENIM	健康と福祉探究ゼミ	2022.8.11	三戸 花菜子	さんかく交流会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2023.2.2.7	小林奨	YONOMORI DENIM	健康と福祉探究ゼミ	2022.11.15	三戸花菜子	さんかく交流会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	青木淑子	NPO法人 富岡町3・11を語る会	健康と福祉探究ゼミ	2022.7.12	園長	広野こども園「ひろのパーク」
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	菅波香織	弁護士法人いわき法律事務所	健康と福祉探究ゼミ	複数回	遠藤まめた	一般社団法人にじーす代表
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	栗城愛梨	NPO法人 富岡町3・11を語る会	健康と福祉探究ゼミ	複数回	前川直哉	福島大学教育推進機構高等教育部准教授
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	磯辺吉彦	特定非営利活動法人広野いわきオリブプロジェクト事務局長	健康と福祉探究ゼミ	複数回	猪狩瑠衣	榎葉わんぱくぼーく
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	野地雄太	株式会社Beyond Lab	健康と福祉探究ゼミ	複数回	小河原桃香	ララジャンスいわき
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.9.10	佐藤 亜紀	HAMADOORI13	健康と福祉探究ゼミ	複数回	渡部沙織	ベルヴィ郡山館
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.9.10	徳田 辰吾	株式会社ネクサスファームおおくま	健康と福祉探究ゼミ	複数回	下枝浩徳	葛力創造舎
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.11.22	佐藤 亜紀	HAMADOORI13	健康と福祉探究ゼミ	複数回	金光弦太	磐梯山観光職(元猪苗代湖ゲストハウス)
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.10.11	松崎 康弘	特定非営利活動法人いわきオリブプロジェクト 代表				
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.11.1	今泉 英哲	広野町立広野中学校 教頭				
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.12.14	仁井田 務	株式会社マルト商事 商品本部				
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.12.14	見城 周平	株式会社マルト商事 IB部 課長				
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.9.27	芳賀 吉幸	有限会社フロンティア広野 代表取締役社長				
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.12.20	市川 稔	株式会社マルト商事 生鮮本部 部長				
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.12.20	仁井田 務	株式会社マルト商事 商品本部				
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2022.12.20	見城 周平	株式会社マルト商事 IB部 課長				
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2023.1.17	今泉 英哲	広野町立広野中学校 教頭				
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2023.1.17	松崎 康弘	特定非営利活動法人いわきオリブプロジェクト 代表				

3年「未来創造探究」お世話になった方々

探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職	探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職
原子力防災探究ゼミ	複数回	正木里奈		再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.6.30	渡邊 友歩	浜江町役場産業振興課新エネルギー推進係副主査
原子力防災探究ゼミ	複数回	川瀬吏恵	カタリバ	再生可能エネルギー探究ゼミ		館長 磯辺吉彦	多世代交流スペースぶらっとあっと
原子力防災探究ゼミ	複数回	米田若菜	カタリバ	再生可能エネルギー探究ゼミ			
原子力防災探究ゼミ	複数回	中元陽	カタリバ	アグリビジネス探究ゼミ	2022.7.12	則藤 孝志	福島大学 農学群職農学類
原子力防災探究ゼミ	複数回	青砥和希	カタリバ	アグリビジネス探究ゼミ	2022.11	三戸 豪士	GSauto JAPAN・ANDANTE 代表
原子力防災探究ゼミ	複数回	岩田雅光	アクアマリンふくしま	アグリビジネス探究ゼミ	2022	伊丹 雅昭	にこにこバラ園 園主
原子力防災探究ゼミ	複数回	山田美香	早稲田大学研究員	アグリビジネス探究ゼミ	2021	古林 秀雄	株式会社レイス 工場長
原子力防災探究ゼミ	複数回	清野幸恵	福島県双葉郡復興ビジョン	アグリビジネス探究ゼミ	2021	國井 佳奈	株式会社レイス 研究部係長
原子力防災探究ゼミ	複数回		双葉郡小学生絆づくり交流実行委員会	スボーツと健康探究ゼミ	2022年1月	BETTY	FMIいわき
原子力防災探究ゼミ	複数回	磯辺吉彦	ちのまプロジェクトNPO法人いわきふるもろーじョンプロジェクトチーム	スボーツと健康探究ゼミ	2022年1月	飛田 国洋	FMIいわき
原子力防災探究ゼミ	複数回	青木祐介	ちのまプロジェクト	スボーツと健康探究ゼミ	2022年1月	安部 正明	FMIいわき
原子力防災探究ゼミ	複数回	大場美奈	ちのまプロジェクト	スボーツと健康探究ゼミ	2022年7月	教員	広野小学校
原子力防災探究ゼミ	複数回		富岡わんぱくパーク	スボーツと健康探究ゼミ	2022.5		広野町民
原子力防災探究ゼミ	複数回		富岡町さくらスポーツ	スボーツと健康探究ゼミ	2022.9	教員	ふたば未来学園高校
原子力防災探究ゼミ	複数回	平山勉	ふたばいんふお	スボーツと健康探究ゼミ	2022.4	職員	広野町福祉センター
原子力防災探究ゼミ	複数回	青木淑子	NPO法人富岡町3.11を語る	スボーツと健康探究ゼミ	2022.12.5	山田さん	いわきFC
原子力防災探究ゼミ	複数回		富岡町観光協会	スボーツと健康探究ゼミ	2022.7	山田さん	学校勤務
原子力防災探究ゼミ	複数回		福島中央テレビ	スボーツと健康探究ゼミ	2022.6	担当者	ひろの元気教室
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋雅裕	株式会社サン・クリーン	スボーツと健康探究ゼミ	2022.5	遠藤	みかんクラブ
原子力防災探究ゼミ	複数回		広野町駅伝チーム	スボーツと健康探究ゼミ	2022.9	職員	広野町役所
原子力防災探究ゼミ	複数回	菅波香織		スボーツと健康探究ゼミ	2022.7	山田さん	学校勤務
原子力防災探究ゼミ	複数回	田子恵子	放デイU.AND舎放デイI.AND舎	スボーツと健康探究ゼミ	2022.6	遠藤さん	広野町役場総務課
原子力防災探究ゼミ	複数回	吉川竜太	田人町地域おこし協力隊	スボーツと健康探究ゼミ	2022.9	山田さん	早稲田大学教授
原子力防災探究ゼミ	複数回	加賀博行	広野町教育委員会	スボーツと健康探究ゼミ	2022.6	半沢さん	みかんクラブ
原子力防災探究ゼミ	複数回		東日本大震災・原子力災害伝承館	スボーツと健康探究ゼミ	2022.9	小学校先生方	広野小学校
原子力防災探究ゼミ	複数回	志賀	広野町役場	スボーツと健康探究ゼミ	2022.6.13	根本 大輝	広野町体育館職員
原子力防災探究ゼミ	複数回	黒田	広野町役場	スボーツと健康探究ゼミ	2022.6	根本 大輝	広野町体育館職員
原子力防災探究ゼミ	複数回	島村守彦	いわきおてんとSUN	スボーツと健康探究ゼミ	2022.6	根本 大輝	広野町体育館職員
原子力防災探究ゼミ	複数回		広野町役場	スボーツと健康探究ゼミ	2022.7	根本 大輝	広野町体育館職員
原子力防災探究ゼミ	複数回	安島大司	株式会社マルチ商事	スボーツと健康探究ゼミ	2022.8	根本 大輝	広野町体育館職員
原子力防災探究ゼミ	複数回	三浦利久	株式会社マルチ商事	スボーツと健康探究ゼミ	2022.9.25	平 僚太	株式会社 ル・プロジェ
原子力防災探究ゼミ	複数回	永久保大樹	パティスリーパールノエル	健康と福祉探究ゼミ	2022.7.5		南相馬市石神生涯学習センター
原子力防災探究ゼミ	複数回	今泉俊昭		健康と福祉探究ゼミ	2022.7.30	江本 節子	NPO法人はらまちクラブ
原子力防災探究ゼミ	複数回	辺見珠美		健康と福祉探究ゼミ	2022.8.5	江本 節子	NPO法人はらまちクラブ
原子力防災探究ゼミ	2022.8.30	住本葵	オイテル株式会社	健康と福祉探究ゼミ	2022.10.15	江本 節子	NPO法人はらまちクラブ
原子力防災探究ゼミ	2022.9月	磯辺吉彦	わいわいプロジェクト	健康と福祉探究ゼミ	2022.7.5	前川 直哉	福島大学
原子力防災探究ゼミ	2022.9月	青木祐介	わいわいプロジェクト	健康と福祉探究ゼミ	複数回		広野町立広野小学校
原子力防災探究ゼミ	2022.4.29	浅尾芳宣	いわきアカデミア総監督、講師、アニメーター	健康と福祉探究ゼミ	複数回		広野町立広野中学校
原子力防災探究ゼミ	2022.4.29	川崎逸郎	いわきアカデミア講師、アニメーター	健康と福祉探究ゼミ	複数回	山田 美香	早稲田大学
原子力防災探究ゼミ	2022.9.14	小澤建二	双葉郡大熊町立学び舎ゆめの森	健康と福祉探究ゼミ	2022.7.12		広野町立広野小学校「ひろの元気教室」
原子力防災探究ゼミ	2022.7～8月		相馬市立図書館	健康と福祉探究ゼミ	2022.6.30	中島 徹	NPO法人広野みかんクラブ かけっこ教室
原子力防災探究ゼミ	2022.7～8月		南相馬市立図書館	健康と福祉探究ゼミ	2022.6.30	半澤 悠司	NPO法人広野みかんクラブ かけっこ教室
原子力防災探究ゼミ	2022.9月		LVMH子どもアート・メゾン	健康と福祉探究ゼミ	複数回	磯辺 吉彦	NPO法人広野わいわいプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	2022.9月		相馬市教育委員会 生涯学習課	健康と福祉探究ゼミ		遠藤 浩	広野町議会議員
原子力防災探究ゼミ	複数回	松岡俊二	早稲田大学教授・広野未来リサーチセンター	健康と福祉探究ゼミ	複数回		広野町役場環境防災課
原子力防災探究ゼミ	複数回	菅波香織	いわき法律事務所・未来会議事務局	健康と福祉探究ゼミ	複数回		多世代交流スペースぶらっとあっと
原子力防災探究ゼミ	複数回	高垣慶太	早稲田大学 学生 「KNOW NUKES TOKYO」	健康と福祉探究ゼミ	複数回		NPO法人広野わいわいプロジェクト まちなかマルシェ
原子力防災探究ゼミ	複数回	倉重水優	早稲田大学 学生 「NO YOUTH NO JAPAN」				
原子力防災探究ゼミ	複数回	松川希映	早稲田大学 学生				
原子力防災探究ゼミ	複数回	崎田裕子	1F廃炉の先研究会 副代表				
原子力防災探究ゼミ	複数回	松本孝一	ドローン企画一級建築士事務所				
原子力防災探究ゼミ	複数回		Twitterの方々				
原子力防災探究ゼミ	複数回	鈴木倅輝	広島県内 高校生				
原子力防災探究ゼミ	複数回		大熊町の方々				
原子力防災探究ゼミ	2022.7月	ひろぼ一課担当者	広野町市役所				
原子力防災探究ゼミ	2022.3月	吉田恵美子	NPO法人ザ・ピープル				

4. 1 ルーブリック評価

本校では生徒の資質・能力をはかる指標のひとつとして独自のルーブリックを作成し、定期的に評価を行っている。ルーブリックは本校で育成したい生徒像でもあり、これを用いた面談も行いながら、総括的評価としてだけでなく、形成的評価として活用し、生徒の目標設定等に活かしている。ここではルーブリックの推移を分析し、本校生の特徴や学年ごとの特徴等について考察する。

(1) はじめに

平成27年度に開校した本校では、「未来創造型教育」を目指すグランドデザインの下、開校直後4月、教員全員による教員研修会(本校では「未来研究会」と称する)を実施した。県下全域から赴任した教員集団はそれぞれの想いを抱きスタートを切った。そこで、新しい学校・教育としての「育成したい生徒像」としての共通イメージを持ち、互いに意思疎通を深めていくために、ワークショップ形式での意見交換会を行った。

開校当時、入学してきた子供たちの8割は原発事故で避難を強いられた地域の出身であった。子供たちの状況は多様だが、数カ所の避難先を転々とし、学力に課題を抱えている子供も多かった。また、避難する中で不登校となってしまった生徒も存在した。一方で、地元への愛着や、世界からの支援に対する感謝の気持ちから、社会に貢献したいという意欲の強さも感じられた。「この子供たちが卒業する3年後に、どのような姿になっていて欲しいか」教職員全員が付箋に書き込み、出し合いながら議論を重ねた。

研修後、「育成したい生徒像」に必要な「育成したい能力」を分析し、共通項をまとめると同時に、本校の校訓である「自立」「創造」「協働」を意識し、福島県双葉郡教育復興ビジョン、OECD キーコンピテンシー等の内容を踏まえ、本校のルーブリックを作成した(巻末関係資料参照)。

ルーブリックの言葉の一つ一つに、教職員の感覚や想いが反映されている。例えば、「寛容さ～異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとする事ができる」という項目である。この地域は今、放射線の安全性に関する考えが違う者同士の衝突や、避難した人と帰還した人との間の気持ちのすれ違いなどに直面している。考えの違う人を排除しても地域復興はままならない。仕事をする上でも生活をすることも、考えの違う他者との関わり合い無くして成り立たない。考えの違う人を説得していく交渉力と

言うより、異なる考えも受け入れ、ユーモアを持って接し、包み込んでいく「あたたかさ」が必要であると私たち教職員は考えた。この力が土台となって、別の項目に定義された「他者との協働力」が発揮される。

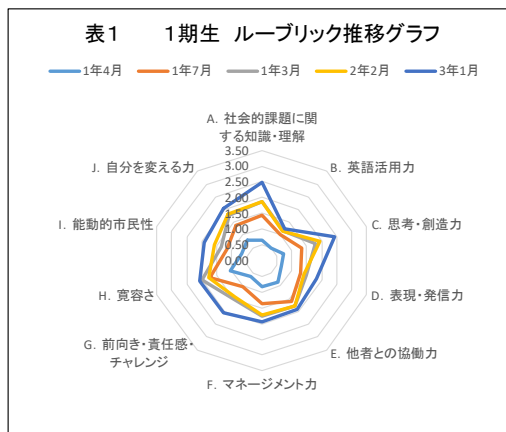
また、「表現・発信力～どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる」という項目も同じように教職員の想いが詰まっている。震災や原発事故のバックグラウンドを否応なく背負ってしまった子供たちは、世界中のどこに行っても意見を求められる。その時、言葉を発せず沈黙すれば、風化や風評に繋がっていく。例え突然指名されたときでも、自分の言葉で語れることが大切だ。話し相手のバックグラウンドも考えながら、定量的なデータの説明や定性的な復興のストーリーを組み合わせ、情緒にも働きかけながら相手の心を動かす力が求められる。

開校して真っ先に行ったのが、このルーブリックの設定である。目指す資質・能力を明確化して、その目標に向けて学校をあげて取り組むために、よそから借りてきた表面的な言葉では無く、自分たちの視点・言葉で定義することを重視した、学校全体の欠かせない出発点である。指導の重点の設定も、授業の展開も、学習の評価も、学校評価も、このルーブリックと関連づけながら展開していくことを目指している。

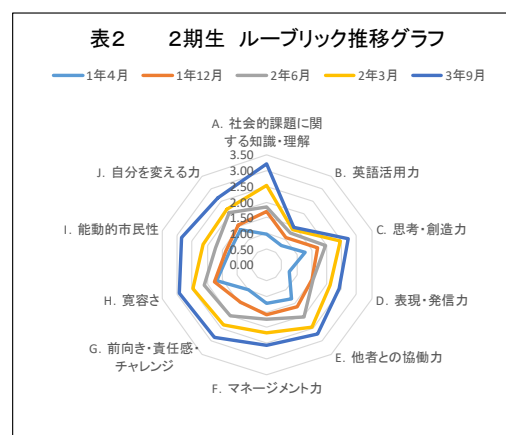
開校から7年が経過し、ルーブリック評価は学校に定着している。当初は年度終了時に生徒がどの程度資質能力を伸ばしてきたか検証する、いわゆる「総括的評価」として使ってきた。しかし、ルーブリック評価は本来生徒個人が活用すべきものであるという考え方から、生徒ひとりひとりにフィードバックし、その先の目標設定等に活かすような「形成的評価」として使うため、ルーブリック面談を導入した。面談は手間がかかるものの、メタ認知の向上にも役立っていると思われ、生徒、教員共に好意的に捉えている。また、2年間かけてルーブリックの改訂を行い、令和3年度からCの思考・創造力をC-1思考力、C-2創造力と分けて運用している。

(2) 1期生（平成27年度入学生）から8期生（令和4年度入学生）のルーブリック評価（表1～8, 図1～8）

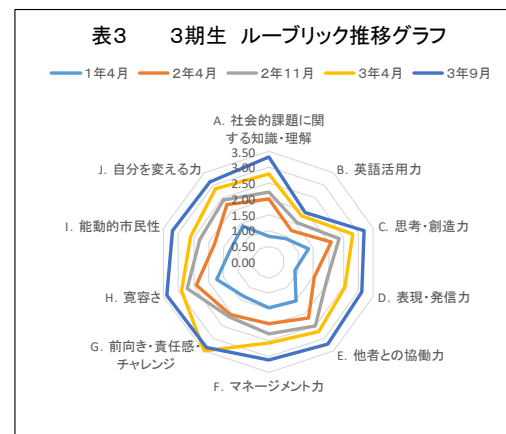
	1年4月	1年7月	1年3月	2年2月	3年1月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.65	1.43	1.87	1.88	2.48	
B. 英語活用力	0.50	1.00	1.17	1.14	1.26	
C. 思考・創造力	0.74	1.32	1.78	1.94	2.43	
D. 表現・発信力	0.64	1.28	1.47	1.42	1.83	
E. 他者との協働力	0.85	1.59	1.77	1.80	1.90	
F. マネージメント力	0.84	1.37	1.75	1.71	1.96	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	0.62	1.03	1.50	1.43	2.04	
H. 寛容さ	1.06	1.73	1.98	1.77	2.07	
I. 能動的市民性	0.66	1.17	1.36	1.57	1.91	
J. 自分を変える力	0.78	1.38	1.78	1.81	2.04	
平均	0.73	1.33	1.64	1.65	1.99	



	1年4月	1年12月	2年6月	2年3月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.98	1.70	1.85	2.52	3.20	
B. 英語活用力	0.78	1.05	1.25	1.39	1.46	
C. 思考・創造力	1.28	1.70	1.98	2.47	2.71	
D. 表現・発信力	0.75	1.51	1.54	2.10	2.40	
E. 他者との協働力	1.35	1.66	2.04	2.45	2.73	
F. マネージメント力	1.23	1.60	1.73	2.17	2.55	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.00	1.45	2.00	2.35	2.86	
H. 寛容さ	1.66	1.77	2.11	2.47	2.95	
I. 能動的市民性	1.27	1.39	1.73	2.13	2.84	
J. 自分を変える力	1.40	1.56	2.04	2.19	2.63	
平均	1.17	1.54	1.83	2.22	2.63	



	1年4月	2年4月	2年11月	3年4月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.83	1.99	2.21	2.80	3.33	
B. 英語活用力	0.93	1.23	1.54	1.79	1.95	
C. 思考・創造力	1.34	2.07	2.37	2.81	3.18	
D. 表現・発信力	0.89	1.51	1.92	2.55	3.09	
E. 他者との協働力	1.51	2.18	2.52	2.71	3.21	
F. マネージメント力	1.45	1.96	2.27	2.58	3.10	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	2.06	2.15	3.47	3.35	
H. 寛容さ	1.73	2.39	2.70	2.92	3.39	
I. 能動的市民性	1.26	1.80	2.29	2.61	3.21	
J. 自分を変える力	1.39	2.25	2.43	2.86	3.15	
平均	1.27	1.94	2.24	2.71	3.10	



	1年4月	2年4月	2年11月	3年5月	3年10月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.69	1.71	1.96	2.48	2.83	
B. 英語活用力	0.89	1.29	1.28	1.59	1.70	
C. 思考・創造力	1.27	1.68	2.11	2.49	2.77	
D. 表現・発信力	1.04	1.40	1.75	2.10	2.36	
E. 他者との協働力	1.42	1.80	2.11	2.59	2.68	
F. マネージメント力	1.49	1.71	2.04	2.43	2.64	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.19	1.54	1.84	2.40	2.72	
H. 寛容さ	1.69	2.12	2.26	2.63	2.95	
I. 能動的市民性	1.38	1.63	2.09	2.39	2.81	
J. 自分を変える力	1.51	1.95	2.17	2.48	2.78	
平均	1.26	1.68	1.96	2.36	2.62	

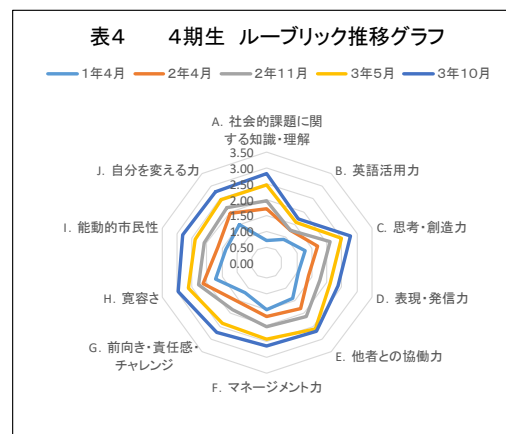


表5 5期生 ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年6月	3年1月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.43	1.70	1.94	2.98	3.04	
B 英語活用力	1.11	1.44	1.06	1.71	1.95	
C 思考・創造力	1.91	2.18	2.04	2.87	3.13	
D 表現・発信力	1.52	1.72	1.64	2.51	2.69	
E 他者との協働力	1.93	2.02	1.94	2.88	3.07	
F マネージメント力	1.83	1.97	1.77	2.77	2.87	
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.80	2.09	1.82	2.88	3.14	
H 寛容さ	2.25	2.31	2.38	3.15	3.15	
I 能動的市民性	1.62	1.81	1.78	2.81	2.92	
J 自分を変える力	2.16	1.98	1.91	3.01	3.04	
平均	1.76	1.92	1.83	2.76	2.90	

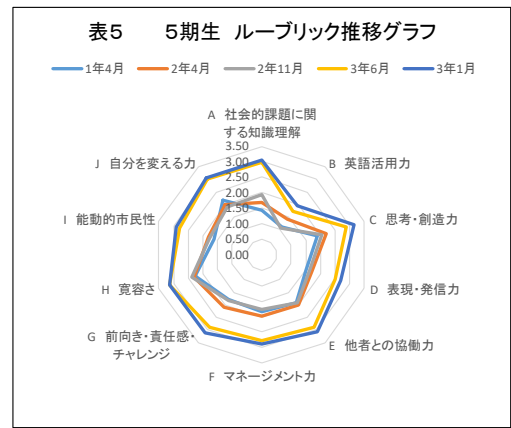


表6 6期生 ルーブリック推移表	1年4月	1年11月	2年6月	2年10月	3年5月	3年9月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.69	1.89	2.24	2.54	2.80	3.17	
B 英語活用力	1.23	1.27	1.49	1.75	1.91	1.95	
C 思考・創造力	2.05	2.07	2.45	2.67	2.85	3.18	
D 表現・発信力	1.78	1.72	1.92	2.29	2.63	2.94	
E 他者との協働力	2.15	2.20	2.23	2.51	2.79	3.14	
F マネージメント力	1.96	1.98	2.15	2.49	2.77	3.01	
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.20	1.99	2.39	2.45	2.87	3.31	
H 寛容さ	2.58	2.44	2.58	2.84	3.08	3.22	
I 能動的市民性	2.07	1.89	2.02	2.48	2.80	3.08	
J 自分を変える力	2.16	2.16	2.42	2.67	2.85	3.26	
平均	1.99	1.96	2.19	2.47	2.73	3.03	

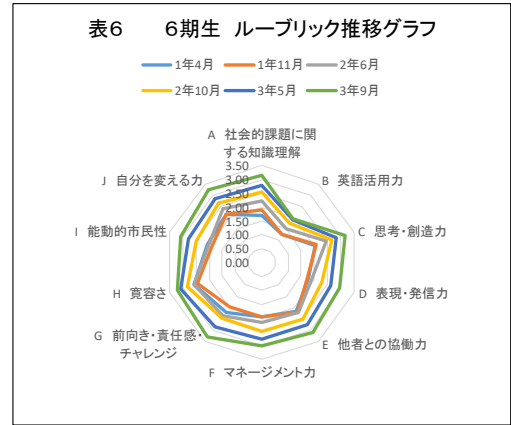


表7 7期生 ルーブリック推移表	1年6月	1年1月	2年6月	2年11月		推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.16	1.17	1.43	1.63		
B 英語活用力	1.00	1.01	1.02	1.17		
C-1 思考力	1.55	1.09	1.35	1.83		
C-2 創造力	1.62	1.01	1.38	1.77		
D 表現・発信力	1.21	1.22	1.22	1.57		
E 他者との協働力	1.50	1.47	1.61	1.72		
F マネージメント力	1.37	1.26	1.37	1.80		
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	1.14	1.11	1.69		
H 寛容さ	1.77	1.44	1.77	1.98		
I 能動的市民性	1.30	1.14	1.28	1.59		
J 自分を変える力	1.52	1.37	1.56	1.81		
平均	1.39	1.21	1.37	1.69		

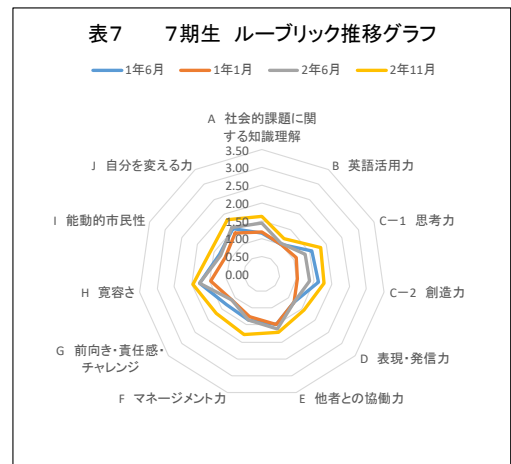
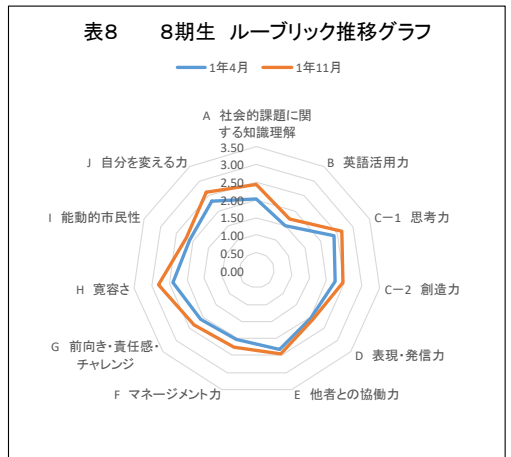
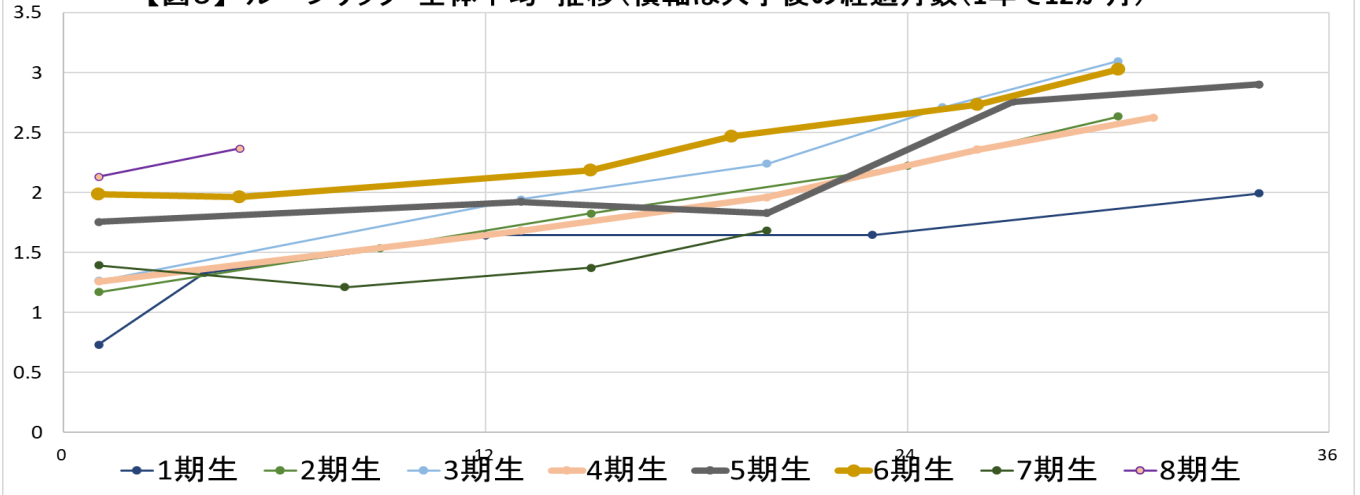


表8 8期生 ルーブリック推移表	1年4月	1年11月				推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	2.03	2.42				
B 英語活用力	1.50	1.71				
C-1 思考力	2.40	2.63				
C-2 創造力	2.26	2.47				
D 表現・発信力	2.04	2.10				
E 他者との協働力	2.32	2.44				
F マネージメント力	2.02	2.24				
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.08	2.36				
H 寛容さ	2.38	2.83				
I 能動的市民性	2.08	2.19				
J 自分を変える力	2.34	2.64				
平均	2.13	2.37				



【図9】 ルーブリック 全体平均 推移(横軸は入学後の経過月数(1年で12か月))



(3) 1期生から7期生の平均値の推移

1～8期生のルーブリックの推移について、値の全体平均値の推移グラフを(2)図9に示す。1～4期生までは1年次から3年次まで順調に値が高まっているのに対し、5～6期生は、1年次最初から値が高く、その状態をほぼ維持したまま推移している。6・7期生については、入学最初のルーブリックの数値よりも年度の途中でいったん数値が下がる傾向がみられる。これについては、1年次の演劇の学習を通じて、自分をメタな視点で見つめなおしたときに、「自分のできなさ」を厳しく現状分析できるようになったことに起因すると考えられる。

これまでのところ、3期生が3年最後の値としては最も高くなっている。2年次後半から3年次にかけて探究学習が本格的に進んでいく時期に大きく上昇する傾向があるが、6期生についてはどの時期においても比較的安定的に数値を伸ばしてきた。最終目標に掲げるルーブリックの平均3.5はかなり野心的な数値ではあるものの、今の6期生が取り組んできた探究学習を考えると、最終数値についてはもう少し上昇が期待できた。特に6期生は入学時より3年間コロナ禍の時期と重なっていた。様々な制限により自分たちが思い描いていた探究学習から変更を余儀なくされた場面も多かったが、創意工夫をしながら諦めずに探究学習に取り組んでいた生徒が多かった。このような状況はG 前向き・責任感・チャレンジ(2.20→3.31)やJ 自分を変える力(2.16→3.26)などの数値に現れている。8期生については、一貫生がいる初めての学年となった。中学校からルーブリックに3年間取り組んでいる生徒を中心に、最初のルーブリックからこれまでの年次の数値を上回っているデータが出ている。この推移を見ながら、実際の能力伸長について見極めていきたい。

(4) 8期生(令和4年度1年生)の評価

8期生のルーブリックは、全体的に最初から数値が高い。これは、中高一貫1期生(一貫生)が高校進学した学年であることが大きな影響を与えている。一貫生は、中学の3年間、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークショップや哲学対話を行っていたため、「表現・発信力」や「創造力」、「他者との協働」、「思考力」の基礎的な力が備わっている。そんな生徒たちが8期生の4割を占めており、地域創造と人間生活や探究の授業において、自分と違う他者の意見を否定せず、共に対話しながら物事の本質を捉えたり、自己を開放し他者と協働する雰囲気を作ったりすることができたことが、結果として全体の数値に現れたと言える。

一番大きく数値が伸びたところは、①寛容さ(+0.45)、②社会的課題に関する知識理解(+0.39)である。①については、生徒から「人それぞれ考え方は違う、ということ忘れずに接するように心掛けた」「仲の良い友達とは考え方が似ているので話していて楽だが、演劇で普段話さない人と話すことで全く違う考えを知ることができ、面白かった」という意見が出た。②は、双葉郡バスツアーや取材等で地域に出て、様々な人達の人生に触れたことで、自分の中に課題意識が芽生えたようである。

高校1年次後半より、未来創造探究が始まった。今後の課題は、生徒たちが探究を通して能動的市民性を身につけるかである。さらに地域の課題を世界の課題と結びつけ、世界に発信する英語力もより一層身につけさせたい。

(5) 7期生(令和4年度2年生)の評価

7期生のルーブリック評価平均値の推移は、他年次とは大きく異なる傾向で推移している。入学後すぐ(1年次6月)の評価から、2回目(1年次11月)にかけて、今までほとんどの年次が上昇傾向にあったにもかかわらず、平均値が下がってしまっていた。これは生徒一人ひとりの自己評価が低いことに起因していると考えられる。未来創造探究の授業においてゼミ配属が決定した時点(2年次6月)までは、例年と比較しても低い数値が出ていたが、探究活動を進めプレ発表を実施した後(2年次11月)は、A~Jまですべての項目が今までで最も高い数値となり、大きい上昇傾向を見せた。これは探究活動と発表会でのフィードバックがある種のスモールステップとなり、多くの生徒が達成感を得ることができたことが最も大きな要因であると考えられる。

この結果をもとに、探究の授業内ではルーブリック面談を実施した。各ゼミ担当者が分担して、ゼミ内の生徒と1対1の面談を行うものである。生徒の自己評価が低いという傾向を踏まえ、面談前にワークシートを配布し、これまで自分が最も頑張った内容や、担当教員と話したい内容をまとめてから面談に臨むよう働きかけた。また、客観的に見て評価数値が低すぎると思われる部分について、生徒の具体的な取り組みや、PROG-Hテスト(河合塾主催:「リテラシー」「コンピテンシー」の両面から、情報収集力や課題発見力、社会で普遍的に必要とされる力を測定する)の分析結果を踏まえながら振り返った。

上昇傾向にはあるものの、全体的に見たときの数値はまだ低い。このまま3年次に向けて順調に活動を進め、進路に対する意識が高まっていけば、さらなる達成状況が期待できる。生徒が達成経験を積み重ね、自分に自信が持てるようにサポートしていく必要があるだろう。

(6) 6期生(令和4年度3年生)の評価

6期生は高校2年次までに4回、今年度2回、計6回ルーブリック評価を行っている。値を表6、グラフを図9に示した。6期生の推移は5期生の推移と似ている。時期を追うにつれ、各項目が少しずつ伸長し、3年次最後には、英語活用能力を除きほとんどが3.0~3.5の間の数値となった。数値が高い順に、G前向き・責任感・チャレンジ(3.31)、J自分を変える力(3.26)、H寛容さ(3.22)、C思考力・創造力(3.18)、E他者との協働能力(3.14)、I能動的市民性(3.08)となった。一方、英語活用能力は1.95と低い数値に留まった。経年比較では、6期生の最終平均の3.03という数値は、3期生の3.10

に次いで高い数値となった。英語活用能力については、過去で最も高かった3期生および5期生と同様だった。

1年次は、旧課程対象の1期生~7期生の中で一番高い数値で始まったが、11月には逆に全体的に下がっている。その中でも高い数値だったのは、H寛容さだった。

2年次になり個人の探究が本格的に始まり、数値が上昇し始めている。6月の時点では2.19、11月の時点では2.47となり、10月後半に実施した中間発表に向けてそれぞれの探究活動が進んだように思われる。6期生は新型コロナの影響により、外部での活動にかなりの制約があったが、ゼミ担当教員の適格な助言やオンラインの活用により、活動を進められた結果であろう。特に、2年次においては、ゼミ担当者の月次会に力を入れ、全体での目線合わせ、カタリバからの助言、過去の事例の研究、ゼミ内生徒の進捗の共有等を行った。2年次最後の数値として高い資質・能力としては、H寛容さ(2.84)、C思考・創造力(2.67)、J自分を変える力(2.67)、A社会的課題に関する知識理解(2.54)が挙げられる。また、2年次に数値の伸長が著しかった資質・能力は、I能動的市民性(+0.46)、D表現・発信力(+0.37) Fマネジメント能力(+0.34)が挙げられる。

3年次も、2年次同様コンスタントに数値が上昇している。5月はプレ発表会直後、9月は最終発表会直後の数値である。3年次は2年間に渡る探究活動の総まとめの時期であり、それぞれが課題解決のアクションや発表会に向けての内容のまとめ等を行った。3年次の全体の平均値は2.73から3.03に上昇した。最終的な数値が高くなった資質・能力は前述の通りであるが、3年次に数値の伸長が著しかった資質・能力は、G前向き・責任感・チャレンジ(+0.44)、J自分を変える力(+0.41)、A社会的課題に関する知識理解(+0.37)、E他者との協働能力(+0.35)が挙げられる。

1年次~3年次を通じ最も伸長した資質・能力は、A社会的課題に関する知識理解(+1.48)、D表現・発信力(+1.16)、C思考・創造力(+1.13)である。

4. 2 ルーブリック評価の定量的分析 (アクセンチュア株式会社)

本校において独自に設定したルーブリック評価に基づき、定期的に測定してきた。その結果を基に、アクセンチュア株式会社様と一般社団法人次世代教育・産官学民連携機構 (CIE) 様の視点から生徒の成長、変容を客観的に確認することに取り組んだ。その結果、全体的に成長している一方で、指標ごとの伸びの大きさに違いが確認できた。主に社会的課題に関する知識・理解、思考・創造力、前向き・責任感・チャレンジ、能動的市民性といった要素が成長しており、未来創造探究等の活動を通じた影響が現れていると考えられる。実際の活動内容と分析結果を比較することで、次年度以降のカリキュラム検討に活用することができる。

(1) はじめに

本校では、指導の重点の設定、授業の展開、学習評価、学校評価等をルーブリックと関連づけながら展開することを目指している。ルーブリックの指標、レベル設定は全教員で議論を重ね、自分達の言葉で定義した。4 カテゴリー(「知識」、「技能」、「人格」、「自らを振り返り変えていく力」)、10 指標を定義し、それぞれ5段階のレベル(1-5)を絶対評価になるよう設定した。

■知識: A 社会的課題に関する知識・理解、B 英語活用力

■技能 (スキル・コンピテンシー): C 思考・創造力 (7 期生からは C-1 思考力、C-2 創造力に分離)、D 表現・発信力、E 他者との協働力、F マネージメント力

■人格 (キャラクター・センス): G 前向き・責任感・チャレンジ、H 寛容さ、I 能動的市民性

■自らを振り返り変えていく力: J 自分を変える力

<データ取得タイミング>

年度/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
令和2年度	6期生 ①							②				
令和3年度	6期生		③				④				②	
令和4年度	6期生	⑤				⑥						
	7期生		③				④					
	8期生	①					②					

測定においては、自己評価に加え、生徒間ピアレビューを実施することで評価の客観性をもたせている。

データ分析はプロボノとして関わってアクセンチュア株式会社に依頼し、次項以降

のデータ分析、示唆出しを行った。(OECD 東北スクール、地方創生イノベーションスクール 2030 東北クラスターにおいても福島大学と協働でルーブリック評価をしており、その知見も活用して実施していった。)

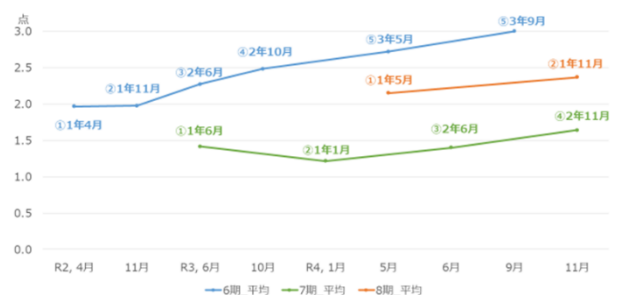
(2) データ分析の概要

今回の分析対象は、全ての測定時に回答している学生のみとした (6 期生: 計 113 名。入学時から卒業までの推移を見るとともに、6 期生と 7 期生、8 期生を比較しながら、指標ごとの傾向、生徒の系列ごとの傾向、海外研修有無別の傾向などの分析を進めていった。

1) 6 期生・7 期生・8 期生の平均値の推移

6 期生は 1 年後半までの到達度が低かったものの、新旧に伴い大きく点数を伸ばした。7 期生では点数の伸びは 2 年への新旧とともに確認された。一方 8 期生は、1 年時の点数がいずれの学年よりも高い水準であった。

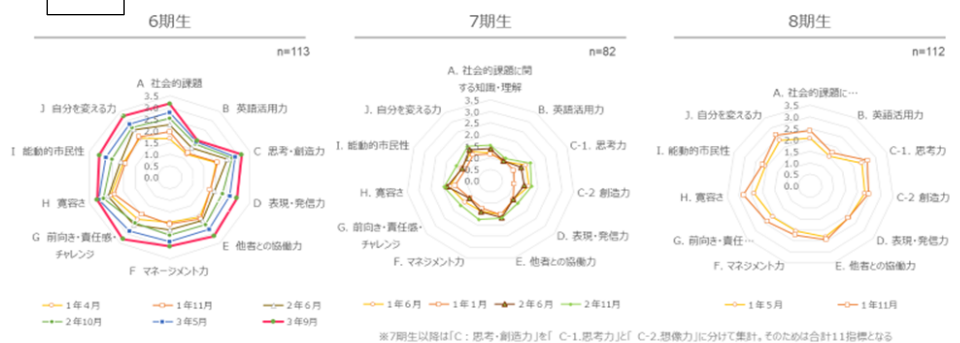
図 1



2) 全体ルーブリック評価の学年別平均比較

左より 6 期生、7 期生、8 期生の順にグラフが示されている。全ての学年で新旧に伴い多くの項目が点数を伸ばしていった。一方で、B. 英語活用力については全ての学年でどの測定時点においても他の項目と比べて最も低い点数で推移している。この傾向は 1~8 期生のすべての年次で見られる傾向である。(図 2)

図 2



(3) 所属ゼミごとの比較 (6 期生)

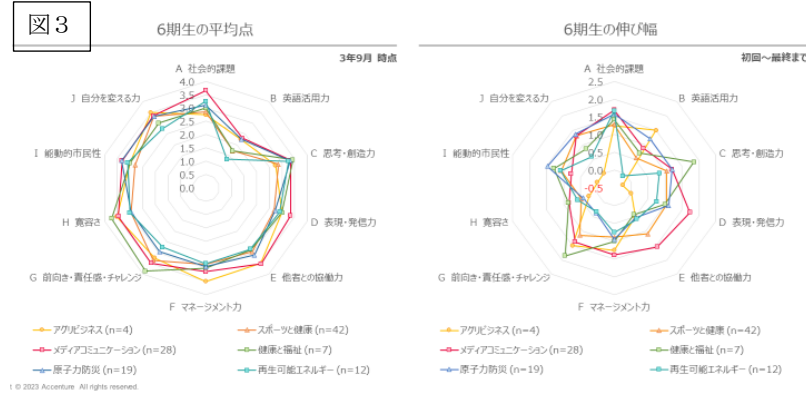


図 3 は所属ゼミごとに比較を示している。6 期生は 6 つのゼミのうち、メディア・コミュニケーション探究ゼミが「B 英語活用力」を除く多くの項目で最も高いレベルを示していた。一方、健康と福祉ゼミは、「C 思考力・創造力」および「G 前向き・責任感・チャレンジ」の伸び幅が他のゼミと比して大きかった。

(4) 入学系列ごとの比較 (8 期生)

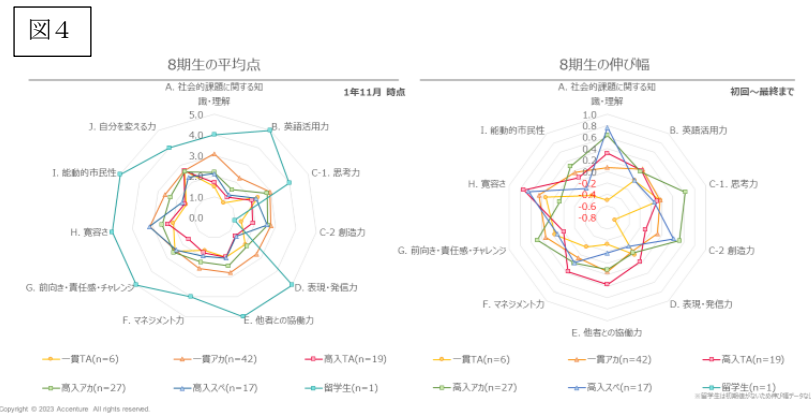


図 4 は入学系列ごとの比較を示している。8 期生は入学系列ごとにルーブリックの数値が大きな差となったため、系列ごとの比較を行った。アカデミック系列はいずれの項目でも他の系列に比べ高い水準を示した。一貫アカと高入アカを比較した場合、「A 社会的課題に関する知識・理解」や「B 英語活用力」「D 表現力」の項目では大きな差を示したが、それ以外の項目ではあまり差がなかった。伸び幅については、高入アカが一貫アカと比較して、「C-1 思考力」や「I 能動的市民性」の数値が伸長している。

(5) 各指標における成長推移 (6・7 期生比較)

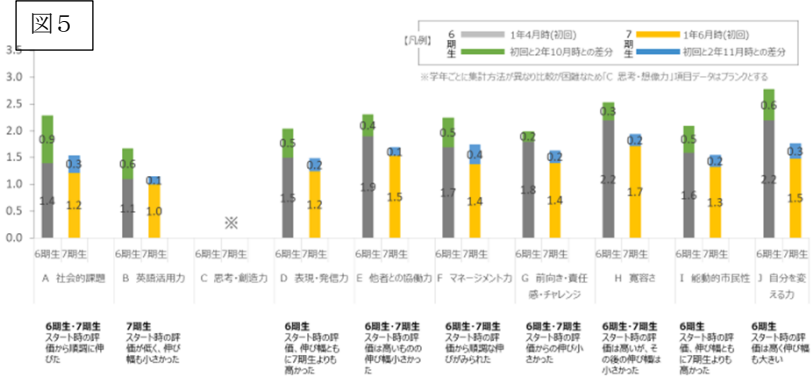


図 5 は各指標における成長推移を示し、1 年の初回測定時から 2 年 10-11 月の測定時までの成長度合いを、6 期生と 7 期生で比較した。全項目において、6 期生は 7 期生よりも伸び幅が同じかより大きいことが確認できる。6 期生は特に「A 社会的課題」の伸び率が大きい(+0.9 ポイント)。次年度については、7 期生のここからの伸長に期待している。

(6) 今後の展望



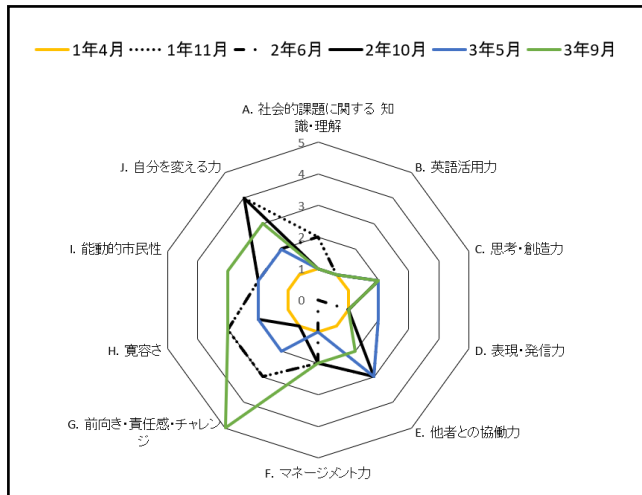
図 6 は最終的な指標別の到達レベル、及びそれまでの変化の 6 期生と 7 期生の比較を示している。今回の指標別順位の推移は、「J 自分を変える力」及び「D 表現・発信力」、「B 英語活用力」は似た傾向が確認されている。B と D の指標が低いのは SGH 指定からの懸念事項であり、英漁活用力とあわせて、「海外に向けて発信する」という施策が必要である。

4. 3 6期生の個別評価

6期生のうち、未来創造探究の各ゼミ 1～2人ずつ生徒をピックアップし、本人の活動の様子とルーブリック評価の推移について分析した。

○生徒 T.A (原子力防災探究ゼミ)

【平均値】1.00 (1年4月) →2.30 (3年9月)

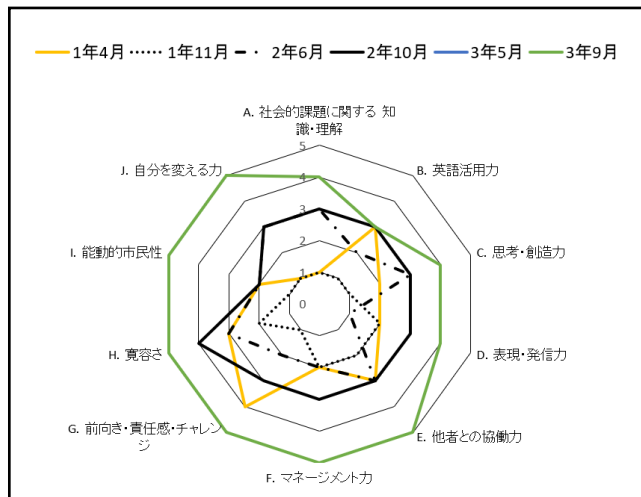


南相馬市から通うスペシャリスト系列の生徒。1年次の双葉郡ツアーや演劇を通じて平均2.4に上昇し、特に「自分を変える力」が4に。しかし、2年次の前半は探究活動がうまく軌道に乗らず、1.8で推移。特に、「他者との協働力」が0に。この頃、外部のボランティア活動に参加はしていたが、自分がどう関わるかに悩み自己評価は低い。数値には表れていないが、2年次後半に大きく変化する。マイプロ校内選考に落ち、代わりに参加したSteam フェスタ (ベネッセ主催) で自分なりの考えをまとめることができ、探究活動が進む。3年次前半の自己評価は低いが、6月頃に外部連携によるワークショップの手伝いを始めたことで活動が進み、夏にもさらに探究活動が進み、内容も精査され、最終発表会では堂々と発表でき、入賞も果たした。最終的に大きく伸びた力は「前向き・責任感・チャレンジ」となった。

○生徒 N.H (原子力防災探究ゼミ)

【平均値】2.30 (1年4月) →4.50 (3年9月)

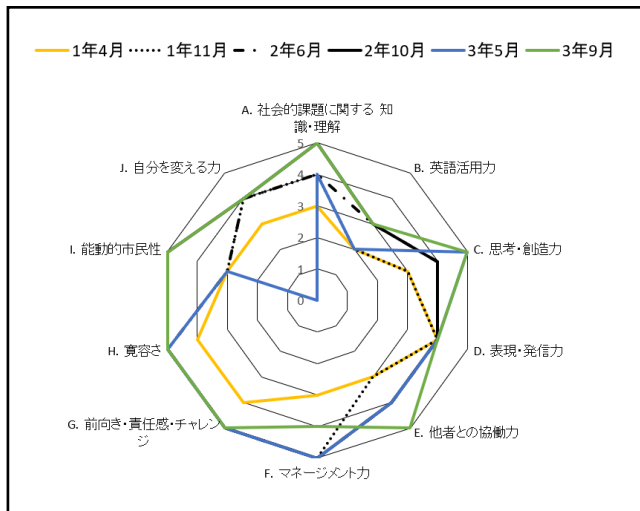
双葉郡以外から通うアカデミック系列の生徒。高校1年次が低い数値であったのは、探究の内容が決まっていなかったことが考えられる。2年次前半は探究の内容が少しずつ決まり始め、10月には実際にアクションを行ったことで「表現・発信力」「前向き・責任感・チャレンジ」



「寛容さ」が向上したと考えられる。特に、「寛容さ」が4になったのは、チームでの取り組みや地域NPOとの連携によるものだと考えられる。最終発表会時には、自分たちのプロジェクトを堂々と発表できたという点で、「他者との協働力」「マネージメント力」「前向き・責任感・チャレンジ」「寛容さ」「能動的市民性」「自分を変える力」を5で評価している。入学時に低かった「能動的市民性」「自分を変える力」は、地域の人々のためにできた、行政に提案できたという点が本生徒を大きく変えたのではないかと考えられる。

○生徒 K.H (メディアコミュニケーション探究ゼミ)

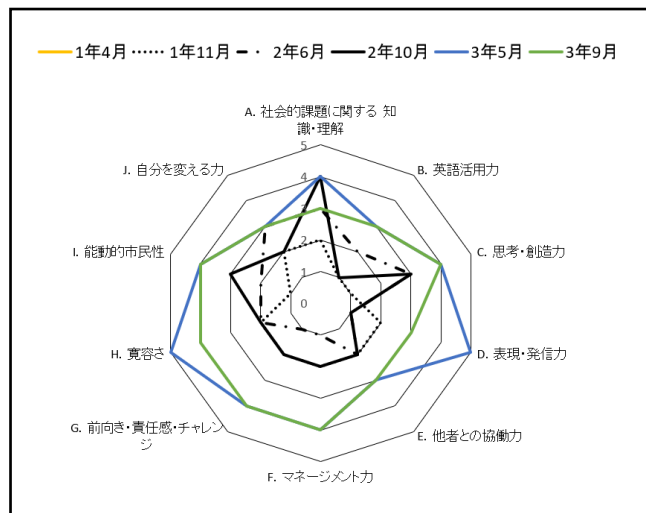
【平均値】3.20 (1年4月) →4.50 (3年9月)



本生徒は富岡町出身の女子生徒である。生理の貧困をテーマに、学校の女子トイレに生理用品を置くなど、積極的に活動を行う姿が見られた。ルーブリック評価は1年次4月より徐々に上昇している。2年6月以降に本格的に探究活動がスタートし、アンケートや調査アクションをきっかけに、A. 社会的課題に関する知識理解、I. 能

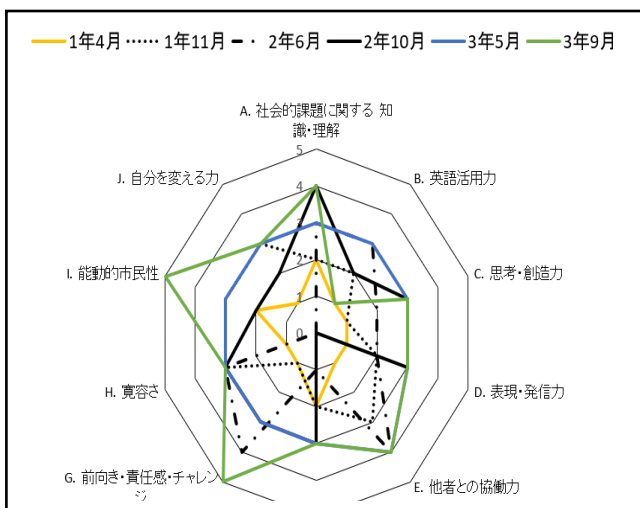
動的市民性が高まった。3年5月には評価が一時下がったが、これは探究に行き詰まった時期だと本生徒は話す。その後、友人と3人で探究を進めたことにより多様な視点で探究を行うことができ、3年9月には評価が再び上昇した。探求のサイクルをうまく回しながら、評価を徐々に高めていくことができた例であると考えている。

○生徒 N.M (メディアコミュニケーション探究ゼミ)
【平均値】 1.70 (1年4月) →3.50 (3年9月)



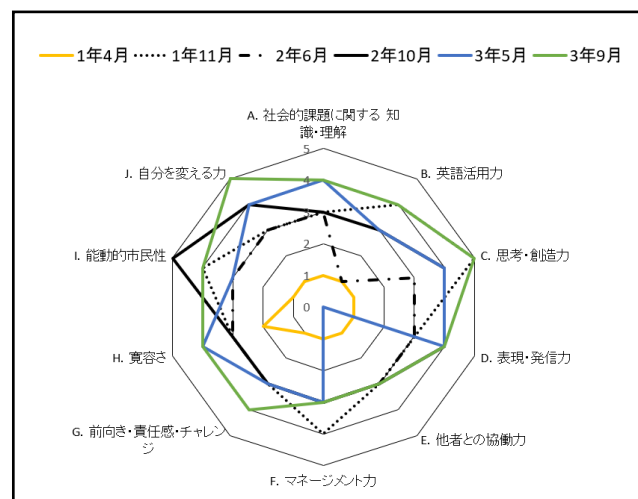
本生徒は大熊町出身の女子生徒である。ふるさとである大熊町に関する活動を行おうと考え、友人とともに母校である双葉郡大隈町立学び舎ゆめの森を訪問し、ワークショップを行った。探求活動を進めていく中で、社会のために何かできないかと考えるようになったことから「思考・創造力」「能動的市民性」が1から4に伸びている。また「英語活用力」も1から4へと伸びており、ニューヨーク研修などの活動に参加したことなどが背景にあると思われる。

○生徒 S.K (再生可能エネルギー探究ゼミ)
【平均値】 1.30 (1年4月) →3.40 (3年10月)



Sは広野町出身の男子生徒であり、高度な学びをしたいと、アカデミックコースを選択した。高校2年次より、地域を明るくするというイルミネーションを使った他の探求に合流し、再生可能エネルギーを使って灯りを灯す活動をおこなった。地域で実際にイルミネーションを設置するという探究活動を通して、地域で活動する外部の人たちと交流を続けた。その成果もあり、「能動的市民性」「前向き、責任感、チャレンジ」の項目において、高い評価へと変化してきた。様々な地域との触れ合いと、目的に向かって活動することを通して、自己肯定感が高まり、チャレンジ精神と柔軟な思考が育てられたと考えている。

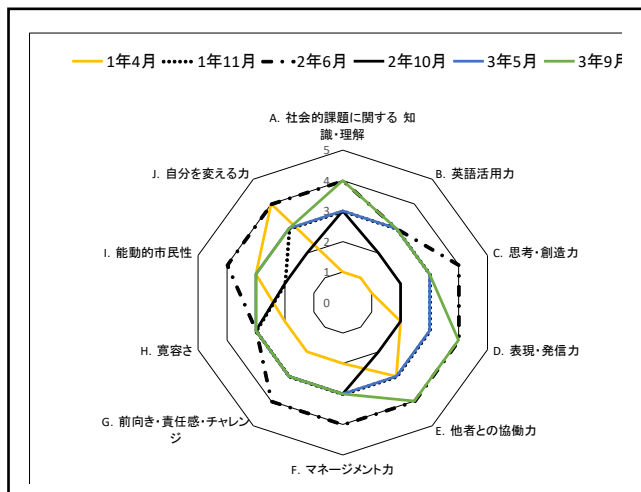
○生徒 E.S (再生可能エネルギー探究ゼミ)
【平均値】 1.10 (1年4月) →4.00 (3年10月)



Sは双葉郡出身の男子生徒であり、情報系の大学進学を希望し、アカデミック理系を選択している。高校1年次からドイツ研修をはじめとするさまざまな研修を通して学習を続けた。特に放射性物質の土壌汚染問題や放射線防御についてや再生可能エネルギー（水素）などについて積極的に情報を得ようとあちらこちらに出向いてさまざまな研修を行った。その結果、「自分を変える力」「思考、想像力」「前向き・責任感・チャレンジ」等の項目において、全体的に数値が上昇した。自己肯定感が強まり、さらに新たな課題に挑戦してみたいという気持ちのサイクルが身についたようだ。

○生徒 S.S (アグリビジネス探究ゼミ)

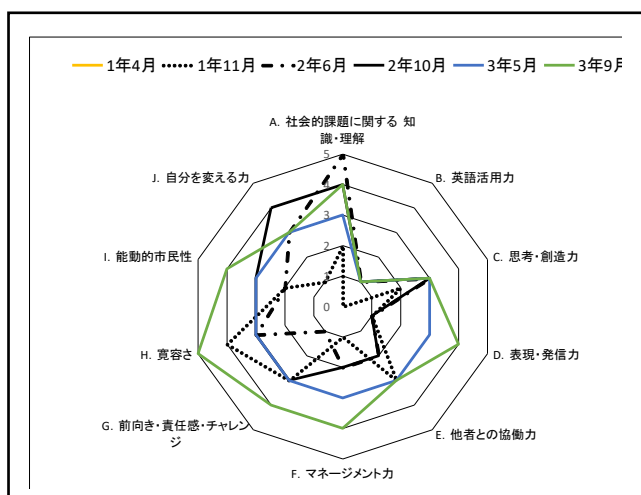
【平均値】 2.10 (1年4月) →3.30 (3年9月)



幼少期を国外(中国)で過ごしてきた経歴を持つ女子生徒である。本校社会起業部の元部員であり、カフェで廃棄されるコーヒーかすを課題視し、コーヒーかすを活用した石けん開発をテーマに探究活動を行ってきた。ルーブリック評価は「社会的課題に関する知識・理解」が1から4に変化している。変化は1年次の途中から現れ始めている。『国外生活期間があった背景から、地域課題の発見よりも先に、まずは地域について知る必要があった』と本人は述べており、関心をもって地域について調べてきた過程が、評価の変化に反映されていると考察する。将来は、海外と日本の関係における課題をビジネス面から解決したいと述べており、地域の課題解決をきっかけに、世界の課題解決に視野を広げることにつながった生徒の例であると考えられる。

○生徒 S.W (アグリビジネス探究ゼミ)

【平均値】 1.90 (1年4月) →3.50 (3年9月)

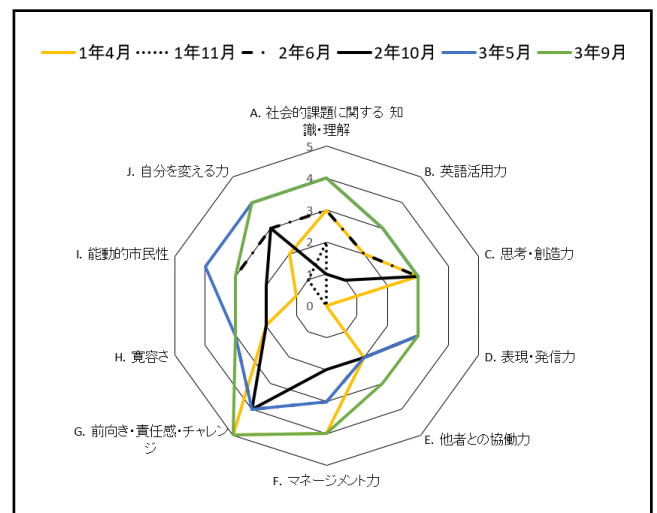


いわき市出身の女子生徒である。スペシャリスト系列

農業選択者3名から成る班に属し、エディブルフラワーの栽培とそれを活用したスイーツ開発をテーマとして、無農薬栽培法と花の加工法について模索してきた。ルーブリック評価は、「表現・発信力」が1から4に伸びている。この変化は3年次以降に急に現れている。S・Wは、3年6月に農業クラブ主催の意見研究発表会に出場しており、自分の考えを言葉で表現・発信する経験をしている。そのことがルーブリック評価の変化の背景にあると考察する。3年1月には県総合学科高校生徒研究発表会にも参加しており、「表現・発信力」を示す積極的な取り組みは評価に値する。

○生徒 Y.Y (スポーツと健康探究ゼミ)

【平均値】 2.40 (1年4月) →3.50 (3年9月)

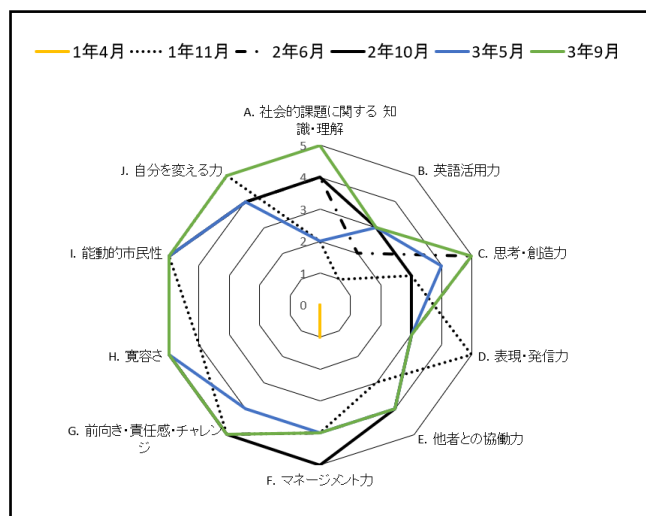


海風寮から本校に通う、トップアスリート系列で男子サッカー部に所属する生徒である。「サッカー部を通して広野町を元気にするには?」というテーマのもと、3人グループで活動を行った。男子サッカー部でも副キャプテンを務め、チームを統率する力、計画的に行動するマネジメント力に優れている生徒である。探究活動においてもグループの先頭に立ち、メンバーそれぞれの役割分担を行いながら、効率的に活動を進めていく様子が印象的だった。ルーブリック評価の内容から、特に表現・発信力の数値が大きく伸びたことが窺える。アクションを起こし、感じたこと、学んだことを周囲の人にどのように伝えるべきかを考え工夫し、発表会に臨んだ成果が数値となって表れている。また、発表会だけでなく、cafeふうと共同でイベントを企画しようと行動した際にも、そのイベントの意義や自分の意思に賛同してもらえるように行動、表現したことも成長に繋がっていると考えられる。3年次には探究活動を積み重ねていく中での社会的課題の発見・解決に向け、知識や理解を深めながら活

動することで数値を伸ばすことができた。広野町の課題を理解しながら、サッカー部として地域の活性化に向けてどんな活動が出来るのかを考え、子どもたちを対象とした「キッズコミット」を計画、開催することができた。ふたば未来学園高校サッカー部と地域を繋ぐイベントを初めて開催することができ、地域とのつながりを感じることができたと感じられる。この経験が数値に大きく影響していると考えられる。

○生徒 M.M (スポーツと健康探究ゼミ)

【平均値】 0.10 (1年4月) →4.40 (3年9月)

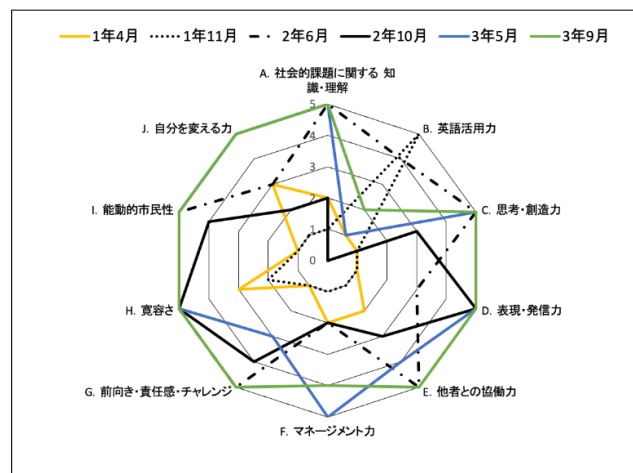


海風寮から本校に通う、トップアスリート系列で男子サッカー部に所属する生徒である。「サッカー部を通して広野町を元気にするには？」というテーマのもと、3人グループで活動を行った。基礎学力は比較的高く、どんなことにもコツコツと取り組むことができる真面目な生徒である。ルーブリック評価の内容からも、ほぼすべての項目で大きな成長を遂げていることが窺える。リーグ戦やイベントのポスターや地図を作成したり、アンケートの質問項目を検討したりとどのような取り組みがサッカー部の周知に効果的なのかを考え取り組んだ。その結果が思考・創造力の段階的な伸びに繋がっている。また、自分で作成したものを広野町内のさまざまな施設に出向いて配布し、町民の方と積極的な交流を深めることができた。その場で町民の方から広野町の現状や課題などの情報を収集することができ、その結果が社会的課題に関する知識・理解の数値の伸びにも繋がっている。町民の生の声をグループでの探究活動に反映させ、グループ内で共有していくことで、他者との協働力、コミュニケーション能力も高めることができた。最初は寡黙に取り組んでいる様子であったが、探究活動を通して仲間や先生、

地域の方々とのコミュニケーションが増え、聞く力、伝える力、自分を変える力がより一層身についた姿が印象的である。

○生徒 M.S (健康と福祉探究ゼミ)

【平均値】 1.70 (1年4月) →4.60 (3年10月)



双葉郡外から本校に通う、アカデミック系列の生徒である。手足の筋力低下や感覚の低下などが起こる難病により、装具を装着しており周囲と同じペースでの歩行や運動は困難である。小中学生の頃に、周囲に自らの病気が理解されていないと感じた経験があり、障害や難病を持つ人たちがよりよく生きることについて強い問題意識を持って、高校3年間試行錯誤しつつも意欲的に探究活動に取り組んできた。1年次には、障害や難病を持っている子どもたちが普通学級で過ごすための手段として自分マニュアルの作成を提案、2年次・3年次には障害や難病を持っている人も含めた全ての人に防災意識を持ってもらうことを目標に活動を行ってきた。

1年次のルーブリック評価の平均値は1.70(4月)、1.50(11月)とかなり低い。しかし、2年次6月に4.20と大幅に伸び、10月には3.00に下がったものの、その後は3年次5月に4.30、9月に4.60と順調に伸び続けている。2年次6月に数値が伸びた原因としては、ゼミ活動が本格的にスタートし、福祉科の教員や大学教員から福祉や健康分野についての講義を受け、探究活動への意欲が高まったことが考えられる。しかし、防災や福祉に関する調査活動は行うものの、問題解決のためのアクションになかなか踏み出せない期間が数か月続いた。授業後に記入するコメントシートの記事でも「アクションが決まらない」「何もやりたくない気持ちが大きい」という感想が見られた。12月には教員から、いきなり大規模なイベントを企画しようと思わず、自分ができるこ

とから始めるよう声かけを行っている。この時期の探究活動での迷いが、2年次10月の値の低下に反映していると考えられる。

2年次の終わり頃に、他ゼミの生徒とともに、校内の避難訓練の改善案と防災に関するワークショップを企画することになり、実行に移してからは、学校内外で様々なアクションを起こすようになった。

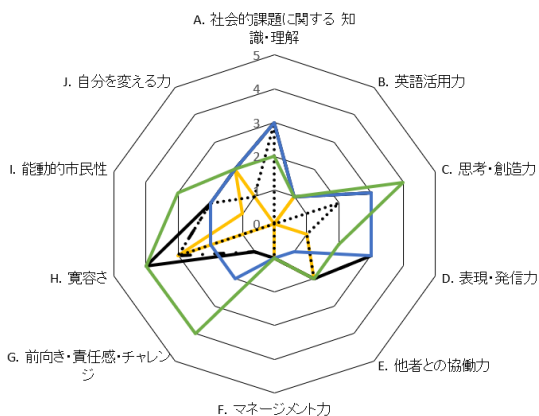
探究活動を通して、面識のない外部の方に自分から連絡をとる、イベントを一から企画する等、様々な体験を積み重ね、自分の行動が周りに多少なりとも変化を促すことができるという実感を得ることができた。また、学校内外で発表する機会が多く、プレゼンテーション能力も向上した。このような成長を実感したことが、3年次の数値として表れたのではないかと考えられる。特に「C. 思考・創造力」「D. 表現・発信力」「G. 前向き・責任感・チャレンジ」「I. 能動的市民性」の4項目の数値の上昇は顕著である（1年次4月：1→3年次9月：5）。

し、3年次初めは、新型コロナの影響でイベント欠席、中止など課題解決のためのアクションが計画通りに進まず、活動が制限されたため、若干評価（2.00）が低くなった。しかし、その後の地域交流イベント参加をきっかけに、自分で問題点を見つけ、解決策を考えることの大切さを学び、自分自身が主体となり活動することで、ルーブリック評価「C. 思考・創造力」「G. 前向き・チャレンジ」の項目が1年次（0.00）から3年次で（4.00）大きく上昇した。

○生徒 M.M（健康と福祉探究ゼミ）

【平均値】1.10（1年4月）→2.50（3年10月）

— 1年4月 …… 1年11月 - - 2年6月 — 2年10月 — 3年5月 — 3年9月



南相馬市から本校に通うスペシャリスト系列（福祉）の生徒である。福祉科目の授業で地域交流の重要性を学び地域交流について興味を持ち、世代間交流を通して、子ども・高齢者・障がい者など地域の住民全員がお互いに助け合える共生社会を目指すことをテーマに、探究活動を行った。

1年次のルーブリック評価の平均（1.10）は低く、2年次（2.10）、3年次（2.50）と徐々に評価が高くなっている。これは、2年次での調査アクションにおいて、地域交流イベント実施状況や地域の高齢者や子どもの日常生活の様子を詳しく知ることができ、次の課題解決のためのアクションへの道筋ができたからと考えられる。しか

4. 4 3年間を通した各取組に関する評価

本校で探究に関連する科目（産業社会と人間、総合的な探究の時間（未来創造探究））や海外研修について、生徒がどのように捉えてきたのか、6期生に対してアンケートを行った。（実施時期：令和4年11月、回答生徒数：125人）

意識調査

以下の表に示す内容について探究の授業についての意識調査を行った（実施時期：令和4年11月、回答生徒数：125人）。Q1～Q3は地域との関わり、Q4～Q6は探究と教科の関わり、Q7～Q11は自分自身と社会との関わりについてである。

表 調査項目と結果（数値は回答の割合）

（4：とてもそう思う 3：そう思う

2：あまり思わない 1：全くそう思わない）

	質問項目	R 4				昨年比 肯定的評価
		4	3	2	1	
Q1	探究授業を通じて、地域に対する興味関心が高まった。	34.4%	58.4%	4.8%	2.4%	-7.2%
Q2	探究授業を通じて、自分と地域とのつながりが増えた。	37.1%	47.6%	12.9%	2.4%	-1.0%
Q3	探究授業を通じて、地域のことが好きになった。	28.8%	56.0%	12.8%	2.4%	-5.0%
Q4	探究授業を通じて、探究学習で学んだことと、教科学習で学んだこととのつながりを感じるようになった。	20.8%	56.8%	20.0%	2.4%	2.1%
Q5	探究授業を通じて、探究学習に教科学習で学んだことを活かせるようになった。	22.4%	55.2%	19.2%	3.2%	-1.9%
Q6	探究授業を通じて、教科学習の必要性を感じるようになった。	21.6%	56.0%	18.4%	4.0%	-8.1%
Q7	探究授業を通じて、世界や日本で起こっている課題を自分の身近に感じるようになった。	38.4%	50.4%	9.6%	1.6%	-1.0%
Q8	探究授業を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった。	40.8%	40.8%	14.4%	4.0%	-16.4%
Q9	探究授業を通じて、自分の考えや意見が深まった。	46.3%	43.1%	8.9%	1.6%	-8.6%
Q10	探究授業を通じて、自分のことが好きになった。	20.8%	29.6%	40.0%	9.6%	-2.6%
Q11	探究授業を通じて、自分が動けば社会は変えられると思った。	24.0%	50.4%	22.4%	3.2%	5.0%

ほぼ全ての項目について肯定的意見（3，4）を半数以上の生徒が回答しているが、昨年度との比較からの数値が低下している。向上した数値としては、Q4「探究学習と教科学習のつながり」とQ11「社会を変えられる」である。「グローバル型」指定期間では、「教科学習と探究学習の往還関係を強化する」ことを目的としていたので、その数値の向上は肯定的にとらえたい。

ほとんどの項目は例年通り8割以上が肯定的評価となっているが、Q8「探究学習を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった」という数値が-16.9%と大きく下落している。例年9割近い生徒が肯定的な数値であったため、この要因としては探究をつづけるモチベーションと進路学習が乖離しており、別個のもととして考えていることが考えられる。次年度については、セルフエッセイや3年間の学びの軌跡を振り返らせることで、探究と進路活動の連動した指導体制の構築について検討していく必要がある。

取組別評価

1～3年の間に実施してきた主な取組を示し、その中で印象に残った取組、力がついた取組を調査した。結果を下表に示す。

表 印象に残った取組、力がついた取組（数値は人数）

	項目（複数回答可）	印象に残る活動	資質・能力向上につながる活動
A	1年次 出張みらいラボ（オンラインカタリ場）	5	3
B	1年次 ブチ探究	5	4
C	1年次 双葉郡バスツアー	5	4
D	1年次 マインドマップ講座	1	4
E	1年次 演劇ワークショップ	26	49
F	1年次 SDGsワークショップ	1	0
G	1年次 しくじり先生	44	17
H	1年次 探究ワークショップ	1	1
I	1年次 ヒューマンライブラリー	1	1
J	2年次 探究オリエンテーション（未来創造探究）	0	1
K	2年次 3年生の中間発表会	12	8
L	2年次 問いづくり講座	4	3
M	2年次 GWの調べ学習	7	1
N	2年次 ゼミごとに分かれての活動	9	4
O	2年次 木3: 社会を社会科の視点で考える	0	0
P	2年次 木3: 処理水	1	0
Q	2年次「地域・社会のあるべき姿」検討	0	1
R	2年次 ゼミ内報告会	0	0
S	2年次 プレ発表会	2	1
T	2年次 5期生の未来創造探究発表会	2	5
U	2年次 セルフエッセイ	17	7
V	3年次 中間発表会	36	20
W	3年次 最終発表会	0	34

回答については複数回答も可としてアンケートを行っており、平均すると一人あたり2.5個程度（昨年平均2.6個）回答している。印象に残った取組と力がついた取組で数値は似通っている。今年度の傾向として、印象に残っている学習として「しくじり先生」をあげる生徒が多かった。生徒のルーブリックから「前向き・チャレンジ」の項目が低いところ所から立ち上がった企画だったため、十分目的を達成できたと考えられる。

4. 5 進路や在り方生き方への影響に関する評価

探究活動が卒業時の進路や在り方生き方にどのような影響を与えたのか調べるために、3年次生徒にアンケートを行った。なお、このアンケートは平成30年度から始めており、今年度が5回目である。

実施日：令和5年2月

対象生徒：6期生3年次生徒 103人

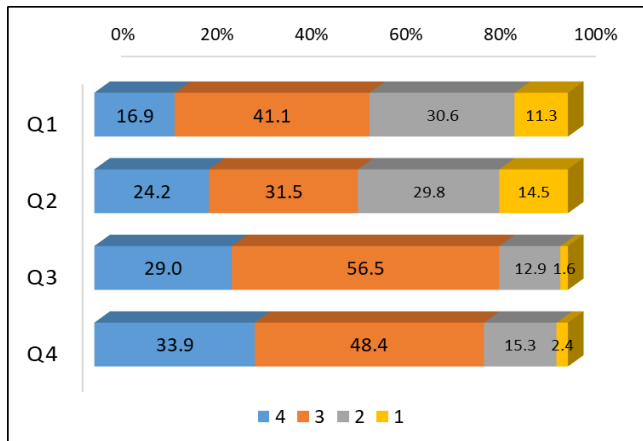
内容：以下のアンケート項目に対して、1～4の4観点で選択、さらに具体的事例などを記述で回答。

結果：

課題名		4	3	2	1
◀ 〓 - 休2億僚下僚了⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ 半井㊯俊㊰(名)監(丸)	- 3歳課	16.9	41.1	30.6	11.3
	53歳課	25.2	41.7	25.2	7.8
	43歳課	23.4	42.3	27.9	6.3
◀ 〓 - 休2億僚下僚了㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ (名)㊱(名)監(丸)	- 3歳課	24.2	31.5	29.8	14.5
	53歳課	25.2	32.0	22.3	24.3
	43歳課	32.7	33.6	20.9	12.7
◀ 〓 - 休2億僚下僚了⑳ ㉑ ㉒ ㉓ (十)秘23十 ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ (月)至(二)月監(二)九十 ㊱(財)日㉒ ㉓ 堂(十)㉔(名)監(丸)	- 3歳課	29.0	56.5	12.9	1.6
	53歳課	27.2	60.2	9.7	2.9
	43歳課	31.3	57.1	10.7	0.9
◀ ・ - 休2億僚下僚了⑳ ㉑ ㉒ ㉓ (十)加㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ 堂(十)㊱(名)監(丸)	- 3歳課	33.9	35.2	26.2	9.7
	53歳課	28.2	59.2	9.7	2.9
	43歳課	35.7	54.5	8.9	0.9

- 大きく影響した（繋がった・活用した）
- ある程度影響した（繋がった・活用した）
- あまり影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）
- 全く影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）

表中の値は割合（％）である。



Q1、Q2については高卒時の進路選択、いわば短期的な進路について、探究活動の影響があったかどうかについてのアンケートである。Q1では59%（昨年67%）の

生徒が進路選択に影響があったと回答している。またQ2においても6割近くの生徒が試験に探究活動を活用したと回答している。4期生、5期生と比較して、Q1は肯定的評価は引き続き定着しており、Q2では6期生は例年よりも一般受験にチャレンジしている生徒が多いため、数値は下がった。しかし、生徒の記述コメントからは探究が具体的に進路指導に結びついている例が多く見られた。「面接で探究のことを語った」や「受験のプレゼンで探究の発表が役に立った」というコメントが多く見られた。

Q3、Q4は長期的な観点から、社会との関わりや自身の在り方生き方に関するアンケートである。いずれも抽象度の高い問いであるにも関わらず例年8～9割の生徒が肯定的に捉える結果となったが、今年度についてはQ3、Q4ともに数値が下がり、85%程度となった。「いろんな人たち知関わり、様々な価値観を知った。そのうえで、自分の価値観を考えることができた」など肯定的なコメントもある一方で、「高校生活があと2年続くのなら、変わったと思う」というコメントもあった。6期生は入学時よりコロナ禍の3年間だったこともあり、探究学習も思い通りにいかなかったことも多かった。この影響は、大人が考えている以上に高校生に多大な影響を及ぼしているように思う。

また、Q3、Q4の質問について、肯定的な評価(4・3)を選ぶ生徒について、アカデミック系列の生徒が肯定的な評価をする比率が高い傾向が多かった。また、系列に限らず、探究学習を通じて、地域復興への意識がめばえ、地元に対しての愛着や地域に貢献したいとのコメントが多く見られた。

高校生と社会の関わりを問う『18歳意識調査「第20回 -社会や国に対する意識調査-」』（日本財団、2019年11月）(<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2019/20191130-38555.html> 2023年3月閲覧)と本校生の今回のデータを比較すると、本校生は社会に対する課題意識を明確に持ち、社会に積極的に関わろうとする意欲が高いことが特徴といえるであろう。

	自分を大人と思う	自分は責任がある社会の一員だと思う	将来の夢を持っている	自分で国や社会を変えたいと思う	自分の国に解決したい社会課題がある	社会課題について、自分や身近な人々と積極的に議論している
日本	29.1%	44.8%	60.1%	18.3%	46.4%	27.2%
インド	84.1%	92.0%	95.8%	83.4%	89.1%	83.8%
インドネシア	79.4%	88.0%	97.0%	68.2%	74.6%	79.1%
韓国	49.1%	74.6%	82.2%	39.6%	71.6%	55.0%
ベトナム	65.3%	84.8%	92.4%	47.6%	75.5%	75.3%
中国	89.9%	96.5%	96.0%	65.6%	73.4%	87.7%
イギリス	82.2%	89.8%	91.1%	50.7%	78.0%	74.5%
アメリカ	78.1%	88.6%	93.7%	65.7%	79.4%	68.4%
ドイツ	82.6%	83.4%	92.4%	45.9%	66.2%	73.1%

参考資料：18歳意識調査「第20回 -社会や国に対する意識調査-」（日本財団）

4. 6 学校アンケートによる評価

本校の教育活動全般を評価するため、毎年1回、保護者、生徒、教員によるアンケートを行っている。このうち、本事業に関係するものについてピックアップした。

対象：本校舎高校1～3年の生徒、保護者、教員

回答数：保護者207名、生徒267人、教員75人

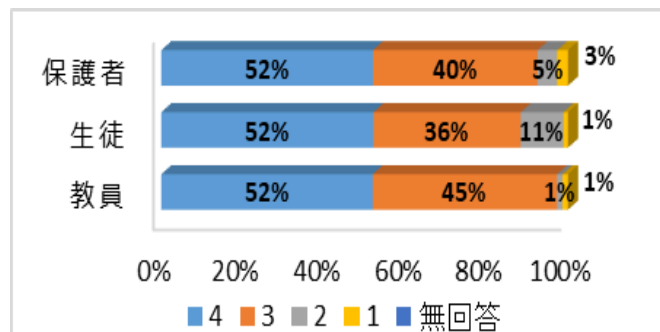
回答：以下の4段階および無回答による回答

4：思う 3：ある程度思う

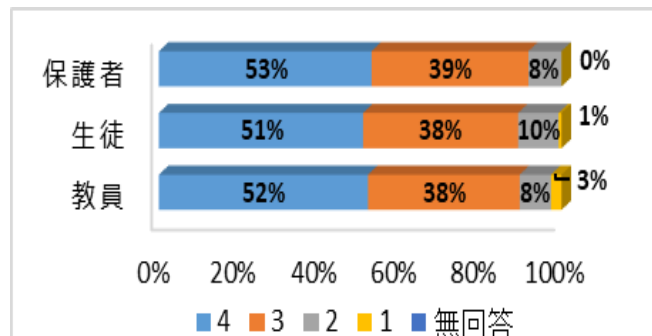
2：あまり思わない 1：思わない

アンケート項目と結果：

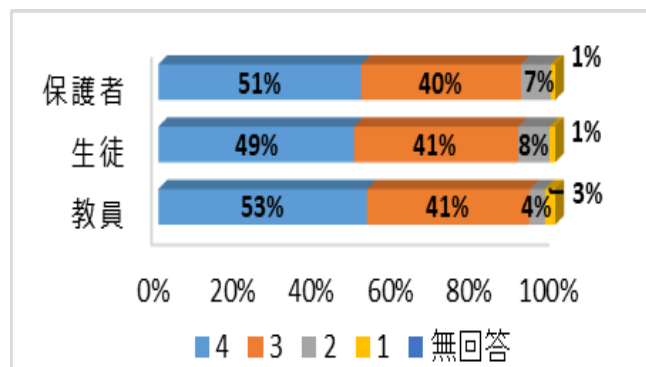
Q1 アクティブラーニングをはじめ、探究する力を育てる充実した授業が行われている



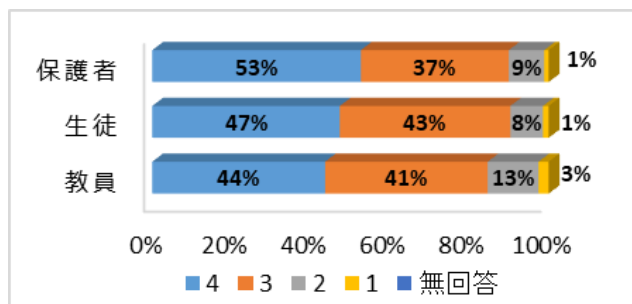
Q2 地域の課題に向き合う授業や活動が行われている。



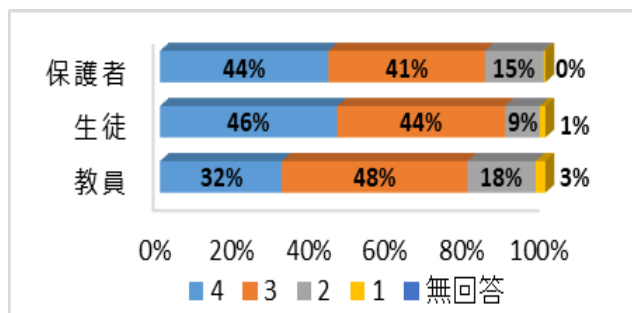
Q3 地域の課題に取り組むために、地域の方々や国内外の様々な組織と連携している。



Q4 地域の課題に向き合う授業や活動が、復興を目指す地域にとってプラスになっている。



Q5 地域だけでなくグローバルな視点 (SDGs など) を持てるような取組が展開されている。



回答いただいた保護者、生徒、教員、いずれも肯定的意見が非常に高く、本事業の取組は高く評価されている。Q1をみると、生徒・保護者ともにアクティブラーニングや探究する力を育てる授業がふたば未来学園の取り組みと認知されている様子が見える。また、保護者の肯定的評価が92% (昨年56%) から急上昇しており、本校の探究学習の成果が地域の方々にも浸透した結果と言える。

Q2については地域の課題に向き合う授業や活動が行われているかの項目である。保護者・生徒・教員ともに90%近くが肯定的な評価をしており、昨年よりも向上している。また、生徒の否定的な評価も5%減少している。

Q3は外部連携の状況についてのアンケートである。昨年度の保護者・生徒・教員の肯定的評価(約80%)から90%近くに上昇し、コロナ禍にあっても協働的な学習を行う着実に進めることができた。

Q4は探究活動の地域へ与える効果についてである。この質問についても肯定的意見が8～9割ほどである。教員の肯定的意見が昨年より6%向上しているが、3者のなかで一番低くなっていることは残念である。生徒が実践している内容は地域の復興にも寄与することも教員間で目線合わせをする必要がある。

Q5はグローバルな視点についてである。特に生徒からの評価が昨年度比10%アップし、生徒の海外研修や海外留学に積極的にチャレンジしている生徒が増えている。学校評価アンケートについては、今年度についてはどの数値も昨年より肯定的評価が微増している。

4. 7 設定した目標の達成度

本事業で設定した目標と今年度の達成度について以下に示す。またそれぞれの項目について以下にまとめる。

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）							
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)	
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値						単位：なし	
a	本事業対象生徒：	2.63	3.10	2.62	2.90	3.03	3.5
	本事業対象生徒以外：						
目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的を実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。							
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上						単位：%	
b	本事業対象生徒：	83.2	84	89	87.4	63.4	70
	本事業対象生徒以外：						
目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もおり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。							
(その他本構想における取組の達成目標)							
本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合						単位：%	
c	本事業対象生徒：	調査なし	67	88.5	90.0	70	
	本事業対象生徒以外：						
目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。							
2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）							
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)	
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)							
地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数（3年次生）						単位：件	
a		31	40	52	60	69	50
目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の1年間を対象とする。							
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)							
視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数						単位：件	
b		調査なし	調査なし	178	192	376	250
目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。※ただしコロナ禍の状況で未確定な要素が大きい。							
(その他本構想における取組の具体的指標)							
生徒の外部発表、コンテスト応募件数						単位：件	
c		調査なし	35	42	44	55	45
目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。							
3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）							
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)	
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)							
本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数						単位：件	
a		150	165	301	310	321	200
目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。※ただし、コロナ禍の状況であるため、オンラインでの対応活動指標に含めることとする。							
(その他本構想における取組の具体的指標)							
d							
目標設定の考え方：							

1a 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値

本校の開校以来、ルーブリックの最終調査における平均値は以下の表のように推移してきた（詳細は5.1参照）。

1期生 H29卒	2期生 H30年卒	3期生 H31年卒	4期生 R2年卒	5期生 R3年卒	6期生 R4年卒
1.99	2.63	3.10	2.62	2.90	3.03

1～3期生まで値が順調に伸びていたが、4期生は3期生よりも低下した。5期生はそこから2.90まで上昇し、6期生で3.03まで上昇した。本事業の最終年度では「3.5」以上を目指しており、最終的に目標を達成することはできなかった。目標設定上、かなり野心的な数値ともいえるが、ルーブリックを策定して「変革者」を育てる本校の目標としてはやはりルーブリックレベル3.5はめざしていきたい数値ともいえる。生徒は年次が上がるにつれ評価が高くなり、探究活動も自走できるようになっていくが、一部、レベル0や1の評価のままの生徒もおり、そのような生徒について指導を手厚くする等、丁寧な伴走、指導を教員側で心掛けたい。その意味において、ルーブリックを「形成的評価」として活用したり、生徒と定期的に面談等を行ったりすることがより重要となる。

1b 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合

この項目については2期生からアンケートを行っており、今年度の調査で5回目となる（詳細は5.5参照）。ここでは以下の2つのアンケートの平均を指標としている。
Q③未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？
Q④未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？

今年度、肯定的意見の割合は、Q③では85.5%、Q④では69.0%、平均77.26となり、目標の70%を上回った。しかし、過去5回実施しているなかで毎年90%近くを推移していたが、今年度はQ④の数値が10%近く低下している。6期生は探究学習が生徒の生き方・在り方の模索につなげている生徒が多いと考えていたため、意外な結果となった。コロナ禍のことなども原因として考えられるが、この数値の原因について企画研究開発部内で検討していきたい。

1c 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見

の割合

例年実施している学校評価アンケートのなかに、昨年度より本事業に関連する項目を追加した（詳細は5.6参照）。5つのアンケート項目のうち、肯定的意見（3および4の回答）について各アンケートの平均をとり、この値で評価することとした。結果としては90.0%（昨年72.7%）となり、昨年度に引き続き70%の目標を超えた。5項目のアンケートのうち、「主体的・対話的で深い学びをはじめ、探究する力を育てる教育」の項目で昨年より36%増となり、本校の探究を中心とする授業がようやく保護者にも定着してきたと考えられる。また、同様に地域の課題に向き合う授業とともにグローバルな視点を持つ取り組みについて数値が2%向上しており、本校でのグローバルリーダーを育成するための教育活動が理解されつつある状況である。

2a 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数

本校の課題探究は、地域に関わるテーマとすることを基本としている。ここではそのうち地域の方と連携、協働しながら進めるテーマ数を取り上げることとした。今年度、3年次の課題探究のプロジェクトのうち、これに該当するものは69件あり、目標としている50件以上を達成することができた。6期生は人数が多く（125名）、個人による探究プロジェクトが多いためこのような数値となった。また、高校1年次後半より探究が本格実施となり、高校2年次や中学生の探究プロジェクトを含めると常時300以上のプロジェクトが動いており、学校全体としても探究学習の活性化が顕著である。

2b 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数

本校への来校者数は令和2年度から調査カウントを開始した。今年度もコロナ禍も来校者がいない時期（4・5月）もあったが、6月から12月にかけては視察が集中し、最終的に376名の方に来校いただいた。また、今年度は2月に「グローバル型」研究成果発表会を実施し、県内外から137名の方が外部から参加された。本校の探究学習が県内外から注目されていることから、本校の教育活動が今後も積極的に外部の視察を受け入れ、本校の教育活動の他への普及に寄与したい。

2c 生徒の外部発表、コンテスト応募件数

今年度の具体的な取組を以下に示す。件数は最終的に55件となり、今年度の目標である45件を上回ることがで

きた。今年度の成果としては、

- ・第21回福島県総合学科高等学校生徒研究発表会(1月、本校から3件発表<口頭発表部門1、展示部門2>)
- ・マイプロジェクトアワード福島 summit (1月、福島県内高校生対象の発表会、本校から14件応募、このうち1件が福島県代表として全国 summit へ進出)
- ・マイプロジェクトアワード全国 summit (3月、福島県代表として1発表。)
- ・第10回ふくしま学(楽)会(7月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から2件発表。)
- ・第11回ふくしま学(楽)会(1月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から1件発表。広島研修で学んだ生徒たちを中心に発表を行った。)
- ・ふたばアワード(11月、1~3年による学年横断型の地域課題探究発表会、14発表)
- ・ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト(8月、福島県内高校生対象の発表会、本校から4件応募、最優秀賞1本、優秀賞1本、社会貢献賞2本)
- ・全国高校生フォーラム(12月、オンライン)
- ・STEAM フェスタ(3月、2本発表)
- ・日本地理学会春季学術大会(3月、東京都立大学)にて、高校生ポスターセッションに参加

3a 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数

第2章に詳細を示したが、今年度、本校の探究活動関連でお世話になった方は321件(3月15日現在)となっており、今年度の目標(300名)と昨年の実績310件をやや上回った。探究活動の特定のゼミの連携数が突出しているという面もあるが、概ねどのゼミにおいても地域や外部の方との連携は進んでいる。「グローバル型」指定期間からコンソーシアムが立ち上がり、早稲田大学とのつながりから外部の専門家ともつながることができ、外部連携を推進する環境が整ってきた。引き続き、外部の方の協力も得ながら活動の活性化を図りたい。グローバル型指定から2年で数値が倍増し、学校と地域の連携が質的にも量的にも深化していることが表れている。

また、本校の活動に関わっていただく講師については、今までのように一度来ていただき講義を頂くという形ではなく、オンラインや対面で断続的に複数回を長期間にわたり関わっていただく状況が多く生まれてきている。

そのため、のべ件数をカウントすることが難しくなっていることから、新たな指標の設定が必要となっている。ただ、どのような指標を設定すれば生徒の探究学習と地域人材との密接な関わりを正しく測定できるかについては、今後も継続的に企画部内で検討していく必要があると考えられる。

5. 2. 1 総合的な探究の時間の指導法と評価～探究プロセスとルーブリック～

グローバル型発表会の第1分科会において、上記タイトルで発表した。本校では令和4年度より中高一貫の一期生が高校入学したことを受け、中高6年間を貫く探究カリキュラムを開発してきた。そのため、この分科会では中学校・高校のそれぞれにおいて、探究プロセスを精緻に組み上げる指導法とその適切な評価を行うための評価方法について議論した。

(1) 高校3年間における探究プロセスとその指導法について【板倉報告】

板倉報告では主に①高校3年間における探究プロセスと②教員の関わり方モデルについての説明があった。高校で行われる「地域創造と人間生活」と「未来創造探究」の位置づけや具体的な取り組み、そのタイムスケジュールなどカリキュラムの全体像が示された。未来創造探究において、問題発見・課題設定期、調査のためのアクション期、課題解決のためのアクション期、論文作成期など生徒の探究アクションを行う時期をステージ4に分け、そのステージごとに教員の役割や関わり方を変えていく仮説についての説明を行った。

4-1-2 生徒主体の学習と教員の関わり方

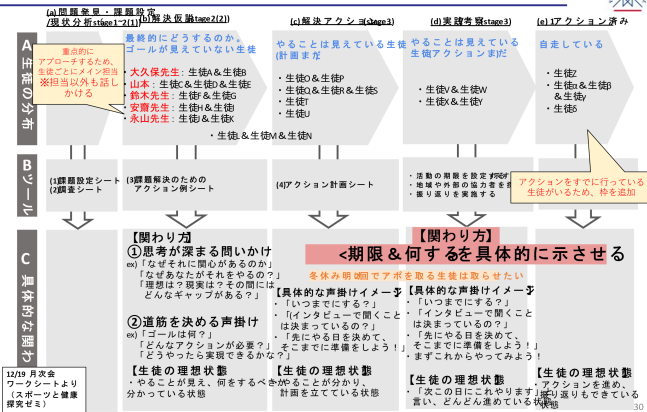
教師の関わりを妨げる3つの要因

- ① 生徒が教師の支援を権威的な言葉として受け取る可能性がある
 - ② 探究のあるべき姿のイメージが、生徒の支援要請を妨げる
 - ③ 教師は一人で複数の生徒を担当する必要があるため、ある程度進んでいる生徒に対しては後回しにする傾向がある
- ▼
- 探究における教師の役割は**多様**であることが求められる。
(指導⇄支援/Teacher⇄Facilitatorの**二者択一ではない**)
 - 一人での切り替えは難易度が高いので、**2人以上で連携**に関わる
 - そのため**面的な指導体制の構築**必須

ステージ	① 問題発見	② 調査	③ 課題解決	④ 論文作成
教師の関わり	問題発見のきっかけ作り、問いの提示	調査の方向性、方法のアドバイス	課題解決の進捗確認、壁打ち	論文作成のサポート、発表の準備
生徒の関わり	問題の発見、問いの投げかけ	調査の実行、データの収集	課題の解決策の検討、実践	論文の執筆、発表の準備

また、この教員が生徒にどのように関わるかにとどまらず、学校全体のチームとして探究学習を指導するための方法についての工夫の説明があった。

4-3-5 生徒に応じた関わり方をチームで考える



(2) 中学校3年間での探究プロセスとルーブリックの活用【松浦報告】

松浦報告では主に中学校での具体的な取り組みとして、主に①未来創造学、②演劇ワークショップ、③リーダー学、④哲学対話の④つの活動について紹介があった。

「未来創造学」地域課題探究全体像



中学校の未来創造学では『ふたばの良さを発信する』をテーマとして、双葉郡の魅力を磨き、発信することが、中学校3年間のテーマとして貫かれ、演劇WSや哲学対話などで探究を行うための基礎体力をつけ、グローバルスタディー(GS)の授業で英語活用力を鍛えるなどを行い、中学校3年間の学習の集大成として、ニュージーランドへの海外修学旅行で世界に発信するという構造となっている。

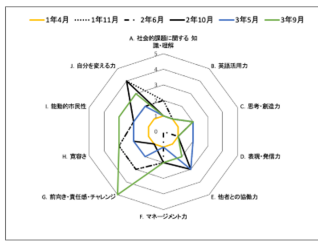
(3) 探究学習における評価とルーブリックの活用【林報告】

林報告では評価に関して①サマティブ(総括的)評価とフォーマティブ(形成的)評価、②ルーブリックの活用、③探究学習の観点別評価、④まとめ(可視化できない評価)の四点について説明を行った。

まず、評価に関しては人材要件ルーブリックの改訂のポイントについて説明し、ルーブリックは不変のものではなく、生徒や学校の実態に合わせて議論し、教員が目線合わせをする機能について確認した。また、ルーブリックは基本的にサマティブ評価として機能している。しかし、本校では年2回ルーブリックを測定し、このデータをもとにゼミ担当者とのルーブリック面談を行うことで、自学期の方針の確認や資質・能力の伸長を生徒自身に確認させることがフォーマティブ評価としても機能していることを確認した。

次にルーブリックによる教員の評価の実例として、分科会の前に生徒発表を行った2名の3年次生のルーブリック評価の分析を行った。ルーブリックの数値はあくまでも生徒の自己評価であり、教員が見立てた評価には差が出る。このルーブリック面談を通じて、目線合わせを行うとともに、生徒と教員の交流ツールとしても機能している。

2-4-2 ルーブリックによる教員の評価②



南相馬市から通うスペシャリスト系列の生徒1年次の双葉郡ツアーや演劇を通して平均2.4に上昇し、特に「自分を変える力」が4に。しかし、2年次の前半は探究活動がうまく軌道に乗らず、1.8で推移。特に、「他者との協働力」が0に。この頃、外部のボランティア活動に参加はしていたが、自分から関わろうとしない。自己評価は低い。数値には表れていないが、2年次後半に大きく変化する。マイプロ校内選考に落ち、代わりに参加したSteamフェスタ(ベネッセ主催)で自分なりの考えをまとめることができ、探究活動が進む。3年次前半の自己評価は低いが6月頃に外部連携によるワークショップの手伝いを始めたことで活動が進み、夏にもさらに探究活動が進み、内容も精査され、最終発表会では堂々と発表でき、入賞も果たした。最終的に大きく伸びた方は「志向と責任感」が+1.5ポイントとなった。

生徒Bのルーブリック自己評価(3年間)
【平均値】1.00(1年4月)
→2.30(3年10月)

ゼミ担当教員による評価

また、ルーブリックを通じて生徒の資質・能力の伸長状況を未来創造探究の指導に対するのフィードバックとしても活用しているが、数値では測れない力もあると感じている。それは未来創造探究を通じて、自己の在り方生き方を試行錯誤しながら本校を卒業した卒業生(アルムナイ)の持つ力である。卒業生は大学に進学後も探究を続け(高校の時のテーマを引き続き行う生徒やテーマを変えながら新たなテーマを探究している生徒様々)ている。愛校心は数値として測定することはできないが、大学の夏休みを利用して学校でボランティアをしたり、卒業生イベント「卒業したって探究は続くんです!」を企画するなど、本校の探究文化は高校を卒業しても続いていることを紹介した。

(4) 質疑応答

質問者: 特定非営利活動いきたす代表理事 江口彰さん

Q1: 6つのゼミに配属されている先生と生徒数を知りたい。

A1: (板倉 T、林 T) 学年、年度によりばらつきはあるが、生徒30人に対して教員が3人の配置になっている。生徒にゼミの希望をとった後に先生の調整している。

Q2: 教科とのカリキュラムのバランスはどうなっているのか。自分の勤務する学校は1年次0単位、2年次2単位、3年次1単位と少ない。ふたば未来は8単位と多いが他の教科とのバランスはどうなっているのか。

A2: (林 T) 単位数というより、年間52週をどのように計画を立て実践するかを大切に考えて活動している。探究を8単位実施しているが探究以外の教科もアカデミック系列は週36単位入っており、生徒は探究も教科も頑張っている。このカリキュラムはいい部分もあるが弊害もあるため今後も継続してカリキュラムについて考えていく必要がある。

質問者: 勿来工業高校 樋口広宣先生

Q3: ルーブリック評価で、個人面談を行うのはいつ、何回行うか教えてほしい。

A3: (林 T) ルーブリック面談は3年間で6回行う。個人面談は毎回行えるわけではないが、1、2年次の秋に実施している。

Q4: 先生方が生徒への関わりとして、インストラクターやファシリテーターなどの役割があることがわかったが、これは普通教科の座学でも意識して教育活動を行っているのか。

A4: (林 T) やれているとは思えない。しかし、この手法(インストラクターなど)を先生方も学んでいるので、一方的に知識を伝達するだけの役割ではなく、教科それぞれ工夫して教科指導している。

質問者: 埼玉県立芸術総合高校 西澤廣人先生

Q5: 伴走が必要な生徒の中で、スキルが高いがアクションができない生徒へはどのように指導しているのか?

A5 (板倉 T): 目標を持たせるために生徒と教員が一緒になって話をするなどをし、アクションについて一緒に考える。

<分科会で対話したいことでの共有事項>

A チーム: 探究基本編 探究を加速させるために効果的な生徒との関わり方とは?

B チーム: 探究実践編 生徒の探究を加速させるための効果的なカリキュラムマネジメントとは?

グループに分かれ10分程度話し合いを持った。共有する時間がなかったため、話し合いのみとなった。最後に参加者から感想をいただいた。

立命館宇治中学校高校 前川哲哉先生

【感想】立命館宇治中学校高校 前川哲哉先生
タクシーで来校したが、校門についた瞬間から迎えて下さる先生方が会釈や挨拶をしてくださった。先生方の人間性の素晴らしさに感動した。また、生徒発表の高久さんの発表にも感動し、自分の学校でも講演してほしいと感じるくらいであった。生徒がこのように探究活動できるのは週3回も生徒のために会議を持ちコンセンサスを取り生徒の指導に当たられているからなのだなと感じた。

【感想】新潟大学附属新潟中学校 橋本善貴先生
学びのある研究発表会に参加できて感動した。先生方の生徒への関わり方を学ぶことができた。

5. 2. 1 総合的な探究の時間の指導法と評価～探究プロセスとルーブリック～

グローバル型発表会の第1分科会において、上記タイトルで発表した。本校では令和4年度より中高一貫の一期生が高校入学したことを受け、中高6年間を貫く探究カリキュラムを開発してきた。そのため、この分科会では中学校・高校のそれぞれにおいて、探究プロセスを精緻に組み上げる指導法とその適切な評価を行うための評価方法について議論した。

(1) 高校3年間における探究プロセスとその指導法について【板倉報告】

板倉報告では主に①高校3年間における探究プロセスと②教員の関わり方モデルについての説明があった。高校で行われる「地域創造と人間生活」と「未来創造探究」の位置づけや具体的な取り組み、そのタイムスケジュールなどカリキュラムの全体像が示された。未来創造探究において、問題発見・課題設定期、調査のためのアクション期、課題解決のためのアクション期、論文作成期など生徒の探究アクションを行う時期をステージ4に分け、そのステージごとに教員の役割や関わり方を変えていく仮説についての説明を行った。

4-1-2 生徒主体の学習と教員の関わり方

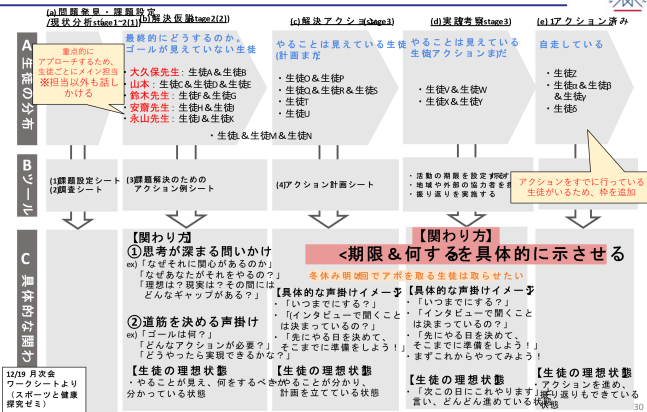
教師の関わりを妨げる3つの要因

- ① 生徒が教師の支援を権威的な言葉として受け取る可能性がある
 - ② 探究のあるべき姿のイメージが、生徒の支援要請を妨げる
 - ③ 教師は一人で複数の生徒を担当する必要があるため、ある程度進んでいる生徒に対しては後回しにする傾向がある
- ▼
- 探究における教師の役割は**多様**であることが求められる。
(指導⇄支援/Teacher⇄Facilitatorの**二者択一ではない**)
 - 一人での切り替えは難易度が高いので、**2人以上で連携**に関わる
 - そのため**面的な指導体制の構築**必須

ステージ	教師の関わり方
① 問題発見・課題設定	教師が問いを投げかけ、生徒が問題意識を共有する。
② 調査のためのアクション	教師が調査の方向性をサポートし、必要な情報を提供する。
③ 課題解決のためのアクション	教師がグループ間の交流を促進し、互いの進捗を確認する。
④ 論文作成	教師が論文の構成や表現についてアドバイスを行う。

また、この教員が生徒にどのように関わるかにとどまらず、学校全体のチームとして探究学習を指導するための方法についての工夫の説明があった。

4-3-5 生徒に応じた関わり方をチームで考える



(2) 中学校3年間での探究プロセスとルーブリックの活用【松浦報告】

松浦報告では主に中学校での具体的な取り組みとして、主に①未来創造学、②演劇ワークショップ、③リーダー学、④哲学対話の④つの活動について紹介があった。

「未来創造学」地域課題探究全体像



中学校の未来創造学では『ふたばの良さを発信する』をテーマとして、双葉郡の魅力を磨き、発信することが、中学校3年間のテーマとして貫かれ、演劇WSや哲学対話などで探究を行うための基礎体力をつけ、グローバルスタディー(GS)の授業で英語活用力を鍛えるなどを行い、中学校3年間の学習の集大成として、ニュージーランドへの海外修学旅行で世界に発信するという構造となっている。

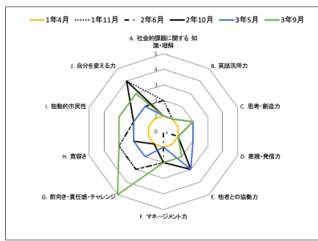
(3) 探究学習における評価とルーブリックの活用【林報告】

林報告では評価に関して①サマティブ(総括的)評価とフォーマティブ(形成的)評価、②ルーブリックの活用、③探究学習の観点別評価、④まとめ(可視化できない評価)の四点について説明を行った。

まず、評価に関しては人材要件ルーブリックの改訂のポイントについて説明し、ルーブリックは不変のものではなく、生徒や学校の実態に合わせて議論し、教員が目線合わせをする機能について確認した。また、ルーブリックは基本的にサマティブ評価として機能している。しかし、本校では年2回ルーブリックを測定し、このデータをもとにゼミ担当者とのルーブリック面談を行うことで、自学期の方針の確認や資質・能力の伸長を生徒自身に確認させることがフォーマティブ評価としても機能していることを確認した。

次にルーブリックによる教員の評価の実例として、分科会の前に生徒発表を行った2名の3年次生のルーブリック評価の分析を行った。ルーブリックの数値はあくまでも生徒の自己評価であり、教員が見立てた評価には差が出る。このルーブリック面談を通じて、目線合わせを行うとともに、生徒と教員の交流ツールとしても機能している。

2-4-2 ルーブリックによる教員の評価②



南相馬市から通うスペシャリスト系列の生徒1年次の双葉郡ツアーや演劇を通して平均2.4に上昇し、特に「自分を変える力」が4に。しかし、2年次の前半は探究活動がうまく軌道に乗らず、1.8で推移。特に、「他者との協働力」が0に。この頃、外部のボランティア活動に参加はしていたが、自分から関わろうとしない。自己評価は低い。教員には表れていないが、2年次後半に大きく変化する。マイプロ校内選考に落ち、代わりに参加したSteamフェスタ(ベネッセ主催)で自分なりの考えをまとめることができ、探究活動が進む。3年次前半の自己評価は低いが6月頃に外部連携によるワークショップの手伝いを始めたことで活動が進み、夏にもさらに探究活動が進み、内容も精査され、最終発表会では堂々と発表でき、入賞も果たした。最終的に大きく伸びた方は「志向と責任感」が+1.5ポイントとなった。

生徒Bのルーブリック
自己評価(3年間)
【平均値】1.00(1年4月)
→2.30(3年10月)

ゼミ担当教員による評価

44

また、ルーブリックを通じて生徒の資質・能力の伸長状況を未来創造探究の指導に対するのフィードバックとしても活用しているが、数値では測れない力もあると感じている。それは未来創造探究を通じて、自己の在り方生き方を試行錯誤しながら本校を卒業した卒業生(アルムナイ)の持つ力である。卒業生は大学に進学後も探究を続け(高校の時のテーマを引き続き行う生徒やテーマを変えながら新たなテーマを探究している生徒様々)ている。愛校心は数値として測定することはできないが、大学の夏休みを利用して学校でボランティアをしたり、卒業生イベント「卒業したって探究は続くんです!」を企画するなど、本校の探究文化は高校を卒業しても続いていることを紹介した。

(4) 質疑応答

質問者: 特定非営利活動いきたす代表理事 江口彰さん

Q1: 6つのゼミに配属されている先生と生徒数を知りたい。

A1: (板倉 T、林 T) 学年、年度によりばらつきはあるが、生徒30人に対して教員が3人の配置になっている。生徒にゼミの希望をとった後に先生の調整している。

Q2: 教科とのカリキュラムのバランスはどうなっているのか。自分の勤務する学校は1年次0単位、2年次2単位、3年次1単位と少ない。ふたば未来は8単位と多いが他の教科とのバランスはどうなっているのか。

A2: (林 T) 単位数というより、年間52週をどのように計画を立て実践するかを大切に考えて活動している。探究を8単位実施しているが探究以外の教科もアカデミック系列は週36単位入っており、生徒は探究も教科も頑張っている。このカリキュラムはいい部分もあるが弊害もあるため今後も継続してカリキュラムについて考えていく必要がある。

質問者: 勿来工業高校 樋口広宣先生

Q3: ルーブリック評価で、個人面談を行うのはいつ、何回行うか教えてほしい。

A3: (林 T) ルーブリック面談は3年間で6回行う。個人面談は毎回行えるわけではないが、1、2年次の秋に実施している。

Q4: 先生方が生徒への関わりとして、インストラクターやファシリテーターなどの役割があることがわかったが、これは普通教科の座学でも意識して教育活動を行っているのか。

A4: (林 T) やれているとは思えない。しかし、この手法(インストラクターなど)を先生方も学んでいるので、一方的に知識を伝達するだけの役割ではなく、教科それぞれ工夫して教科指導している。

質問者: 埼玉県立芸術総合高校 西澤廣人先生

Q5: 伴走が必要な生徒の中で、スキルが高いがアクションができない生徒へはどのように指導しているのか?

A5 (板倉 T): 目標を持たせるために生徒と教員が一緒になって話をするなどをし、アクションについて一緒に考える。

<分科会で対話したいことでの共有事項>

A チーム: 探究基本編 探究を加速させるために効果的な生徒との関わり方とは?

B チーム: 探究実践編 生徒の探究を加速させるための効果的なカリキュラムマネジメントとは?

グループに分かれ10分程度話し合いを持った。共有する時間がなかったため、話し合いのみとなった。最後に参加者から感想をいただいた。

立命館宇治中学校高校 前川哲哉先生

【感想】立命館宇治中学校高校 前川哲哉先生
タクシーで来校したが、校門についた瞬間から迎えて下さる先生方が会釈や挨拶をしてくださった。先生方の人間性の素晴らしさに感動した。また、生徒発表の高久さんの発表にも感動し、自分の学校でも講演してほしいと感じるくらいであった。生徒がこのように探究活動できるのは週3回も生徒のために会議を持ちコンセンサスを取り生徒の指導に当たられているからなのだなと感じた。

【感想】新潟大学附属新潟中学校 橋本善貴先生
学びのある研究発表会に参加できて感動した。先生方の生徒への関わり方を学ぶことができた。

5. 2. 2 総合的な探究の時間での協働～地域協働・外部協働～

グローバル型発表会の第二分科会において上記タイトルで発表した。生徒一人ひとりが持続可能な社会の担い手として社会の成長を生み出すためには、開かれた学校づくりが期待される。大学等の外部機関連携や、学校と地域の協働による「学びと地域活性化の相乗効果」の創出について議論した。

(1) 未来創造探究とは？

自己紹介ののち、県外からの来校者もいるため、福島県双葉郡についての概況を説明した。

本校は「生まれ変わり」を余儀なくされたことを奇貨とし、学習指導要領改訂以前から「主体的・対話的で深い学び」の導入を行っている。なぜ原発事故は起きたのか？ そもそも原発が誘致されたのはなぜか？ 何かゆがみがあったからではないか？ 何かを変える必要があるのではないかと、ということで建学の精神は「変革者たれ」とされている。

原発事故から十年が経ち、コロナ禍となった。それによりオンライン授業が始まるなど、今や知識はどこにいても手に入る時代である。そんな現代において、仲間とともに「世界にひとつだけの福島」で学ぶ意義を考えると、地域における課題の多さが挙げられる。原発事故特有の課題とそれが加速させた日本の地方が持っていた課題、そういった課題の多さを逆説的に「教育の強み」と見なし、「福島で学ぶ意味」として提示したい。

ふたば未来学園高校の未来創造探究の時間では、生徒が考える「あるべき社会」と現実の社会とのギャップを埋める努力をしている。いわば「手が届く世界を変えていく」手触りを得る時間である。

(2) 探究における協働体制と価値創造

協働体制① NPO法人カタリバ

もっとも身近でお世話になっているのがNPO法人カタリバだ。未来創造探究の時間での教師とともにゼミに入り、時には地域との窓口になってくれるのみならず、教育課程外でも地域イベントの実施や、放課後の学習伴走、相談相手などを担っていただいている。

協働体制② 地域

関西から福島に移り住み、福島大学の先生となった前川直哉氏は「福島にはカッコいい大人たちがたくさんいる」と評している。本校の探究ではその「カッコいい地域の大人」たちの力を借りている。具体的には普段の探究の相談相手や、地域の現状を知るためのインタビュー先、あるいは発表会の審査員として力をお借りし、2021年度には高校1～3年次でのべ350余人の方にお世話になった。今年度は初めてプレ発表会の審査員として本校OGをお招きした。本校は2022年現在8期目となる学校である。卒業生も当然若く、卒業しても大学で探究をつづけている者や、就学しながら地域に関わり続ける者もみられ、彼・彼女たちが新たな「地域のカッコいい大人」として本校と関われる可能性がこの先考

えられる。

■2022年高2年次発表会 外部アドバイザー

氏名	所属	関連領域
岩田雅光さん	アクアマリンふくしま	再エネ
山根辰洋さん	一般社団法人双葉郡地域観光研究協会	メディア、原子力
猪狩琉依さん	富岡わんぱくパーク・ふたば未来3期生	スポーツ、福祉
平山勉さん	双葉郡未来会議 代表	メディア
日比賢二さん	廃炉資料館	原子力
新國宏樹さん	廃炉資料館	原子力
猪狩 僚さん	いわき市役所、Igoku編集長	メディア、福祉
秋元 菜々美さん	ふたばいんふお	メディア、原子力
佐藤 亜紀さん	HAMADORI 13事務局	アグリ

協働体制③ 早稲田大学

これまで生徒の探究学習において、地域での実践を加速できた一方で、学術的な知と接続することによる科学的概念への昇華（抽象的に思考し転用できる概念的なものの見方・考え方の獲得）には課題があった。

学術知との接続

例：シビックプライドについて考察する
生徒へのオンラインレクチャー



例：早稲田大学先端社会科学研究所のシンポジウムで発表させてもらう

このことから、学知の接続を目的として2018年以降、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターとの連携を重ねてきた。2021年には大学研究者の常駐を開始、2022年には早稲田大学環境総合研究センターとの連携協定を締結した。

例えばオンラインレクチャーや、シンポジウムでの発表の機会を得るなど学術知との接続をしたり、常在の研究員さんによって、探究のテーマに応じた専門家を生徒に紹介してくれたりしてくださっている。

価値創造① 演劇と探究

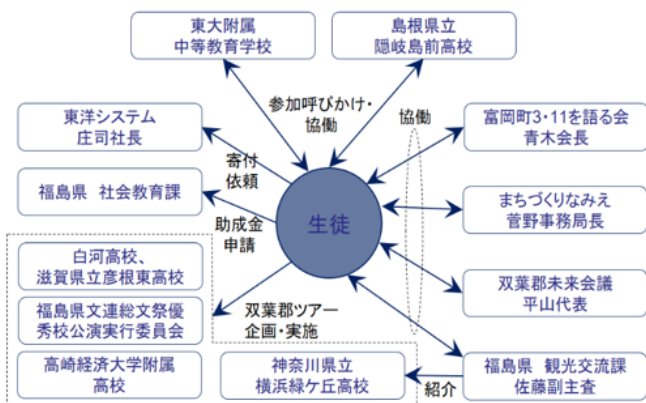
高校1年次では地域の方に取材して演劇を捜索している。地域の方にと手はモデルとなった演劇を鑑賞し、「対話の場」形成の難しさや「問いの共有」の難しさを再認識できた。

高校2・3年次には探究活動があり、それによる地域の活性化がなされている。過去の例でいえば、

震災で途絶えていた祭りが復活するにあたり、神輿の浜下りのルートと避難訓練に利用し、新たな価値づけをした事例や、関心があるコスプレを地域の高齢者に施すことで気持ちを華やかにさせた事例、避難先で元気づけられたチアリーディングを、今度は自分が主体となって子どもたちとチアで地域を盛り上げるプロジェクトなどである。

コロナ以前で最も外部との協働がなされたプロジェクトは地域交換留学である。白河市から本校へ入学した生徒によるプロジェクトで、地元友人が言った「双葉郡って放射能じゃん」にショックを受け、「他人事から自分ごとへ」を掲げ、福島と全国の高校生が互いの地域を訪問して問題解決のきっかけをつくるプログラムを企画し実践した。フィールドワーク、ホームステイ、地域未来会議を意図的に組み合わせ、資金調達・参加校募集等も自ら実施、3回119人が参加した。

下図は該当生徒の外部協働概念図。



※本校生徒・教職員との協働は除いた主な連携先。記載のお屏書きは活動当時のもの。

価値創造② 葛尾劇「宝宝宝」

伝承が途絶えていた葛尾村（現居住者200名）の「宝財踊り」をもとに、演劇部が作品を創作した。観劇した村人からは「よその若者が村のことを学んだ上に文化を伝えてくれるとは。胸に迫る」「隣に座っていた方が宝財踊りを踊っていた方で、また見られるとは、と涙を流していました」と感想を頂いた。葛尾出身でこのプロジェクトの主体となった生徒は「自分の中、誰の中にもある故郷を想う気持ちを土地の神様に見せたい。それを地域の人と共有したい」とコメントし、農村に残るアニミズムの心情が高校生にも残っていることを示した。



価値創造③ ふたば未来ごちゃまぜ探究カイギ

「いま、あなたの視点から、どんな双葉郡・浜通りが見えますか？」という問いをもとに、2022年10月地域、教員、NPO、行政、小中学生など総勢30名超の方が集う対話の場をカタリバの横山さんが開催した。「学校と地域をかき混ぜながら」がキーワードとなった。

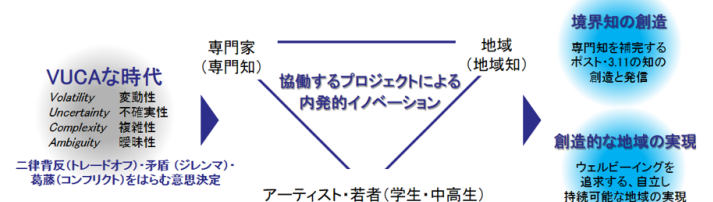
価値創造④ ふくしま学（楽）会・1F地域塾

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターは、世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島の復興と廃炉について共に考える「対話の場」として「ふくしま学（楽）会」を半年に一度開催しており（2023年1月で第11回目）本校生も毎回発表の機会を頂いている。

1F地域塾については本冊子「2.4.3 広島研修」を参考されたい。

(3) 地域における高校生の役割・力

いわゆるVUCAな時代において、地域知と専門知をつなぐ境界知的作業者の存在が求められている。立場やしがらみのない学生が専門知／地域知の分野をトリックスター的に軽やかに超え両者をつなぎ、いじくりまわして（TINKERING）新たな価値を創造する可能性がある。社会を変えるのは「ヨソモノ、ワカモノ、バカモノ」と言われている。小松理虔は「言い換えれば外部、未来、ふまじめ」と表現しており（『新復興論』）、未来ある若者のときに「ふまじめ」な関わりに創造的可能性を見出している。



5. 2. 3 第3分科会 グローバル教育～海外研修・英語力向上～発表内容

報告者 英語科 高野・星(耕)・塩田

1. ふたば未来学園の実践

(1) AFS 留学生の受け入れ(5年間：エリックの未来フォーラム)・ニュージーランドとの交流・水曜放課後・プレゼン・ディベート・スピーチコンテスト



(2) 演劇・イラクエイドワーカーの高遠さん講演会

(3) ニュージーランド研修(特例先遣チーム)・ドイツ研修・ニューヨーク研修と APU



2. 成果

プロジェクト型海外研修

E 他者との協働・F マネジメント力は上昇

B 英語活用力については、メタ認知が進み、帰国直後の一時的な下降、その後上昇。

I 能動的市民性については、他国のコミュニティ形成に触れて帰国後のUカルチャーショックに陥るも、その後持ち直し、探究活動への接続が成される。

(検定試験) GTEC 校内平均点の上昇・英検2級取得早期化・準1級1名

(海外留学) 長期 フランス1名・イタリア1名・ハンガリー1名(予定)

短期 ドイツ2名・オーストラリア1名



「卒業生」人的資源が年々豊富になる卒業生の APU 前 Zoom、OECD オンライン双葉郡ツアーで教員と外部関係者との協働



3. 今後の課題

(1) 生徒の変容…身体知の保障

オンライン交流<国内バブル内の国際交流<現地渡航国際交流<現地渡航プロジェクト型海外研修
現地渡航を伴わずとも、グローバルシティズンシップを涵養していくこと。

(2) 目標文化へのアクセスや国際交流がモチベーションになり、プランされすぎない研修の実現

→教員やコーディネーターにプランされた学びは大部分がオンラインで代替可能
(予定調和にならない海外研修が当たり前。)

(3) 偶発的に目の前の外国人に日本人(の代表)として頼られることが必要。



5. 2. 4 シティズンシップ・コミュニケーション・演劇教育 ～コミュニケーション教育～

グローバル型発表会の第4分科会において、上記タイトルで発表した。東日本大震災と原発事故という経験したことがないような災害に見舞われ、今までの価値観や社会のあり方を根本的に考え直し、常識にとらわれず新しい考えのもと生き方の見直しや社会の建設をする「変革者」として、自分の頭で考えて立ち上がる主体性、違いを乗り越えて手をつなぎ合っていく協働性、そのうえで新しい生き方や社会をつくりだす創造性、この3つは双葉のみならず福島県、ひいては日本全国で必要な力と言える。社会を変え、自分の地域を変えていくためには、与えられた者で満足するのではなく自分達で理想とする未来を構想してその未来を実現する力をつけなければならない、それが変革者である。本校では開校初年度より平田オリザ氏を講師に招き、演劇を通して地域課題を知る学習をおこなってきた。そして本校の中学校開校の際も NPO 法人 PAVLIC の方をファシリテーターとして講師招聘し、演劇ワークショップを実施するとともに、長野県立大学の神戸和佳子氏を講師に迎え哲学対話も始めた。令和4年度より中高一貫の一期生が高校入学したことで、演劇と哲学対話を3年間学んだ生徒たちにはどのような変化があるのかも分かった。

(1) シティズンシップとは

経産省で既に2006年にシティズンシップ教育について掲げているが、本校で育てたい生徒像を考えた時に、改めてシティズンシップについて定義づけしたものが以下の通りである。

○シティズンシップとは、身のまわりのことも社会のことも人任せにせず向き合い、自ら考え動くことができる能動的な市民としての主権者意識、市民性、人権感覚。

○本校ルーブリックの項目では下記に該当

・寛容さ（異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとすることができる）

・能動的市民性（社会を支える当事者としての意識を持ち、地域や国内外の未来を真剣に考えることができる。）

○加えて、本質を掴み、分断を乗り越えていくための能力として「コンテクストを掴み、互いの違いを乗り越える力」や「未知のことについて粘り強く問い・考え・語り・聴く力」等を育成。

シティズンシップの基盤となる**能動的市民性（本校ルーブリック項目I）、他者との協働力（E）、寛容さ（H）**等を育むために、哲学対話や演劇教育を実施している。また、哲学対話や演劇を通して本校が育てたいルーブリックの力が総合的に育つよう授業内容をデザインしている。

(2) 中学3年間を通した「哲学対話」と「演劇」による成果

中学では演劇と哲学対話を「総合的な学習の時間」において3年間継続的に活動している。自分と他者の違いに気づくこと、他者と対話を重ねること、協働すること、伝えるためのことば・身体・表情などの操作を試行錯誤すること、そして正解のない課題に取り組み楽しむことを通じて、表現力やコミュニケーション力、創造力を育成していく。また、お互いの違いを認め合う寛容な学びのコミュニティの形成にも繋がっていく。

このことによる成果は以下のとおりである。

・対話により問いが生まれ、思考を動かし、語ることが

考えに形を与え、さらに思考が深まり新たな問いへ向かうことで、本質をつかむ批判的思考力や聞く力が育った。

・自由な、真実を追求する学びの空間を形成することで、他者との考えの違いを肯定し、面白がることのできるようになった。

・演劇ワークショップの中で、自分を表現することのハードルが下がった。

・失敗を面白がる姿勢が育った（普段の生活での物事に対する考え方にも繋がる）

ふたば未来と哲学対話

◎ **担任だけではなく、全員で見とる哲学対話**

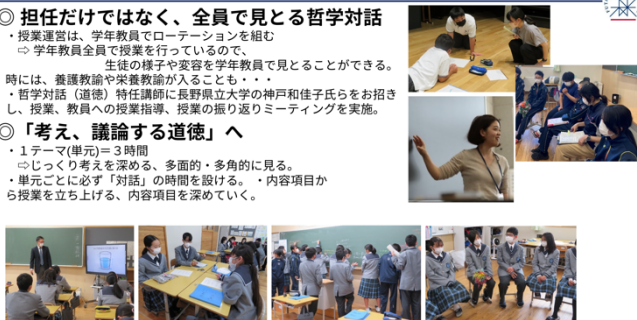
- ・授業運営は、学年教員でローテーションを組む
- ⇒ 学年教員全員で授業を行っているので、生徒の様子や変容を学年教員で見とることができる。

時には、養護教諭や栄養教諭が入ることも・・・

- ・哲学対話（道徳）特任講師に長野県立大学の神戸和佳子氏をお招きし、授業、教員への授業指導、授業の振り返りミーティングを実施。

◎ **「考え、議論する道徳」へ**

- ・1テーマ(単元)＝3時間
- ⇒じっくり考えを深める、多面的・多角的に見る。
- ・単元ごとに必ず「対話」の時間を設ける。・内容項目から授業を立ち上げる、内容項目を深めていく。



テーマを提示 グループで考えを深める 問い出し 対話と振り返り

13

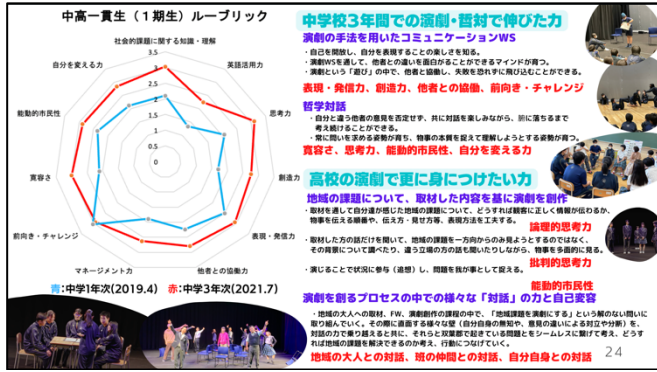
また、総合的な学習の時間以外でも、それぞれの教科の中で演劇や哲学対話を用いて授業を行う教員が増えた。演劇という身体的なアプローチを通して教科書だけでは分からない登場人物の気持ちを考えたり、哲学対話で一つの題材について問いを出し深く掘り下げたりすることに役立っている。

(3) 高校1年次「演劇を通して地域の課題を知る学習」

中学3年間の学びとその成果については(2)の通りだが、今年度の高校1年生は中高一貫1期生である。彼らが3年間演劇と哲学対話を通してどのように変化したのかは、次のページのグラフで示してある。

今年度の1年生は140名、そのうちの4割が中高一貫生である。中学での演劇はコミュニケーションWSを中心に自分を表現することの楽しさや失敗を楽しむ力が育ち、哲学対話では他者との違いを楽しみ、対話の中で物事の本質を捉える力が育った（演劇や哲学を使って自

分を変える)。



高校では演劇を通して地域の課題について学ぶが、結果的に中高一貫生が生徒全体に良い影響を与えたと言える。演劇的手法を用いた活動で生徒は、グループ活動という普段とは違う他者との関わりの中で、話し合いながらFW先を決め、取材の役割分担をし、取材した内容を演劇にしていく。

演劇を創るために構成された男女混合のグループ編成はクラスも系列もバラバラである。そのようなグループの中で対立や分断が生じた時、それは平穏なものばかりとは限らず、時には葛藤、衝突、軋轢が伴うものが多かった。一見、上手く行っているように見えるグループも、よく観察すると、一部のリーダータイプの生徒が主導で話し合いを進めており、その他が傍観者だったりしたものだ。しかし、今年度はそのどちらでもなく、お互いの意見の違いを認め合い、楽しみながら創作をするチームが多かった。これは哲学対話を通して協働できるリーダーが育ったからだと考える。また、これまでになく創造的な作品がそれぞれの班から生まれた。これらの活動を通して育った力は以下の通りである。

- ・ 中学3年間の演劇&哲学の学びを経た中高一貫生の役割(協働できるリーダー)
- ・ 次に続く「探究」に必要な「批判的思考力」「論理的思考力」が身についた
- ・ 様々な対話を通して、他者理解や他者への興味、地域の課題への理解が深まった。

分断・対立の構図に第三者として触れる / 演じることで体験し、問題を我が事として捉える

アレント「公平性(非党派性)は、複数の他者の複数の観点(viewpoints)を考慮することによって獲得される」

令和3年度1年次 3班作品 『トリチウム』
取材相手:東京電力広報担当Aさん(震災当時双葉郡の高校3年生)

東電「被災者から加害者になってしまう」
漁師「こいつらバチこいてる」「国民は知ってるのか、安全だって」
東電「伝えられる人、伝わっているからこそ大変な人、伝えたい人」
漁業関係者への追加インタビューを行った。

漁師「トリチウムのせいで、俺たちの魚が売れなくなる」
漁師「いや、俺たちがトリチウムに負けない魅力づくりをしなれば」

令和4年度1年次 20班作品 『大熊と未来の人々のために』
取材相手:鹿島建設(除染解体作業員)Kさん

大熊町民「前に進むためには仕方ない」
「悪い出の詰まった家を解体してほしくない」
鹿島建設「本当はものづくりがしたくてこの会社に入ったのに」
「辛い現場もあるけど復興のためだから」
女子高生「解体ありえない、かわいそう。うちらには関係ないけど」

(4) シティズンシップの醸成

生徒会役員を中心に1年間議論し、今年度は校則改正について動いた年となった。新年最初の登校日に校則を改正し、全校生に説明した。あわせて、校則改正規定を定めた。学校を民主主義の舞台としていくために法改正のプロセスを参照している。

全生徒の考えを深め、合意を形成していくこと。その際に、目的の正当性(なんのために変えるのか)、妥当性(なぜ校則による必要があるか)、整合性(正義と衡平、不整合や悪影響はないか)を検討することを大事に取り組んだ。これらも演劇や哲学対話を通して生徒一人一人にシティズンシップが育まれた結果と言える。

(5) 質疑応答

Q:人生を想像させ、未来創造探究に繋げていくというなかで、高校1年生から高校2年生に繋がられない生徒はいないのか?

→探究の授業でもなかなか手につかない生徒がいるが、知識を付けたり、好きなこと・やりたいことを探すなかで、自分が探究したいものを見つけ、町とどのように関わられるかを考える。

Q:ファシリテーターを生徒に任せただけの場合、問題にならないか?

→中学の哲学対話、生徒たちだけでは難しい部分がある。安心できて出来るように対話をさせるようにするためにも、教員のサポートを取る場合もある。また、普段の授業でも全員が置いていかれる生徒がいないように確認作業をしたりしている。

Q:たくさん出た問いを教員がどのように対応しているのか?

→一人ひとりの思った問いを記載。問いの意味を提示させる。全員が同じ土俵に立ち、多数決をとる。その他、話し合いのなかで問いを決める。その際、少数の意見にも注目をするなどの手法を取り入れるなどの工夫をしている。

Q:哲学対話を通してどのような変化があるか?

→自分たちでアクションを起こすことを考えさせることにより、コミュニケーションを通して対話ができるようになる。話が聞けるようになる。このことは授業中を通して感じられることである。

Q:哲学対話の答えを知っている先生と答えを知らない生徒の関係をどのように対応して乗り越えているのか?

→あえて知らない役をすることも。しかし、答えがない場合が多く、先生としても一参加者として入って、人生経験を踏まえて話したり、生徒からの意見を聞いたりと、共に考えることが多い。

Q:グループで活動する効果は

→意見の違いをネガティブなものとして捉え、傍観者でいることで乗り越えるべき壁を避けており、対話が成立していない班は、作品が深まらずに表面的な部分をなぞったものとなることが多い。逆に、あらゆる壁にぶつかり、上手く行っていない班ほど、それらの対立や分断を対話によって乗り越えた先に完成した演劇は、こちらが驚くほど地域の課題を捉えた素晴らしいものとなっている。

5.2.5 伴走する先生を支える主体的・対話的で深い学び ～教員エージェンシーと指導力向上～

本校の「未来創造探究」は、探究ゼミでの活動を中心に複数の教員によって構成されたチームが協働をしながら、組織的に運用・改善がなされてきた。具体的な授業運営や生徒伴走の方法に関しては、他の章で述べられているためここでは割愛する。本章では、グローバル型研究成果報告会に際し実施した教員アンケートを基に、「探究に関わったことで、教員自身にどのような変化や学びがあったか」、「探究を推進するにあたって、重要なサポートは何か」の2点について報告する。

(1)はじめに

「総合的な探究の時間」は、学習指導要領においても「各学校においては、第1に示した総合的な探究の時間の目標を踏まえつつ、課程や学科をはじめとした学校の特色、生徒の特性等に応じた教育活動を行うことが求められる。」とあるように、各校に運用が委ねられている現状がある。また、実際の指導においても「学習単元や教科書が設定されていない」、「専門性を持つ専科教員が存在しない」など、自由度(=曖昧性)が高いという特性があり、授業を行う教員にとっても揺らぎが起こりやすい状況にある。

実際に、2019年に取得した教員アンケートでは「つかみどころがない」、「未知の授業」、「初めは探究の時間が苦痛だった」など、その曖昧性の高さゆえに起こる不安や悩みが読み取れる回答が多くあった。

(2) 未来創造探究に関わることによって教師自身に起こった変化

2022年9月～12月にかけて、「未来創造探究(総合的な探究の時間)の運営経験を通じて、教師にどのような学びや変化があったか」、仮説を立てるための材料を取得することを目的とし、ふたば未来学園中学校・高校の教員を対象にアンケートを実施した。(取得件数=36)

結果を以下に示す。

質問① 未来創造探究を実施した前と後で以下の悩みや不安に変化はありましたか?

質問①では、未来創造探究を実施した前と後で、以下のa～gの悩みに変化があったかを5段階評価(1が「解消されていない」5が「当初の悩みや不安が解消された・次の課題に変化した」)で質問した。

- a. 探究におけるテーマ・問いの設定の仕方について
- b. 生徒の学びの評価方法について
- c. 授業案・カリキュラム設計について
- d. 探究における調査や実践の支援について
- e. 外部との連携・協働について
- f. 校内での探究授業の理解の促進について
- g. 進路との接続方法について

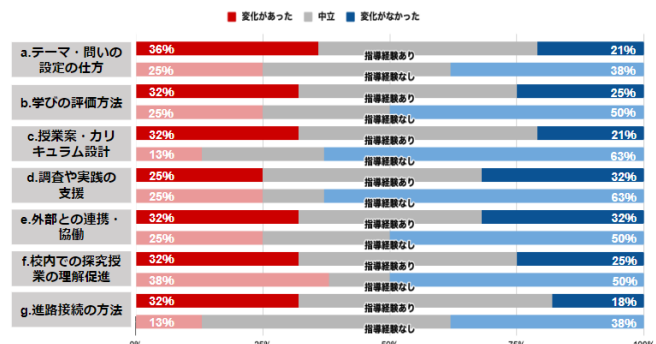


図1 探究の実施前後で上記の不安や悩みに起きた変化

アンケートを分析すると、「企画研究開発部所属の有無」や「探究ゼミリーダー経験の有無」では差異が出ず、「ゼミ指導経験の有無」で比較をすると指導経験がある教員は、全体的に肯定回答が高い傾向にあった。ただし、「調査や実践の支援」のみ指導経験の有無に左右されず否定回答が肯定回答を上回った。(※「指導経験の有無」=高2,3年の探究ゼミを半年以上担当したことがあるか、ないか)

「調査や実践の支援」に関して、指導経験のある教員に聞き取りを行ったところ、①1人の生徒に上手くいった指導法が他の生徒にそのまま適応できるわけではない。(生徒やテーマに合わせた個別性の高い伴走の重要性)

②現状の悩みが解決されると新たな課題にぶつかるため、悩みが完全には解決されない。(プロジェクト進捗による指導方法の変化の必要性)といった回答が得られ、「総合的な探究の時間」における指導の特性が影響していることが予想される。

質問② 未来創造探究を実施した前と後で以下の項目に変化はありましたか?

質問②では、未来創造探究を実施した前と後で、以下の3つの項目に変化があったかを5段階評価(1が「変化がなかった」5が「変化があった」)で質問した。

- a. 教員間で協働したり、日常的に話し合ったりする機会が増えた。
- b. 新しい取り組みを実践することに対して前向きに捉えられるようになった。
- c. 地域の大人やカタリバなど、外部人材と協働することを前向きに捉えられるようになった。

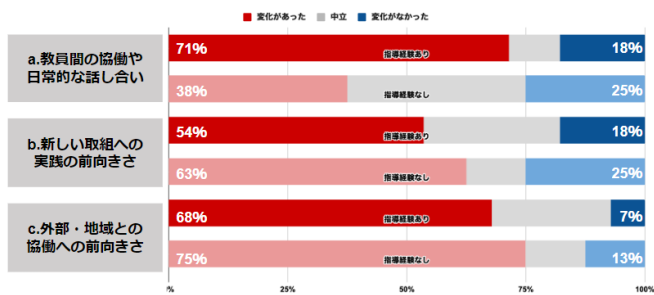


図2 探究の実施前後で上記の項目に起きた変化

質問③ 未来創造探究を実施した前と後で、あなたの「学び」に対する価値観や考え方（学習観）にどのような変化や揺らぎがありましたか？（自由記述）

No.	コメント抜粋
1	長いスパンで生徒の成長を見守れるようになった。
2	主体的に取り組めない生徒の対応は相変わらず難しい。
3	教員が知識などを押しつけるのではなく、 生徒が自分で行動したり気づいたりすることが大切 であると感じ、必要以上に干渉しないようにするようになった。
4	答えを与えるのではなく、ヒントを与えるように意識するようになった。
5	生徒の考えを聞くことがより増えた。
6	生徒1人1人の気持ちや学びへの動機づけを意識するようになった
7	生徒の学習状況（進捗状況や意欲）に応じた教員の関わり方やサポートの仕方を意識するようになった。
8	「何のために」「どういったことに役立つのか」など先々を見据えた視点を問うようになった。
9	進学先と学びたいことのマッチングが実現できるようになったことと、学びの転移が意識できるようになったこと
10	生徒の探究であるため、教員として最低限の指導は必要であるが、探究活動においては生徒の支援や理解を多くし、 生徒のモチベーションを高める働きかけが大切だと感じている。
11	生徒自身が興味を持たないと探究が深まらないので、やはり 動機づけやそのテーマに至った過程が大切 だと改めて思いました。
12	生徒の学びたいという主体的な気持ちが 強いほど、探究の内容も深まっていくと感じた。

表3 探究を経験することで起きた教員自身の変化

質問②では、全項目で指導経験に関係なく肯定回答が否定回答を上回ったが、特に「a.教員間での協働や日常的な話し合いが増えた」では伴走経験の有無で差が顕著にあらわれ、7割以上の教員は変化があったと回答をしていた。

また、質問③の自由記述回答では、個別の学習状況を見立てることや、内発的動機づけやモチベーションを重視する意識への回答が多く、主に指導に対しての意識変容の記述が多く見られた。これらは後の「授業運営に必要な支援」でも述べるが、各ゼミの定例 MTG 等を初めとした協働促進の仕組みが反映された結果と言えるだろう。

(3) 教員の変容を支える対話の文化

質問④ 授業運営に対して有効だった支援は何ですか？（※複数の設問の記述回答を抜粋）

支援内容	コメント抜粋
話し合い・相談	具体的な生徒の話からどのように伴走するか、どのように探究活動を支援するかを企画部内で話している。 目標と恒常的に情報交換（対話から洞察まであくまで）できる環境はきわめて大きい。 生徒によってテーマが異なるため、 話し合いを日常的に行わなければならないことができない。 ゼミミーティングで各PJについて話し合った。 日々の雑談の中にも話が出てくることもある 自分の思考を整理したいとき、アイデアをが欲しい時に 【壁打ち】 をしてみようこと。 企画研究開発部や探究に携わる教員、カタリバのスタッフの皆さんとの連携。特にミーティングの機会。フォームやスプレッドシート等による記録が定期的にあることが指導上大いに役立っていると思います。 中学教員だけでは情報量に限界があるため、高校教員やカタリバスタッフに 相談する 商りに「とりあえずやってみよう」という 前向きなマインドを共有できる仲間がいること。 生徒に関する情報共有が増えた。 先生方との日常的な情報共有 担当している班への助言などをいただく機会があるため
アドバイス	たくさん 人の意見や、考え方を取り入れないでそれぞれの生徒に対応できないから。 学年に入っていたカタリバスタッフのみならずが 生徒の探究に対して真剣に考えていただき、生徒や教員に助言していただいたから
チーム体制	教員間で協力することができたため。
事例の共有	高校生や中3生の発表の様子を見て、 新年度からのデータの蓄積、他学年の発表を見る機会です。 外部に送るメールの文章などのアドバイス（生徒から質問があったことへの回答）。 テーマ設定する際に用いた資料等
校內研修	未来研究会（教員の研修）はもっとやったほうがいい。

表④ 授業運営に対して有効だった支援

授業運営に対する有効な支援を、各質問の自由記述から抜き出したところ、研修などよりも「ゼミ定例 MTG」や「教員間での日常的な雑談・相談」といった回答が非常に多く見られた。

本校では、企画研究開発部、各ゼミの担当者など、それぞれの役割に応じて MTG を設定しており、この重層的な会議体の設計が協働を促進する仕掛けになっている。

会議体	参加者		頻度	主な議題・内容
	教員	カタリバ		
各探究ゼミ週次 MTG	・各探究ゼミ担当教員（リーダー1名+2〜3名）	・探究ゼミ支援スタッフ	週次	・各生徒の進捗共有、指導・伴走方針のすり合わせ ・次回以降の授業設計
月次担当者会	・各探究ゼミ担当リーダー1名（+2〜3名） ・学年探究担当教員	・学年付コーディネーター ・探究ゼミ支援スタッフ	1〜2ヶ月に1回	・課題組や方針、スケジュールの共有 ・解決策の議論、立案 ・月次担当者会の企画設計 ・全体授業、校内発表会の企画設計
各学年コアMTG	・学年探究担当教員	・学年付コーディネーター	週次	・各探究ゼミ・生徒の現状把握 ・解決策の議論、立案 ・月次担当者会の企画設計 ・全体授業、校内発表会の企画設計
企画研究開発部 部会	・所属教員全員	・統括コーディネーター ・学年付コーディネーター	週次	・各学年の進捗・課題の共有 ・カリキュラム全体の議論 ・外部発表会マネジメント 等

表5 実際の各探究ゼミ MTG・月次担当者会の実施内容

担当者は、他教員との対話や議論を通じて、個々人の内省、知見の共有、アイデアの発散を行うことで、現状の課題に対する解決策を得て、次の実践に向かうことができていると言えるだろう。



2年次探究担当者月次会の様子

(4) 今後の展望

未来創造探究を軸として校内で培われた「対話と協働」の素地が、「学び続ける教師」の後押しとなり、組織のしなやかさを生み出している。

コロナ禍での臨時休校期間でも、ICT ワーキングチームを中心に教員が自律的に各教科で議論・検討し、即時の ICT 授業への移行などが実現された。

このように、日常で培われた「対話と協働の文化」は有事の際にも柔軟に変化に対応することに繋がっていたと考え、変革が求められる現在の学校教育の現場において示唆深く、今後も「学校」という組織の変化の可能性を探究していきたい。

5. 3 課題と今後の方向性

(1) さらなる探究の高度化

より文理融合したグローバル・イシューや高度な学問分野との接続を強化するため、令和5年度以降WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築事業に申請している。福島アドバンスラーニングネットワークを形成し、県内の連携校とともにカリキュラム開発や東北大学・早稲田大学・福島大学などの連携大学とAP（アドバンスト・リプレイスメント）の導入の準備を進める。また、福島をフィールドとしたグローバル探究や世界をフィールドとしたグローバル探究など、探究を軸としたカリキュラム開発を進めていく計画である。

この事業を進める中で、長期的な目標としては、福島国際研究教育機構をはじめ、地域や全国・海外で世界と協働しながら活躍人材の輩出や「教育」と「創造的復興による持続可能な地域実現」の相乗効果を創出することを実現したいと考えている。

(2) 教科横断的な学習と総合探究、教科と探究の往還関係の構築

教科と探究の往還関係については、SGH時代から本校では「クロス・カリキュラム」として研究開発を進めてきた。SGH時代にはある程度の成果をあげたが、グローバル型指定期の3年間ではコロナ対応などもあり、取り立てて効果的な研究開発を進めることができなかった。WWLに申請するにあたり、文理融合カリキュラムを構築する必要から、クロス・カリキュラムの意義を再確認することができた。これまでの偶発的なクロス・カリキュラムから教科横断的な学習を学校全体のカリキュラムに統合する方法を研究して、文理バランスよく人材育成を図っていくカリキュラムデザインを今後検討したい。

(3) 地域復興と教育の相乗効果を生み出す探究学習

生徒の探究での活動が活発化し、地域の方々との協働によって、生徒の探究は年々深化している。今回の探究大賞を受賞した生徒は、実践を通じて、双葉郡の子どもたちにとって地域での習い事の数が少ないという顕在化していなかった新たな課題を発見し、その課題解決にも貢献した。一連のワークショップを経て大観衆の前でパフォーマンスを行ったプログラムにより、子どもたちの心に生涯残る確かな変容を生み出した。また、双葉郡の親子をはじめ、様々な方々を活動に巻き込み、ソーシャル・キャピタルとしてのチアを行うことで、地域住民のウェルビーイングの向上につなげ、特筆すべき成果をあげた。一方で地域住民のウェルビーイングについての検証についてはまだまだ未知の領域であり、どのように評価していくかについては、今後も研究を進める必要がある。

(4) 全校で探究学習を伴走するための校内研修の充実

昨年に引き続き、今年度も教員の指導力向上に向けた取組を組織的に実践することができた。具体的には以下のような取組が行われた。

- ・未来研究会（全体で行う教員研修）（年間3回）
- ・企画・研究開発部（15名程度）による定例ミーティング（週に一度実施。探究関連の取組についての議論、情報共有の場）
- ・各学年の探究担当者（各学年20名程度）による月次会（月に一度実施。生徒の指導の在り方等についての議論、情報共有の場）
- ・2, 3年の各ゼミ担当者（各3名程度）による定例ミーティング（週に一度実施。ゼミ内の探究テーマの指導、進捗確認の場）

小さな会議体を増やして、機動力をあげつつ、全体での研修会を減らしてきた。グローバル型指定期の3年はコロナ対応に伴うオンライン化への準備・研修や働き方改革に伴う会議の削減などの課題に向き合ってきた。今年度の研修ではグローバル型最終年度にむけての目線合わせを行った。2回目の未来研究会では、「探究の効果的な伴走方法」をテーマに、探究伴走の具体事例の洗い出しを行い、学校全体の伴走力のブラッシュアップを行った。この研修から、教員はチェックリストを用いてどのように生徒と向き合っているかをチェックしながら、探究ステージ-伴走スタンス-具体的な関わり事例を検討した。

ふたば未来学園中学校・高校は探究学習の先進校として県内外からも認知されるようになってきた。その分、教員がかかえる校務量は多く、教員の長時間労働やカリキュラムオーバーワークが問題点としてあげられる。一方、その中でもなくしてはいけないものもある。例えば校務の中で削減してはいけないものは「目線合わせ」のための会議や「理念を共有」する会議である。校務の内容を精選しつつ、教員のウェルビーイングを図るうえで、「自分たちが必要だと思う教育活動は何か」を教員間で議論し、校務の棚卸しをすることが必要不可欠である。次年度以降も限られた時間とリソースをどの活動に注力するかを検討していきたい。

(専門教科・科目及び学校設定教科・科目)

教科	科目	入学年度		令和4年度			令和3年度			令和2年度			備考
		年次		1	2	3	1	2	3	1	2	3	
				必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	
農 業	農 業 と 環 境				2			2			2		課題研究は、2・3年次継続履修。 総合実習は、2・3年次継続履修。 食品製造は、2・3年次継続履修。
	課 題 研 究				3	3		3	3		3	3	
	総 合 実 習				3	3		3	3		3	3	
	農 業 情 報 処 理								2			2	
	野 菜					2			2			2	
	草 花				2			2			2		
	食 品 製 造				2	2		2	2		2	2	
	微 生 物 利 用								2			2	
	造 園 技 術								2			2	
	農 業 と 情 報					2							
地 域 資 源 活 用						3							
工 業	工 業 技 術 基 礎				3			3			3		
	課 題 研 究					4			3			3	
	実 習					3			3			3	
	製 図				2			2			2		
	生 産 シ ス テ ム 技 術								2			2	
	環 境 工 学 基 礎								2			2	
	電 気 基 礎							3			3		
	電 力 技 術					2			2			2	
	社 会 基 盤 工 学					2			2			2	
	地 球 環 境 化 学				2			2			2		
	電 気 回 路				3								
	工 業 環 境 技 術					2							
	生 産 技 術					2							
商 業	ビ ジ ネ ス 基 礎				2			2			2		令和2、3年度入学生は、課題研究及び原価計算は、 2・3年次継続履修。 令和4年度入学生は、簿記は、2・3年次継続履修。
	課 題 研 究					3		3	3		3	3	
	マ ー ケ テ ィ ン グ				3			2			2		
	商 品 開 発								2			2	
	広 告 と 販 売 促 進								2			2	
	簿 記				4	2		3			3		
	財 務 会 計 I								3			3	
	原 価 計 算					3		2	2		2	2	
	ビ ジ ネ ス 情 報								2			2	
	情 報 処 理				3								
	ビ ジ ネ ス 法 規					2							
	ビ ジ ネ ス コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン					2							
ビ ジ ネ ス マ ネ ジ ム ン ト					2								
観 光 ビ ジ ネ ス					3								
家 庭	子 だ も の 発 達 と 保 育							2			2		子どもの発達と保育は、2・3年次継続履修または3 年次のみ履修。 令和4年度入学生は、フードデザインは2・3年次継 続履修。 保育基礎は、2・3年次のいずれかで履修。また、保 育実践は2年次で保育基礎を履修した者が3年次で選 択可。 介護福祉演習は、2年次で生活と福祉を履修した者が 選択可。
	生 活 と 福 祉				2・4			2・3			2・3		
	フ ー ド デ ザ イン				2	3			4			4	
	保 育 基 礎				2	2							
	住 生 活 デ ザ イン				2								
	フ ァ ッ シ ョ ン 造 形 基 礎				2								
	保 育 実 践					2							
課 題 研 究					4								
介 護 福 祉 演 習					6								
情 報	情 報 メ デ ィ ア							2			2		
	ア ル コ リ ス ム と プ ロ グ ラ ム							2			2		
	情 報 デ ザ イン				2						2		
福 祉	社 会 福 祉 基 礎							2			2		
	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 技 術							3			3		
	生 活 支 援 技 術								4		4		
	介 護 総 合 演 習								4		4		
	こ ころ と か ら だ の 理 解							2			2		
体 育	ス ポ ー ツ II	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	スポーツII、スポーツIIIは、1～3年次継続履修。
	ス ポ ー ツ III	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
	ソ ル フ ェ ー ジ ュ								2			2	
音 楽	鑑 賞 研 究							2			2		
	器 楽							2			2		
美 術	素 描										2		
	鑑 賞 研 究										2		
英 語	英 語 演 習				3			3			3		
	総 合 英 語 演 習				4			4			4		
	国 語 演 習				3			2			2		
人 文	世 界 史 演 習				3			5			5		
	日 本 史 演 習				3			5			5		
	表 現 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン				2			2			2		
	数 学 演 習			1	3・5			4			4		
	総 合 数 学 演 習			2・3	3・5			6			6		
理 数	応 用 数 学				2			2			2		数学演習は、2年次に1単位履修した者は3年次に3 単位の継続履修(計4単位)、3年次に履修の者は5 単位履修。 総合数学演習は、2年次に2単位履修した者は3年次 に5単位の継続履修(計7単位)、2年次に3単位履 修した者は3年次3単位の継続履修(計6単位)。
	微 分 積 分 演 習				3								
	数 理 数 学				5								
	化 学 演 習				2			2			2		
	生 物 演 習				2			2			2		
	地 学 演 習				2			2			2		
	物 理 演 習				2								
	理 科 総 合 演 習				3								
産 業	ス ベ シ ャ リ ス ト 基 礎			2									
	Webデザイン&Webプログラミング				2								
農 業	葉 子 演 習				2								
工 業	地 域 エ ネ ル ギ ー				2			2			2		
保 健 体 育	ト ッ プ ア ス リ ー ト 概 論				2			1					令和3年度以降の入学生は、産業社会と人間の代替科目として履修。
探 究	地 域 創 造 と 人 間 生 活	2				2							
総 合	産 業 社 会 と 人 間								2				
総 合 的 な 探 究 の 時 間		1	3	2			3	3		3	3		
小 計			74~				74~			74~			
ホ ー ム ル ー ム 活 動		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
合 計			77~				77~			77~			
組 編 成			5				4			4			

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 人材育成要件・ルーブリック(6 April 2021 Ver.)

協働
創造

学力概念	No	資質・能力・態度(まとめると)	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
知識 Knowledge "What we know"	A	 社会的課題に関する知識・理解 一般常識や基礎学力をつけながら、世界・社会の状況の変化やその課題を理解するための知識を身に着ける。	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	地域の復興に向けた課題や、目の前の課題についての基礎的な知識を得る。	環境・エネルギー問題など持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題について基礎的な知識を得る。	社会の課題について、習得した知識を深掘し、周辺情報や関連情報を集め理解する。	社会の課題について、目の前の課題と関係する知識を俯瞰してつなげ、人に説明できるレベルまで理解する。
	B	 英語活用力 英語を使つてのコミュニケーションができるようになる。	英語でコミュニケーションをとろうとする関心・意欲・態度を持ち、自分のことについて英語で簡単に伝えられる。	自分の興味関心のあることや、地域について英語で説明できる。	地域や研究内容について、原稿を元に英語でスピーチし、簡単な質疑応答ができる。(CEFR A2レベル)	地域や研究内容について、即興で英語でスピーチし、意見交換ができる。(CEFR B1レベル)	地域や研究内容について、ストーリー、データ、事例などを交えながら英語で説得力を持って主張し、議論できる。(CEFR B2レベル)
技能(スキル・コンピテンシー) Skills "How we use what we know"	C-1	 思考力 物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、スケールの大きな考え方ができる。	与えられた情報を整理できる。	目の前にある課題やその解決のための内容を論理的に掘り下げて考えることができる。	メディアを活用して情報を集め、情報を分析・評価・活用しながら課題を発見したり設定できる。	現実と理想の差を踏まえながら、広い視野・大きなスケールで既知の事実について批判的に考え、本質を追求することができる。	未知のことについても粘り強く考え、自分の考えや常識にとらわれず、本質的・根源的な問いを立て、多面的に考えることができる。
	C-2	 創造力 自分なりの見方や好奇心を持って試行錯誤し、社会に新たな独創的価値を創造することができる。	アイデアを生み出そうと、自分なりの見方や考え方に基ついた観察や思考を行うことができる。	好奇心をもって、他者との違いを楽しみながら自分なりのアイデアを生み出そうと行動できる。	目の前の課題に対して、これまでに得た知識や技術に関連づけながら、自分なりのアイデアを実現しようと行動できる。	行動する中での出会いから得られた知見や発想を取り入れ、自分なりのアイデアを社会的に価値あるものに高めることができる。	試行錯誤(創造のスパイラル)を繰り返しながら、価値を更に発展させ、社会に新たな独創的価値を創造することができる。
	D	 表現・発信力 どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる。	自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。	突然指名されたときでも憶せず、集団の前で、自分の意見や考えを相手に伝えるように表現することができる。	データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考えたり、テクノロジーを活用したりしながら、分かりやすく伝えることができる。	多様な人々へ、熱意とストーリーを持って腑に落ちる形で説得力ある発信を行い、共感を得ることができる。
	E	 他者との協働力 異文化・異なる感覚の人・異年齢等を乗り越え、仲間と協力・協働しながら互いに高めあえる行動が取れる。異文化・異なる感覚の人・異年齢等を乗り越え、仲間と協力・協働する。	集団や他者との中で、決められたことや指示されたことに一人で取り組むことができる。	集団や他者との中で、自分の役割を見つけ、個性を活かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる。	集団や他者との中で、他者の良さに共感し、新たなものを取り入れながら、共通の目標に向かって活動を進め合意形成を目指すことができる。	集団や他者との中で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を作ることができる。	分断・対立、文化・国境を越えて、社会を変革する行動にうつし、互いに高めあう同志としての関係をつくれる。
	F	 マネジメント力 自分や組織での取り組みを計画性を持って進めることができる。	指示を受けながら作業を実施できる。	指示を待たず、解決に向けた適切な目標を設定し、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	全体にとって必要な作業を見出し、自分の作業に優先順位をつけて、複数の課題に同時に対処することができる。	作業の繋がりが、全体スケジュールを意識し、チームやメンバーで作業を適切に役割分担して目標に向けた行動ができる。	今後のスケジュールやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。
	G	 前向き・チャレンジ 自分を意味ある存在として考え自信を持ち、課題解決のために自分の役割を見つけ、全力で取り組み、決してあきらめず遂行できる。	自分を意味ある存在として考え、物事をポジティブに捉えることができる。	自分に自信を持ち、目の前の課題を自分のこととして好意的に捉えて、主体的に取り組める。	集団や他者との中で、自分の役割を見つけることができ、すぐに解決方法が分からなくても考え続けることができる。	困難にぶつかっても自分の責任を果たす努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果たし、失敗してもその失敗を糧とできる。
人格(キャラクター・センス) Character "How we engage in the world"	H	 寛容さ 異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとするができる。	集団や他者との中で、他者を気づかえる。	集団や他者との中で、相手の立場や考えを想像し、共感できる。	集団や他者に対して、思いやりをもって行動し、周囲の幸せを考えることができる。	考えの違う他者に対して、ユーモアを持って接するなど、他者との違いを楽しめる。社会や環境の変化を前向きに捉えられる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分や社会をより良くしていくための重要なものと考え受け入れられる。
	I	 能動的市民性 社会を支える当事者としての意識を持ち、地域や国内外の未来を真剣に考えることができる。	所属する集団の一員としての自覚を持つ。	社会の一員としての自覚を持ち、社会の抱える問題に目を向けようとする。	社会をより良くしようと、社会の主体としての意識を持ち、社会がより良くなるための考えを持つことができる。	社会に貢献しようとする意欲と自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼそうとする。	社会・未来を良くしようとする志を持ち、自分自身の意見を他者に真剣に語る事ができる。
自らを振り返り変えていく力(メタ認知) Metacognition "How we reflect and learn"	J	 自分を変える力 自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動や、将来の夢に繋げることができる。	自分を向上させるために、自分自身で目標を立てることができる。	自分を向上させるために、自分の目標と現実の差を見つめることができる。	自分の目標に近づく方策を考え自ら行動することができる。	自分の目標の達成のための行動を、常に自分自身で見直して反省しながら、学び続け、次の行動につなげて取り組むことができる。	社会の中での自分の役割や意義を俯瞰して考え、自分の目標や将来の夢と関連づけて大局的に行動できる。

自立

令和4年9月7日
高校教育課

令和4年度福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
第1回運営指導委員会 記録

日時 令和4年9月7日（水）15:00～16:30

会場 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校（オンライン開催）

【出席者】

No	所属	職	氏名	備考
1	OECD教育スキル局	シニア政策アナリスト	田熊 美保	オンライン参加
2	慶應義塾大学	教授	飯盛 義徳	オンライン参加
3	國學院大學	教授	田村 学	※都合により欠席
4	ふたば未来学園中学校・高等学校	校長	郡司 完	
5	ふたば未来学園中学校・高等学校	副校長	南郷 市兵	
6	ふたば未来学園高等学校	教頭	星 弓彦	
7	ふたば未来学園高等学校	教頭	佐藤 章	
8	ふたば未来学園中学校	教頭	大森 淳	
9	ふたば未来学園高等学校	教諭	山崎 次郎	教務部主任
10	ふたば未来学園高等学校	教諭	渡部 ゆかり	生徒指導部主任
11	ふたば未来学園高等学校	教諭	日渡 淳一	進路指導部主任
12	ふたば未来学園高等学校	教諭	新関 幸太郎	総務部主任
13	ふたば未来学園高等学校	教諭	北原 志帆	図書部主任
14	ふたば未来学園高等学校	教諭	遠藤 太	保健厚生部主任
15	ふたば未来学園高等学校	教諭	佐藤 和義	1年次主任
16	ふたば未来学園高等学校	教諭	中村 慎	2年次主任
17	ふたば未来学園高等学校	教諭	遠藤 明緒	3年次主任
18	ふたば未来学園高等学校	教諭	林 裕文	企画・研究開発部主任
19	ふたば未来学園高等学校	教諭	齋藤夏菜子	企画・研究開発部副主任
20	ふたば未来学園高等学校	教諭	高野 寛之	企画・研究開発部
21	ふたば未来学園高等学校	教諭	小磯 匡大	企画・研究開発部
22	ふたば未来学園高等学校	教諭	板倉 雄太	企画・研究開発部
23	ふたば未来学園高等学校	教諭	高山 さなえ	企画・研究開発部
24	NPO法人カタリバ双葉みらいラボ	拠点長	横山 和毅	
	高校教育課	課長	平澤 洋介	オンライン参加
	高校教育課	主任指導主事	志賀 勲	オンライン参加
	高校教育課	指導主事	赤岡奈津美	オンライン参加

1 開会（15:00）

2 主催者あいさつ（高校教育課 平澤洋介課長）

3 指定校長あいさつ（ふたば未来学園中学校・高等学校 郡司完校長）

4 運営指導委員及び関係者紹介

5 運営指導委員長及び委員長代理選出

6 説明（学校より）

- (1) 令和3年度の取り組みについて
- (2) 令和4年度の研究開発実施計画について
- (3) 今年度取り組んでいきたいことと今回の協議題について

7 協議「学校全体のカリキュラム・マネジメントの観点から、未来創造探究で取り扱う生徒のプロジェクトにどのようにして教科の知識を組み入れていくか？」について

○ 田熊 美保氏【OECD教育スキル局シニア政策アナリスト】

・探究と教科の横断について、注意することは、異なる教科の教員同士でチームを作り、解を見つけるようにしないとオーバーロードになってしまうという報告がある。また、学年や校種によって、知識の習得に違いがあるので、発達段階に合わせたカリキュラム開発が大切である。地域住民への効果については、海外ではソーシャルインパクトという評価がかなり進んでいるので、ぜひもっと掘り下げてもらいたい。さらに、地域住民が若者と出会うことで、社会全体の価値観のアップデートにつながる効果も期待できる。教員エージェンシーについても考えられていることは素晴らしく、それをサポートする管理職や教育委員会のエージェンシーも重要である。

・ドイツでは脱原発を決めたが、エネルギーの価格高騰の中で、政治的判断を変えなければならないという議論が高まっている中で、ぜひ福島の高校生と話をしたいというような学校もある。福島ならではのテーマを是非掘り下げてもらえたらと思う。また、教科的知識のブリコラージュについては、探究格差に注意してほしい。その生徒にはどのくらい教科的知識があるのか丁寧に見取ってほしい。

・ふたば未来学園の生徒の「探究ノート」がまさに探究と教科の横断であると思う。それをカリキュラムにしたらどうなるかを探究してほしい。

○ 飯盛 義徳氏【慶應義塾大学総合政策学部教授】

・指標を定めることは極めて難しい。指標を達成したからといって、学校の目標を達成したことにならないことがある。ふたば未来学園がほかに例のないフロントランナーであることも難しさに拍車をかけている。この難しさをどうクリアしていくかが大切である。

・探究活動を通じて、教科学習に意欲的に取り組むようになることは、よく聞く話である。非常に難しいことではあるが、探究と教科の学習がうまく連動していく仕組み作りができると良い。

・今、大学で実践している探究学習において、我々の役割は、学生と地域住民が共に学び合う場作りをすることである。大学にいる間は、レクチャーはするが、学生が地域のフィールドに出たら、こちらはコーディネートに徹し、教えることはしない。決まった答えがないので、徹底的に学生達自身に考えてもらうことに醍醐味があるからである。学んだことをフィールドで生かした知識は忘れないものである。

8 閉会（16：30）

令和4年度福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
第2回運営指導委員会 記録

日時 令和5年2月13日（月）15:00～16:30

会場 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校（オンライン開催）

【出席者】

No	所属	職	氏名	備考
1	OECD教育スキル局	シニア政策アナリスト	田熊 美保	
2	慶應義塾大学	教授	飯盛 義徳	欠席
3	國學院大學	教授	田村 学	欠席
4	ふたば未来学園中学校・高等学校	校長	郡司 完	
5	ふたば未来学園中学校・高等学校	副校長	南郷 市兵	
6	ふたば未来学園高等学校	教頭	星 弓彦	
7	ふたば未来学園高等学校	教頭	佐藤 章	
8	ふたば未来学園中学校	教頭	大森 淳	
9	ふたば未来学園高等学校	教諭	林 裕文	企画・研究開発部主任
10	ふたば未来学園高等学校	教諭	齋藤夏菜子	企画・研究開発部副主任
11	ふたば未来学園高等学校	教諭	高野 寛之	企画・研究開発部
12	ふたば未来学園高等学校	教諭	小磯 匡大	企画・研究開発部
13	ふたば未来学園高等学校	教諭	板倉 雄太	企画・研究開発部
14	ふたば未来学園高等学校	教諭	高山 さなえ	企画・研究開発部
15	NPO法人カタリバ双葉みらいラボ	拠点長	横山 和毅	
	高校教育課	課長	平澤 洋介	
	高校教育課	主任指導主事	志賀 勲	
	高校教育課	指導主事	赤岡奈津美	

1 開会（15:00）

2 主催者あいさつ（高校教育課 平澤洋介課長）

3 指定校長あいさつ（ふたば未来学園中学校・高等学校 郡司完校長）

4 説明（学校より）

（1）令和4年度研究開発実施状況について

（2）令和5年度以降の活動方針について

5 指導助言（田熊 美保氏【OECD教育スキル局シニア政策アナリスト】）

・一つの学校で、早稲田大学やカタリバと、非常に深いところまで協働をされているところが、ほかの地域でも参考になる。今回ウクライナの件があって、フィンランドなど原発のある地域との話が今年は随分多い。やはりそれぞれの地域には国際研究所があり、日本にも福島国際研究教育機構が誘致されて、世界からの研究者も来られる。ぜひそこの学問領域の進化というところでは、チャンスで

ある。日本では沖縄に大学をと言った時に、そこに様々な研究者が来たというのは、沖縄にとってはチャンスだった。まだそこが高校と紐づけられていないので、まだもったいない。ぜひ福島でこのチャンスを逃さずにいてほしい。

・探究の概念と紐付けのマッピングで、教科と探究の横断をどうするかというところの一手手前まで来ている。一番右側で概念を出したところが、そこと教科が今度は結びやすくなる。探究だとどうしても教えるというティーチャーの部分が欠けてしまうというところのバランスが、教科学習の中で、補完的に両立できる。

・教員の関わり方で、ふたば未来に長くいる教員とそうでない教員の比較したのがよかった。そこから紐解かれる部分が多い。海外ではジェネレーターの代わりにデザイナーとかクリエイターと言う。概念は同じだと思うが、教師にどんな変化があったかというところを、もう一步、踏み込むとほかの教員が元気になるような、教員のエージェンシーに関する何か新しいものがふたば未来から出てくると思う。他の国でもそのバランスを見たときに、一人ひとりの生徒でかなり異なるというところに最終的にはたどり着く。生徒のプロファイリングみたいことを海外の教員はよくされている。やはり、一人で抱え込まずに、地域の方、別の教員、カタリバ、大学生などの方々に委ねながら、教員もライフロングラーナーとして成長していく。今、日本では、リカレント教育が流行り出しているが、教員にとってのリカレントは、学び続けるだけではなく、変わり続ける。ぜひこのことも含めてほしい。

・卒業生を資源として活用というのが、循環する学校という事例としてまだ日本ではなかなか出てきてないので嬉しく思う。カリキュラムをきちんと学校でデザインしているのがよい。

・地域へのインパクト評価については、まだまだ日本でも事例は聞いていないところであるので、そこも評価をとり始めているというところに将来性を感じる。

・生徒たちがプロジェクトを立てていくという方向性は、EUでは、かなり多い。福島の郡山高校と大阪の中学校とポルトガルで今まさに生徒たちが自分たちでプロジェクトを立てているものがある。SDGsを一緒にやろうという形ではなく、友達から入った方が良いというパイロット実験をしている。非常に有機的に、生徒が主体で広がっていくというところが、本当に希望が持てる。ウクライナから日本に避難している生徒とつながるパイロットもしている。ウクライナ支援に関心のある生徒がいれば、いろいろリソースがある。

・日本の生徒たちと話をして、最近思ったのが、実は、考え方などが多様な人の中の方が自由で居られるということである。知った仲だと逆に同調圧力を気にしてしまうことがあるので、バラバラの中での合意形成ということがますます重要になってくる。最近、主体的・対話的で深い学びについて、深い学びというところに特化したワークショップには行ったことがなく、この深い学びというところが、まだまだ対話が欠けているところであるので、ふたば未来で行われている演劇教育は、極めて深い学びのところで、参考になる。

・カナダの研究では、先生自身のエフィカシー（自己効力感）、高揚力が高くなると、実は学校全体の生徒のための学力だけではなくて、ウェルビーイングも高まる。コレクティブ・エフィカシーという、いかに集合として、先生方がエフィカシーを高めているかということが先生にとっても生徒にとっても良いという研究がある。自信を持ってください。

・OECDで実施している郡山高校、大阪の中学校、ポルトガルのパイロットでは、中学校の先生と、高校の先生が交じることで、高校の先生が柔らかくなっている。ポルトガルの中でも幼稚園、小学校、中学校、高校が一貫している学校があり、特別支援の生徒も、インクルーシブしているので、その先生とのやり取りだけでも、日本の先生には気づきがある。友達になるところから始めて、もっと気軽な普段着のグローバルな関係性が作れるようにしている。必然的に目の前のコミュニケーションをしたいという気持ちが出てくる。WWLでも、生徒の顔と笑顔と先生方の笑顔をきちんと確保した形の構想であってほしい。

令和4年度福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
第1回コンソーシアム協議会 記録

日時 令和4年9月6日（火）15:00～16:30
会場 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校（一部オンライン）

【出席者】

No	所属	職	氏名	備考
1	双葉郡教育復興ビジョン推進協議会	主幹兼指導主事	坂本 貴光	代理出席
2	福島大学人間発達文化学類	特任教授	中田 スウラ	
3	福島相双復興推進機構	専務理事	桜町 道雄	
4	福島イノベーション・コースト構想推進機構	教育・人材育成部長	山内 正之	
5	NPO法人カタリバ双葉みらいラボ	拠点長	横山 和毅	
6	ふたば未来学園中学校・高等学校	校長	郡司 完	
7	高校教育課	課長	平澤 洋介	教育次長代理
8	ふたば未来学園中学校・高等学校	副校長	南郷 市兵	
9	ふたば未来学園高等学校	教頭	星 弓彦	
10	ふたば未来学園高等学校	教頭	佐藤 章	
11	ふたば未来学園中学校	教頭	大森 淳	
12	ふたば未来学園高等学校	教諭	林 裕文	企画・研究開発部主任
13	ふたば未来学園高等学校	教諭	齋藤夏菜子	企画・研究開発部副主任
14	復興庁福島国際研究教育機構準備室福島国際研究教育機構・地方創生班			オンライン
15	福島県企画調整部福島イノベーション・コースト構想推進課			オンライン
	高校教育課	主任指導主事	志賀 勲	
	高校教育課	指導主事	赤岡奈津美	

- 1 開会（15:00）
- 2 主催者あいさつ（高校教育課 平澤洋介課長）
- 3 指定校長あいさつ（ふたば未来学園中学校・高等学校 郡司完校長）
- 4 出席者紹介（高校教育課 平澤洋介課長）
- 5 出席者自己紹介
- 6 説明（学校及び担当者より）
 - （1）令和3年度の取り組みについて
 - （2）令和4年度の研究開発実施計画について
 - （3）今年度取り組んでいきたいことについて
 - （4）今回の協議題について
 - （5）復興庁福島国際研究教育機構準備室福島国際研究教育機構・地方創生班より
 - （6）福島県企画調整部福島イノベーション・コースト構想推進課より

7 協議「浜通りの国際教育研究拠点とふたば未来学園中学校・高等学校の協働・共創の形を模索する」について

○ 中田スウラ氏（福島大学人間発達文化学類特任教授）

・機構、県、高校が、どの接点でうまくかみ合うのかが重要である。まだ検討と研究と分析が必要ではないかと考える。機構による出前授業で教育現場と接点を持つ可能性があるが、どう未来創造探究の構造の中にそれを入れ込んでいくかである。中高と機構との連携、8町村あるいは12市町村の義務教育との広がりも視野に入れておかなければならないと思われる。

・学際的に世界から集まってくる研究者の子供達の教育環境は、福島の地域ということになる。ウェルビーイングもキーワードとなっているが、研究者の研究環境、生活環境を共に作る地域の子供達、媒介は教育、学校となるので、そこでの生活共同のようなものが相互理解を深めて、福島の実情を生活することによって理解し、研究と教育の課題が何であるのかを理解していくということが、機構としては地域に期待しているとも考えられるのではないかと。

○ 桜町道雄氏（福島相双復興推進機構専務理事）

・シームレスの幅が広い。機構の周りには企業が来る。企業でも研究開発等が行われる。企業と共同研究をするために大学も関わる。ベンチャーの育成も始まると思う。クリエイティブにイノベーションを起こす。ベンチャーも含め、多様な形で展開していくことになる。加えて、街づくりをどうしていくのかも重要なこと。地元から人材を輩出するというので、何らかの形で機構にたどり着ければ素晴らしい。機構の5分野に必ずしも直結しなくても、幅広い分野や視点で考えたらどうか。ビジネスマネジメントや地域マネジメントなど文科系の分野でもフィールドワークをしながら探究して、復興に貢献できれば素晴らしい。広い視点で考えれば、ふたば未来学園の役割も広がってくるのではないかと。

○ 坂本貴光氏（双葉郡教育復興ビジョン推進協議会代表代理）

・機構が浪江町に設立されれば、研究者のお子さんを預かる可能性が出てくることで、様々な子供達への教育を考える必要がある。ICTの活用を含めた個別最適化の学びの必要性を感じる。機構の研究者等との交流によって、理系分野への興味がわいたり、将来、学者になるための道のりを知ったりすることができるのではないかと。

○ 山内正之氏（福島イノベーション・コースト構想推進機構教育・人材育成部長）

・もう一度、ふたば未来学園の原点に帰り、どんな生徒にしたいかによって、機構を利用しようというスタンスがいいのではないかと。機構における人材育成は、ふたば未来だけではなく、8町村や12市町村、県南、会津まで波及させなければ、福島県に来る意味はないので、まずは、今まで培ってきたものを踏まえて、出前授業や講義、施設見学等を通して、生徒の志や希望をかなえるようなくらいで考えていた方が良くはないかと。

○ 横山和毅氏（NPO法人カタリバ双葉みらいラボ拠点長）

・機構の概要には、高校生による研究助手制度にも触れられているので、これについても検討すべきと考える。ふたば未来学園がこの地域の最高学府となっているので、カリキュラムの中でやることと外でやることの整理が大事だと思う。地域側としては、多様な人々が混ざり合っている中で、お互いを理解する力、思いやる力など対話と協働をしていく力を連携しながら、双葉郡内に育ていきたい。

8 閉会（16：30）

令和5年2月14日
高校教育課

令和4年度福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
第2回コンソーシアム協議会 記録

日時 令和5年2月14日（火）15:00～16:30

会場 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校（オンライン）

【出席者】

No	所属	職	氏名	備考
1	双葉郡教育復興ビジョン推進協議会	代表	笠井 淳一	
2	福島大学人間発達文化学類	特任教授	中田 スウラ	
3	福島相双復興推進機構	常務理事	遠藤 和人	専務理事代理
4	福島イノベーション・コースト構想推進機構	教育・人材育成部長	山内 正之	
5	NPO法人カタリバ双葉みらいラボ	拠点長	横山 和毅	
6	ふたば未来学園中学校・高等学校	校長	郡司 完	
7	高校教育課	課長	平澤 洋介	教育次長代理
8	ふたば未来学園中学校・高等学校	副校長	南郷 市兵	
9	ふたば未来学園高等学校	教頭	星 弓彦	
10	ふたば未来学園高等学校	教頭	佐藤 章	
11	ふたば未来学園中学校	教頭	大森 淳	
12	ふたば未来学園高等学校	教諭	林 裕文	企画・研究開発部主任
13	ふたば未来学園高等学校	教諭	齋藤夏菜子	企画・研究開発部副主任
	高校教育課	主任指導主事	志賀 勲	
	高校教育課	指導主事	赤岡奈津美	

1 開会（15:00）

2 主催者あいさつ（高校教育課 平澤洋介課長）

3 指定校長あいさつ（ふたば未来学園中学校・高等学校 郡司完校長）

4 説明（学校より）

（1）令和4年度研究開発実施状況について

（2）令和5年度以降の活動方針について

5 協議 「グローバル型」指定3年間の総括について

○ 笠井 淳一氏（双葉郡教育復興ビジョン推進協議会代表）

・8町村とうまく連携ができている。双葉郡の中学校も一緒に取り組んでいるふるさと創造学とも連動している。教員の関わり型モデルは、小中学校の先生に提示していただくと大変参考になる。新しいゼミ編成の「原子力災害・伝承探究」で「伝承」が入ったところが大変ありがたい。課題は、新しく来る児童や教員にここで行われている学びの意義の共有や継承である。

- 中田 スウラ氏（福島大学人間発達文化学類特任教授）
 - ・ジェネレーターとして、自分の役割を再認識していくというような教員の指導の分析は、大事なポイントである。また、ゼミ編成の学術的な再検討における課題は、ややもすると学問的な専門性で分化してしまうので、課題解決のために専門の力を統合し直す作業が必要である。生徒だけでは到達できない段階まで進化させるということと、教えるということがどういう関係になるのかには悩まれると思う。生徒に教員がどんな関わりをしたのかを実践分析しながら、教員の変容を丁寧に振り返ってみることも、方法としてはあるのではないか。双葉郡の義務教育学校含め小中学校がやりたいことと、かなり重複しており、お互いの役割を果たしあえるチャンスが増えていると思う。

- 遠藤 和人氏（福島相双復興推進機構常務理事）
 - ・研究成果発表会の第2分科会の方に参加させていただいて、多くの方が地域とどうつながればいいのかということに悩んでいるということがわかった。ふたば未来学園では、8町村との連携で、深いテーマに取り組んでいると感じた。私共は、震災で避難された商工業者が双葉郡で事業を再開する支援をしているが、お客さんがいなくて、事業は順風満帆ではない中で、ふたば未来学園に入っただけでメンターになっていただけだと思う。連携について意見交換させていただければと思う。

- 山内 正之氏（福島イノベーション・コースト構想推進機構教育・人材育成部長）
 - ・素晴らしい生徒が育っているので、学校としては自信を持っているのではないかと。イノベ機構は、双葉郡の8町村の教育長会と連携して、様々な活動の支援をしているが、ぜひともふるさと創造学と未来創造探究がうまくつながると、小中高、そして大学へ向かっての一貫的な教育、福島ならではの教育ができるのではないかと期待している。探究指導は、小論文指導と同様、教員の教材研究の大変さを感じたので、教員が準備する環境を整えることも大事だと思う。さらに、ふたば未来から異動した教員は、その学校で、ふたば未来の経験を生かして探究学習の伝道師となってほしい。

- 横山 和毅氏（NPO法人カタリバ双葉みらいラボ拠点長）
 - ・研究成果発表会の第5分科会を担当したが、教員へのアンケートやインタビューを通して、探究に関わる教員の学びに着目した。主体的に生徒が学んでいく学習とはいえ、どこまで教員が介入しているのかという悩みなどがあることがわかった。実際、それが解消されていくプロセスというのが、日々の教員同士のコミュニケーションなどの小さな会議体だということもわかった。課題解決がされていくと教員の指導法も変わってくる。教員の協働が鍵だと思う。また、探究学習をやったからこそ、教科の時間も非常に重要だという指導観の変容があった教員もいる。課題としては、学校としての体制作りが非常に重要だと思われる。昨日、ふるさと創造学の教職員による双葉郡子ども未来会議が行われ、ファシリテーターを担当したが、とても意欲的にふるさと創造学の現状と課題やアイデアが多く出されたので、来年度に向けて、動ければと思う。

- 平澤 洋介（高校教育課長）
 - ・探究の指導においては、教員のその時、その時ごとの役割があって、手厚い形の指導につながっていくのがよくわかった。さらには、おそらく生徒たちの探究のベクトルの先は立体的な360°の全方位的な方向を向いていると思われるので、教員としての関わり方はこれからも研究していかなくてはいけないと思っている。全国各地から参加者があった研究成果発表会を考えると、ふたば未来学園が全国のライトハウスの存在になりつつあるということは非常に嬉しく思っている。

令和4年度 7期生プロジェクト紹介一覧(2022.10.25プレ発表会時点)

原子力防災探究ゼミ					
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
海洋放出の反対運動について考えようプロジェクト	佐藤志保	始まりに交流の輪を	能勢友珠	多頭飼育の現状	佐藤遥香
内容		内容		内容	
<p>"なぜ海洋放出に反対運動が起こるのか？というテーマのもと、今起こっている反対運動について調べる。そこから東電や政府の政策にどんな問題があるのかをさぐり、よりよい形の海洋放出の姿を見つける。そのために、まず、過去に起こった原発に対する海洋放出について調べた。1F,2F,小高原子力発電所の建設に反対運動があったと知り、それについて詳しく書いてある本を読んだ。また、海洋放出は廃炉事業の一環であるため、廃炉について学ぶために「1F 地域塾」に参加した。海洋放出に反対している団体について調べ、彼らが何を懸念して何を求めているのかを分析した。"</p>		<p>私のプロジェクトは神社と交流を軸に活動しています。きっかけは、子供の頃に町の人たちと交流した記憶や、引越越し、そして広野町の人の声を聞くなどの経験をしたことにより地域での交流がその場所への安心感や行動力につながると思ったからです。その安心感や行動力を最近避難解除されたばかりで交流が0に近い、自分の出身地である双葉町で作りたいと思いました。今までの活動としては、双葉町を調べたり、見学に行ったり、神社の宮司さんや双葉でイベントを行っている人にお話をお聞きし、イベントに参加させていただきました。これからの主な活動としては双葉町の紹介マップや双葉町内での対話イベントを行いたいと思っています。</p>		<p>広野町が猫の保護活動や不妊手術活動をサポートしていることがわかったので、広野町社会福祉協議会へ行き根本さんという方にどのような事を行っているのかを聞ききました。やはり、サポートをしているだけで、活動を行っているわけではなかったためどのような活動を行っているのかは聞けませんでした。ですが、広野町に多頭飼育崩壊になってしまった家があるというのを教えていただきました。3年前にこども園の前にいたたくさんの猫も不妊手術をして数を抑えたことも教えていただきました。今後は、多頭飼育をしていた家を訪問するということを考えています。</p>	
富岡町に写真を通して何ができるのか	遠藤利沙 遠藤葵	3.11は僕らに何を残したのか	藤原知也	古着を活用	児山虹大
内容		内容		内容	
<p>写真を通して富岡町の町おこしに繋がる探求活動に取り組んでいます。双葉郡の中で津波の被害が大きかった富岡町の、震災前、震災直後、震災後の写真を比較し、分かりやすくマップにしてまとめたいと思っています。そして様々な地域、世代の人にマップを見てもらい、震災前と震災後でどのような改善点があるか、色々な意見を踏まえて考えていきます。最終的には出した意見を意見書として富岡町の役場に提出する予定です。富岡町で起きた震災について知ってもらい、他人事ではなく自分事として考えるきっかけになったら良いなと思います。</p>		<p>震災に関しての取材などをさせてもらって母校に授業をしに行くにあたって企画書などを書いたり授業計画を書いたりして、教育実習生のようなことをして、それと同時に将来のためにどのようにしたらわかりやすい授業の構成ができるかなどを考えています。そのために富岡アーカイブミュージアムに行ったり、貴重な経験をされた方々からお話を聞いたりしているところです。この内容を元に授業を構成していき、人に教えるということはどんなことなのかということも学んでいきたいです。</p>		<p>アフリカ西部ガーナの首都アクラのごみの埋め立て処分場で起きている古着問題についてまとめそこから身近にある古着に着眼点を置き去年のクラスTシャツはどうなっているのか、もしかしたら今からクラスTシャツを捨てようとしている人もいるのではないかと考えどうせ捨てるならそのクラスTシャツを回収しなにかに活用しようと思ったので行動に移りました。まずクラスTシャツについてのアンケートを高校二三年生に取り、処分場にいる人はいないかを確認します。今のところはアンケートを集めその結果を見てどうするかの所まで進んでいます、そのアンケート結果で今後どうしていくか決めたいと思います。</p>	
フードロス減らすためには？	箱崎正義 武田志道 上野来旺 佐藤辰輝				
内容					
<p>料理の際に普段は捨ててしまうような所をどうすれば捨てずに済むかを調べたくさんの人知ってもらうためポスターなどを使い知ってもらおう！また自分たちで食堂で残った料理を自分たちで工夫をしてさらに美味しく作り生徒がおかわりできるぐらいのものを作りたいと考えている！PowerPointなどでスライドを作りまずは身近な生徒達に理解してもらえようわかりやすくまとめて伝えたいと考えてます！今までに行ってきたことは広野町にあるお食事処ふたばさんという飲食店にお邪魔しフードロスについてどのような工夫をしました。そこでは動画をとり福島テレビやふるさとシェアというYouTubeチャンネルに放送されました。これからの活動予定はふたば未来学園の食堂で残されている学食を自分たちでもっと食べてもらえるような美味しいものに工夫して加工したいと思っています！</p>					

メディアコミュニケーション探究ゼミ					
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
福島県を綺麗にしようプロジェクト	鈴木蒼一郎	福島の魚の魅力を伝えよう	山内永遠 片寄互	障がい伝えていくには。	三瓶竜也
内容		内容		内容	
<p>"福島県のごみを減らすためにどうすればいいのかを考え、行動し、いわき市をはじめとして福島県全体に広めていきたいと思っています。いわき市や郡山などの大きい市はいろいろな観光客が多いのでそう言う人たちがまた来たいや綺麗な町だと思おうような街にしたいです。いろいろな人たちやグループに手伝いを要求して、福島県の現状を伝え、福島県全体で考えて県民全員がポイ捨てやゴミの扱いなどを意識することを第一として探究をしようと思っています"</p>		<p>"自分たちが魚を釣るだけでなく、捌いたり、調理をして食べることをメディアを通してみせる！そのためにはいろんな人に見てもらわないといけないのでそれをYouTube、Instagram、tiktok等のSNSを通してだんだん認知していただくことをまず目標としています！それにより福島県外の方にも風評被害を受けることなくなると思うので頑張りたいです！！！！"</p>		<p>"まず、フィギュアスケート場についての探求をやってきました。アクションプランとしては、電話で質問をしました。少ししか質問できなかったのですが、いい経験になりました。ですが、スケート場の場所が遠くて探究していくにあたって不可能だともおりました。なので、自分の障がいについてもっと調べたいと思いました。障害について様々な種類について調べた。今後に向けては、障害について話し合う「きやべつ」の葉っぱに参加していきたいと思っています。また、小さい頃お世話になった施設にお邪魔していきたいと思っています。目的としては、自分と同じ障がい者を身近に感じたい、気持ちに寄り添っていきたくて思いました。"</p>	

探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
広野町、欧米料理少なくて？！	菅田風之	絵を欲しい人に提供する	政井蒼太	韓国の美容法を使って自分に自信をもとう！	篠原真悠子 先崎陽菜
内容は 私は現在、探究活動において欧米料理をテーマに活動しています。欧米料理といえば、ピザ、ハンバーガーなどが思い浮かぶと思います。しかし、今の現状、サイゼリヤなどといった欧米料理は広野町に見当たりません。そこで私は広野町に欧米料理を広めたいという大きな目標に向かっており、日々取り組んでおります。まず私は、キッチンカーを使って広めたいと思っております。まだ、キッチンカーのことをよく知らないのですが、来週の土曜日にキッチンカーを行なっているすえつぎCafeさんへの訪問をする予定です。	内容は 絵を必要とする人に絵を提供するポスターや専用のネットアカウントを作り宣伝をする。ですがネットから絵を拾ったり写真で済む時代なので、あまり絵を必要とする人はあまりいないと個人的に感じたため同時進行で、『待つ』ではなく自分から絵を描き、町のイベントや行事で見てもらい興味を持ってもらう。最終的には絵で町の活性化や町の明るさに少しでも貢献できればと思います。	内容は 韓国の美容法についてのテーマで行ってそのテーマにしたいと思ったきっかけがもともとK-POPや韓国が好き、韓国のコスメについても詳しく知りたいと思いこれまでアンケート作成を行い、自分の悩んでいる部分や使っているコスメなどを学年の人達に答えてもらいました。そのアンケートを行うことで自分が思っていた事とは違う意見や考え方が得られることが出来て自分だけでは視野が広がらないことや色々な意見が大切だということがよく分かりました。			
国際交流で世界を見る	小林明日美	クワイエット×〇〇	大津怜奈	理解されにくい人とどう関わるべきか	齋藤 菫
内容は 私は最初、海外と日本の教育についてを調べる探究にしていた。そこで留学に行ったルールメイキングのイベントに参加したりしました。そこでもっと「国際交流を増やしたい」「教育だけでなく多方面から海外について調べたい」「たくさんの人に英語の楽しさ、海外と人と交流する楽しさを知ってもらいたい」という思いが強くなり新たに、国際交流を増やすには？という問いが生まれました。この探究をすることでまずは学校で国際交流を行い生徒を含めたたくさんの人に国際交流の大切さと楽しさを伝えたいと思っています。その他については後々考えます。	内容は 何かを作る、と地域の事、勉強の事。大きく広げればSDGsに関連するものを何かと組みあわせながら作ることでより分かりやすくなるようにしていこうとしています。具体的には、まだハッキリとは決まっているとは言いがたいですが、地域の歴史を絵を描くことで動画にして分かりやすく表現したり、SDGsとゲームを組み合わせてSDGsに興味のない層が少しでもSDGsに興味関心を寄せられるように出来ればと考えています。	内容は きっかけは、兄弟や身近な人に発達障がいやダウン症を持っている人がいて、そういう人と関わる機会が多いから。また、障がい者に対する誹謗中傷をよく見かける。誹謗中傷する人は、障がいを持っている人をよく理解せずにいるのでは？見た目では分かりにくい障がいを持った人とのように関わり、存在を広めていくべきかを探求しようと思った。本で発達障がいやダウン症について概要をよく調べた。アンケートを作りこれから実施。発達障がいやダウン症の概要を学んだ。(後にアンケート結果をまとめて、分かったことを発表する。) 今後は、アンケートを基に今後の活動を定める。障がいを持っている人と関わりを持つ方にインタビューをする。障がいを持っている子と関わってみる。			
表現するファッション	脇山果子	理解されにくい人とどう関わるべきか	齋藤 菫	cafeふう売上あげあげプロジェクト	遠藤 果穂
内容は 私はコムデギャルソンやリュウノスケオカザキのファッションショーレポートを見てデザイナーさんがファッションを通してジェンダーレスを訴えたり、自然や形のない祈りを表現しているということを知りました。それを知った時すごくいいなと思いました。元々ファッションが好きでしたがファッションを通して自分の考えや訴えたいことや身の回りの環境を伝えられるなんてすごく魅力的だと思いました。そこから私もファッションを通してなにかを伝えたいと思いました。それで「表現するファッション」という私の探究が始まりました。私にはまず、表現するとはなんだろう、という疑問が湧いてきました。そこで「13歳からのアート思考」という本を読みました。ここから得られた新たな考えは自分だけの物の見方を大切にすること、表現するため道具は手段にすぎず、伝えることが出来るならなにを使っていいかわからないという事です。そして美術展にも行きました。4つの美術展に行ったのですが1番心に残っているのはChim+Pomのバビースプリング展です。ここではChim+Pomメンバーのエリイさんの生き方と人生を知りました。作品のひとつにただの潰れた空気がありました。これを見た時、え、これも作品なんだ、と思いました。それで新たな疑問がうまれました。「作品と作品じゃないものの違いとは」という疑問です。そしてこの疑問を解決すべく多摩美術大学の卒業生の方とzoomでお話をしました。その方からは作品になるか分からないのは、言語化できるぐらいの自分の思いや考えがあるかどうかだと教えてもらうことができました。そして表現することはアウトプットが大切だと言われたのでどんどん実践に移りました。自分は、身近にあるけど震災を通してさまざまな見方をされている「海」をドレスで表現したいと思っていたのでまずデザインしてみました。いい感じに描けたのでどんどん作るということでも進んで作っていきました。今はドレスの上の部分まで完成しました。これからドレスを完成させてパンフレットを作りたいです。	内容は “【きっかけ】 1、兄弟や身近な人に発達障がいやダウン症を持っている人がいて、そういう人と関わる機会が多いから。 2、障がい者に対する誹謗中傷をよく見かける。誹謗中傷する人は、障がいを持っている人をよく理解せずにいるのでは？ ↓ 見た目では分かりにくい障がいを持った人とのように関わり、存在を広めていくべきかを探求しようと思った。 【活動内容】 本で発達障がいやダウン症について概要をよく調べた。アンケートを作りこれから実施。 【分かったこと】 発達障がいやダウン症の概要 (後にアンケート結果をまとめて、分かったことを発表する。) 【今後の活動】 アンケートを基に今後の活動を定める。 障がいを持っている人と関わりを持つ方にインタビューをする。 障がいを持っている子と関わってみる。 【新しい疑問】 診断をしている障がい者と、診断をしていない障がい者の方の区別や関わり方をどうすればいい？”	内容は “この探究のテーマにしたきっかけは将来カフェを経営したいからです。2年生になってからカフェチームに入り、cafeふうが赤字というのを聞ききました。だから売上を上げたいという目標ができたので、このテーマにしました。私が行った解決のためのアクションは2つあります。1つ目は職員室にブラックボードを設置したこと。よく先生にカフェが何時から空いているのか分からないと言われます。だからブラックボードにカフェの営業時間や一言を書くようにしました。ダジャレや新作商品の情報をかくと評判がよく先生がさらにカフェに来てくれるようになり売上に繋がりました。2つ目は動線の確認です。お客さんがどの道を通ってCafeふうに来てもらっているのか分からなかったため、事務室の隣の入口に看板と営業時間が書いてある紙をおきました。看板にはこの看板をみてCafeふうに来てくださった方はシールを貼ってくださいと書き今データを取っています。営業時間が書いてある紙はすぐなくなってしまうので、今後はカフェふうがある場所を分かりやすく書いておきたいと思っています。ふたばワールドに出店したアクションでは、始まる前は雨が降っていたため全く売れないだろうと思っていた。しかし始まる前中中には焼き菓子売り切れになり、飲み物は3種類売り切れしました。そこからわかったことは、看板を大きくし真ん中に置くことと飲み物が沢山売れるということです。午前中は全く売れなかったのですが焼き菓子売り切れスペースが空き、飲み物の看板を真ん中に置いたところ、お客さんが近づいてきて買ってくださる人が増えました。また、コーヒーを売っているお店が少なかったためアイスコーヒーが沢山売れました。Cafeふうは日によって営業時間が違うためインスタのQRコードなどが書かれた紙を持って行ってくださるお客さんが多かったです。新たな仮説はふうブレンドコーヒーをその場で入れて売ったらどうなっていたらという事です。ふたばワールドではコーヒーのドリップバックしか売っていません。アイスコーヒーをふうブレンドだと思っている方や味が分からないから買わなかったお客さんがいるように思います。今度ならSUNフェスに出店しふうブレンドコーヒーを売るのでその時検証出来ればと思います。自分の考え方の変化は自分から行動するのが苦手だったけれどカタリハの方達と仲良くなってからは、ライブや探究のイベントとかに参加したり探究に向けてカフェなどでお手伝いをしたりすることが楽しくなりました。今後の解決のためのアクション計画は、休日のカフェ営業です。平日カフェに来れないお客さんがいるので、休日にカフェ営業をすることで知名度や売上をあげることが出来ると思います。そして売上のデータを分析していきたいなと思います。”			

探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
伝説、神話、伝承で人を呼びこもうプロジェクト	尾内寿人	福島の水の安全性を広める【仮】	猪狩拓希	みんなが積極的に英語でコミュニケーションをとる世界を作る	木村遥人
内容		内容		内容	
"伝説、神話、伝承を詳しく調べつつ、現地におもむき、その地の賑わいについて知る。その後、賑わっているところと賑わっていないところを調べ、どうすればひっそりとしたところを賑わうようにできるかを考える。そして、その考えを、より明確に、より現実的に、わかりやすくまとめ、その考えを、発表し、人を呼び込むことができるかどうか、他の人の意見を調べ、その意見に合わせて、考えを変える。"		"東日本大震災後に福島の水は買いたくないといった風評被害がネットの記事で多く見られるようになりました。原因は放射性物質です。震災から10年がたち風評被害は少しずつ減ってきました。しかし、処理水を海に流すという決定により再び風評被害は広まってきました。そんな福島の水評被害を無くそうと思い今回の探求をやってみようと思いました。これまでやってきたことはネットで福島の水評被害について調べ、原因を探りました。また、富岡廃炉資料館という場所に行き、処理水の海の生き物、人体に与える影響について調べました。今後の活動としてはどうやって安全ということをみんなに伝えるかを決めていきたいと考えています。"		"みんなが積極的に英語でコミュニケーションをとる世界を作る"という私の探究テーマに1歩近づくために、11月12.13のbeyondキャンプに向けて主催者の野地さんと話し合いをした。その結果11月は参加者として参加し2月にも同じキャンプがあるのでその時に私がレクリエーションとして実際に英語でコミュニケーションをとる楽しさを伝えるためにちょっとしたゲームで交流することをしようと思っている。その後は、英語に関心がない人達も英語でコミュニケーションをとる楽しさを伝える。それで、楽しいと思ってもらえるためにこれから色々考えていく。"	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
演劇で地域を笑顔に	佐藤里奈	アロマオイルで賑わう地域に	上田大雅 佐藤玲音	政治への関心	鴨川絃音
内容		内容		内容	
これまでにアリオス演劇部U30に参加してワークショップを行ったり、富岡町で行われた演劇キャンプでミュージカルについて学んだりした。また、語り人育成教室交流会で自分がワークショップを運営する準備をしている。そのワークショップを運営するために事前に打ち合わせなどをした。今後は、これまでにやったアクションを生かして自らが主催者となり地域交流をもっと増やしていきたいと考えている。		マイキーワードは「特産品」でこのマイキーワードに設定した理由は、地域の特産品を使って双葉郡をPRして地域に来てくれる人を増やして行って、多くの人で賑わう明るい地域にしたいと思ったからです。地域の特産品を使って作るものはアロマオイルにして、その理由は日渡先生から3年生の先輩がアロマオイルを使った探求をしていると聞いて興味があり、特産品を使って簡単に作れるものだったからです。ゴールは、イベントをして地域の人の交流の場を作ったり、インスタグラムなどSNSを使って地域の魅力を広めたりして、たくさんの人で賑わう明るい地域にしたいです。		周りの人たちの社会に対する関心・知識が足りないと感じていた。社会に直接かかわることができる政治にはもっと多くの人が関心を持ってほしいのではないかと。自分は政治家個人の魅力を知ったことがきっかけで政治を学んだり考えたりするようになったため、周りの人に「親しみやすく」「正しい」切り口で政治家について知ってもらうことはできないか。→政治家紹介シートを作成し、皆に見てもらってイベントを開き、関心が高まったかどうか確認する。	
探究テーマ					メンバー
少年法とわたしたち					菅家菜々子
内容					
私は夏季休業まで「未成年の実名報道は少年犯罪の抑止力になるのだろうか」というテーマのもと活動してきた。しかしながら探究を進めていくうちにいくつかの気づきや学びがあり、それを踏まえてテーマを再設定した。以下がテーマの概要である。					
<p>1) 前テーマの設定理由</p> <p>①被害者と加害者の権利が対等ではない</p> <p>刑罰ではなく更生を目的とした少年法の目的、加害者の可塑性を考慮した裁判が行われる。かつては被害者家族又は遺族に関する余地がなかった。そのため武蔵りこさんが代表を務める"少年犯罪被害者当事者の会"をはじめ多くの方々の地道な努力の積み重ねにより少年法の改正が行われてきた。しかしながらこれらは裁判時中のものであり、判決後のケアが進んでいないのが現代社会における課題である。例をあげると、被害者の顔写真や氏名がメディアで公表されるにもかかわらず加害者は公表されない、被害者家族は地域の目にさらされ住む土地を追われる、事件の精神的苦痛など多くの問題がある。一方で加害者側もSNSの特定騒動や社会復帰の困難、少年院を出た3人に1人の割合が再犯するという問題が山積している。</p> <p>そのような現状から、私は強い抑止力があることで双方の権利を保護するのではないかと考えた。実名報道をすることによって第三者の勝手な介入を防止し、少年法従来の加害者の更生という目的を達成できるのではないだろうか。</p> <p>②"18歳から成人"の意味</p> <p>民法が改正され18歳から成人となり、クレジットカードの利用や選挙権など多くの権利を取得した。それにより少年法も特定少年という枠組みを作り、実質的に実名報道が可能となった。しかしながら個人的には政府は躊躇しているような印象を受けた。18歳に責任能力を認められ自由や権利を与えられるならば、なぜ少年法において特別な枠組みがつけられるのだろうかと疑問に思うからである。"18歳から成人"その意義を私たち高校生が考える必要性があるのではないだろうか。</p> <p>2) 課題解決のためのアクション</p> <p>①実名報道に関するアンケートの実施</p> <p>夏季休業中オーストラリアの語学学校に短期留学したため、その学校でアンケートを実施した。ポスター等の掲示が承認されなかったため、私が1人1人に足を運び回答を求める形式となった。回答数は15人と少ない数ではあるが、回答者それぞれとの対話の時間を確保することができた。</p> <p>アンケートをまとめた気づきは以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> それぞれの背景が異なることから実名報道には多種多様な意見があり、一概に賛成反対で決められるものではない。実名報道に賛成とするならば、範囲の明確化を定める必要がある。 自身が被害者となる場合は加害者の実名報道を望むが、立場が逆転すると望まないという意見になる。 加害者になる想像をしたことがない。それだけ現代社会が充実している証明となると同時に犯罪意識の低下がある。 <p>②「わが国の少年法の理念 木村裕三」等の論文を拝読</p> <p>少年法の成り立ちや欧米諸国との違い、これまでに問題視され大きくメディアに取り上げられた少年犯罪などを拝読した。</p> <p>3) 夏季休業までの活動反省</p> <p>調査を進めていくうちに実名報道と少年犯罪の煩雑さを実感し、今の未成年者にはこの課題を解決するには力不足であると考えた。この探究を進めていくためには高度な法律(少年法以外にも)の知識が求められ、現段階ではそのような知識不足が明確であった。そして法律の勉強を継続したとしても、このテーマに必要な量を身に着けることは大変難しい。1つの少年犯罪に焦点をあてるという案を考えたが、この行為自体が私が危惧する被害者加害者間の問題に該当する可能性が高いと考えた。当事者間の問題に関与することを一概に悪いとは言えず、誰にとってもその権利はあると思う。しかしながら私自身は関与するべきではないと判断し、その選択に後悔することはない。またこの探究は自身の知的好奇心の要素が多く、社会的貢献性が欠如している。自身のための探究であり、誰に何を貢献できるかという面を考えると曖昧なものばかりであり、それでは探究活動本来の意味が失われてしまう。</p> <p>以上を踏まえテーマの再設定を行った。</p> <p>4) テーマ再設定にむけて</p> <p>テーマを考え直すにあたってまず行ったことは、少年犯罪の現状把握である。六法全書や警察庁の犯罪白文書等事実に基づいた資料を読み、理解を深めた。そして少年犯罪を問わず、犯罪や法律がそもそも日常生活と遠い世界にあるということに気づいた。意識してみれば法律は身近なものにあり、何をすることにおいても絡んでくるものである。犯罪も同様について私たちが被害者になるのか、あるいは加害者になるのか全く見当がつかない。しかしながら興味や意識がなければそれらの事に関わらない人が多いただろう。法治国家の日本において一部の人のみが知識を持つ状態は大変危険である。</p> <p>そして少年法においても同様に適用される私たちは全く内容を知らない。それに加え、少年法改正時には子供の意見表明権がなく、反映されない。この課題を解決するためにはまず少年自身が少年法について正しい知識を持つ必要がある。そのため私はもって少年法が身近な存在になるような活動をしたと考えた。</p> <p>現在のテーマ『どうすれば少年法を身近な存在にできるだろうか』</p> <p>5) 現テーマでの課題解決に向けたアクション</p> <p>①「少年のための少年法入門 山下敏雄他」を拝読。</p> <p>裁判までの流れ等の少年法の基礎知識を得るために活用させていただいた。</p> <p>この本は私の探究テーマと似たような目的で作られたため、どうにか山下さんと関係を築けないだろうかと模索している。</p> <p>②菅波香織さんとの対話</p> <p>10月11日、18日の総合的な探求の時間(6.7校時目)</p> <p>このフォーム記入時には行われていないため、予定日を記入する。そこから得た学びはプレ発表会までにはまとめておく。</p> <p>6) 今後の活動目標</p> <ul style="list-style-type: none"> 少年法に対する印象調査(Googlefoamのアンケート) 菅波さんとの対話を増やす カードゲームの製作 					

再生可能エネルギー探究ゼミ

探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
スポーツしながら町をキレイに	門馬聖弥	生態系が支える自然環境	高岡龍助 大越斗輝	葛尾村に人を呼ぶために～葛尾村の自然とツーリングを活用して～	松本葉奈
内容		内容		内容	
<p>スポごみの計画、開催し身体を動かしながら楽しく町をキレイにする。そのごみを分別回収する。</p>		<p>"学校の校内にある使われていない土地を利用して、池を作り、間近で生態系を観る。あさみ川で生態系を観察してきました。多様な貝類、カワムツ、オイカワ、アユなど様々な生態が見られました。また、学校の土地の環境はとてみどく、ミミズが見られませんでした。ミミズがないということは、かなり重大です。土の循環ができていないのです。そら木も育たないわけだし、葉をつけないだけです。"</p>		<p>震災前まで住んでいた葛尾村の探究をしています。今の現状として、葛尾村の人口は400人です。そのうち、葛尾村に住んでいるのは200人程度です。後期高齢者地域です。人口の半分以上が75歳です。私はテレビで、葛尾村がなくなるかもしれないのを見ました。自分が住んでいた村がなくなるのは、寂しいのでこの探究で多くの人に葛尾村を知ってもらいたいと思っています。葛尾村の魅力は自然です。その自然と自分の好きなバイクを組み合わせで探究をしています。</p>	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
川内村の自然はどのようにして守られているのか～川内村に人が来るには～	若松美咲	海と人が上手に繋がるために	神山美咲	福島海の魚(仮)	高野 睦斗 岡崎 純晶 三瓶 幸一
内容		内容		内容	
<p>今のところのテーマは川内村の自然はどのようにして守られているのか、川内村に人が来てもらうためにはの二つを考えていますが、あまり具体的なアクションはできておらずテーマも正直迷走中です。なぜこういうテーマにしようと思ったかという、最初は川内村が好きということで何が好きなかを考えてみたときに、一つが自然だったので川内村の自然は何か守られている秘密があるのかなと思って、テーマに挙げてみました。もう一つのテーマとして、私は川内村に人がたくさん来るようになってほしいので川内村に人が来るためにはというも頭にありました。アクション内容としてはネットで環境保全の条件や方針、川内村出身の志賀風夏さんの元へ行き、いろいろなお話を聞くところまでしか今の段階ではできていません。</p>		<p>"私は防災や環境保全、土地活用の観点から人と海の繋がりを見つけ直し、より良いものにしていきたいと思い、この探究を行っています。自然環境に興味があったことや、私自身が現在の災害対策への疑問点や不安感があったことなどから、このテーマを制定しました。請戸地区などの、津波の影響で災害危険区域に指定されている地域に興味があるのですが、課題が大きすぎるため、現在は身近な問題である広野町の防災や自然環境の変化についてを調査しています。今後行いたいアクションは、寮内の災害時の対処の調査・改善、双葉郡の土地の現在の使われ方と今後の方針の調査などです。"</p>		<p>"双葉郡の海の魚について調べて漁協 釣り船経営者など話を聞き実際に釣りを体験してみたいです。魚好き・釣り好きの人に広めていき、双葉郡の魚に興味を持ってもらう 双葉郡の活性化につなげる海の魚を上げたい。魚を知ってもらいたくさんの人に食べてもらいたい。そこで問題として掲げるのは汚染水の放出についても漁協の方や市場の人たちの話を聞いたリインターネットや漁港に行き調べたり考えたい。</p>	
探究テーマ	メンバー				
数字からわかる世界の課題	横田彩音				
内容					
<p>私は"星"の探究から"数学"を使って"SDGs"の理解を深められるような探究にガラッと変えました。まず自分は何が好きなのか、どんなことだったら続けられるかを考えたとき"数学"というワードが出てきたことがきっかけです。また、私はドイツ研修に参加していて、そこで"SDGs"の重要性をすごく感じたため2つのワードに決めました。そこで1人1人のSDGsは1人1人の意識が大切、それを変えるためにはみんなが世界の課題を理解して身近に感じなければならぬと思いました。そこで身近な課題を数値化して理解してもらおうという探究テーマにしました。この探究は決まったばかりなのでアクションはまだ行っていません。アクションの予定としては、ついこの前ラポでSDGsの本を見つけたので読んでみたいと思いました。また、数値化する案として、ふたば未来学園はSDGsを意識している学校だから、他校とどのくらいの違いがあるのか(節電量、ゴミ分別、紙の利用etc)それは一人当たり〇日分の〇〇に値するなどをしたいと思っています。そうすることで小さな行動も社会問題解決につながる、他人事ではないということが伝わるのではないかと考えました。</p>					

アグリ・ビジネス探究ゼミ

探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
大熊町のいちごを使って、風評被害の払しょくを	宍戸涼果	広野のお米を使って	橋本ゆきな	come to FUTABA !	佐藤愛心
内容		内容		内容	
<p>“私が、このプロジェクトにした理由は私自身がいちごを好きなこと、大熊町の出身ということもあり、大熊町のためになにか私が力になれることがないかと思っていました。そこで、大熊町について調べてみると、いちごに力を入れていることを知りました。大熊町のいちごを使い商品販売をすることで、大熊町に対する風評被害の払しょくといちごのPRIに繋がるんじゃないかと考え、このプロジェクトを始めました。</p>		<p>探究テーマは元々小麦アレルギーの人でも食べれる米粉パンを考えていました。しかし、1回作ってみたところ全然上手くいかず悩んでいました。先生に相談したところパンじゃなくて他の食べ物でもいいのではないかと聞かれました。そこでお煎餅はどうかと相談したところお煎餅を作る人はあまりいないという事だったのでお煎餅に決めました。元々小麦アレルギーをテーマにしていたので広野のお米を使ってみることにしました。フロンティア広野さんに相談して1kgお米を無料で分けてもらえることになりました。実際につくってみたところ美味しく作ることができました。改善しないといけなところがあるのでこれから改善していきたいです。</p>		<p>“双葉郡にはおいしい食べ物や果物がいっぱいあるのに、関わらず特産品が少なかったり、風評被害で食べられてないと思われ風評被害を改善するため新しい特産品を作り、広めたいと思いました。まず私が目につけたのは檜葉町です。檜葉には小学生のときによく遊びに行っていてそれで何か恩返しをしたいと思いこのプロジェクトを始めました。私は檜葉町の新しい特産品でさつまいもをPRしたいと思いました。</p>	
オリーブで広野に平和を	亀岡知広	美容で食料廃棄物をへらそう	新妻怜実 餌取琴羽		
内容		内容			
<p>広野のオリーブを使ったお菓子や料理を調理し、その調理したものを販売したり、レシピを記録して、それを様々な人達に見てもらいオリーブの様々な魅力を伝えていく過程で、新しいオリーブの活用法やオリーブを広野でも栽培しているという事、なぜ広野でオリーブを栽培するようになったのか、また、オリーブには気候変動の対抗効果がとても高いという特徴があり、オリーブの畑にその栽培地域の動植物が生態系を築いたり新たな植物種が発見されるなど、環境においても好影響を与え、日本においてもその環境に与える影響が評価され、持続可能な開発目標としてSDGs推進本部が設置されるなど、SDGsにも関わりのあるということにも興味を持ってもらえるように取り組んでいます。</p>		<p>私たちはおからの食糧廃棄物を減らすことを考えました。おからは美肌やがん予防になったりして美容にも特化した食品だとも思いました。そこで私たちはおからを使ったおからグミを作ることになりました。なぜグミかというゼラチンは潤いや弾力のアップ、シワ改善などの美肌効果があることがわかりました。作ってみた結果まず私たちはおからを入れないでグミだけを作りました。メニュー通り作りましたが上手く作ることが出来ませんでした。失敗点は硬さが柔らかすぎるのと味がどうしても薄くなってしまふことです。</p>			

スポーツと健康探究ゼミ

探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
This is football	赤津陸 岩崎翔哉 爲我井運磨	怪我ZERO	川田百華	日本野球史プロジェクト	尾島健太 佐藤一之成
内容		内容		内容	
<p>僕たちがプレーするふたば未来学園グラウンドはプレー環境はとても恵まれているが観戦するという面ではあまり整っていない駐車場からサッカー場までが遠かったり、まずふたば未来学園グラウンドがあることを知らない人が多く、町のみならずと繋がってなく、あまりサッカーを好きな人が地域にいないんじゃないかと思ひ、この環境が整ったグラウンドを自分たちだけで使うのは違うのではないのかなと思ひこの探究をやろうと思ひました。そこで出てきた観戦する面での課題を解決していき、地域の人から応援されるチームというチームの目標にも繋がると思ひしたのでこの探究をしました。</p>		<p>私達は怪我で苦しむスポーツ選手やスポーツをやっていない人でも怪我で苦しむ人を少なくしていきたいと思ひます。そして軽い怪我の応急処置などの悪化を防ぐための知識や、その怪我にならないようにするストレッチやトレーニングなども知ってもらいたいです。なぜなら自分が高校1年生の時に腰を痛めてしまって、結構酷い状態だったので半年ほどバドミントンができない時期がありました。その時は1日1日苦しくて自分だけがバドミントンができていない状況で本当に毎日が嫌でした。そんな思ひをして欲しくないと思ひてこのテーマを設定しました。</p>		<p>“欧米発祥の異文化競技であるbaseballというスポーツが江戸末期に日本に渡った。バスケ、サッカー、ゴルフetc…数々の異文化競技がある中でこのbaseballという競技は『野球』と改名され、なぜこの極東の小国で国民的競技となりうるまで根強い人気を誇ったのだろう。そこまでして我々日本人を突き動かす、感動させる事の本質を持つこの競技の正体とは。我々はその要因や真髄に近づいていく探究を進めた。”</p>	
アスリート“極”	金土啓悟 渡部雄大	スポーツ貧血、無月経	村上七生	世界の羽ばたこうプロジェクト	須藤海妃 堀小雪
内容		内容		内容	
<p>僕達の通っているふたば未来学園のある双葉郡は、震災によつての風評被害がまだ続いている。その中で僕達はサッカーを今までやっており、自分達のやっているサッカーと、双葉郡を繋げてなにかできないかと考え、このアスリートの補食という探究をやろうと思ひた。サッカーをやるにあたって様々な補食があるがなにが適切なのか、どのタイミングがいいのかなど詳しく分からなかつたため、それを調べたいと思ひ、その調べた補食を双葉郡とかけあわせて、双葉郡の食材でアスリートに適切な補食をつくれるのかと思ひこのテーマにした。</p>		<p>“スポーツ貧血、無月経のことを知り、アンケート調査をして、その結果をもとにして一人一人の考え方や付き合い方を参考にして、自分の体で試して、その結果をもとに、自分自身のたいけん、悩んでいる人たちと共有していきたいスポーツ競技で最高のパフォーマンスを発揮できるような環境、知識をひろめていきたいと思ひます。</p>		<p>“今現在は、オリンピックや世界大会の結果を見て海外選手の方が強いことがわかります。日本人選手(私たちが)海外選手に勝つためにはどうしたらいいのか、海外選手の特徴を調べ、実際に海外の大会で勝つためにこの探究を始めました。それを調べることで海外選手の長所や短所が分かったり、自分のレベルアップにも繋がると考えています。バドミントン部のmottoでもあるWORLD STANDARD、世界基準。世界でも戦える選手を目指して行きたいです。インドネシアのコーチに聞いたり、アンケートを取ったりして世界選手の特徴や練習について調べていきたいと思ひます。最終的に海外の大会で勝てたらいいと思ひます。”</p>	

探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
障がいを持っている人との交流場所を作りたい！	阿久津ひなた	SKAメソッド	阿部錬平 栗原七瀬 鈴木拳心 郎	スポーツブランドを元に地域を盛り上げる	十文字里沙 齋藤優月
内容		内容		内容	
障がいを持っている人も運動が嫌いな人もみんなが色々なスポーツに興味を持ってくれたり、スポーツをやりたいくないやスポーツを苦手だと感じてしまう原因を明確にし、どうしたら改善できるのか、どうしたら楽しんで運動できるのかなどを考え、スポーツや運動のプラスな部分を発表することで、より運動を好きになってくれたり、苦手な人・嫌いな人・みんなが楽しんでスポーツをしてくれたり、普段の体育の授業がいかにスポーツに触れ合う機会を増やし、よりたくさんの方がスポーツに触れ合う環境作りをしたいと考えてます。		僕たちはサッカー部に所属していて3人共ロングキックができなかったのでのこの探求をはじめました、まず自分たちのフォームの動画を撮り、ロングキックがうまい人とのフォームを比較して自分たちのフォームと何が違うのかを調べました、次にサッカー場に行きロングキックのフォームの細かい部分の改善をしてどれぐらいボールの距離が伸びたか調べました。そして自分たちが撮ったロングボールのフォームの動画を見てもらい誰でもボールが蹴れるようになったか調べる。		“スポーツブランドに協力していただき双葉郡でイベントを行いたいと考えています。スポーツブランドに協力していただくために、お互いwin-winな関係になるような企画を考え、提案します。また双葉郡のイメージがどう変わったかを知るためにイベント前後の双葉郡のイメージについてアンケートを行いたいと考えています。協力していただくスポーツブランドは普段ユニフォームなどでお世話になっているアンダーアーマーを考えています。”	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
食事×高校生アスリート	阿部学斗 三本菅弘憲	体づくりプロジェクト	川島詩音 箱崎龍聖 瀬谷蒼羽	ハートの強さで勝利をつかめ！	石岡空来
内容		内容		内容	
自分たちは、寮の食事について疑問や不満を持ち改善するためにこの探究テーマにしました。この、不満や疑問は自分たちだけでなく他の寮生アスリートも同じ意見が挙がっていたため、周りの寮生アスリートや自分たちのためにも役立つ理由を感じました。自分たちアスリートは厳しい練習を行い、補給として食事は大事な部分となっている所だと考えます。その中で味や見た目が悪く、食欲がそそられないため残飯の量が考えられない様な事態になっていました。そのため、自分たちは今の食事は栄養が足りていないと感じ、周りでアスリート食を提供している料理人などにインタビューしました。また、寮生が求めているものなどもアンケート調査を行い「アスリート食×高校生が求める食事」と言う題材でパワーポイントにまとめ、寮の食事を提供しているLEOCさんにプレゼンをします。許可がでしだい、LEOCさんと一緒にメニューを考え寮に提供するというプロジェクトです。	“野球に必要な、筋力を向上させ、飛距離アップ、瞬発力アップ、球速アップを目指す。柔軟性を高め、関節の可動域を広げ、ちょっとした動きで腕や腰の痛めるリスクを減らす。ケガを減らし長期離脱を防ぐ。パフォーマンス向上によっての体への大きな負担を減らし、レベルアップ、パフォーマンスアップしていくために、継続的にトレーニングなどを積み重ねていくこと。ケガをできるだけなくす。自分自身の動きも見つめながら、パフォーマンス向上に取り組む。”	“私は高校生になってメンタルの状況が不安定なことが続いており、元気に明るく過ごせる時間が少なくなっていました。そんな自分を変えたくて今回心理学やもっと自分のことを知りたい！と思いこのテーマを設定しました。今は毎日元気に過ごすというのが目標ですが、バドミントンもやっているのでも今後はメンタルが競技やパフォーマンスにどう関係しているのか探究し、競技力アップにも繋げていきたいと思っています。”			
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
アスリート食について	北條杏華	怪我なしプロジェクト	手島葵 岡田琉音	体の強化をするためにはどうしたら良いのか？	谷岡大后 江田和博 山北奈緒
内容		内容		内容	
“目指している職業と結びつけられて、自分が運動をしているので関連したもので探究を進めることができるからこの探究テーマにした。サッカーをする人のプレーに支障がでないような、食生活について調べてベストパフォーマンスでプレーできるようにする。そのために、必要な栄養素について調べて身近なサッカーをしている友人にプレゼンする機会を作りたいと考えている。自分は寮生なので、自作の献立を寮食に取り入れたい。”		“私たちは、前に怪我をして、練習できなくなる期間があり、とてもくやしい経験をしたので、ほかの人には同じ経験をしてほしいと思ひ、この探究テーマにしました。私たちは、野球部とサッカー部に所属しているののでその二つの部活に共通する怪我について、詳しく探究していきたいと思ひます。そのため、アンケート調査やアスレティックトレーナーの久保さんにインタビューをしたいと思ひます。”	私たちの探究のテーマは「体の強化をするためにはどうしたら良いのか？」というテーマです。そのテーマの答えゴールに近づくためにまずは、行動をおこしていこうと思ひインタビューを何人かの人たちに協力していただきました。最初は毎日食べるご飯のことから調べていくことにしました。ご飯は栄養などを一番摂取できるからです。インターネットなどでも調べはしましたがここふたば未来学園には栄養士さんという一番食に詳しい人がいたのでインタビューさせていただきました。インタビューをもとに自分たちなりにまとめました。次に実際に選手として活躍している人にインタビューをさせていただきました。そのインタビューをさせていただいた人は3人いて一人目は今世界で活躍していて世界ランク2位の桃田賢斗選手、二人目は桃田選手と同じ企業に所属していてダブルスで活躍している柴田選手、3人目は柴田選手のペアの緒方選手にインタビューしました。3人の選手にはバドミントンのために食事でも何を気をつけているかや練習の合間に何を食べているかや睡眠時間、トレーニングで一番どこを鍛えているかなどのインタビューに答えていただきました。その結果も3人でしっかりとまとめました。今からしていきたいと思うのは、町や地域のためになること、実際にインタビューで聞いたものを自分たちで実践していきたいと思ひます。まだまだアクションは増やしていけると思うので3人でやりたいこと必要なことを話し合い実践していきたいと思ひます。		

健康と福祉探究ゼミ

探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
よりよいメンタルヘルスを	辻浦羽彩	私たちが子どもにできること	宮本朱梨 新谷蓮佳	パラスポーツの認知度を上げるためには	緑川歩幹
<p>内容</p> <p>職場、学校などの環境が原因で心が病む人が増加しています。そのなかで、私は「うつ病」に目を向けました。うつ病の原因のなかに、職場や学校でのストレスがあります。環境が悪いだけで、心が病んで人生が台無しになるなんてもったいないと思いました。そして、うつ病になるうつ病に気づきやすく対処ができるよう行動しやすい環境に、職場うつにならないよう対策ができる優しい社会にするにはどうしたらいいのかについて考えています。</p>		<p>内容</p> <p>私たちは子どもと音楽が好きという共通点から一緒に活動することになりました。今まで行ってきたのはまず、子どもの現状を調べた時にコロナ禍での自律神経の乱れで自律神経失調症になる人が増加傾向にあるとわかりました。そこで私たちは広野子ども園「ひろばーく」さんに子どもたちの生活に関するアンケートを実施しました。アンケートの結果を集計し、自律神経に関わる主な原因をこれから解決に近づけていければ良いと思って活動しています。</p>		<p>内容</p> <p>始めようと思った理由は、自分自身パラスポーツに興味があり授業の中でパラスポーツを主とする授業を受けたことがあったからです。行った内容としては、まず初めに王道のパラスポーツについて調べ、そのスポーツができた歴史について調べました。次に行ったこととしては実際に体験してみたいと思い田村市陸上競技場いきバラ陸上の練習会に参加させて頂いた。その後事務局長の斎藤さんに質問しました。アクション終了後パワーポイントにまとめました。</p>	
野菜スイーツで健康に！	横瀬亜美 鈴木心寧	運動が苦手な子供は、どうすれば動くことを楽しく感じられるのか	須賀悠太	LGBTQを身近に感じてみよう！	赤井晴香
<p>内容</p> <p>私たちは、まず福島県の子供の肥満に目を向けました。どうして肥満児が多くなってしまったのか私たちが考えた結果、栄養価の高い食材は子供たちに避けられがちなんじゃないかと考えました。まずは、知識を増やすために本やインターネットを使って調べ学習をしました。そして、栄養教諭の水口先生にも話を伺いました。学校の栄養教諭ならではの専門的な知識を沢山聞くことが出来て、すごく勉強になりました。今後は、子供に向けて食への関心を持って貰えるようにレシピを考案したいと思っているのでコンテストに応募しようと思っています。</p>		<p>内容</p> <p>“福島県の肥満度が全国トップクラスを占める割合で、少子高齢化と同時に肥満度の高さが問題視されている。また、家庭用ゲーム機等の開発が進んでおり、屋内で遊ぶ方が楽しいと感じることが多いと思う。震災から11年が経って、外での行動制限が無くなってきた。だからこそ、復興を成し遂げ前より発展して帰ってきたふるさとで未来を担う健康な人材を育成することが大切だと思う。運動といっても、ケガのリスクを伴うようなものではなく、ラジオ体操の様な手軽かつ簡単なものが理想になってくる。”</p>		<p>内容</p> <p>私は演劇の作品でLGBTQに興味を持ち、LGBTQの中でも、同性愛という所に目を向けて、「皆が充実した環境で、充実した環境で過ごすためにはどうしたらよいか」というテーマに決めました。夏休み期間中に自分の身近な人の色んな考え方を知るために、高校2年生にアンケート調査を実施し、LGBTQや同性婚について多様な意見を頂きました。アンケートにより多様な考え方を知った私は、更に他の視点から色んな考え方を知りたいと思い、今度は住んでいる地域に視点を当てて調べました。都会と比べて田舎ではLGBTQの方々が集まる機会がないことが課題だと思い、田舎にコミュニティーや都会との差の現状を伝えるために、世代別に誰でも見られるものを作成したいと思っています。</p>	
ブラウスを作ってみた	吉田梨紗	♡BIG LOVE♡	草野理香子 渡邊縫土屋樹	HSPを理解してもらいたい	尾内佳奈
<p>内容</p> <p>“自分で一から服をデザインして作りたい、そして多くの人に自分の服を手にとってもらい、喜んでもらいたい、そう思うようになったのがきっかけです。私は夏休み前にブラウスを作りました。作ろうと思ったきっかけは自分が行きたいと思っている専門学校の最初の課題だからです。型紙も自分なりに考え、そして運よく描いていたブラウスを作ることができ、ボタンホール以外は作り終えることができました。夏休み中は、祖母にインタビューをしました。あとは、服を作りました。自分の中で少しドレス作りに興味があったので挑戦してみました。型紙は自分で一から作るのとは諦め、ドレスのビスチェ部分の型紙だけ買って、スカート部分は型紙を使わずオリジナルで作りました。ドレスを作るのに何度も何度も苦戦しましたが、最終的に作り上げることができました。今後は、私がしていきたいことは、多くの種類の服を作ること挑戦すること、そしてファッションについて学ぶことです。”</p>		<p>内容</p> <p>これまでの活動はALTの先生の結婚式の企画、運営。先生方に国際結婚や愛についてのインタビュー。結婚式場に電話やメールなどの取材を行いました。これからは幅を広げて地域の方や双葉部の新婚さんなどに取材をしたり、結婚式企画だったり、ホームページを作ったりして考えを深めていきたいと思えます。私たちは聞きに来てくださる方みなさんに少しでも面白いと思ってもらえるような発表をしたいと思っています。</p>		<p>内容</p> <p>最近HSPという言葉聞くことが多く、自分自身もHSPであったため同じ状況で苦しんでいる人を助けてあげたい、HSPである人自身も周りの人も理解してもらいたいためこのプロジェクトにしました。これまでのアクションは、まずインターネットと本でHSPについて調べました。意外とHSPに関する本があり、HSPが広まりつつあるのかと思いました。また自分でも初めて知ったこともありました。次にアンケート調査をしました。アンケート調査をする前、HSPについて知らない人がほとんどかなと予想してました。アンケート結果を見てみると、HSPという言葉を知ったことがある人は約50%でしたが、詳しく知っている人はほとんどいませんでした。やはりまだ知らない人はたくさんいるんだなと思いました。これからやってみたいアクションはカウンセラーの先生方にアンケートを取ったり、HSP専門の先生の話聞いてみたいと思います。また、HSPと地域の関係性を探したいと思います。</p>	
この世はカラフルだ!!	四條海璃亜				
<p>探究テーマについての説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマが変わった経緯 ・探究テーマの設定理由 ・LGBTQ等の性的マイノリティについて学ぼうと思ったきっかけ ・アクションした内容 ・学校で「LGBTQ等の性的マイノリティについて」のアンケートを高校1〜3年生に実施した。 ・さんかく交流会（いわき市でセクシュアリティやジェンダーについて話す会）に参加し、年齢や性別にお互いお話をした。そして交流会ように作成した「性的マイノリティについて」のアンケートを実施した。 ・10代限定のさんかく交流会に参加し、お話しや探究に役立つ本を拝見させて頂きました。 ・絵本を作るために、実際に性的マイノリティについて書かれている書物を読み取り、作るための情報を集めている ・アクションをしたことで考えが変わったこと・気づいたこと ・今までは、聞いてみて、それを自分で解決するために、アンケートをとったり交流会に参加しようと思っていたが、話を聞いたり対話をしているうちに、形に残せるものを作って自分ができることをしたいと思うようになった。 ・SDGsと照らし合わせたとき関連する項目 ⑤ジェンダー平等を実現しよう（一人一人のジェンダーの違い等） ⑩人や国の不平等をなくそう（ジェンダーによる不平等等・国によるジェンダーへの対応の違い⇒同性を好きになることは犯罪とする国がある等） ⑪性み続けられるまちづくりを（人の目を気にしてしまふ・地方だと目立つ等） 私が思い浮かべる「地球・社会のあるべき姿」に近づけるためにできること ・私が思い浮かべる「地球・社会のあるべき姿」は、性的マイノリティに限らず、国籍や肌の色、価値観の多様性、それぞれの個性を尊重し、違いを理解できなくても、それも含めてその人だと受け入れることができる社会です。 ・近づけるために ①言語、年代問わずLGBTQ等の性的マイノリティについて知ってもらい、理解できなくても受け入れようとしてもらえる人一人でも増やすために絵本で伝えていく。を受け入れる等） ②働きがいも経済成長も（生まれ持った性別によった、仕事・服装） 					

【原子力防災ゼミ】			
サステナブルな原発を！ AED普及の、住民による健康づくり推進の意義		震災を風化させないために	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
住民が主体的な医療が、未来ある街なのではないか？	虎玉花心	震災の記憶を風化させないためにはどうしたらいいか？	東野真直 齋藤晴日
Let's unify AED marks		0	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
AEDの認知度を上げる為には？	久保明日香	子どもや若者が社会や地域に誇りを持って参加・参画できる環境・仕組みがあれば社会や地域を盛り上げることができるのか？	中山真実
Let's cheer up ふたば!!		塩からみた未来	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
チアを表現教育として取り入れていくことで、子どもたちが地域や社会において双方向的な関係を築けるようになるのではないかな？	和賀美々香	海と人とはどのような関係がベストか？	吉田百華
探究とは？		過去から今の防災へ	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
探究は地域や高校生にとって意義があるのか？	大谷心亮 園井太輔	過去から今の防災へつなげるにはどうしたらいいかな？ 高校生ができる範囲で行える防災は何か？	大和田晋空
流木の可能性		居心地のいい場所を	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
処分されるはずの流木を有効活用するためには？	大和田朝斗	居心地のいい場所とはなにか？	阿部虹輝
不登校の子共達に「安心」と「刺激」を運ぶサポーター		補食のパワーチャージプロジェクト	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
不登校の子の悩みや不安を減らし、学校へ行きたいと思えるきっかけ作りができるのだろうか？	齋藤晴日	運動している人に栄養のとれる補食がどんなサポートができるのか？	松本安香己
聞いて話して繋げよう		海洋ゴミのことを次世代へ伝えたい	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
どうしたら子供たちにゲーム以外のことで楽しませられるか？	栗田平帆	海洋ゴミに対する人々の関心を高めることは出来るのか？	高久明日花
アンケートまとめ		本に興味を持ってもらうために	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
探究の行い価値とは？	長谷川優人	どうしたら本に興味を持ってもらえるか？	小野楓花 白土慶典
アレルギーでもお菓子で笑顔に		全米タルト	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
食物アレルギーをもっているお菓子で笑顔にできるのだろうか？	松村真優	地元食材を使ってアレルギーに対応するスイーツは作れないか？	高橋次織 廣瀬さやか

【メディアコミュニケーションゼミ】			
生理よりそう探究		ふるさとを大切に	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
生理の質問を解決するために、身近なところから何が出来るのか？	川名希音 佐伯善吾 宇佐見雪	ふるさとを大切にするために、新田南樹 西尾蓮生紗	
0		浜通り×聖地巡礼	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
音楽で町を盛り上げることが出来るのか？	青藤康洋 八巻希美	浜通りに観光客を増やすにはどうしたらいいか？	村山空賀実
男性保育士に対しての差別や偏見を減らす		絵本を作って東日本大震災を伝える	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
どのようなすれば男性保育士に対する差別や偏見を減らせるのか？	青木康汰	東日本大震災を絵本で伝承していくことは出来るのか？	高橋明日花
繋がる世界と福島		古着の活用	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
外国に福島を伝えるためには？	吉田優美	古着を使って人々の役に立てるようなことは出来るのか？	下河邊望来
話せばわかる。話せば変わる。いわずに伝えたい学びを通して		孤食～今の子供たち～	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
福島県内の震災や社会教育に関する意識・知識の壁をなくするには？	渡邊光季	なぜ、孤食が減らないのか？	高崎菜々美
不自由なく過ごすには？		発達障害と療養	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
どうしたらすべての人が不自由なく過ごせるのか？	坂本涼	発達障害がいじめに対する地域サポートとは？	経田 萌々花
救いたい小さな命		福島と世界	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
どうしたら殺処分という問題が減少するのかわ？	林日葉 吉田瑞佳	福島の印象が良くなるにはどのようにしていけばいいのかわ？	堀川優斗
風評被害と心理		キャンプアートで印象付ける	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
風評被害を減らすにはどうしたらいいかわ？	鈴木麻友	キャンプアートで「ひろほー」を広めることは出来るだろうか？	鈴木智里 安部真莉愛
民話を通して地域を知る		小説で福島に人を	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
民話を通して地域について学べるのではないかな？	大和田紗希	小説を通して、福島の魅力を伝えることは出来るのか？	村上翔梧

【アグリビジネスゼミ】	
双葉郡の新たな力「coffee grounds」	
探究テーマ	メンバー
コーヒーがすでにただ捨てるだけの運命なのか？	佐川生華
美容で双葉郡を魅力的に！	
探究テーマ	メンバー
美容で交流は生まれるのか？	山内美々々 黒川進希
花を食べよう	
探究テーマ	メンバー
花を最大限に楽しむにはどうすればいいかわ？	鈴木希香 石井楓 渡辺栞星
フルーツで双葉郡を元気にしよう！	
探究テーマ	メンバー
双葉郡のフルーツを使って復興の状況を全国に伝えるには？	榎本希子 種塚孝音
【再生可能エネルギーゼミ】	
二酸化炭素削減	
探究テーマ	メンバー
どうやって二酸化炭素削減をしようか？	佐藤南 平田遥希
除去土の再利用と可能性を見つける	
探究テーマ	メンバー
除去土によって蓄積された汚染土壌をどのように再生利用土壌として活用できるか？ どのような事業に貢献できるかを考える？	遠藤聖太 小松聖人
ひろの影プロジェクト	
探究テーマ	メンバー
再生エネを使って町に影りを与えるためには、なにができるのか？	鈴木一真 西開木健太 貝沼希音 中島一葉
水素エネルギーを広める	
探究テーマ	メンバー
水素をより身近なエネルギーとして、多くの人にその利便性や安全性を知ってもらうにはどうすればいいかわ？	鈴木博士 門野新 福山裕斗 渡部拓斗
目に見えないプラスチック	
探究テーマ	メンバー
弊害のないマイクロプラスチックと判断するにはどうすればいいかわ？	渡辺彰夏

【スポーツと健康ゼミ】			
スポーツを通して町を綺麗にしよう！		低費でなくして笑顔が広がる世界を創る	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
スボGOMIなどのイベントを使って持続的に町を綺麗にするにはどうすればいいのだろうか？	梅澤心	みんなの個性を活かすためには？	遠藤真直 松崎元輝
パドミントンで地域活性化		ケガゼロプロジェクト	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
スポーツ人口を増やすにはどうしたらいいかわ？	斎藤浩也 齋藤 剛野 大 吉田真子 松本 康史 渡部 遼太	スポーツをする人の個性を最大限に活かすにはどうすればいいかわ？	吉田剛 高田心斗 佐藤 浩 大矢翔聖
外遊び減少を解決		スポーツ観客数を増やそう	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
どうしたら外遊びをしてくれるかわ？	井澤 優 草野彩仁	どうしたらスポーツ観客数を増やせるかわ？	横田慶太
肥満児を減らそう		野球に興味を持ってもらおう	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
どのようにすれば肥満児を減らせるだろうか？	半谷博哉 比佐 隆輝 持 隆大 尾 坂本 雅太	どうしたら野球に興味を持ってもらえるのだろうか？	高橋和輝 岩佐 尚希 我 孫子高太
easyports no2noカタ～愉快発見～		withふたば未来FC	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
どうすれば運動が苦手な人でも楽しめるだろうか？	遠藤勇丸 森川悠	サッカー部を通して広野町を元気にするにはどうすればいいかわ？	村上真斗 足立 寛章 山内 優和
筋トレをして運動不足を解消しよう		チャリで地域活性化	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
どうすればみんなが筋トレを楽しくなるのか？	梅沢 紅野 門野 洋平	自転車を通して双葉郡を元気づけることは出来るか？	吉田 康 遠藤 悠斗 齋藤 久
広野Revolution		パークゴルフで肥満率低下と地域活性化	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
スポーツを使って広野町を活性化するには？	藤上 祥太 菅野 聖 大 菅野 聖 大 菅野 聖 大 山口 悠介	パークゴルフを使って肥満率の低下と地域活性化させることができるのか？	廣瀬 貴太 斎藤 康志
高齢者に健康な食事を		FMGS	
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
高齢者に健康な食事を届けたいが元気で長生きするのは難しいか？	平子朝晴	女子サッカーの魅力や楽しさを伝え、女子サッカーの人口を増やすにはどうすればいいかわ？	福富心華 戸崎 真希子
太田栄養部			
探究テーマ	メンバー	探究テーマ	メンバー
アスリートに必要な栄養を効率的に摂る方法はなんだろうか？	太田瑞希		

【健康と福祉ゼミ】	
誰一人取り残さない防災	
探究テーマ	メンバー
要配慮者が災害時に避難、避難生活を安全に行うためには？	三村映岐
運動と音楽で子供たちに笑顔を	
探究テーマ	メンバー
運動と音楽を通して子供たちの笑顔を増やすためにはどうすればいいかわ？	大川原菜々 片山希良星
地域リング	
探究テーマ	メンバー
子供と高齢者、障がい者の交流を増やすにはどうしたらいいかわ？	有賀真月 村上舞
Have a nice day together!	
探究テーマ	メンバー
双葉郡での世代間交流を増やし、地元の人に地域の魅力を知らせてもらうにはどうすればいいかわ？	小野希真白 松本花
DANCEでたぐさんのSMILEを！	
探究テーマ	メンバー
ダンスでストレスを軽減させるにはどうしたらいいかわ？	大崎百加 星塚乃
介護に興味を持ってみよう！	
探究テーマ	メンバー
介護に興味を持ってもらうにはどうしたらいいかわ？	大山未来
中高生「食育」プロジェクト	
探究テーマ	メンバー
中高生が将来にわたって役立つ、正しい食生活を身につけるには？	吉田るな
LGBTを理解しよう	
探究テーマ	メンバー
どうしたらLGBTへの理解が広がるかわ？	鈴木慶隆